白世界

白龍閣下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白世界

【Ｎコード】
Ｎ３５０４Ｊ

【作者名】
白龍閣下

【あらすじ】
私こと秋津晴希は身長は低めで顔は中性的、体力はおそらく陸に上がったコイキングに劣る程度、趣味といえるものはこの執筆くらいで、基本的に無気力ニートと言った具合で、家から電車等を駆使し約三十分の所にある董城高校という所に通っている。部活動はと言えば、文芸部所属。活動は面倒ながら平日ほぼ毎日ある。あー…後、対人運が酷く悪い。もはや終了していると言っても過言ではないだろう。これぞというような原因があるかといえば普通にあるわけで、その全てはあの男――内藤嘉光に出会ってしまった事だと

言ってしまっていい。それから似非無口だのレズの後輩だのと、懸案事項は後を絶たない。かくして私は頭を悩ませながら文芸部ライフを送る羽目になるのである。　※一～十四話、大幅に修正もとい悪化させました！（２０１１／９／６現在）

序章　白世界は白より現る（前書き）

えー、であるからして作者初の作品であるわけですが。
最初からこれです。作者は偏屈です、シニカルです。

序章　白世界は白より現る

「……どういう事だ」
「……」
「……おい内藤、どういう事かと訊いている」
「？　何がだ？」
「しらばっくれるな。どういう事か答えてくれ」
「待ってくれ晴希、まず日本語で話すんだ」
「鼻から尻尾まで日本語だ。更に念を押すと、かつて琉球王国（りゅうきゅうおうこく）と呼ばれた場所で発達した沖縄弁でも発音がフランス語っぽいと言われている津軽弁でもない。れっきとした標準語で言ったんだが？」
「そうか、じゃあ俺がお前の話をよく聞いてなかったんだな。悪かった」
「いや、聞いてたろ」
「……エ？　ボクキイテタヨ？」
「そうか図星か。やっぱりちゃんと聞いてたか」
「ホワッツ？」
「……往生際が悪いな」
「何事も諦めないからな」
「まさかポジティブに受け取られるとは思わなかった」
「俺なりの至高の精神だ」
「今のもポジティブに受け取られるとは思わなかった」
「失礼な。俺は俺なりにちゃんとやっているんだぞ。例えば毎月の小遣いも晴希のブロマイド写真を買――この話は終わりにしよう」
「待て、今非常に気になることを言ったぞお前は」
「安心しろ。パソコンのデスクトップとかにはしていない」
「普通はしないだろ！」
「携帯の待ち受けにはしてるけどな」
「結局するのかよ！」

「他の人に見られて『これ誰ですか？』とか訊かれたらちゃんと『はい、僕の彼女です』とか返してるぞ」
「やめろよ！　いい迷惑だ！」
「え？　そんな……彼女じゃなくてもう妻として？」
「何故そう話が全力で逆方向に突き進むんだ！？」
「……ま、冗談はさておき、本当に携帯の待ち受けだけだな。抱き枕にすらしてないぞ」
「当然だ。抱き枕なんぞにされてたまるか」
「三次元は本物で満足出来るから一切持ってないわけだ」
「油断した！　そんな理屈か！」
「俺は晴希とは違うからな。そこらへんの境界は厳しいんだ」
「そこで私の名前を出すな！　抱き枕は疎(おろ)か、私はお前の写真にすら興味は無いぞこのセクハラ野郎！」
「へ？　誰も俺の写真がどうこうなんて言ってないぞ？」
「お前の名前を出したのは全面的な信頼その他諸々の計算の結果だ」
「まさか誘導尋問に引っかかってくれるとは……」
「成り立ってないよな、誘導尋問」
「これでお前のツンデレも立証されたな」
「されてない。そして私の話を聞け」
「ん、どういう話だ」
「だからなあ……」
「最初の方に言った、どういう事か、って話か？」
「そうだ。そしてそこでお前は先ほど私の話をちゃんと聞いていたという事をあっさりと告白するんだな」
「……参ったな、誘導尋問とは」
「まさか、ばれてないと思ってたか？」
「ああ……お前は天才か」
「……お前は馬鹿か」
「それはどうでもいいとしてだ」
「そこで流すか」

「流すさ」
「そうか。それで、うんざりするくらい話が脱線したような気がするんだが」
「その通りだ。ちゃんとしてくれよ、晴希」
「私のせいか」
「そうだ」
「なぜそこまで自信が持てるのやら……。まあいい、とにかくこれはどういう事だ」
「何の事やら」
「あー、まだ分からんか。とにかく私が言いたいのは、どうしてお前なんぞと二人っきりという偏屈な状況なのかって事だ」
「神のお導きだな」
「嫌な神だ。チェーンソーにでも切られてしまえばいい」
「これはデートみたいなもんだ」
「最近はこういうのもデートと言うのか」
「愛があればいい」
「……もういい、私が馬鹿だった。ところでこの対話だけのグダグダなスタイルで話を進める理由を教えてくれ」
「いいんだよ。これは最初の最初。アニメで言うオープニングテーマの前奏までだ」
「本当に最初の最初だな」
「だから構わない。それより、この話のちょっとした紹介でもしようじゃないの」
「やっぱりそうか。だと思ったよ」
「とりあえず俺が一人で話す。だから晴希は安心して体を俺に預けろ」
「早速安全性に問題のある発言だな」
「では、話を始めよう」
「無視かよ」
「俺は董城(とうじょう)高校二年で文芸部の内藤嘉光(ないとうよしあき)。これといって語る事も無

い、普通と言う要素が服を着たような男子生徒だ」
「そうやって自分をフォローするには遅すぎるんじゃなかろうか。焼け終わった石に水を掛けるようなもんだ」
「――そう。こうやって全力でアピールしてくれるこいつは秋津晴希（あきつはるき）、俺と同じく文芸部の二年であり、かつ俺の嫁だ」
「待て。お前の所に嫁入りした覚えはない」
「こういう恥ずかしがりやさんなんだ。見た目は中世的だけどハートは乙女なんだよな。それを男口調で隠そうとしてるのが残念だ」
「よくもそうやって出鱈目（でたらめ）を言えるもんだな。お前の事だからそういうのは常に脳内で温めてるんだろうけど」
「このツンデレめ」
「黙れ内藤。……あー、分かっているだろうがこの馬鹿の言う事は大体が出鱈目だ。情報化社会に生きる諸君ならそれくらい正しく取捨選択できていると信じるぞ。私は」
「それで真実が闇に追いやられる事が無いようにな」
「いいから黙っとけ。……それで、私はさっきの阿呆が申した通り文芸部二年の秋津晴希という。誤解の無いように言っとくとあいつではなく私が主人公だ。自分で言うのもなんだが男容姿男口調男性格――まあこれについては育ってきた環境と言うものがあってだな。この話は文芸部において、私が色々と苦悩を抱えてたりするわけだな。あと念を押しておくとツンデレではないしこいつの女でもない。まあとにかく、文芸部には内藤みたいなのが色々といる。実に悩ましい」
「……いや、晴希も十分変だが？」
「……気のせいだ。目の錯覚だ」

序章　白世界は白より現る（後書き）

いやーほんと、プロローグにすらなってないってどうなんでしょ。

……あー、次からはまともにしますとも。

第一話　秋津晴希の憂鬱（前書き）

サブタイトルの通り、ここから本当の始まりですとも。
では、４６４９！

第一話　秋津晴希の憂鬱

「なあ晴希（はるき）。頼みたい事があるんだ」

その男は元のその整った顔立ちを決して崩す事なく、普段のような軽い調子ではない、これが勝負どころだといわんばかりに女の名前を呼んだ。いや、よく見れば顔が赤くなっているようにも思えたが、それは夕暮れの影響でそう見えるだけかもわからない。

ここは本来閉鎖されているはずの学校の屋上だ。そこに、男と女が一人ずつフェンスにまっすぐもたれかかっていた。

男の方は学ランのボタンを全開にして中には白のカッターシャツを着込んでいて、すでに制服を適当に着崩すのに慣れているごく普通の男子高校生といった格好だった。

女の方はと言うとすごく特徴的なもので、スカートからそれほど長くもない足を伸ばしているのはまあ普通なのかもしれないが上に着ているのはセーラー服でもブレザーでもなくやはり学ランをきっちりとボタンを締めて着ていた。そのため服だけではスカート好きな男か学ラン好きな女か一瞬見分けがつきにくいが、その背丈の低さと声の高さで女だと判別できる。

ただこれは仮にの話であって、女が特に学ランを好いているわけではない。別に誰かの趣味嗜好でこうなったわけではないので悪しからず。またこの学ランは男の着ているものとも多少デザインが異なっているが、これも別に誰かの趣味嗜好ではない。悪しからず。

夕焼け空は少し曇っているが、大抵の人は快晴よりは少しばかり曇っていた方が快適と感じるだろう。おかげで暑くはなく、むしろ風が強いせいで寒いくらいだと女は思った。

「……何だよ」

女は大体男の言いたい事を大体は理解しながら、それでもそう訊いた。こう言う時、言いたい事をはっきり言うのは普通男の方だと相場が決まっている。別にこの場面に限った話でもなく、元々そう

いうものなのだ。なおこの女が男口調であることも、誰かの趣味嗜好などではないので悪しからず。

男だってそんな事分かっているのだろう――一応説明しておくと趣味嗜好云々ではなく、誰が言い出すべきなのかという話についてだ。戸惑っているかのようにきょろきょろとあちらこちらに目を動かしながらもやがては覚悟を決めて女の方を見据え、

「文芸部に来てくれないか？　そんで俺の近くにいてくれよ。いや出来ればだけどさ……なあ、どうだろう？」

ここが勝負とばかりにその頼み事をやけに直接的な物言いで一気に口にした。

で、まあ、その様子が面白くて思わず女は口元で軽く笑ってしまった。それに多少の動揺を覚え、次の言葉を口にしようとする。

「……あのさっ、俺はお前に――」「待ってくれ」

女はその苦笑をこらえながらも手を男の方に出して言葉を留めた。そして額に手を当ててしばらく考え――具体的には今強引に話を切ったそいつの言語を理解してやるのに若干の時間をかけたのだが――、

「それより先にこちらから少し訊いておきたい事がある」

と言った。正確には、時間を稼いだとも言えるか。

「……おう、分かった。一体何だ？」

男がいいというので、女はその二つの疑問を出した。彼女自身も正直に言ってこんな奴に言われなかろうが文芸部に入ってやろうとは思っていたが、しかしそんな彼女を悩ませているものはあったわけで。だって人間そんな簡単に思い切ってやっていけやしないのだ。

「今回の件で私は救われたか？　そんでお前のその気持ちってのは、本当に本当なのか？」

一つ目の疑問――自分は確かに手を差し伸べられはしたが、それはイコール救われたという事なのか、なんて事はこの時の彼女にははっきり分かりやしなかった。人間、案外自分の事なんて分かりやしないものだ。後で考えてみればこの疑念は正しかったわけだが、

まあそんな話は今はいいだろう。
そして二つ目の疑問――男は自分の事を異性として好きだのなんだのと言っていた。要するにその気持ちが本当かって事だ。今さっき自分の事はよく分からないと言ったが、その典型は人への好意の形だと思っている。愛だといわれれば愛になるし同情といわれれば同情になる、そんな不安定な気持ちだってある。
特に彼女については、分かるとは思うが色々誤解されやすい人間だというのもある。
要するに、その愛などという言葉がどんな意味を成しているのかを求めていたのだ。後で失望などしたくない。失望するくらいなら最初から何も望まない方がいい。臭い台詞だが、彼女の心境は要するにそんな所だった。
彼も色々とやってくれてたんだろう。そんな事は分かっている。だがそれは果たして愛なのか？　もしそうだとすれば私はこれから悩みながらもいてやろう。もしそうでない、単なるお人好しだとしても義に基づいてこれからもいてやる。結局は彼女自身の心構えというものに帰結する、小さくも決して浅くはない問題だった。
「ああ、一つ目は確かだ。お前は救われた、と思う」
思う？　そんな彼女の内心を悟ったのか、彼は首を横に振って、
「……いや、確かに救ってやったよ。そしてこれからも守ってやる。俺が保障するよ」
そんな頼もしい事を言ってくれた。なんともまっすぐな言葉だった。良くも悪くも。まるでなんだ、主人公のようで、彼女にはそれが本当に羨まく、そして呆れるような話であった。
「……二つ目は？」と訊きながらも彼女は思った。なんだこれ。まるで告白みたいじゃないか、と。あまりにも気付くのが遅いものである。
すると、彼は迷うことなく、しかしそれでも若干恥ずかしいのか照れ隠しのように顔を背けながら、
「……そんなの、言うまでもないだろ？」

と答えた。はっきり言わせようとした事に多少罪悪感を覚えたが、それと同時にどこか安心した。はて、彼女はどうして安心したのやら。

「……せこい回答だな」

はっきり言えよ、そう言いながら体をフェンスから離す。。かくいう女の方も同じような顔をしていたはずだ。ここに他の誰かがいたら、そいつは罪悪感を覚えてどこかへ飛んで行っている所だろう。それくらい恥ずかしい話でもある。ああもう。どうしてだよ。どうしてそうやって、つい最近出会っただけの私の癖を知ったようにピンポイントで突いてくるんだよ。

そんな回答されて私が、来てやらんわけがないだろうが。

――と。

言うまでもない――それくらいにお前は、私の事を考えてやれるというのか。そんな大口を叩けるくらいにやってくれるのか？　くすぐったいったらありゃしないんだが。

でもまあさっき待ってやったんだから感謝しろって思ったけどさ、私としても待ってやってよかったと思うんだ、と。

「……なんだ、イーブンじゃないか」

聞こえないよう、彼女はそっと呟いた。

……で、その時は確かに、私こと秋津（あきつ）晴希は自分の傍に常にこの馬鹿がいてくれると、そう信じていたわけだが。

……ふぅ。

まあお察しの通りだろうが、あの女は、昔の私の姿だ。……かっこつけた言い方をしてしまってなんだが、比喩的な意味と深読みす

る事なく単純にそのまんま過去の私であると受け取ってしまっていい。

で、お前は誰だと言われると何とも言えないんだが、とりあえずはこの物語の基本的な語り手だと言わせて貰おう。

思えばあれからもう一年近くか。一年として長かったか短かったかと訊けば、おそらくは前者だろう。

しかし今痛感するのは一年の間隔的な長さがどうのこうのではない。何しろ私こと秋津晴希がこの文芸部に入り、大変間違っているであろうラブコメを展開する事となった所以である、あの出来事なのだ。あの出来事について今、仮に何か一言言えと頼まれたならば、

『顔から火が出るほど恥ずかしかった』

やはりこの一言に尽きる。まあそれだけ純粋だったって事だな、一年前の私。うん、何なんだろうこの気持ちは。集合写真を撮って後で見たら自分だけ明後日の方向を向いていたのに気付いたようなこの虚しさ恥ずかしさは。そう、それはあの時――

「――津さん。おーい秋津さん！」

誰だ、これから回想に入ろうって時にタイムリーにも流れを止めようとするのは。ちょっとは私のモノローグにも気を使ってもらえないだろうか。

「何だ」

顔を上げ、その無礼な客人の方を見た。すると、そいつは私の見知った人物だった。

「……邦崎（くにさき）か」

「や、どうも」

そこにいたのはクラスメイトの邦崎綾女（あやめ）。中学の頃からの友人で、奇遇にも今年含め五年間ずっと同じクラスという謎の縁を持つ。親友と言えば親友なのかな？……まぁいいか。前髪をシンプルな白のヘアピンでまとめていて、表情は結構コロコロと変わるタイプ。性

格はまともと言えばまとも、変と言えば変。要するに一般的という言葉がふさわしいかもしれない。「一般人＝まとも」ではないというのが悲しいところだが。諦めろというのかそこは。

あと――そうだ。今日は始業式で、確か午前だけだったか。もうクラスの生徒は私と邦崎を除き誰もいない。家に帰ってしまっているか、もしくは早くも部活だろう。始業式の日にも部活とは全く元気なもんだ。私も一応今日は部活あるんだけどさ。

とりあえずそんな教室の中で私はどうやら沈思黙考の世界に迷い込んでいたらしい。四月病か何かか。これはかたじけない。そういや四月病ってあったっけ？　何月病があったかすっかり忘れてしまったな。まあ私は年中そんな感じの気がするが。

それでも、中学の頃はもうちょっと違ったと思うんだけどな……。

「……それにしても『秋津さん』はやめろって言ったろ」

頭を切り替え、早速邦崎に文句を垂れる。

「仕方ないじゃん。秋津さんの部屋にあんな本がおいてあったら……ねえ？」

「だからあれは不可抗力だと言ったろうに！」

誰しもおかしいと思うのは分かる。だって一般的な女子高生の部屋にエロ本が置いてあったらスルーする方が珍しいだろう。ただあれは決して私のものではない。あの後親に詰め寄ったら、兄が私宛に名指しで送ってきただと、そう言っていた。今度奴が帰ってきたら存分にクレームをつけてやろう。当然素直に従う親も親だが、それは既に文句を言ってやった。あの人たちが手遅れなのは分かりきっているが、あの怒りはどこかにぶつけなければならなかった。

……ちなみに、いかがわしい本が一応私の机の引き出しの奥底に眠っているというのはここだけの話だ。安心しろ、理由はある。だから引くなお前ら。感想欄に「主人公のムッツリっぷりが気持ち悪いです」とか書くつもりならもうちょっと考え直すんだ！

「あの兄が悪いんだ」

「あの人ねえ……でも秋津さんも――」

「だから秋津さんはやめろ。晴希だ晴希」
何度言われても訂正しなければならないが、それでもこいつは何度も言ってくる。根本的な接し方を変えられると結構傷つく。親友なんて所詮は設定だけである。自分で言うのもなんだが、私がそれほどいい奴でなければとうにこんな関係は断ち切ってしまっていると信じたい。
「――晴希もちょっと男みたいな顔立ちだし」
「それを言うな」
流石にコンプレックスとまでは行かないが、それは元来私が抱えている重荷なのだ。他人に中性的ですねと言われるくらいならまだいいんだが、男みたいなどという直接的な物言いはされたくない。本来許されるべきものではないのだ。
「しかも男子の制服だし」
「それもあの兄だ」
むしろスカートを死守して更に差別化のために男子制服を改造までさせた私のたゆまぬ努力を誉めてもらいたいくらいだ。実際は私がやったわけじゃないけどさ。
いやあしかし本当、何度こいつの前でふてくされざるを得なかった事やら……。
「秋津さ……晴希、予定はある？」
また秋津さんと言いかけたなこいつ。ま、訂正してくれるならいいけどさ。
「いや、部活がな」
「残念。一緒に帰ろうと思ったのに。それにしても部活って――」
「当然あの文芸部だが何言ってんだ。お前も知ってるだろ？」
忘れたのか？　お前も四月病か？　それじゃあ仲間だな。特に嬉しくないけど。
「いや、覚えてはいるけど……たしか内藤君っていたよね？　あのかっこいい人」
「いたな。というか去年同じクラスだっただろ」

休み時間とかでもよく私の机に来て他愛もないことを話してたはずだが。つーかかっこいい人ってなんだ。あれはただの変態だぞ。せいぜい顔のおかげでメインキャラとして成り立っているだけの。メインキャラでいるためにはまず顔が重要だと教えてくれているだけの。そんな糞みたいな設定で構成されただけのバグみたいな存在なんだぞ！？

「そいつがどうかしたか？」

「いや、何でも……」

どうやら簡単には話せないことらしい。……邦崎、お前まさか――

「あいつに恨みがあるのか？　なんなら相談に乗るが」

たとえ設定だけでも親友なのだ。それくらいの悩みは私にも聞いてやれる。

「いやいや全然そんな事ないけど！」

「そういえばそうだったな」

どうやら恨みではなかったらしい。確かに仲は良かった気がするからな。と言うことは――

「ただ純粋な好奇心からあいつを陥れたいと」

「どうしてそうなるの！？」

この反応――なんだ、違うのか。今こいつの考えている事がどうも分からん。私にはあいつの顔を見ると心から陥れたくなることがたまにあるんだが。

「っていうかその態度、彼って晴希の何なの！？」

何なんだろうは果たして。まあ強いて言うなら――

「分かりやすく言うなら――婿ってところか？」

「ええ！？」

「おいバグ！　変な法螺を吹き込むな！　てかいつの間にいた！」

馴れ馴れしい態度に、ホストにでもなれそうな無駄にいい顔立ち――噂をすればなんとやら。いつのまにかそこに立ち、邦崎に変な法螺を吹きこんでいたのは今まさに話題に上がっていた、日々私の好感度を上げる事に日夜力を惜しまない男、糞設定の集積こと内藤

嘉光（よしあき）ではないか。
　ここでこいつが来るとは、全くもって疲れる。嫌になる。邦崎は邦崎で放心状態だし、誰かこの状況をどうにかしてくれ。ついでに腹いせにあいつを吊し上げろ。
　……ってそんな都合よく行かないよな。どうせ誰も来ないさ。いわゆる孤立無援。ああほんとに……どうしてこんな疲れなきゃならないんだよ。少なくともこれを学園ラブコメとするなら間違いもいいところだろうね。
　ああまったく、どうなってんだ。私のこの対人運の無さときたら。しかしなんて男だろう。今こうやって邦崎が放心状態になっているのも私が悩みを抱えているのもバブル崩壊もトキ絶滅も地球温暖化も全てこいつのせいだというのに。私の中ではこいつはそういう設定だというのに。それなのに全く悪びれた様子がない。
「安心しろ。何とかなる」
「ああん？」
　呑気な事を言う内藤を私は即座に親の仇のように睨みつけた。何言ってんのこいつ？　全部お前のせいじゃね？　馬鹿なの？　死ぬの？　死にたいならさっさと窓から飛び降りてくれよ頼むから。
「本当だぞ。本当にあるぞ」
　……随分と必死だなおい。そんなに私の好感度とやらは心配か。まあ確かに下がるけど。今もちゃんと下がってるけどそれがどうした？……まあいいやもう。
「もういいから言ってみろよ。その手段とやらを」
「キスだ」
「……はあ？」
　今こいつは何と言った？　キス？　雑誌のＫｉｓｓなら知っているが、そっちの方だと是非信じたい。脈絡なんていらないから。飾りだから。どのみち読んでないから話に乗れないけどな。こいつなら案外詳しそうな気もするが。
「もちろん王子様の接吻だ」

……どうやら希望的観測などというものは、裏切られるためにあるものらしい。少なくとも私に関しては。そうか、こいつに対して期待を抱いちゃいけないんだな。

「いや待て。邦崎の気持ちはどうなるんだ」

こんな男に唇を奪われるだなんて、立つはずのフラグも立たなくなる。

「嫉妬する気持ちは分かる」

「出来れば分かるな。それより邦崎の気持ちを汲み取れ」

「そうだな。じゃあ晴希がやるか」

「私はレズじゃない」

同性のクラスメイトと接吻なんてまっぴらごめんだ。勿論異性とでも同じくらい嫌だが。そしてそんな事でもし邦崎が起きてしまえば再び『秋津さん』に逆戻りだ。そういった事は絶対に避けたい。評価は地に落ちるどころではなくたちまち地下へとのめり込むことであろう。たちまち体感温度も氷点下のヒヤヒヤ学生生活にイノベーションだ。ちなみに今でも結構摂氏〇度近いんだが。

「じゃあ俺がお前とキスすると」

「ちゃっかり目的を入れ替えるな。ほれ邦崎、とっとと起きろ」

結局、目の前で手をパンと叩いてやったらびっくりしてすぐに起きた。よかったな、こいつとキスするなんて事にならなくて。

第一話　秋津晴希の憂鬱（後書き）

えー、大体一話２０００字ほどを心がける事にしますとも、はい。
ちょっと少ない気はするけども。

第二話　恋と鯉と二キロの衝撃

かくして文芸部室への廊下を、嘉光と並んで歩く。振り切ろうとか後ろ行こうとか考えてもどうせ歩幅を合わせてくるので、横並びについてはもう指摘しない。寧ろそこを指摘すると私の親とはまた違い、なんとフハフハ喜んでくるのだ。それは全くもって耐え切れない。他人を虐げるのは恥ずかしながら嫌いじゃないんだが、そこまで行くと勘弁だ。

ちなみに目を覚ました邦崎は、嘉光の顔を見ると顔を赤くしてダッシュで帰っていった。おそらく嘉光に純潔を奪われそうになった事を直感で悟ったのだろう。ご愁傷様です。絶対に忘れないよ……お前のような似非親友がいた事を……。

「綾女、行っちまったな……」

「惜しかったな、色男」

名残惜しそうに呟く嘉光に、私は心底呆れながらも言ってやった。

「へ？」

「へじゃないだろ。綾女にキスなんてしようとしたくせに」

「……ああ、嫉妬か」

「近寄るな変態そして消え失せろお前の事は忘れないぞきっと」

さっき邦崎に対して思った事もご丁寧に最後に付け足しておく。私の人間関係ってなんなんだ。早急に消えてほしかった。いやホントに。お前との一年間は長い付き合いだったよ。きっと覚えてるって。二ヶ月くらいはな。そっから先は知らん。でも努力はすると思うな。忘れる方にだけど。

「いや、許せ。半分冗談だ、晴希」

「たとえ半分でもそこに本音があるとすればただちにさようなら願いたいが？　なあどうすんだよ性犯罪者？」

「勘弁してください」

「……」

急に嘉光は立ち止まり、膝からつま先まで、肘から手の指先まで、そして額を接地した。

土下座、平身低頭、アポロジー――それは本気の、本気と書いてガチの土下座だった。なあ、ここで許さないという選択肢が選べるのかな？　まあ一瞬選びそうになったのは秘密だけどね？

「……分かったから。立て馬鹿」

結局私は選べなかった……クソッ。

「ああ……ごめんな」

ああもういいよ……いつもの事だったわけだし。始業式に意表突かれただけだしな。

考えてみれば、この春休みの間に嘉光耐性が薄まっていたのかもしれない。

「いや、勘違いすんなよ？」

立ち上がるなり、嘉光はそう言った。

「俺は綾女にキスなんてするつもりは一切なかった」

「おい王子様どこ行った」

「晴希と一緒に探そうと思ってたんだよ」

「意味わかんねえよクソが」

思わず汚い言葉遣いになったぞ。どうして始業式終わって部活行く前の小イベントでそんなクエストを達成させなきゃならないんだ。最初のスライムと戦うのに一時間かかるあのドラクエじゃあるまいし。まあ私はあの作品結構好きだけどさ。

「晴希の好感度が上がる。あわよくばきっと晴希ともキスできる」

「できるわけないだろ」

第一にそういう事は口に出すなよ。信用無くすような事ペラペラ喋って、そんなの別にカッコ良くないからな？

「よし決めた。今ここでするか」

「……」

さて、反応に困るので視線は明後日の方へ。そうしておいて改めてこいつの紹介をしておこう。内藤嘉光。文芸部の二年。特徴とし

ては――気持ち悪い。
　変態のくせにやけにイケメンフェイスで、そのおかげでこいつの事を良く知らない女子には人気がある。逆に言えば接すれば接するほど評価を下げていく残念な属性の持ち主だが。気持ち悪い。あと若干フェミニスト。女をみんな下の名前で呼ぶ。気持ち悪い。
　それでなぜか、私に大してはこの通りぞっこんときた。容姿性格にも長けていない、この私ごときにだ。頭でも打ったかもしくは変なものを飲んだのかもしれないが、おそらく二次元に萌えるという一般男子学生の通過儀礼をスルーしたであろう事が大きいのではなかろうか。もはやリア充とかのレベルじゃないな、うん。気持ち悪い。
「ん？　どうした？　恥ずかしいか？」
　嘉光が声をかけてくる。もちろん私が黙っているのは照れているわけではなく、単に無視しているだけなのだが。まあ恥ずかしいという点では正解か。勘のいい奴め。
「まあいい晴希、ちょっとばかり目を瞑ってくれればいいんだ」
「いや、その必要はない。寧ろお前が目を瞑って歯を食いしばれ」
　まあ私が殴っても大して威力は出ないのは分かってるんだけどな。誰か奴を右ストレートでぶん殴ってよ。
「ふっ……素晴らしきかな、リアルツンデレ」
「誰がツンデレだきめえ。なんだそのドヤ顔は」
　そんな会話をしているうちに、本館二階の部室へとたどり着いた。久しぶりの日常の欠片が目に入ってくる。引き戸である他の部屋と違い、開き戸が特徴のいつもの広い部室。何台もあるいつものパソコン。一方で隅にあり様々なジャンルの本を蓄えたいつもの本棚。なんか所々にある関係ない、一言では名状しがたいものたち。名状しがたい部員達。そして目先五寸に落ちてくるいつもの黒板消し……いや、違うな。黒板消しはいつもじゃない。こんなのが日常茶飯事であってたまるか馬鹿野郎。
「……天森（あまもり）さん、何ですかこれは。角に当たったら結構痛いんです

よ」

ドアを開けたすぐ横の壁で腕を組み、さっきの嘉光にも負けないドヤ顔でもたれかかっている、おそらくこのトラップを仕掛けたであろうその人物に声をかける。

「あれ？　ハルちゃんに当たりそうだった？　いやごめん！」

「まあいいですけど。少しは自重してくださいよ」

私ときたらそりゃもうひ弱な草食系女子って設定だから、黒板消し程度でも致命傷なんだよな。ま、あっちは速いからな。すぐ瀕死になるけど。

「了解！　合点承知よ！」

そんなテンションの高い返事で期待が出来た物ですか……まあ前向きには捉えてみますけども。

さて、このあからさまキチガ……少しばかり変わってらっしゃる先輩は、天森小枝（このえ）さん。

改めて言うがこの通り気さくを通り越してキチガ……少しばかり変わってらっしゃる人で、実は強い。ウルトラ強い。パーフェクト強い。いうなれば『プロじゃあるまいしこんなこと普通の人間には出来……いや、あの人なら出来そうだ』現象が普通に成り立ってしまうような。。百メートルを五秒フラットで走れるとかいう噂も一時期あったくらいだし。噂は誇張されるものだというが、まあ逆に言ってしまえばこの人はそれくらい誇張されてもいい存在だって事だ。見た目は黒髪清楚な美少女みたいな感じなのに。

「でもハルちゃんってばすごいよ！　扉開けた瞬間に判断してノリツッコミって！」

「勝手に人の思考を覗かないでください！」

私はそう、目の前の長身の見た目清楚のドヤ顔の先輩に対し、必死に言い聞かせる。「うんうん！」と先輩はまるで他人事のように首を縦に振り、

「あ、ちなみにその黒板消し二・〇キロあるからね！」

「あなたは私を殺す気ですか！？」

身を翻しバーンと小学生のするような手で銃で撃つようなジェスチャーをしながらそんな説明をする先輩に思わず私はハイに叫んでしまった。鉄アレイの重さじゃないですか。地味にリアルな重さに、私は思わず鳥肌が立った。まだ「十三キロや！」とか冗談みたいに言われた方が安心できたよ。どっちにしろ嫌な事に変わりはないけどさ。本気なら軽く死ねるけどさ。

第二話　恋と鯉と二キロの衝撃（後書き）

文芸部の紹介……と思いきや次話まで持ち越しになった用で。
次話には更にキチガ……少し変な仲間たちがいますとも。ではここで。

第三話　残酷描写と手榴弾（前書き）

第二話から一続きみたいな感じでしょうか？

……読むか？　いや、読め☆

第三話　残酷描写と手榴弾

「なんですか二キロって。まともに私に直撃したら赤文字で『残酷描写あり』と付けられるか救命病棟に搬送されるかの二択ですよ」

そう抗議しながらも私はその辺にあった席に着く。

「そんなに重傷か」

会話に加わってきた嘉光が突っ込んでくる。いや全く、こいつは何も分かっちゃいない。まさに大馬鹿者だな。

「馬鹿だなお前は。頭に鉄アレイ投げつけられて平気な奴なんて多分忍者ハットリ君くらいのもんだぞ」

「むう、確かに……竹輪（ちくわ）がないと厳しいか……」

なぜかそこで納得してしまいながらもわざわざ別の席に置いてあった荷物を動かしてまで私の隣の席に座ってくる気持ち悪い嘉光を横目に私は一つの疑問について考える。その二キロのハイパーグレート黒板消し（仮）を当てるつもりだったのは私に対してじゃなかったんだろ？　ということは……。

なんだ、嘉光じゃないか！　簡単な話だネ！

「天森さん、奴を潰したいというその気持ちはよく分かります！」

「晴希！？」

「フッ……」などと満足げな表情で髪をかき分けている天森さんに同意する。嘉光は一瞬動揺したものの、すぐ復帰して、ため息をつきつつも話を続けた。

「それにしてもその表現は大袈裟すぎるだろ……なあ、晴希はちょっとした段差で死ぬとかそういう病気なのか？」

失礼な事を。お前は主人公補正的な何かで生命力がゾンビ並だからそんな事が言えるんだ。言い忘れてたがお前も鉄アレイ当たっても平気だよな多分。勿論竹輪もいらないよな。

「ま、晴（はる）はコイキングより弱い男だからしゃあねえもんな」

これまた失礼な事を言ってらっしゃる声がする。とっさに「男じ

ゃないです」とだけ返しておいた。その前の言葉は残念ながら否定できない。

声がする方――部室の一番奥に目を向けると、そこにはこの文芸部をまとめる二人の先輩方が座っていた。

私の事を晴と呼ぶ、さっきの声の主は大曽根誠文（おおぞねまさふみ）さん。黒髪短髪に眼鏡、ボタンもしっかり全部締めていていかにも優等生です的なオーラを発している――これで何もしなければ、だが。実際は口調からもある程度は感じ取れるが、『キチなんたらは誉め言葉』と言った感じの相当な傾奇者なのだ。文章媒体のおかげでその辺りのキャラはまあわかりやすいんじゃないかと思う。趣味はスプラッター。主にやっていることとしてはピッキング、手榴弾製作など（本人談）。勿論自称であって実際はそんなわけじゃない。もっとすごいのだ。

あと、大曽根さんはいつもいつも、毎度のように私を男呼ばわりしてきて正直うざい。「それはお前の利点なんだから頑張って伸ばせ」とか言ってくる。ふざけんな、誰が伸ばすか。

――バァン！

「モガガル！？」

と、私の顔のすぐ横を何かが高速で通過し、当然のように隣の席にいた嘉光の鼻先に直撃。嘉光は情けなくそんな断末魔を叫びながらぶつけた箇所を抑えた。なるほど、私は大曽根さんの行動の意味を即座に把握する。

「先輩には優しくするもんだ。な？」

笑顔で拳銃を握りながらそんな事を言う大曽根さんに、私は無言で重々しく頷いた。多分飛ばしたのはＢＢ弾とかだとは思うが、多分銃の方に改造が施してある。いや多分じゃないな。絶対だ。

「しかしそういつまでも弱キャラなのも困るよな。それじゃあ刺客に襲われた時とかに手も足も出せやしねえ。炸裂弾あるから売ってやってもいいぜ。文芸部のよしみで割引してやる。大曽根さんプラ

イスだ」

……これである。一体日本の警察は何をやっているんだろう。もしくは自衛隊関係とか？……いや、考えるだけ無駄だけどさ。

「……」

それでもう一人、パソコンの前に座っている金と黒の混じった髪の、黒のノートパソコンを操作しながら鋭い目をもってこちらを無言で見ている見た目ヤンキーの人は一宮敦次（いちのみやあつし）さん。一生徒の身でありながらそこらの一教員より強い力を持っているらしく、現に去年にもこの人が教師を動かしているのを目の当たりにしたことがある。その立ち位置から『参謀』なんて呼ばれ方をする時もあるが、大曽根さんほどアクティブに話しかけてくるような人ではないため私はよく知らない。ともかく大曽根さん共々この二人は文芸部の重鎮、将棋で言うと飛車と角行といったところだ。

「将棋の駒とは失敬な……」

なんて事を説明していると、目を伏せながら一宮さんがそう呟いていたのが聞こえた。飛車角行は単に重鎮ってだけの意味を比喩してるんだけどな。せめて竜王と竜馬と言った方が良かったか？……いや問題はそうじゃなくてだな。

「……一宮さん、いつも思いますがその読心術どうやったら使えるんですか？」

「知りたいか？　すごく難しいぞ」

「じゃあいいです」

「即答か」

「当然です」

「謙虚な事だ」

いえ、その『すごく難しい』が不安なんです。

「読心術……いいのになあ。てめえの首狙ってる奴の正体とかすぐに分かるのに」

「大曽根さん、それはかえって怖いです」

「頑張れば出来るのに」

「天森さんの『頑張る』はまともだと思えません」
「高さ二メートルからの二キロの落下物で重傷、読心術も使えない。晴希は残念だな。でも俺はそんな晴希も――」
「黙れとっとと帰れ内藤、落下物での重傷も読心術使えないのも人間として普通だ」
周りからの問答に一人一人答えていく。周囲から「重傷は普通じゃないだろ」という視線を感じたのは気のせいだ。おおかた春一番の悪魔が私によからぬ事を吹き込んでいるんだろう。私はちゃんと分かってる。
……ところでさっきから理不尽にも本を読みながらも憐憫の視線で私を見ている小娘がいるんだが。
「おい杭瀬（くせ）、その視線は何だ」
「可哀相な晴希……」
「誰が可哀相だ」
はて、どうして私は比較的穏便な人間であるはずなのに、それが今殺意を覚えているのだろうか。
まあ……ついにこいつのターンが回ってきたと言ってもいいか。私が呼んだって？　そんなの野暮な質問だ。生憎あいつにとっちゃ私は『友達』らしいからな。実感ないけど。ガチで実感ないけど。
そいつの容貌は今している事（私をいじるとかそういう方ではなく）も相まって、無口な読書娘というイメージがある。わずかながら透明感のある茶色の髪を肩の後ろ辺りまで伸ばし、細い眉にも垂れ下がった目にも、小さな口にもまるで儚いような統一感がある。一つ見た目的に違う点を挙げるなら身長が意外とあり、私より数センチ高いくらいのものだ。そう、ぶれている点を言うならそれくらいのもんだ……見た目的には、だが。
杭瀬弥葉琉（みはる）。教室では「落ち着きがありますね」などとすら言われない、最早存在すら気づかないレベルで空気さを極めている。苛め云々ではなく本当に誰も気づかない、最早異能力の領域にまで入ってしまっている。それでも私が普通にこいつの存在を認識できる

のは何らかのバグだと信じたい。
　一方で、部室にくるとやはりこの文芸部らしく自己主張が強くなるというある意味一番の曲者である読書娘であり嘉光に次ぐ私の天敵。そして、読んでいる本は常に変なタイトルときた。なんて奴だ。
　まあ杭瀬やら先輩方やら見ていると分かる通り、見た目と性格が噛み合ってないやつが非常に多いように感じられる。こうしてみるとどれだけ私が正直者であるかどうかがわかるな……全然嬉しくないけど。勿論悔しくもないけど。
　ふむ、今日は日が日なのでこれだけしか人数がいないようだ。過疎ってんなあ……ってのは贅沢か。まあこれだけ来れば十分だよな。どのみち何人来ても文芸部としての活動とかしてないし。
「今日は何だ？　あー……鼻水が垂れるほど……またまた何だこれ？」
「『鼻水が垂れるほど速攻で極められる全力雑巾ブーメラン投法』……読む？」
「遠慮する。読書の邪魔をして悪かったな」
　一瞬での掌返しは実に安定した行動だった。そんな本渡されてもどうしたらいいのやら。私は読まないぞ。本を読む楽しさっていったい何だっけ。
　しかし、わざわざ「読め」とご丁寧にも杭瀬はしおりを挟んで本をこちらに渡してきた。
「命令形かよ」
　ほんと部だと押しが強いなこいつって。他に誰も知らないからって調子に乗りやがって。
　……ん？　それでこいつ自身はこれを読んでどうするかだって？
　それはな――
「杭瀬、改めて訊くがこんな本何のために読んでるんだ？」
「普通に参考資料。恋愛小説の」
　――だそうだ。さっぱり意味が分からないぜ。
「いや、がしかしそれを恋愛小説の参考資料として用いるのはどう

考えても普通じゃないと思うんだ。なあ」
「二キロの落下物で重態になるよりは普通だと思うけど……」
「貴様まだそれを引っ張るか……！」
流石に私は杭瀬にガンを飛ばした。あんま触れんなよそれ。ネタだとしても私だって気にしてるんだからな。流石にこればかりは仕方がないで済ませられた話じゃないからさ。
「可哀相な晴希……」
「だからそんな目で私を見るな！」
世の中は理不尽だ。早く帰りたい。言えないけど。しかし本当にやる事ないからこいつみたいに何かの本でも持ってくれば良かった。
――やる事……ねえ？
「っし！　やる事もねえしニコニコに荒しコメ投下させてくっか！」
「待って！　私も手伝うわ！」
全く、どうしてもあちらには気を取られてしまって仕方がないじゃないか。
大曽根さんに天森さんは、どうしてあんなテンションなんだろうか。ここは文芸部だったよな？……いや、紛れもなく『こういう』文芸部なんだよな。
「秋津」
「あ、はい一宮さん」
そんなことを考えながら、パソコンの前でワイワイやっている見た目だけ真面目な二人の先輩方の様子を眺めていると、ふと珍しくも一宮さんが声をかけてきた。一体どうした事だろうか。
「ここに一つの御守りがある」
「はあ……」
「値段にして一個サンキュッパという破格の値段の交通安全御守りだ。金は必要ない、貰ってくれないだろうか」
「いえ、いいです。遠慮しときます」
だって交通安全とか言いながら書いてある文字が『粉骨砕身』ってどういう事だよ……。そんなの貰いたくないっての……というか

別に金いらんなら安いだのなんだのってアピールも必要ない気がする。

「言い方を変えよう。貰え」

「そこでさっきの後輩のネタを使いますか。いえ、でも――」

ま、とはいえ先輩命令。結局は嫌々ながらも粉骨砕身サンキュッパを預かる身となった。

「いいか秋津、それを手放すな」

「はあ……」

爆弾とか入っていたりしないだろうか。だって粉骨砕身だもんな。メガンテだもんな。

「爆弾ではないな」

読心術絶好調のようだ。とりあえず言い方からして他に何かが入っているという事か。何だかモルモットか何かにされてる気分だなぁ。爆弾じゃなかったら盗聴器か発信機でもついてるんじゃなかろうか。

しかし一宮さんはそれには答えず、そのまま話を続ける。

「あと新入生の勧誘は必要ない。勧誘無しでも新入部員は来るはずだ。……そうだな、話はそれだけだ。後はもう帰ってもいい」

一宮さんがそう言うので私はサンキュッパを胸のポケットに入れ、そして鼻水が垂れるほど以下略を鞄の中に入れ（結局これも預かることになった）、帰る事にした。

ちなみに、勧誘無しでも新入部員が来るはず、と言う自信にも根拠はある。それはこの人達自身が証明の材料になると言ってもいい。とりあえず一言でいうなれば、強いのだ。

「俺も便乗するかな」

大曽根さんが素早いタイピング音で荒しコメ投下をしながら言う。便乗て。

「武器貰うか？　いや貰え」

いえ、本当に要りません。そんな言い方しても無駄です大曽根さん。手榴弾とか私が持ってても仕方ないんで。それこそ粉骨砕身だ。

笑えやしない。
「じゃあ私もこの黒板消しを！　預かる？　預かって！」
嫌です。そんな手榴弾と並ぶ殺戮兵器要りません。というかまず重くて持ってけません。
「待った。俺も一緒に帰ろう」
そして待っていましたとばかりに颯爽と飛び出しこう言ったのは嘉光。こういう時に言ってやるべき事は、当然こんなところだろう。
「……一人で帰るか？　帰れ」
「まあそう酷いことを言うな」
「……おあとがよろしいようで」
「いやちょっ！　タンマ！　ちょっとぐらいいいじゃないか！」
「あのさぁ……うーん……あー……」
嘉光のあまりの迫力に気圧され困った私は天井を見上げたが勿論そんなところにこの場を乗り切る手段など見えるわけもない。後は皆非協力的である。なんてこった。
結局、心優しい私は途中まで嘉光と共に帰ってやる事となった。帰り道、特にこいつの話に乗ってやらなかった事が私に出来るせめてもの反抗だった。
今日の私、つくづく甘いな。まあ手榴弾貰わなかっただけましだが。あれを貰ってしまったらいろいろな意味で終わる気がする。まだそちらの方に逸脱してしまいたくはない。……いや、まだってのは言葉のあやね？　本当はずっと逸脱していたくないよ？
というわけでまあ、そんな開幕早々にして意表を突かれたような、実に精神面を削られる文芸部一日目であった。

第三話　残酷描写と手榴弾（後書き）

さて、これでメインの二・三年生は出た感じでしょうか？
次回は新入生を出そうと思います、はい。

第四話　蝉逃亡記（前書き）

序盤は淡々としてるなあと、自分でも思います。

第四話　蝉逃亡記

早速、新入生が文芸部を訪れた。始業式の翌日とはなんとも積極的なものだと感心する。

事実、私がこの部に入ったのも仮入部期間を終えた後だったりする。見ての通り元々私は帰宅部で行こうと思っていたキャラなのだが、まあ色々あったのだ。

さて、普通文芸部といえば文字通りマイナーと言う言葉の似合う中々に埋没しがちな部活であり、決して学校を台頭する部活にはなりえないと思うかもしれないが、この学校において文芸部は実質最強たる立ち位置と称しても過言ではない。それにはちゃんと理由がある。今回はそんな話だ……そんな話だという事にしてくれ。

まず、元々この学校の部活状況は斬新を通り越して末期だったという事。

どう校長の気が違ったのかは知らないが、奇怪な部がたくさんある。ハンドボール投げ部やら紙飛行機部、あとロウ人形同好会とやらもあったな。あそこは現生徒会長が所属してるとか。もうこの時点で頭おかしいよね。

それで酷いことに、一般的にメジャーな運動部は全滅ときた。野球部も無いしサッカー部も無い。水泳部も無いという砂漠的な状況。ちなみに学校のパンフレットでは確かに「学生の本分である勉強を重視し、机と向かい合うことへの自然性を改めて身に染み込ませます」などと胡散臭い方針みたいなのが書いてあったが、それならハンドボール投げ部とか残すなよと言いたい。紙飛行機部とか何なんだ。テスト用紙とか紙飛行機にして飛ばしてるって聞いたぞ。学生の本分って何なんだろうな。

それはともかく、何もただこの学校が衰退した状況であったというだけで、文芸部がここまでのし上がってきたわけじゃない。要するに文芸部を突き動かすような大きな変化――言うなれば革命が起

こったのだ。
確か二年前……うん、二年前だ。あの頃ピカピカの一年生だったであろう先輩方の中でも大曽根さん・一宮さんの両名の存在は大きかったらしく。いや、詳しい事は知らないし知りたくもないんだけどさ。その頃私は中学で色々四苦八苦してたしな。
で、今はもう卒業してしまった先輩方と当時の恐るべき新入生を加えた新生文芸部がこの学園を制する存在と化すのにさほど時間はかからなかったとか。
「クッ……」
それで、どうして私がわざわざこんな回想を今更しているか分かる奴はいるだろうか？
隠すまでもない。現実逃避だ、エスケープだ。
誇りを持って今一度言おう。現実逃避だ、エスケープだ。
だってお前ら、蝉の死体が浮かんでるまっ黒のスープとか飲めるか？　私は飲めやしない。進んで黒魔術の実験台になる気など更々ない。当然ながらもしこれが仮に漢方云々で免疫を強くするとかの作用があったとしても断固拒否したい。食事というのは単なる栄養分の摂取ではない。人間の三欲の一つである食欲を満たすというのがあるわけで、それを蔑ろにする事などあってはならない。
でもそれは、確かに私の目の前のさらに注がれていた。う……見ているだけでも嫌になるじゃないか……。
ついでに言っておくが、ここは紛れもなく文芸部室だ。いやはや、調理スペースがあったなんて知らなかったぞ。どんだけハイスペックなんだ。ここ文芸部の部屋だぞ？　料理部にお帰りください。
「晴希、うまかったぞ。俺が保証する」
これを飲んだであろう嘉光が横から満足げに言ってくる。だがこいつの保証は当てにならない。大方舌でも麻痺させてしまったのだろう。可哀相に。
「晴、お前は何『考える人』みたいに固まってんだ」
部室の奥にいる大曽根さんが文句を垂れる。そうは言ってもあん

た飲んでないでしょう。あんただって飲みたくないんでしょう。
そして杭瀬、親指を突き立てるな。この分は後できっちり文句言わせて貰うからな。
ちらりと横に目をやる。そこにはこれを作った一年、菅原卜全（すがわらぼくぜん）が立っていた。嘉光が見つけ出し、早速文芸部室に連れてきた逸材（本人談）らしい。確かにこの人材は、色んな意味ですごい。本人談て。まあ逸脱した人材という意味では大正解だけどさ。
して今のこいつの顔には不安が垣間見える。一見平然としているように見えるが私にはわかる。あれは内心焦っているのだと。
そして私には分かる。その不安はおそらく「先輩の命大丈夫かな……」ではなく、「果たして先輩の好みの味かな……」なのだろう。……一体何がどうなってんの？　どうしてわざわざ強制されて命張ってまで無駄なフラグ立てないといけないの？　君ら、そんなに私の人間関係が不安なの？
『ざわ……ざわ……』たちまち福本漫画のような幻聴が私を襲った。考えろ……そう、考える人とは言いえて妙だ。
冷静に考えろ、蝉はどの季節だ？　夏だよな？　でもって今は春だよな？　と言うことは当然、そこらへんから拾ってきたやつじゃないことは分かる。コールドチェーンか？　南半球からコールドチェーンで送ってきたのか？　いや、北半球が春なら南半球は秋だし、残暑ですらなさそうだし……いや違う、品種改良か。聊かバイテクだが。ハイテク……そうだバイテクに違いない。いやあ技術って進歩したんだなあ！　はっはっは！
……いやそういう問題じゃないだろ！　あー、残念ながら今は社会科の勉強をしてる時間じゃないんだ。さてどうするか。

・普通に批判して飲まない。
・先輩たる意地を見せて飲む。
・隙を見て手が滑ったと言いながらひっくり返す（ただ後始末がクソ）

・飲むと見せかけて嘉光か杭瀬の口に放り込む（大曽根先輩も腹立つが、正直無理）
・今すぐ逃げ――ぐはっ……

「男なら黙って飲みやがれ」
大曽根さんが私の鼻をつまんで口を無理矢理開けさせ、口腔に無理矢理暗黒スープを流し込んだようだ。随分と暴虐の限りを尽くされた。全くもって甘かった。この人ならこうもしかねないと予測して、早めに退避しておくべきだったのだ。
いや、男じゃないんですが……。
そりゃ「ああ、終わったな」って思えたさ。けど――。
「ゲホッゲホッ……普通に……美味い……！？」
そう、あの見た目でありながら味は普通に美味だった。むせても美味いと言えるくらいだ。どうしてこうなった。
「ほら、我らが部の新たな料理人は一味違うだろ？」
「確かに違うな、色んな意味で。というかここ何部でしたっけ？」
「文芸部に決まってんだろ」
「……」
そして、この後輩は満足げな表情で言った。
「当然の結果です。愛という最高級の調味料を使っていますから」
「いや、見た目もある意味重要な調味料だとは思うが」
「見た目は非常に拘ってますけど？」
と言う事は、ひとえに芸術的センスが常人のそれと大きく違うって事な。頼むからもっと緩い（？）路線を目指してくれ。これじゃ緩いのなんてお前の頭の螺子くらいのものだ。
「ま、色々言いたいことはあるが……一応美味かったぞ。でもな……」
「光栄です。実は――」
菅原がやはり満足げに言う。すごく悪寒がするのはおそらく外れじゃない。つか人の話を最後まで聞けよ。そんなんだから頭の螺子

が緩いんだぞ。
そして菅原後輩の次に放った一言とは――
「もう少し作ってあったんです」
「だと思ったよ！」
予感的中……いや、悪寒的中だ。私は素早く部室から逃げ出した。
結果が分かっていても、逃げ出したい事がある。安全の保障されたスリルを楽しむ人間は確かにいる。バンジージャンプってのはその心理を利用した物なんだろう。だが私は生憎バンジーとか苦手なんだ。
「男なら黙って飲みやがれ！」
「私は女です！」
後ろから聞こえる大曽根さんの言葉に、私はそう叫び返した。

「……くそ、たかが女子高生一人になんて仕打ちなんだ」
体力がコイキングにも劣る私は息も絶え絶えで、舌打ちしながらも女子トイレに逃げ込んだ。滑り込んだと言ってもいいかもしれない。必死で滑り込み、扉を閉め、その締めた扉に背中を寄りかかった。そのままやれやれと腰を下ろす。汚いかもしれないが、私の体力が体力だから仕方ないのである。恨むなら私の両親でも恨め。それか私の設定。
もう他に逃げ場がないんだが、手榴弾とか舞い込んでこないよな？　大丈夫だよな？
「あ、こんにちは……秋津先輩……ですよね？」
誰だ、疲労困憊の私にわざわざ声をかけてくる奴は？　私に気でもあるのか？……なんてな。馬鹿げた話だ。
声をかけてきたのは、一人の女生徒だった。
……いや、女子トイレだから当然だがな。

第四話　蝉逃亡記（後書き）

つーわけで、新キャラを二人。いや、二人目は最後の最後に出てきただけなんだけれど。

それにしても、大曽根さんがここまで扱いやすいキャラだとは思いませんでした、はい。

第五話　秋津晴希の熱弁（前書き）

第五話　秋津晴希の熱弁

こんにちは、と。

私が蝉スープから逃げおおせてきて、辿り着いたのは狭い女子トイレ。そこに、私を名指しで言うその女生徒はいた。

身長は私と比べてももう二回りほど低く、髪はショートのストレート。目がぱっちりとしていて高校生にしては若干幼く見える。私を先輩と呼ぶからには後輩なのだろう。

私が「誰だ？」的な顔をしているのに気付いたのか、この後輩はご丁寧にも自分から名乗ってきてくれた。「人に名を訊く時はまずお兄ちゃんと呼べ」等と言っていた嘉光とは大違いである。例えば私が知らない男性に向かいお兄ちゃん誰？と訊くとしよう……うえっ気持ち悪っ。やっぱあいつは駄目だわ。何だか八つ当たりっぽいが、元々悪いのはあいつなんだから仕方ない。さっきも説明した通り、全ての災厄が須くあいつのせいなのだから。

「私、朱鷺羽（ときわ）みのりって言います。文芸部に入る事を決めていて」

「ここでも文芸部の話か」

やれやれ、と肩を竦めた。ついさっきその文芸部の新入部員に酷い目に遭わされ、それでここに逃げてきたばかりなのだ。

「……本当、疲れそうな部ですね」

「……分かってくれるか」

理解力のある後輩で何よりだ。現に疲れてるしな。只今脾臓の血液が大変な事になって破裂してしまいそうなところだ。横っ腹ってのは脾臓の事なんだとさ。豆知識だな。

「私なんかさっき蝉スープ飲まされたんだぞ。どこの漢方か知らんが、現代人に合うとは到底思えない。かといって古代人に合うかも微妙だが。誰が得するんだあんなの」

「ですね」

思わず毒づく事しか出来ないでいる私に、目の前の比較的まとも

そうな後輩は頷いた。いやしかし無関係な後輩に愚痴を垂れるとは酷い先輩である。まあ前向きに検討するよ。

「ところで……あー」

「朱鷺羽みのりです。下の名前で呼んでくれても構いませんから」

「いや、朱鷺羽でいい」

後半の部分はやんわりと断った。人のことを苗字で呼ぶのは、堅実な私の立ち位置がぶれる恐れがある。別にキャラ作りとかに拘るつもりもないのだが、簡単に言うと気恥ずかしいのである。嘉光は別。心の中ではあいつは私の宿敵である。きっと前世では血で血を洗う仲だったに違いない。

「それで朱鷺羽、お前はそれだけ知っときながらどうしてあんな部に？」

これが疑問だったのだ。これだけ文芸部の現状を知り、私と同じような認識を持っているにも拘らずこいつは文芸部に入ろうとするのか。その答えがさっぱりわからない。

「どうしても……言わなきゃありませんか」

んー、何だこの空気？　なんか辛い過去でもあったのか？　あのキチガイな文芸部に関する人に言えないドラマなんて――あるけどさ。それも私が当事者で。あー突っ込みづらい。どうして否定する事自体が矛盾になるなんて微妙な立ち位置にいるんだ私は？

「いや、言いにくいような事ならいいんだ。私が悪かった」

結局引き下がった。まあ論理の矛盾ゆえ仕方ない事はある。それは四大文化発祥の時から続いている至極当然の事実であると自分に言い聞かせ――

「わかりました。言います」

「結局言うか」

「先輩がどうしてもって言うから」

いつ言ったんだよ、そう言いたかったが言わない事にした。悟ったわけだ。ああ、結局こいつは言いたいんだな、と。これまで結構人間関係で苦労してきたからな。他人の建前と本音くらいはある程

度掴めるようになってきているのだ。
いいだろう、言ってみろよ。お前のその理由とやらを。
「好きな人がいたんです」
「そうだ、いずれにせよ部室に戻らなきゃいけなかったんだな。鞄あるし」
「聞いてください聞いてください！」
トイレから出ようとした私だったが、惜しくも朱鷺羽に袖を掴まれてしまった。それも両手でだ。お前どんだけ私にその話聞かせたいんだよと思いながら渋々向き直り、話半分にでも聞いてやる事にする。だって何かと思ったらコイバナだぞ？　いまどきそんな今時の女子高生同士の会話みたいな……ごめん、よく考えれば今時の女子高生同士だったな。大丈夫か今日の私。いいから落ち着くんだ。
「それで、好きな人がどうした？」
何だか長いエピソードになりそうな予感がする。詳しく語ると大体一話出来上がってしまいそうなくらい。お茶の用意が必要か？ここトイレだが。大体女子トイレって言うと女子が下ネタトークで盛り上がる場所じゃなかったか？……いや、それは流石に違うか。中学の頃そんな事を言っていたクラスメイトがいたんだが。
「私の好きな人が文芸部にいるんです」
なるほどなるほど。なるほどなるほど……ん？
「……ええと、それだけですよ？」
「短いなおい！」
なんて話だ。折角自分が前振りをしてやった（モノローグなので気付かないだろうが）のに二十文字以内とか、国語のテストでもこんなお粗末な答えはないぞ。このゆとりめ。
「ええと……詳しく言うと、あの人がいきなり『それなら文芸部に入ればいい』って。あ、あの人っていうのはその、好きな人じゃありませんよ？」
「はあ、話は大体分かった。……それで、それだけの理由で文芸部に引きずり込んだ『あの人』とやらは誰よ？」

「あの人です、あの人。向こうにいる」
「代名詞の文法的な用法の質問なんぞしていない。こそあどくらい小学校で習ったぞ」
「そうじゃなくて、あそこにいる人です」
朱鷺羽が指を差した方向を向いてみると――
「……お前かよ」
見た目は寡黙、中身は野次馬の何とも厄介な少女文芸部員がそこにいて、まあ当然のように私は溜息をついた。
「いつからいたんだ？」
「いつからって……晴希が、架空の男性キャラと男性キャラをくっ付けるやおいという趣味の素晴らしさについてそこの後輩に熱弁していた辺りからだけど」
なんだそりゃ。
「生憎だがそんなシーンは今までも、そしてこれからも存在しない。期待に副えなくて本当に残念だったな、杭瀬」
「ノン、それはきっと人違い。私は杭瀬弥葉琉なんかじゃない。言うなればそう……似非弥葉琉とでも言えばいいかな」
「まあ確かにお前はいつも似非だけどさ。そんな冗談を言ってのける奴が杭瀬弥葉琉という人間以外にいるのか疑問だよ」
「それは分からないけど、ともかく冗談は楽しいね」
「は？」
いきなりなんて脈絡のない事を言い出すんだこいつは。
「お前、頭は大丈夫か？　ごめんな、医者には詳しくないんだ」
「私は正常よ。でもこうやって冗談を言ってしまえば、一人くらいは真に受ける人間もいたりするの」
……さっぱり意味が分からん。
「すまん、私は哲学にも詳しくは――」
「やおい……いいと思いますよ。好みは人それぞれですから」
気付くとそう言いながら朱鷺羽が私の手を握り、上目づかいでこっちを見てきていた……クソッ、お前かよ。すぐさま私は目を逸ら

した。この後輩がどんな顔をしているのかは知らないし、知りたくもない。

「なあ朱鷺羽、お前私がそれを語っていたのを聞いたことがあるのか？」

とりあえず朱鷺羽には手を離してもらい、額に手を当てる。「大丈夫ですか？」なんて訊いてくるが大丈夫ではない。脈絡のない話と思いきやこういう事か。やれやれだ。

こんな認識のすれ違いが起こるのはこいつが誤解しやすい人間なのか、はたまた私が誤解されやすい人間なのか……どっちもあるかもしれない。どうもこの後輩は人を疑うことを知らないタイプだと私は感じた。

「なんだ、冗談ですか。紛らわしいです秋津先輩。男同士よりもより女同士が好きなんて」

「そんな事も私は言ったつもりはない！」

「嘘ですよ。全くの冗談です」

体の後ろで両腕を組みながらそう言った朱鷺羽の顔は、微笑みながらも何故だか寂しそうに見えた。深い理由は分からないが、好きな人云々とも関係はあるのだろうか。残念ながら恋愛云々に関して私は助言出来ないからな。私に出来ることなんてせいぜいフラグを断ち切る方法論くらいのもんだ。嘉光？　あいつは特別しつこいしな。

「ま、いいさ。そろそろ部室に戻るか」

なんだか何かを忘れていそうな気もするが、ただクラスメート一人に後輩一人と一緒に女子トイレで語らっていても仕方ない。このままガールズトークが成り立つとも思えないし、こんなシュールな状況はまぁいいや。

「……晴希、死なないでね」

「無意味に死亡フラグを立てようとすんなお前は」

いったい何が言いたいんだ。意味もなく不安になるじゃないか。

そんなこんなで例の部室へと戻り、開き戸を開けるとそこには――

「お帰りなさいませえ！」
皆の大声と共に目に入ってきたのは、大きい机の上に展開されていた――蝉。
本当、強烈な記憶なはずなのにどうしてだかこの一連の流れですっぽりと記憶から抜け落ちてしまっていたな……。
「さらばだっ！」
「あっ、待ってください、先輩！」
かくして私は、ダッシュで素早く退散する事となった。ああくそ、脾臓が壊れそうだ。杭瀬の忠告を無碍にした事は本当に後悔している。ちゃんとあいつの言う事を聞いてやればよかったんだ……！
あいつの言う事はごくたまに深い意味を持っていたりするのに、私はそれに気付けなかった。本当に、ごくたまにだけど。
「楽しかったですね」
「……そうか？」
「あ、これ鞄です。文芸部の人たちから受け取りました」
「おう、悪い」
朱鷺羽の差し出した鞄を受け取り、帰り道を並んで歩く。何故かこの後輩は随分と楽しそうにしていた。
「楽しそうだな」
「ええ、私が求めてたのは本当はこういう空気感だったのかもしれません」
……さいですか。まあ私も人の事は言えないけどさ。現にこうやって部の一員として存在して、初日から部室に出入りしたりしているんだから。
「ところで、好きな人ってのは？　入部希望期間って事は多分二、三年なんだろ？　いや、三年は手が届きにくそうだから二年か。少なくとも二年間は一緒にいられるわけだしな」
朱鷺羽は「何故それをっ！」といった顔だった。分かるんだよ、私には。
二年でこの純粋そうな後輩キャラにに好かれそうなの……なんだ、

明らかなのが一人いるじゃないか。あの主人公補正をふんだんに抱えた変態野郎が。全く嘉光め。

「……先輩は狡いです。今更になってそんな話掘り出して……」

とは言ったものの、朱鷺羽の表情はまんざらでもなさそうだった。

今の話の何が嬉しかったのやら。私にはさっぱりわからないが、この後輩が結構な惚気野郎でありながらかなりいい奴だって事ぐらいはまあ理解できた。

第五話　秋津晴希の熱弁（後書き）

まさかこのキャラ一人で一話潰すとは。作者自身びっくりです。
まぁ今が彼女の見せ場って事ですかね。

第六話　秋津晴希は最高の女（前書き）

久しぶりの執筆……の割に短いのはご愛嬌ですとも。

第六話　秋津晴希は最高の女

秋津晴希は、最高の女だ。……いやいや、君らが想像しているような性的な意味じゃなくてですよ？

秋津晴希が性的な意味でなく俺にとって最高に最高な女であるというその認識について「何故だ？」なんて疑問持つまでもないはずだ。これまでの話における晴希の活躍を見ていればまあ君たちはもう晴希にメロメロになっていることだろう。渡さないけどな。

それとも君たちにとって、そんなことはどうでもいいのかな？……いや待てそう言ったやつら、頼むからもう少し考え直そうぜ？このまま晴希のことを誤解されるのも俺にとっちゃ不愉快だしさ。

晴希は誰がどう言おうが最高なのだ。

たとえば小動物のような、敵意ではない若干の警戒心を持った鋭い目。

たとえば自分気を使ってませんよとばかりにだらしなく跳ねるくすんだ黒髪。

たとえば平らとまでは言わないまでも服の上から判断できる程度の小ぶりな胸。

たとえばそれらへのコンプレックスを取り繕おうとするかのように使っている男口調。それらを含めた全体として中性的な雰囲気。

たとえば文句を言いながらも決して部活を休まない律儀すぎるくらいの律儀さ。たとえばそれでいて自分の幸せは内藤嘉光の不幸だなんて言ってしまう遠慮の無さ。たとえば何にも興味がないようなふりをして本当はいろんなことを知っているところ。たとえば入学

時に学ランなんて物を買ってしまうような、意外に抜けたところ。
たとえば何か気に触れるようなことを言っても本心から怒ることはほとんどなかったりする優しさ。たとえば虫一匹殺せない非力さ。たとえば高校二年生にしてどこか悟ってしまっているところ。

――そして何より、ツンデレだ。

これだけ言えばもうわかるだろ？　秋津晴希は、最高の女だってことぐらいさ。

さて、俺が突然晴希の話に割り込みつつこんな事を言い始めたのには理由がある。

その最高の嫁の秋津晴希が、何者かに攫われてしまった。

これは大変だ。ゆゆしき事態だ。本来なら晴希に傷一つつけておきたくないのに、まんまと出し抜かれてしまった。まさか拉致なんて大胆な行動に巻き込まれてしまうとは思いもしなかった。

現に参謀の一宮さんすらも「こんな事態くらい予想はできていた。手は打てる」と焦っているわけで……

……はい？　一宮さん？

「Ｈｉ，Ｉｃｈｉｎｏｍｉｙａ！！　Ｗｈａｔ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｓａｙｉｎｇ？」

「Ｉ　ｓａｙ　ｔｈａｔ　ｉｔ，ｓ　ｎｏｔ　ｉｎ　ａ　ｈｕｒｒｙ．　Ｉｎ　ａｓｓｕｍｐｔｉｏｎ　ｔｈｉｓ，ｔｈｅ　ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎ　ｈａｓ　ｂｅｅｎ　ｔｈｏｒｏｕｇｈ．」

「……日本語でお願いします」

「焦るなと言っている。いずれ奴らがこんな風に仕掛けてくるのは想定の内だったしな。準備もできている。それと――」

と一旦言葉を止め、黒色に金色の混じったような髪の毛を軽くいじったあと一宮さんはこのように言った。

「俺は間違っても参謀じゃない」

新学期が始まり、新入生も新たに加わり、そっから一週間経過。今日の五限において、私はついに体育の授業と言う障壁にぶち当たった。

ご存じの通り運動能力というものが終了してしまっている私には一〇〇メートルをお天道様の中全力疾走するなんて真似不可能なわけで、普段なら見学と言う至極退屈な役割を全うするのだが、やはり体力テストくらいはやっておけというわけで私も参加する事となった。言うまでもなく結果は惨敗だ。上体起こしとか出来るわけないだろ。

まあ保健室に行く必要がなく、悠々と六限目の化学の授業を受けられた辺り、私の勝ちと言ってもいいんじゃなかろうか。内容はよくわからなかったけどな。

で放課後。一介の文学少女であるがゆえに体育がかなり苦手で化学もちょっぴり苦手であるところの私は今、

「さて、話を始めましょうか」

この状態で何が話だ、と思うのだ。

その部屋はなんというか、生徒用の部屋とは思えないような清潔感を醸し出していた。逆に言えば実用性においては微妙とも言える。パソコンは部屋の隅の机に一個申し訳程度に置かれていて他はすっきり。部屋の真ん中に会議に使うような折り畳み式の長机を組み合わせ、それをパイプ椅子で囲っている。

パイプ椅子に腰掛けている生徒達は全員眼鏡装備。一番奥でまるでゲンドウのように腕を組んで座っている三年生（やはり眼鏡）の女子は仁科（にしな）由宇さんというらしい。そして横の壁際に置かれたホワイトボードには堂々と『報道とは九割の嘘と一割の偽りだッ！』と書かれている。……それは最早報道の欠片もないんじゃなかろうか？　まさかの真実〇％配合。何故それを勢い良く言い切る。

で、かく言う私はお縄にかかってしまっていた。とは言っても私

が窃盗罪をやらかしたわけではないし、詐欺罪に手を出したわけでもない。ならばと麻薬の運搬密売に手を出していたわけでもない。犯罪は嫌だ。かといって別にそっち系のプレイが好きなわけでもない。マゾでなければレズでもない。レズでないといってもバイでもない。元々語り手的な立場として危ういのに、そんな事があってたまるか。

ここに至るまでの経緯を簡潔に述べるならば、とにかくわけのわからないまま頭に袋をかぶせられ、新聞部に拉致されてしまったという流れだ。そして説得という名の脅迫を受けている。

それにしても拉致とはスケールが大きい。現代の若者にもこんなアクティブな人はいるんだな。やはり偏見は良くないな。日本という国はまだまだ安全には足りないみたいだ。

……いや、なんかもうリアリティがなさすぎてかえって客観的に思えてしまう。

仁科さんは組んでいる手を解き、口を開いた。

「新聞部って、どうでしょうか？」

「……」

どうでしょうかと言われても困る。そうだな、強いて言うなら――

「強いていうなら、少々縄がきつかったと思います。というか解いて下さい。痛いです、色々な意味で」

こう答えるしかなかった。

「ふむ、私たちがそんな簡単に解くとでも？」

仁科さんが眼鏡の奥にある目を見開き睨む。

いや、最初からそんな事は思っちゃいない。待てと言われて待つ奴がいないように。だからこその強いて言うならなのだ。

「仕方ありませんね。解きましょう」

って結局解くのかよ。いや嬉しいけどさ。

そうして彼らによって私の忌々しい拘束が解かれる。試しに手首の関節を回してみるとバキバキと音が鳴った。よしこれで全力が出せる。全力って言っても普通の人の三割にも満たないけどな。

「縄の跡がついてますね。まるで縄文土器みたいですよ。ふふっ」
「大して上手い事言ってねえ！」
思わずタメ口で突っ込んでしまった。いやだって、縄の文様で縄文土器だろ？　そのまんまじゃないか。寧ろどう褒めろと？
しかし勢いとは言えため口になってしまったのは事実。仁科さんは部員に目配せした。
何かの音。そして数秒後に大柄の部員が運んできたのは——コップに入った水。しかしこいつ、見覚えがあると思ったら同じクラスの奴か。
「どうぞお飲みください」
そう言ったのは、やはり仁科さん。
「……」
明らかに怪しい。裏か？　何か裏があるのか？　そうやって私が訝(いぶか)しんでいると。
「怪しいと思うのなら、飲まなくても結構ですよ。では秋津さん、あなたもそろそろこの部室に馴れてきた所でしょうから、ようやく本題に移りましょう」
仁科さんが眼鏡の奥の目を光らせながら私の目を見て言い聞かせてくる。そして再び手を組み直した。
さて、どうしたものかね……。

第六話　秋津晴希は最高の女（後書き）

ところで後書きって何を書いたらいいんでありましょうか。
キャラの特徴とか、ショートネタとかっすかね？
とりあえずサブタイトル、自重します。

第七話　新聞部室のスイートタイム

「で、話とは？」
私は結局差し出された水を飲み干し、新聞部部長である仁科さんに本題の提示を求めた。しかしその返事はと言うと、
「まあ水でも飲んで落ち着いてください」
といってにやけながら新たに水の入ったコップを差し出すだけだった。
「いえ、水はいいですから本題を」
「冷静になってください」
「もういいですから」
「水を飲んで話し合おうではありませんか。話せば分かります」

……。

切れた。
千切れた。
プッツンした。

「だからこれが何杯目かってんだ！　そんなデジャヴいらねえよ！　第一何なんだなんだてめえら人をコケにしやがって！　人を縄で縛ってきて何が落ち着けだよクソが！　ジョークだとしても誰も笑わねえよ！
　挙句の果てにやらせる事はただひたすら水を飲ませるだけと来た！　見事なまでにふてえ接客だ！　私をこの秋津晴希と知っての狼藉か！……はい、ごめんなさい。冷静になりますから」
　思わず我を見失ってしまった。危うくキャラがぶれてしまう所だった。これは開き直って嘉光のせいにするしかないか。そうだそうだ、あの変態がストレスを蓄積させたに違いない。

とはいえ今こうやってコップを投げ捨て、暴言を吐いたのは私なのだ。いや、本当に八つ当たりしてすみませんでした。

「そうですか……まあ、落ち着いて水でも飲んでください」

仁科さんの言うことは至って冷静だった。その眼鏡の向こうがあんな感じでなければだが。涙目は行きすぎだろう。どんだけ豆腐メンタルなんだよ。なにしろこっちはコイキングより弱いってのに。

「で、では本題に移りましょう」

仁科さんは表情を隠すように慌てて眼鏡を押し上げ、話を始めた。

「簡潔に言うと、あなたに文芸部から新聞部に移って貰いたいといった話なんですよ」

予想通り、ストライクゾーンど真ん中の話だった。さっきも新聞部はどうかとか話していたし。

「それで、何故私が？　普通に一年生でも攫ってくればいいじゃないですか」

「それは本気で言っているのですか？」

無論本気で言っているわけではない。確かに私が新聞部側ならば今の私のような位置の奴を攫うか、あるいは誰も攫ってこない。まあ普通に考えて誘拐という発想には至らない。よってどっちにしろこの人達の行動にはさっぱり理解ができないという事だ。

そんなさっぱり理解のいかない仁科さんは再び話を続けた。

「理由は四つありますよ」

この人の言う四つの理由。それを要約すると。

まず、私と言う人間のカリスマ性。これは自分で言うのもなんだが。まあ悲しくも事実なのだから仕方がない。

私が一般人であるかと問われれば是非ともイエスと答えたい所だが、残念ながらそうではない。女が改造学ランに身を包んでいる時点で私のキャラは確定してしまっているのだ。

それで、何故だか人気がある。去年度のバレンタインの事とかは思い出したくもない。

とにかく、私が入る事で一種の新聞部の宣伝効果になると言う事

だろう。

次に、内藤嘉光と言う変態との関係。

嘉光は常に私に付いて回る。ここで私を説得して新聞部に入れれば、いずれ嘉光も関わってくる。その時が新聞部にとっての好機だ。そして嘉光を組み込めば嘉光のカリスマ（これも納得いかないが事実である）に釣られて大量とは言えなくもまた人が来る。

そして、こうやって攫うことの容易さだ。

時々誤解される事があるが、知っての通り私の身体能力はそりゃ酷いもんだ。それは実の兄に「コイキングより弱い」と評されたほど。だから実際は下手な一年よりずっと攫いやすいはずだ。

最後に、文芸部における私の立ち位置。

私の居場所が狭いという事だ。確かにその通りであり、嘉光然り杭瀬然り、あそこは私を悩ませる原因が多い。

実際に私はあの部に好きで入ったわけではない。他社にとっては一見どうでもいいような理由があって、その上であの部にずっといる。

これらの理由から、私はまさしく恰好のターゲットだったと言うわけだ。なんて絶妙な位置にいるんだろうか私は。自分の身を呪う他ない。

と、ここで聞き慣れた電子音が流れた。私の携帯電話だ。

「ＭＧＳとはまた女子高生らしくないチョイスですね」

「……放っておいて下さい」

ポケットから取り出して外側のディスプレイに目を向けると、そこにはこんな文字列。

『内藤嘉光』

そうか、嘉光か……

あいつはいつの間に私の携帯にこんなのを登録したんだらうな。

私は携帯電話を人に貸した事すらないし、ましてやあいつとの番号交換もきちんと懇切丁寧に断り続けてきていた筈なんだが。

第七話　新聞部室のスイートタイム（後書き）

えー、一つ思うこと。

何で皆こう執筆が早いんでしょうか。リズムですかね？　リズムの問題？

とりあえず近頃この話の一話一話が短くなっているのをどうにかしなければ。明日から本気だします。

第八話　虹色のペンと彼奴らの血で悪夢を綴ろう（前書き）

久しぶりの更新です、はい……。

第八話　虹色のペンと彼奴らの血で悪夢を綴ろう

携帯が鳴っている。サブディスプレイには『内藤嘉光』の四文字。
……こんなの私は登録した覚えが無いんだが。
場所は相変わらず新聞部室。相変わらず全員メガネという窮屈な状態。そりゃ突然変わった方がおかしいけどさ。
そんな私の携帯に気付いた仁科さんが、声をかけてきた。
「文芸部からの着信ですか。しかし我々がそれを許すとでも思いますか？」
ふざけろ。当然思わない。

新聞部。一宮さんはそいつらが晴希を浚ったと言った。
彼奴らの腕前は確かだった。誰にも発見されることなく晴希を攫っていったのだから。その辺りはオドロキだ。
あそこの部長は三年の仁科由宇（にしなゆう）さんといったか。
とにかく由宇という人は交渉が上手いと聞いた事がある。それがどういう事かは不明だが、仮にも晴希が説得されたら大変だ。俺が新聞部に入るしかなくなるじゃないか。
「秋津と離れるという選択肢は最早ないんだな」
何て失礼な事をいうんだ一宮参謀は。
「だから俺は参謀になったつもりはない」
こうやってモノローグにすら文句つけてくるし。
とにかく、もう一度言う。新聞部の腕は凄かった。
ただし、それと同時に相手が悪すぎた。文芸部を敵に回したが運の尽きだ。
こうして一宮参謀によって晴希の居場所も割り出されている。ここから取るべき行動はただ一つ。
「早く新聞部に突入して皆殺しだ！　知ってるか！　文学には紙も

ペンも必要ないんだ！　その時必要となるものはそう、愛と勇気とそれをねじ伏せるいかんともしがたい暴力だ！　早速奴らの血で文学を綴って――」

「落ち着け」

「何ですか一宮参謀！　晴希の居場所も敵の正体も分かったのに！」

ＲＰＧだったらもうすぐボス戦だってとこなのに！　アクションでももうすぐボス戦だってのに！

「あくまで仁科由宇がしようとしているのは説得だ」

ああ、脅迫という名のな！

「説得という名の説得だ」

冷ややかな口調で一宮さんは言う。俺は心の中で舌打ちした。せめて大曽根さんがいればこの人を説得することも――

「誠文は旅に出た」

しかし、一宮さんが告げたのは残酷な現実だった。旅って何だ。晴希も随分と適当な理由で見捨てられたもんだ。そして俺の心も簡単に読まれたもんだ。すると、

「秋津の奪還は何とかなる。それ自体は造作もないことだ」

唐突に一宮さんはそんなことを述べた。つまり……どういうことだ！？　ならどうしてすぐ向かわない！？　そしてどうして他の部員たちは緊張感もなくトランプで遊んだりしているんだ！？

これは！　俺ら！　文芸部にとって！　本気と書いて！　ガチで！　大変な！　事態なんじゃ！　ないのかよ！？

「だから、落ち着け」

「待ってください！　まずは説明から――」

「ここで新聞部を叩きに叩き潰しても、再びアクションを起こす可能性があるってことよ！　新聞部でもない、また別の何者かが！」

「お前もいちいちうるさい。落ち着け。最悪喋るな」

近くに現れた小枝さんによって、そんな説明が付け加えられる。俺はなるほど、と腕を組んで考え込む。となれば――

「晴希を攫った新聞部を見せしめとして鉄釜の中に――」

「内藤」
すぐさま忠告を受けた。いや、いい発想だと思ったんだけどな……。
「仕方ない。あれを教えてやろう」
「あれですか……。とうとう……」
思わせぶりな一宮さんの一言。だが俺には『あれ』が何を意味しているのか即座に理解できた。
「すみません、『あれ』って何なんですか？」
口を挟んだのは後輩のみのりだった。確かに、今のは非常に思わせぶりな会話だったかもしれない。
「ああ、教えてやろう。晴希の携帯の番号だ」
「秋津先輩の……あれ？　それっておかしくないですか？」
「ん？　何がだ？」
首をかしげるみのりに、こっちが疑問を覚えてしまう。そんなことよりも早急に新聞部を血祭りにあげないと。
「内藤」
「……すみません」
「なぜお前の思考は今日に限って誠文とシンクロするんだ」
「……すみません」
また一宮さんに注意を促されてしまった。これ、今日で何度目なんだろうか。
「……それで、どこがおかしかったんだ？」
話が途切れてしまったので、再びみのりに向かって問い掛ける。
「ええと……いいんですけど、なぜさっき話が途切れて」
「気にしなくていい。ここは平和な日本国だから」
「……ええっと、それは？」
「いや、なんでもない。ここをイラクだなんて考えちゃいないから、イラクじゃ駄目ならレバノンにしてやるなんて考えちゃいないからその変な所を教えてくれ」
「じゃあ言いますけど……。ええっと……内藤先輩は秋津先輩の彼

女なんですよね？」
「おう……え？」
いやその理屈はおかしいぞ！　何で俺の方が彼女になるんだ！？
「すいません間違えました……秋津先輩は内藤先輩の彼氏さんなんですよね？」
「それも違うってかさっきと意味同じ！」
「じゃあ、ええっと……うーんと……秋津先輩は、内藤先輩の彼女さんなんですよね？」
「おう」
みのりの問いに軽く答える。当然だ。超当然。むしろお嫁さんでいい。でも晴希はなかなか踏み出してくれない。
いやそれにしても、なんでこいつは二度も変な間違いを――
「じゃあ……なんで今まで番号を知らなかったんですか？」
「……ぐふっ」
「先輩！？」
非常に痛い。ロンギヌスで胸を貫かれた気分だ。
「ええと、あれだ。あいつツンデレだからな。簡単には教えてもらえないみたいで。下手すると『ときメモ』のメインヒロインより攻略しにくいかもしれんぞあいつ。やったことないけど」
あいにく俺の隣は晴希で埋まっている。二次元なんぞに心を許す余裕はない。
「はあ……それで、なぜそんな人の番号を参謀先輩が？」
「偶然にも手に入れたとかな」
「ほんとに偶然なんですか！？」
「ああ、科学とオカルトの結晶だってさ」
「なんと……」
みのりは驚愕していた。当然といえば当然だ。俺も初めて聞いた時同じ反応だったし。
ちなみに脇では一宮さんが「俺はいつの間に参謀先輩になったんだ」などと言っていた。……一宮さんには後できちんと謝っておこ

うと思う。

第八話　虹色のペンと彼奴らの血で悪夢を綴ろう（後書き）

今回は若干暴走気味の嘉光を。晴希以外の一人称で一話書いたのは初めてかもしれません。

まあ、もっと暴走させたいとは思ってましたけどね。

第九話　嘘と偽りの御物

「ふむ、文芸部からの着信ですか。しかし我々が、果たしてそれを許すとでも？」

新聞部部長は首を軽く傾げながら余裕綽綽といった態度でそう言った。

相手が許してくれるかどうか？　当然ながらそんな事は思っちゃいない。この流れでそんな事を許すのは余程のアンポンタンしかおるまい。

「許しましょう」

「許すのかよ！」

思わずタメ口で突っ込みたくなってしまうほどにアンポンタンなのがここに一名いた。……いや違うか。よく考えてみると一名じゃなかったわ。何人か仁科さんに頷いてるし。

「落ち着いてください。そして水を飲もうとして手を滑らせてその携帯に水をかけてください」

「やめて下さいよ！？」

なんて注文だ。というかそれは決して落ち着いてはいないと思う。それに私のは防水だ。

「とにかく早く電話に出てください。そしてその惚気話（のろけばなし）をカセットテープにして新聞部にお譲りください」

「無理です」

さすがは嘘九割と偽り一割だ。私は携帯を開き、困り果てながらも結局通話ボタンを押すしかなかった。

で、それよりちょっと前のこと。

「まず代表の由宇を電気椅子に座らせて――」

「内藤」

「いや、晴希を取り戻した後暗殺して偽の由宇を擁立すれば――」
「内藤」
「いやそれも違う。だいたいこの学校には生徒が多すぎるんだ。新聞部員をひっとらえて、あえて隙を作って逃がし部室で合流した所で装着しておいた爆弾を――」
「内藤！」
「駄目だ晴希が巻き添えになる……くそっ！　ごめんなさい！」
「分かってくれたなら結構だ」
俺たち（ただしほぼ一名）は、こうやって至極真面目に晴希奪還作戦の道程を考察しているところだった。
とここで、一宮さんが意見を出す。
「新聞部室に行くメンバーを決める必要があるな」
なるほど、これはもう数人で突入するということだろう。
ということは、最低限俺は当然だとして、他には……。
「小枝さんの力が必要になりそうですね」
「あれっ？　私頼り？　うん、まぁいいけどね！」
俺の発言に、常に楽しげな小枝さんが答える。
「……そうだな」
なぜか一宮さんは一人苦々しい表情をしていたが、どうしたんだろうか。ともかくあまり踏み込んで心地のいい話ではなさそうだが。
「菅原はどうだ？　俺はできるやつだと睨んでたんだが」
そう言って後輩、菅原卜全（すがわらぼくぜん）の方を見る。
「ちょっと無理ですね。今日は海苔（のり）も蒟蒻（こんにゃく）も持ってないので厳しいです。それに蝉も丁度切れててですね」
「その装備でどうやって戦うんだ……」
菅原は時々よく分からないことを言う。さすがこの前晴希に「お前は微妙さにおいては他の追随を許さないな」とまで言われただけのことはある。
「いえ、バイトで使うんですよ」
「バイト？」

「ええ、バイトです。疑問に思われるかもしれませんがこれは……いえ、やめておきましょう」
何その引き、すごく気になるぞ！　くそっ、何だ！？　何のバイトだ！？
呆れたように一宮さんが助言する。
「というより戦力が欲しいなら杭瀬でも連れていけばいいだろう」
「……」
部室の奥に、それなりに可愛いはずなのになぜだかやけに地味な女子が見える。
確かに杭瀬はああ見えて運動神経はいいらしいし、それにいきなり部室に忍び込むなんて真似も無理じゃないだろう。同じ部じゃなきゃ存在すら認知できなかったようなやつなんだから。
しかし、だ。
「でもね一宮さん、それはちょっと承諾できないんですよ」
「ほう」
「敵地に女の子を送り込むのは俺の主義に反するんで」
「内藤、格好つけて言っている自分の姿をよく見直してみろ」
一宮さんの相変わらず冷静な一言。へ？　自分の姿って言われても、右手の指が全部ねじ曲がってて肘がねじ曲がってて、足も同じってだけじゃ――なん……だと……？
「ぎゃあああああ！　体が！　右半身の関節が全部曲げられて新人類に！　小枝さん！？　あんたイチ、ニのサンで何をやってんの！？」
一瞬で右半身の関節をすべて逆に曲げられた。
「どうしたの？　右半身がでたらめな人になってるけど！」
「あんたの強さがでたらめですよ！」
「お前ら、痴話喧嘩は後回しにしろ」
「そう思うんだったら俺の関節を元に戻してくださいよ……」
一宮さんは小枝さんに目配せする。すると小枝さんはまた火中天津甘栗拳ばりの速度で俺の体を元に戻してくれた。

「さて、お前らが遊んでいる間に秋津のアドレスはお前の携帯に登録しておいた」
「俺はおもに弄ばれてましたがね」
「内藤は秋津に連絡を取っておけ。小枝の突入後は流れに任せろ」
なるほど、ようやく突入か――
「って、結局力技ですか。さっきデジャヴがどうとか――」
「お前があまりにも急かすからな。急襲をする側がなぜ焦る必要がある」
「……すみません」
「気にするな。それより早く連絡を取れ」
そうだった。俺にもすべき仕事がある。
携帯電話を開き、アドレス張に登録されたばかりの『秋津晴希』に電話をかける。届けこの想いっ！
……。
……なんだなんだよなんだってんだよ！　随分と待たせるなおい！
「一宮さん！　晴希ってもしかして携帯持ってきてないんじゃ――」
「そんなことはない。見てみろ」
一宮さんはそう言うと、いつものように使っているノートパソコンの画面をこちらに見せてきた。複数の長方形の組み合わさったような図に赤の点が打たれている。これは……地図か？
「現に秋津に渡しておいたお守りの発信機と秋津の携帯電話に仕込んでおいた通信機で位置を調べてみるとどうだ、同じ場所にあるのが分かるだろう」
「そうですね、納得です」
そうして再び応答を待つ。「ちょっと待ってください！　タンマタンマ！」なんてみのりが叫んでいるが、何をそんなに慌てているのか俺にはさっぱりわからなかった。
「それよりは今出れない状況にあるのかもしれないな」

「ということは……さあ、虐殺の準備だ！」
「落ち着け」
といったところでようやく、相手が電話に出てきてくれた。聞こえてくるいつもの可愛らしい声。どうやら無事だったらしい。
『内藤か？』
「おうそうだ、内藤だ！　大丈夫か？」
『……チッ』

ツーツーツー……。

「……舌打ちされて切られちまったぜ！」
「静かにしろ」
その場でへたり込み天井越しで空に向かって叫ぶ。今夜はきっと……いや確実に枕を濡らすことになるだろう。

第九話　嘘と偽りの御物（後書き）

えと、要するに全力で助けにいっても全力で受け入れてくれるとは限らないって事ですね、はい。

愛って難しいものです。俺には恋愛経験なんてありませんが。

第十話　イン・ザ・パラレルワールド

「参謀先輩」
電話で四苦八苦している嘉光から離れ、朱鷺羽は一宮に話しかけた。
「参謀先輩じゃない」
「参謀先輩」
「誰が参謀先輩だ」
「参謀先輩」
「……朱鷺羽」
「はい」
「一宮先輩だ。間違っても俺は参謀先輩じゃない」
「そうですか。参謀……の、一宮先輩」
「どうした。そして確かに俺は一宮だが参謀ではない」
まずどうしてこの後輩は一宮のことを参謀呼ばわりしたいのか未だに謎だった。
「天森先輩一人で大丈夫なんですか？」
「天森なら大丈夫だ。もっとも、俺はそこまで信用していないが」
「そうなんですか？　ならなぜ」
「あいつくらいしかいなかった。今日は誠文もいないしな」
「大曽根先輩ですか？　旅に出たって言ってましたけど、本当のところどうなんですか？」
「それはプライベートの領域だ。それに、そんなものを明かした所で面白くも何ともないだろう」
「はあ、すいません……」
「ちなみに天森は、召喚獣を呼んでおいたと言っていたがな」
「召喚獣？　それはどういう？」
「俺にも心辺りはない。だからこそ胡散臭いんだがな」
「は、はあ……」

頭に疑問符を浮かべる朱鷺羽を無視し、一宮は新聞部のある方向へ軽く目をやった。

「すいません、どうやらイタズラ電話だったみたいで」

携帯電話を折り畳み、そう返答する。さっきの通話なんて最初からなかったんだ。

「いえ、私の見る限りでは横に『内藤嘉光』と書いてあったような気がしたのですが……」

「……誰ですかそれは？」

「へ？」

仁科さんが困惑している。躊躇わず、寧ろこれは好機とばかりに私は話を続けることにした。

「内藤嘉光なんて人物は、この学校にはいません……いえ、この世界にもね」

『……』

部室がしばしの沈黙に包まれる。

「そんな事は……なるほど、ありますね」

そしてまさか納得するとは思わなかった。

「おそらくこれはパラレルワールド……どうにかして元の世界に戻らなければ！」

私には理解もできない決意を込めて仁科さんが立ち上がると、他の新聞部員達が次々に騒ぎ出した。

『そうだ、これは夢なんだ！』『昨日買ったエロ本が地雷だったのもきっと夢なんだ！』『俺はやればできる子なんだ！』『ヒャハハハハハ！　ラリホー！』『キエエエエエエ！』『楽シイナア！報道ガデキテ楽シイナア！』

……もう駄目だこの新聞部。いっそ滅びてしまえばいいと心から

思うんだよね。
　そうやって私が文芸部にいた事にまさかの感謝を覚えながらも思考を放棄している所に、再び聞き慣れたＭＧＳの着信音。とは言っても勿論サイボーグ忍者などではなく。相手が誰かはまあ見るまでもなかった。
『おう晴希』
「誰だお前は」
『冗談はよしてくれ。ただでさえさっき電話切られたせいで死にたくなってるってのに』
　そうか、あれが相当な精神的苦痛を与えるとは。嘉光はマゾだから大丈夫だと思ったんだがなあ。
「悪いがこっちだと内藤嘉光って人間は存在しなかった事になってる」
『へ？』
　信じられないというような嘉光の声。まあこれは無理もない。
「どうも新聞部は勝手にパラレルワールドに旅立ってしまったらしい。残念だったな嘉光」
『……そうか、なら仕方ない』
　だからどうしてお前も納得するんだよ。などと思ったが、果たしてこいつの次の言葉は、
『大丈夫だ』
　私にとって全く意味の分からない物であった。
「……何がだよ？」
『お前が違う世界に行ってしまっても、俺は絶対にお前を見つけ出してみせるからさ』
「……っ！」
　思わず言葉になっていない何かが口から飛び出た。
『どうした晴希！？　大丈夫か！』
「お前の歯の浮いたような台詞のせいだ馬鹿！」
　おかげでさっきの水道水が逆流してしまったじゃないか。どうし

てくれる。
『大丈夫ならいい。ところでよく分からんが、もうすぐそちらに召喚獣が来るとか……』
「はあ？　召喚獣って何なんだ」
いきなりよく分からない単語が出た。本当にパラレルワールドの狭間からやってくるんじゃないだろうな？
『ひょっとしたらこれが科学とオカルトの結晶なのかもしれないな……一宮さんがお前の携帯番号を特定した時と同じようにさ』
「おい今の話は聞き捨てならんな！」
そんな私の訴えは見事にスルーされ、『まあいいけどさ』と言われた。いや、それが本当にいいのかを決めるのはお前じゃないから。その辺後できっちり勘定してもらおうか。
『届いてからのお楽しみだとか言ってたぞ』
「そうか、じゃあ切るぞ」
処分を後でやるとするならばもう長話をしている必要もないだろう。私は遠慮なく携帯を切り、仁科さんの方に向き直った。
『っと、ちょっと待っ――』
さようなら、嘉光。
「さて、ではこの世界のあなたに訊いておきましょう」
混乱からある程度回復した仁科さんが言う。しかしまだパラレルワールドを信じ込んでいる辺りが半端ない。
「あなたは新聞部に入る意思がありますか？」
「ありません」
即答。
こんな水道水ばっかり飲ませたり勝手にパラレルワールドに入っていく部活など、突っ込みが追いつかない。よって直ちに却下だ。
「そうですか、では」
特に悔しくもなさそうに、仁科さんは言った。「はい」と相槌を打っておく。
「文芸部に残る意思はありますか？」

「……」

難しい話だ。

確かに入りたくて入ったわけじゃない。だが、選択のチャンスは前にも一度あった。そしてそこで、部活を続けるとこの口で言ったのも事実だ。

「嫌だ嫌だなんて言ってる内は、本当は嫌じゃないのかもしれないな……」

そんな事を呟いてしまう。

「新聞部入部を一瞬で拒否しておきながらこの質問に悩むなんて、我々はなんて顔すればいいんですかね……」

そして仁科さんもそんな事を呟いていた。あ、やっぱり悔しかったのか。ざまみろ。

……なんていうやり取りはともかく。

「分かりましたよ。答えましょう。私はあの部に――」

このまま文芸部に残るという選択肢を取る意思は――

――パコーン！

と、狙ったかのようなタイミングで新聞部室の扉が吹き飛んだ。

そして廊下から現れたのは……一人の男子生徒。くせの強そうな黒髪が逆立っていた。

「文芸部一年、神城羅央（かみしろらおう）、見参！」

――超！　エキサイティン！

空中で扉を吹き飛ばした後そのまま何回転かし、着地した後その神城とやらは両足を広げ両腕と腰を深く落としながらも斜めに構えた、俗に言う『かっこいい姿勢』を取りながらそう叫んだ。

「……は？」

思わず今日何回目かと思えるような呆れを私は見せた。まさかこ

いつが『召喚獣』なのだろうか。それにしてもまたまた奇妙奇天烈な奴だ。

第十話　イン・ザ・パラレルワールド（後書き）

はい、そろそろ新聞部編も終わりが見えてまいりました。
それにしても杭瀬の出番がものすごく少ないような……いずれ奴との会話でまるまる一話使うときは来るでしょうが。

第十一話　神出鬼没の邪心礼賛

「総員、あの人を抑えなさい！」
『了解！』
突然の闖入者、神城羅央を取り囲む新聞部。
「おっもしれえ！　かかってきな！　全員俺がこのこの創始の力（フォース・オブ・ジェネシス）でぶっ飛ばしてやるよ！」
何だそのやけに厨二病臭い単語は。ここに来て変な異能力出すのか？　やっちゃうのか！？
「さて秋津さん」
新聞部一同が神城と交戦しているのを見やりながら、仁科さんが話し掛けてくる。ああ、あれは抑えられないな。キャラ的に。
「何ですか？　新聞部に入る気ならさらさらありませんが」
「いえ、そうではなく――さっきの水の事ですよ」
さっきの水？　つい勢いで飲んでしまったが、やはり罠にかかったのか？
なんて事だ。という事はさっきの行動は油断させるために……してやられた。囲碁で初心者相手に「取った」と思って油断してたら目を離しているうちに石を取られたような気分だ。そんなの、とんだ道化じゃないか。全く以って私のキャラじゃない。腹立たしいな。
「さっきの水――ただの水道水なんですよね」
「……」
やっぱり駄目だろう、この新聞部。
「ところで仁科さん」
「はい」
「あの一年、異次元的な力を使ってるように見えるんですが」
「安心してください。彼が手から波動を飛ばしているように見えるのはあなただけじゃありません」
「ですよね」

溜息をつく事しか出来なかった。本当にここに来て異能モノか。並行世界って怖いな。

「あの一年は何やってんでしょうかねえ」

「困った侵入者さんですよね、本当に」

「ほんと、凄いわよね！　私も出来るけど！」

「出来るんですか！　というか――」

声をかけてきたその人の方を向き、はっきりとその疑問を言葉として飛ばす。

「なんで天森さんは当然の如くここにいて、会話に割り込んでいるんですか！？」

「あら、神出鬼没とハーモニカの演奏が私のアイデンティティだったと思うけど！」

「どさくさに紛れて変な特技を付け加えないで下さい！」

「そう――ツンデレがハルちゃんのアイデンティティであるように！」

「うるさいだまれ」

嫌な方向にまとめられたものだ。思わずため口で突っ込んでしまった。いかん、焦りなのかついさっきの仁科さんへの接し方を引きずってしまったな。キャラ的にはどっちも同じようなものだとは思うが。

「誰と誰が同じようなものって？」

ほら、こうやって焦っているからこの人も読心術が使えたっていう事実を忘れてしまったりするんだ。

本当に……私は馬鹿だ。とんだ道化だ。他に言い様のない弱者だ。

「さてハルちゃん、あちらでちょっと話をしようかしら？」

「えっと、それは――そうです、仁科さんが暇じゃないですか」

みんなが手から出た波動に吹き飛ばされている間ずっと、この人は水道水を飲んでいなきゃいけないのか。そんなのは残酷すぎる。私も泣く。といってもこれから待ち受ける天森さんの処刑タイムにだが。ははは、全然暑くないのに汗が止まらないや。

「それは問題ないわよ！」
「……と、それはどういう」
「では、俺と話をしましょうか。由宇さん」
「……内藤」
今度は内藤嘉光。度重なる神出鬼没にもうかけてやれる言葉がない。
その嘉光が首だけ回してこちらを見ながら、こう言った。
「言っただろ晴希？　お前がどの世界にいようが俺は必ずお前の所に行くって」
「だからそういう並行世界じゃないからな」
「何……ですって？」
今度は仁科さんが驚愕してしまっていた。敵同士の割に息合ってるなお前ら。増えたのは仲間じゃなくて敵なんじゃなかろうか？
仲間を増やして次の町に行く某ポケモントレーナーとは大違いだ。
少なくともコイキングより弱い女子高生が進むべき道じゃあないと思うんだ。
「今まで並行世界だなんだと私を騙して、嘲笑っていたのですか……」
まだ信じ込んでたのかよ。あんたはもういいよ仁科さん。ただ一つだけ違うのは、笑えもしなかったって事だけど。ならばどうする？　こうするまでだ。
「内藤、後は任せた」
こいつに頼むしかない。一対三よりは明らかに一対一の方がましだ。
「すまん晴希、ちょっと調子が悪いもんで」
こいつ……見事なまでに棒読みじゃないか。言っておくがこんな私でもお前の口からいつものアホのような発言がスラスラと流れ出る事くらいは知ってるんだぞ。
「何が目的だ内藤！」
「いや、つまらない事なんだが――」

嘉光は私の目を見据えて続けた。
「『嘉光』って呼んでくれ」
こいつ、まだそんなことを気にしてたのか。懲りない奴だ。ばーかばーか。
「ああ、分かったよ嘉光！」
「急に力が湧いてきた！　新聞部を皆殺しだ！」
「いや、そこまでやらなくてもいいだろ！　というかやめろ！」
「半殺しだな！？」
「ああもうそれでいいよ！」
嘉光がいつもの十割増し（実質二倍）邪な気を纏っていた気がした。……私のいない間こいつに何があったんだ？
「さてハルちゃん、こっちに来てくれるかしら？」
そして私の戦いも始まる。
バトルはこの後すぐってところか。超展開にも程があるだろ。

第十二話　復讐の使徒（前書き）

今回、ノリ成分だけで書き上げました。若干病的です。

第十二話　復讐の使徒

『由宇さん、ちょっと話をしようじゃないか』
『ほう、あなたが内藤嘉光さんですね？　名前は聞いて――』
『由宇さん、ちょっと話をしようじゃないか』
『え、ええ、話をしましょうか。まず秋津晴希さんについて――』
『由宇さん、ちょっと話をしようじゃないか』
『は、話をするのならせめてその殺気を――』
『由宇さん、ちょっと話をしようじゃないか』
『落ち着いてください！　水を――』
『シャアアアアアッ！』
『いやあああああああっ！』

幸いにも（と言っていいと思う）視界には捉えられていないが、同じ新聞部室内で惨劇が起きているのはよく分かる。仁科さん……哀れ。同情します。

「さてハルちゃん、こっちに来てくれるかしら？」

天森さんはそれが真なのか偽なのか分からない笑みを向けてきている。

――本当に同情します。多分こちらも同じような事になるでしょうよ。

「……天森さん、何をする気ですか？」

「うーん……」

許してください。私の知っている天森さんはなんだかんだ言って優しい天森さんですから。

「――縄を首にかけたバンジーとかかしら！」

なるほど、これはどうあっても避けなくちゃならない。身長への願望もないわけじゃないが、流石に命と天秤にかけるものではないだろう。

「……あー、天森さん、私の体が弱いって知ってますよね？」
「ポケモンのコイキングだっていくらオーバーキルしても瀕死に留まるから大丈夫よきっと！」
「あのですね、きっと瀕死って事はもしかすると死ぬって事ですよね？」
「当然！」
いや、当然と言われてもまさか同じ部活の先輩に抹殺されたくはない。無論瀕死にされたくもないが。あと無論違う部活の先輩ならいいと言うわけでもない。本来なら現実とゲームをごっちゃにするなとも言いたいところだが、その辺の境界は今現在非常に揺らいでしまっている。
ついでに、仁科さんの「きゃあああああっ！　指と爪の隙間に粘土」詰められた！」という叫び声が耳に入ってきていた。嘉光がどういう方向性で無双しているのか非常に気になる所だが、今の私はそんな状況じゃない。何しろ私のか細い命がかかっている。
「……天森さん、今度何か奢りましょうか？」
「そんな事しなくても、活路はあるのに」
活路はあったんですか。よかったよかった。
あと地味に天森さんの台詞から「！」や「？」が消えた気がする。
「作者が疲れたからよ！」
さいですか。実に発言がメタでございますね。
「それで、活路と言うのは」
「交換条件よ！」
「はあ」
天森さんが私の耳に口を寄せてきた。念のため言っておくと指をビシッと突きつけてやっぱり語尾に「！」をつけて叫ぶような感じで言ってきた後にだ。だがもしここで仮に「わっ！」とか大声で叫んだり、私の耳に素敵な事をしたら絶縁ものだ。下手すれば絶命だ。私の命運は文字通り天森さんの手の平の上にあると言ってもいいだろう。そう考えると耳を貸すって怖い行為だな。今度からは気を付

けよう。
だが優しい天森さんはそんなことをせず、
「……嘉光君とのデートでどうかしら？」
「なるほど、それならどうぞ行ってきて――」
「いや、ハルちゃんが行ってくるんだけど！」
「あああああっ！　耳が！　耳があっ！」
訂正。ちゃんとヒソヒソ声で離してくれるかと思ったら、よりによって二言目で大声に戻った。優しくない天森さんだ。やっぱ次からじゃ駄目だな。
鼓膜への思わぬ不意打ちについ腰を抜かし後ろに倒れこんでしまったが、そんな私にも構わず天森さんは続ける。
「そうね、ルートとかはこっちで考えるから！　それで罰ゲームみたいな感じでビデオカメラでも持てば！」
「……そうですか。じゃあゴールデンウィーク頃にでも」
「了解！　あとそんなとこで寝てると風邪引くわよ？」
全部あなたの責任でしょうが。くそ、鼓膜が……鼓膜がさっきから唸りを上げて……。
「口は災いの元ってね！」
私は何も言ってなかった筈ですが。寧ろそっちでしょう災いの元は。
修羅場を生還したので、崩れ落ちたままで周りを見てみる。

『うおおおおおおおお！』
『侵入者め！　生きて帰れると思うな！』

例の神城羅央という一年生は七色の分身を出しながら新聞部員達と交戦していた。あのままならいずれ全滅するだろうが、それでもここまで耐えている新聞部員たちは凄いと思う。例えその相手が一年生一人であれ。
「そう言えば天森さん」

「何？」
「あの一年生、何なんですか？」
竜巻を起こしている一年を見やる。何だか腕に紋章みたいなのが付いてる気がしたが気付かない振りをしておく。
「召喚獣（しょうかんじゅう）よ！」
「いえ、そうではなくて」
変にはぐらかされても困るんだが。
「つまりは適当に知り合ったわけですね」
「いえ、召喚獣だから！」
さっぱりだ。
「ま、いいんですがね」
それはそうと、もうちょっと周りを見直してみよう。ポートピア連続殺人事件とかは勿論、逆転裁判すらやった事が無い私だが、それでも観察眼が大事である事ぐらいは心得ているのだ。あの一年は根本的に訳が分からないから例外。

『死ねえええええ！　オラオラァ！』
『ぎゃあああああ！』

嘉光は目にも止まらぬ動きで仁科さんに攻撃（？）を仕掛けていた。ああ、今一瞬で地肌にガムテープを張って剥がしたな。あれは痛い。というか一体何キャラになってしまったんだあいつは。もう既に戻れない所まで行ってしまったのならもう戻って来ないでいいんだが。
というか嘉光は女子全員下の名前で呼んでるし基本フェミニストって印象があったが、一気にキャラが定まらなくなった気がする。
思い当たる事といえばただ一つ。私が誘拐されていたのが嘉光を狂わせたのではないかという事だ。じゃあ私が止めなきゃならんのか。なにこの罪悪感の持てなさ。
とはいえここで立ち往生していても仕方がない。実際には座り込

んでるけど。
「やめろ嘉光！」
『血だあああああああ！　奴らの血で、文学をおおおおおお！』
『ひゃあああああああ！』
いかん、これじゃ止まらない。折角下の名前で呼んでやったのにスルーかよ。気遣って損した。
ならば、こちらにも考えがある。無益な争いを止めるための考えが。
「頼むからやめてくれ！　内藤君！」
これでどうだ！　お前も中学からのクラスメイトにさん付けで呼ばれた私の苦悩を、屈辱を、疎外感を思い知れ！
すると。
「争いなんて無益だ」
と言ったのは他でもない、内藤君こと嘉光だった。一瞬で止まったなお前。ついでにさっきまでの行動と全く矛盾している台詞だなそれは。
「すいません由宇さん。俺、取り乱していたみたいで」
嘉光が仁科さんに頭を下げる。取り乱しすぎだ馬鹿。仁科さんが凄く引いてるぞ。指と爪の間に何か挟まってるし。嘉光はどっから持ってきたのか粘土なんて持ってるし。
「まあそれはともかく、これで一件落着――」
「いえ、そうでもないみたいよ！」
私の台詞を打ち消すような天森さんの一言。
「あれを見て！」
一年のほうを指差す。そこにいたのは、漆黒のオーラを纏った神城羅央。
「創始の力（フォース・オブ・ジェネシス）の暴走よ！」
波動、分身、竜巻、暗黒化……厨二病臭いにも程があるな。ふざ

けろ。

第十二話　復讐の使徒（後書き）

次か、次の次でラストって事になるんでしょうかこれは。いずれにせよ伸びすぎですね、はい。

ちなみにこの小説、最後の最後にどういう展開にするのか全く考えてません。いや、正直フラグの立てようが……。

第十三話　創始の理

「目デハナイ、心デ見ロッ！」

周りの空気が歪んで見えるほどの暗黒オーラを放つ一年生、神城羅央。なんか奴の持つ創始（フォース・オブ・ジェネシス）の力が暴走したとか何とか。新聞部は熱気で充満している。機材とか壊れたりしないだろうか。そこらへん結構心配だ。でもってあいつの頭は多分手遅れだ。

「晴希が助かってはいおしまい、ってわけでもないみたいだな」

「これは困ったわね！　たかが新聞部相手にあの子を出したのがいけなかったかしら！」

「ああ……指と爪の間が……」

そして奴を前にしての反応は、文字通り三者三様だった。

本当、いつの間にこんなファンタジー展開に突入したんだ？　あと仁科（にしな）さんにはさっさと『指と爪の間に粘土攻撃』から復帰してほしい。

「くそっ、魔法先生でも呼んでこい！」

どうせ来ないがな。やけくそになってそう叫んで見る。

「ああ、あの先生は産休なんだ！　タイミングが悪い！」

「今じゃなきゃいたのかよ！？」

嘉光の返答に驚愕した。

「目デハナイ、心デ見ロッ！」

暴走して口調までおかしくなった一年生が再び叫び、暗黒オーラをもう一段階上げた。そういえばこいつ、さっきからこれしか言ってない。

「俺が止めよう！」

「嘉光！――持ってきてたのか、それ……」

そう言って嘉光が持ち出したのは――例の黒板消し（２ｋｇ）。頭部にでも当たればただでは済まないであろう危険なテイストを孕んだ一品だ。

「でいやあああああ！」
黒板消し（２ｋｇ）を投擲）――いや、射出する。
高い速度と共に手首から繰り出されたそれは、初速のまま神城の頭部に突き刺さるように飛び――

『なっ！？』
――そのまますり抜けた。
一瞬でかわした？　いや、当たる直前まで見たが、体勢的にもそれは難しかった。同じ理由により、手足で弾いたり掴んだりしたわけでもないだろう。
「……残像」
いつの間にか復帰していた仁科さんが告げる。そうか、残像か。
いや、残像ってそんなオカルトな……あいつならやるか。
待て、と言う事は本体はどこに？
「目デハナイ、心デ見ロッ！」
もはや耳にタコができるほど聞いた一節がどこからかまた聞こえてくる。
「危ない晴希っ！」
嘉光が私の襟首を掴み、自分の方に引き寄せた。何をするんだ、と言おうと思ったらさっき私のいた場所を竜巻を纏った足が通過していった。もしかしたら三途の川をスキップで渡る所だったのかもしれない。嘉光には素直に感謝しておこう。
それにしてもこの一年、何から何まで滅茶苦茶の出鱈目だ。天森さんみたいだな。
「いや待て！　天森さんなら！」
これ、天森さんなら余裕で鎮圧できるんじゃないか？
天森さんの実力は折り紙付きだし、なにしろこいつを召喚獣と呼んでいたくらいだ。普通に考えて競り負ける方がおかしい。多分完全上位互換くらいにはなると思ってもいいだろう。じゃなきゃあの人何しに来たんだ。

「それがな、小枝さんいつの間にか消えてたんだ！　俺があいつに黒板消し投げた辺りで！」
　またもや嘉光の一言。
「どうして天森さんが消えるんだ！　逃げたのか？」
「こっちが訊きたいくらいだな！」
　立場は同じか。生憎私達は逃げられそうにない。本当にあの人何しに来たんだ！？
「どいてなさい」
　と、ここで仕切り直すような一声。
　仁科さんだ。
　多々の疑問が湧きあがってくる。なぜここで仁科さんが出るんだ？　まさかこの人にあいつが止められると？　だとしたらどうやって？
「……そして、どうして裸足に？」
　いかん、ふとした疑問が口から出てしまった。
「内藤さんに、上履きの中にスティックのりを塗りこまれましてね」
　嘉光が明後日の方向を向きながら口笛を吹いて誤魔化そうとしている。え？　だから何やったのこいつ？
　はっきり言って、爪の間に粘土を埋め込まれながら裸足になっている仁科さんはかなり心もとない。
「そういえば」
「はい」
「どうして仁科さんは、助けてくれるんですか？」
　逃げるチャンスはあっただろう。神城が私に攻撃してきた辺りとか。あいつに対抗できるような人が、その隙を見逃すだろうか？
　いやそんな事はない。
　すると、仁科さんは呆れたような表情で。
「世の中にはこんな言葉があります」
　こんな事を切り出した。
「昔の諺（ことわざ）ですか。意外としっかりしてるんですね」

「いいから聞いて下さい。世の中にはこんな言葉があります。『昨日の敵は今日の友。今日の友は明日も友達』と」
「……とりあえず、仁科さんが義理堅いって事は分かりました」
場が場なので、「後半はめざせポケモンマスターの歌詞だろ」とかは突っ込まない。
「それと、ここは私の部活ですからね」
そう付け加えながら、仁科さんはコップに注がれた水を少し口に含み、飲み込んだ。
心もとないはずのその姿が、何故か頼もしく思えた……何故だ。
「あの人強いぞ」
嘉光が私だけに聞こえるよう小声で喋った。
「俺の攻撃を喰らって怪我一つなかったくらいだ」
それは嘉光の攻撃に問題があるんだと思う。あれは怪我するとしてもガムテープ攻撃ぐらいだろう。
「目デハナイ、心デ見ロッ！」
「さて、そろそろあちらも怒ってらっしゃるので――行きましょうかね！」
神城と仁科さんがぶつかり合う。
火器も銃器も使っていないのに、なぜか眩しいほどの光が新聞部室に溢れ出た。

第十三話　創始の理（後書き）

新聞部室内で8話も使うのは、正直どうかと思います……。

第十四話　終焉の呼び水（前書き）

ようやく……ようやく新聞部を脱出できたぞっ！
あ、では、お楽しみください。

第十四話　終焉の呼び水

ドアを開ける。いつもの広い部屋、いつものパソコン、いつもの本棚……。

ようやく、文芸部室に戻ってきたという事だ。

「戦いは長かったな……」

ついそう呟いてしまうくらい、新聞部室でのひと時は過酷だった。まあ、大変なのは新聞部相手じゃなかったが。

時間が時間なので皆帰っていて、部室に残っていたのは一宮さんと杭瀬、そして朱鷺羽だけだった。

さっきの新聞部室での話のオチでも説明しておこう。

闇を纏い鬼神化した文芸部一年、神城羅央と新聞部部長、仁科由宇さんがぶつかり合い、まるでカメラのフラッシュが焚かれるように光を放ち、そして交差した。

私は見ていた。

擦れ違いざま、神城の口に水がねじ込まれるのを。

仁科さんは振り返り、満身創痍になりながらも口を開いた。

「……りあえず……水でも……んで……ち着いて下さいよ」

驚愕した。色んな意味で。

なぜ奴の隙を縫うことが出来たのか、なぜ最初で最後の一発を水道水に懸けたのか――

「目デハグハアッ！……普通の……普通の水道水だ。……待て、俺は何を！？」

――なぜ、奴を正気に戻せたのか。

「いや、これにて一件落着！」

「そしてなぜ、天森さんがいつの間にか戻ってきているのか……」

「いや、超必殺技一発で終わらせようと思ってね！」

つまり、隠れて機会をうかがっていたが、その間に仁科さんが解

決してくれたと。
どうも腑に落ちないな。天森さんの実力なら、わざわざ私たちを囮にしなくてもよかったんじゃないかと思う。ただ、そうなるとなぜ私たちを囮にしたのだろうか？　戦いを長引かせ、新聞部の損害を拡大させたかったのだろうか？……なんとなく思い当たることはあるにはあるが、私は敢えてそれに気付かない振りをし、自分を偽る事にした。
「……さて、文芸部の皆さん」
ようやく呼吸の整った仁科さんが床に腰掛けたまま、口を開いた。
「我々新聞部は、あなた方文芸部と協定を結びます」
「つまり、もう俺の晴希を攫ったりしないと？」
「ええ」
嘉光の問いにも仁科さんは即答した。
「お前の秋津晴希になった覚えは更々ないがな。ところで仁科さん」
「はい」
「なんでそう急に？」
私の問いに、この新聞部部長は喜怒哀楽の『楽』をそのまま現したような表情で、こんな事を言った。
「好きな人のために頑張れる人は、嫌いじゃありませんからね」
「あいつの事ですか。ただの馬鹿ですよあれは」
「秋津さんは、内藤さんの事は好きですか？」
出たよ、こういう質問。好きと言ったら「異性として好き」って解釈になるし、嫌いといったら「友達として嫌い」って事になる。まああいつだから後者でもいいんだが。
「嫌い……でもありませんね」
「では、好きと」
「全然です」
「即答ですか」
「いやもうやっぱり嫌いでいいです」
私の反射的即答に、仁科さんは呆れかえっていた。

「後始末は私達がしますから、秋津さんたちは戻ってください」
「どうも」
私は嘉光と天森さんの所へ歩み寄った。
「いや、もうあれは大変でしたよ小枝さん！　死ぬかと思いました！」
「嘉光君は殺しても死なないから大丈夫！　何度でも蘇るから！」
ちなみにこんな会話を繰り広げていたお陰で、さっきの私達の話は嘉光の耳に入っていなかったらしい。まぁ、最後の天森さんの台詞には同感。寧ろ何度でも殺そう。

「無事でよかったです！　秋津先輩！」
部室に入った途端真っ先に駆け寄ってきたのは一年の朱鷺羽だった。文芸部の中でもまともな方の部員だが、おそらく嘉光に好意を寄せているように見える。そこは残念な所だと思うが、まあそこは個人の自由だろう。他人の恋愛感情に口出しする権利は私にはない。
「晴希先輩の居場所がわかったのは、参謀先輩のおかげなんですよ」
……参謀先輩？
「俺だ」
「……ですよね」
参謀先輩とは、一宮先輩の事だった。まあいかにも参謀っぽいのは分かるが、どうしてそんな渾名になったのだろうか。一体私のいない間に何があったんだ？
「ちなみに、居場所がわかったと言うのは」
「偶然にも発信機を取り付けていただけだ」
「プライバシーの欠片も見当たりませんね」
大曽根さんといいこの人といい、やる事がいちいち犯罪の域に片足を踏み入れている気がする。下手すれば片足以上、最早彼岸の存在だ。
「気のせいだ」

きっと大曽根さんはさっきの私の台詞と地の文両方に気のせいだと言ったんだろう。この人は肝心な部分でいつもしらばっくれるから厄介だ。いや他の点も十分厄介なんだけどさ。私に発信器仕掛けるとか。

「……そうですか」

「ちなみに秋津の携帯の番号も偶然――」

「だと思いました」

もう言いたいことが分かったので、話を切った。

「晴希」

横からいきなり話し掛けられた。この影の薄さは、一人しかいないだろう。

「杭瀬か。さて、私は一人で帰るぞ」

「待って」

「また今度だ。お前との話は無駄に長くなる。早く帰って風呂に入りたい」

「風呂？　俺と一緒に入――」

「黙ってろ内藤」

「にょろーん」

嘉光が機能停止したところで、また杭瀬が話し始めた。

「晴希の風呂なんてどうでもいい。どうせ清潔感とかは変わらない」

「杭瀬、今さりげなく私を中傷しなかったか？」

「それより会話してくれないと訴えようと思うの。晴希が私の処女を奪った事もばらすから」

「待ってくれ。後半の事実は確認されていない」

と言うか私は純粋な女だ。男でもレズでもない。他の奴らに聞こえないよう小声で言ってもそいつは限りなくアウトに近いアウトである。

「じゃあ、仕方なく後日話すとして」

「ああ、何故そっちが妥協するような形になったのかは定かじゃないがそうしてくれ」

さて、帰るか。私は鞄を手にとり、部室を出ようとした。すると、予想通りだが嘉光がついてきた。
「待ってくれ晴希、俺も帰る」
「だと思ったよ」
そのまま並んで部室を出て行く。
「……羨ましいですね」
朱鷺羽が憧れるような眼差しを私たちに向けてきていた。こいつの相手は実際かなり大変なんだがな。
「なんだかんだ言って離れようとしないのね！」
天森さんが余計な事を言っていた。私が離れようとしないのは単にもう諦めたからってだけです、はい。
「お幸せに」
杭瀬はもっと余計な事を言っていた。あの似非無口キャラは本当に……。

下駄箱を出て、また並んで歩く。嘉光と私の身長には、少なくとも15センチ以上の違いがあった。
「晴希」
そしてふと、嘉光に声をかけられた。
「どうした、内藤」
「いや、もう嘉光って言ってくれないんだな」
「一緒だろ」
「なあ晴希、確か一年の春頃……ちょうど一年位前だな。あの時俺と約束した事、覚えてるか？」
「文芸部に入る事、だったか？」
嘉光のほうを見ず、そのまま返事する。
「あの約束はもう契機を過ぎたはずだったな。いや、やめる気はないが」
「いや、そうじゃなくてだな……」

「素直に感謝するよ、ありがとう。私はあの文芸部が、案外好きみたいだ」
　奇人変人ばっかりだがなぜか居心地は悪くない、あの場所が好きだ。ほんの少しだがな。
「俺の事は？」
「知らん。黙れ」
「そこは厳しいんだな……」
「当然だ」
　勢いで好きと言うとでも思ったか。嫌いじゃない、で我慢しとけ。
「いや、そうじゃなくてな……もう一つの約束の事だ」
　もう一つの約束……と言うと。
　脳内の記憶を辿ってみる。確かに、あの話にはまだ続きがあったのだった。

『晴希の質問は二つあったな』
『ああ、それがどうした』
『……実はもう一つ、頼みたいことがあるんだ』
『何だ？　あまり面倒なのは断るぞ』
『いや、簡単なことだ』
『……ほう』
『俺はお前の事を晴希と呼ぶ。だからお前は俺の事を嘉光って呼んでくれ』

　なるほど思い出した。そう言えばそんな惚気話があったな。言わなくてよかった。あんなの新聞部にばれたら一瞬でネタにされるはずだろうから。
「ああ、あれなら一週間でやめたな。それがどうした？」
　それでも、考えてみるとあれには結構重要な意味があったのかもしれない。現に私はあいつと話す時は内藤と呼ぶが、心の中では嘉光と呼ぶ事をやめられていない。

「一週間じゃないだろ」
「そうだったか？」
「ああ、三日だ」
「残酷だったんだな、私は」
「そうでもないだろ。晴希は晴希だ。どんな晴希でも俺は好きだよ」
……本当にこいつは。恥じらいってのが無いのかね。
「待て嘉光、お前の帰り道は向こうだったはずだが」
「え？」
「『え？』じゃない。なぜそこで疑問を覚えるんだ」
「今日は晴希と一緒に風呂に入るはずだったが」
「いや、そんな予定は未来永劫無いだろうがな」
やっぱりフォローのしようがない。見つからない。こいつはただの変態だった。
ああ、また私の間違ったラブコメが変な方向に進むんだな、なんて思うと同時に。

この時も確かに、あの馬鹿は嫌でもずっと私の傍にいてくれるなどと思っていたわけだが。

あの事件が起こってからまた考え直してみれば、生憎ながらそうでもなかったらしい。

第十四話　終焉の呼び水（後書き）

ようやく新聞部編終結です。これで杭瀬との話が書ける……！

それはそうと、サブタイトルを全体的に大きく変えました。これで若干のシニカルっぷりも出ていると思います。

断章　乙女二人はかく語りき

まあ、いつもといえばいつものやり取りに入るのかもしれない。
「……さて杭瀬（くせ）」
「……」
「杭瀬、ちゃんと答えてくれ」
「……」
場所は部室。アクティブに絡んでくる内藤嘉光（ないとうよしあき）をうまくかわし私が声をかけている相手、杭瀬弥葉琉（くせみはる）は今でこそ無口キャラを装っているが、私相手には本当に好き勝手言っている、いわゆる似非（えせ）無口キャラだ。
普段文芸部室においてこいつは、どこのコンビニにも並んでいないような意味不明のタイトルの本を読んでいて、本人は「恋愛小説の参考に」と言っているが、こんな調子で執筆する恋愛小説がどんな出来になるかわたしには全く予想出来ない。
というわけで。
「よし、帰ろう」
「……ノリが悪い人」
「お前には言われたくないな」
そちらから呼んどいてコミュニケーション無視なんだもの。
「そうだった。晴希（はるき）は普段家で全裸になってライオンキングやってるくらいノリがよかったんだ」
「誰だそれは。普通に誰だ」
私はそんな性癖の人間じゃない。
「……」
……なぜ私は何もしていないのにジト目で見られなきゃならんのだ？
「可哀相な晴希」
「可哀相なのはお前だ」

「大丈夫。晴希は晴希だから」
「さて、帰るか」
「死ね」
「人に死ねと言うな」
「生きろ」
「いや、生きるけども」
とりあえずもうやめろよこのやり取り。一体誰が得するんだよ。
「本当にノリが悪い。それが全裸でライオンキングした人の実力？」
「だからそんな私は最初からいない」
「まずはそのふざけた幻想をぶち壊すから」
「ふざけてんのはお前だろ。私はあれだ、凄く真面目だ！　品行方正なんだ！」
ん？　感情が昂ぶってつい変な事を口走ってしまった気がするんだが。
「ただし、家では全裸」
「私はお前の目には一体どういう風に映ってるんだ！？」
「常に全裸」
「まあ、最悪だな」
「と言うか服が透けて見える」
「どういう超能力だよ」
というかどこのエロ漫画だ。
「脱いでも大して凄くない」
「悪かったな」
「けど私は分かってる。晴希が風呂上がりに毎日胸が大きくなるマッサージをしてることは」
「だからお前はどうしてそうやって私に事実無根のキャラ設定を付け加えようとするんだ」
というかこういう会話する対象がいつも私なのはどういう事なんだ。
「晴希……胸は小さくてもいいんだぞ？　寧ろ俺は小さい方が好き

だ」
「内藤は横から割り込んでくるんじゃない！」
「いや、そこはちゃんと彼氏として……」
「いつ彼氏になった。まあいい、後でたっぷり話してやるから黙ってろ」
「ラジャー！」
「ネタ古いな、お前！」
某ポケサンでは未だにやっているけれども。
まあとりあえず外敵の襲来は妨げられた。
「晴希……わざわざそんなマッサージする事ないのに」
「マッサージの話はお前から言い出したことだからな！」
「秋津先輩……わざわざそんなマッサージを？」
「朱鷺羽までそんな反応をするんじゃない！」
と言うかこの後輩、なんだかんだ言ってノリノリだな。普段はかなりまともだと聞いたが。
「じゃあ晴希」
「なんだ？」
「嘉光と入浴した感想を」
「本当に次々と嘘ばっか言うなお前は！」
「秋津先輩……」
「だから朱鷺羽！　なぜショックを受ける！」
「……羨ましいです」
「羨ましかったのかよ！」
まあとりあえず、言い付けを守って黙ってくれた嘉光に評価プラス一点だ。よかったじゃないか、ＧＤＰの如く落ちていた私の好感度が少しでも上昇して。
「とりあえず嘉光と晴希のあの日の話は『Ｒ１８』タグ付きの番外編でやってもらうとして」
「それはきっとお前の妄想成分１００％になるだろう」
本気でかかれば慰謝料すら持っていけそうだ。

「大体、晴希はオプションが多い」
「いきなり話題変わったな」
何の話だよ一体。
「男女（おとこおんな）、ツンデレ、コイキングより弱い、全裸でライオンキング、レズ」
「最初の三つはさておき、後ろの二つはお前の妄想だからな！　と言うかお前ライオンキング好きだな！　あと朱鷺羽はなぜそう私を尊敬の眼差しで見てるんだ！？」
「人間は怖いね。好感度が上がったり下がったりする」
「達観してるみたいだがこの事態を引き起こしたのが誰か分かってるのか？」
「全裸でライオンキングの人」
「そんな奴この部室にはいない」
「間違えた。全裸にニーソックスだけ履いてライオンキングする晴希」
「ある意味更に重症になったな！」
「だとすればその裏をかいて全裸ニーソネクタイ……」
「話が不毛だ！　ライオンキングに興味は無いし私の好感度が変なことになった原因も私じゃない！」
「晴希がこんな事態を引き起こそうと願ったからこうなった」
「私は晴希であってハルヒではない」
「こうやって突っ込みを入れるために世界を動かしてるの」
「一体突っ込みに何を懸けているんだよそれは」
「実際は、作者のせいであって私のせいじゃないけど」
「待て。今ものすごく鮮やかにメタな台詞で責任転嫁（せきにんてんか）した気がするんだが」
「晴希は本当に、本当に最初の最初は男口調でちょっとツンデレなだけの普通の女子高生だったのに」
「だから台詞がメタだぞ」
「今じゃこんなおっさんになって……」

「誰がおっさんだ！　大体世の中はおっさんって言った奴がおっさん呼ばわりされるんだよ！」
「この後付け設定の塊と違って、私は無口キャラだから大丈夫」
「……そうだったな。お前のポジションはつくづく羨ましいよ」
「……」
「おい、どうした似非無口キャラ」
「……いや、何でも」
何だか一瞬杭瀬の調子がおかしかったような気がするが、まあ気のせいかもしくは杭瀬の演技だろう。
「私も元は地味じゃなかったけど」
「人の事言えないな、おい」
「……」
「だから無口キャラを演じるな」
「分かった」
「分かってくれたか。……というかなぜたかがお前との会話でこんな無駄に一話使うんだ？」
「それは私が、作者のお気に入りで」
「やっぱり発言がメタだな！」
「……言い出したのは晴希」

断章　乙女二人はかく語りき（後書き）

はい、今回は超省エネレベルでモノローグを減らしてます。流石に最初の最初みたいなのではありませんが。

この話、書きたかったんですよねー。

第十五話　戯言の交錯

「晴希！」
「何だ邦崎、大声を出して」
「いいの！　晴希は私のライバルだから！」
「何がだ。天森さんみたいなテンションでいきなり何を」
「私は頑張って、晴希の大好きな内藤君を奪ってやるんだから！」
「別に大好きじゃないからな、うん」
「ツンデレ？」
「言動が内藤と被ってるぞ、それ」
「そう……？」
「たったそれだけで頬を赤く染めるな。とりあえず私はツンデレじゃない。内藤への好意もこれといってない」
「あっ、そうなんだ……」
「ただ内藤の方が私に好意を寄せているだけだ。……まあ泣くな邦崎、諦めたら終わりだ」
「うん、ありがとう……」
「それにしても、いつの間にか注目集めてるな私達」
「え、そう？」
「お前が大声出すからだろ」

私こと秋津晴希が理不尽な理由で新聞部に拉致され、文芸部が助けに来てくれたと思いきやそこでまた一波乱。なんだかんだあって新聞部との同盟が結ばれたのが、つい先日の出来事。
そして今現在、私はいつものように文芸部へ赴く道中だ。ただし今日は二人で。
この横に並んでいる内藤嘉光という男は、顔だけは良く他は馬鹿で変態でどうしようもないキチガイだが、まあ性悪というほどでは

ないので無垢な女子生徒達にはかなりの人気がある。
例えば私のクラスメイトの邦崎綾女。何が起こったのかは知らないが、いきなり私にライバル宣言をしてきた。なんのこっちゃと思ったら、嘉光の事が好きだそうだ。今日初めて知った。
例えば同じ文芸部後輩の朱鷺羽みのり。文芸部に好きな人がいるから入ったとか言っていたし、それに私と嘉光を見て羨ましいとも言っていた。あと文芸部室の席のとり方は自由となっているが、いつも嘉光の近くを取っていた。本人に直接訊いてもなかなか首を縦に振ってくれないのは、少しでも私を気遣おうとしているからだろう。いい後輩だ。
本人曰く「俺には晴希の愛があれば十分だ」と言うが、如何せん私はそんなビートルズが歌いそうなものを供給した覚えはない。というか、出来れば嘉光争奪戦を辞退したい。
まあそれでも新聞部に拉致された時には本当に怒っていたようだし、あの暴走した神城羅央という一年生から私を助けてくれたのも事実なので、感謝していないわけでもないのだが。ただこういうものは常日頃の行い、いわゆる平常点というものが大きく関わってくるもので、「やれば出来る子」ならばいいと言うわけでもないのだ。
ほら見ろ、私と一緒に歩いてるってだけでこんなヘラヘラしている。「それがいいんだ」なんて意見もありそうだが、私はそういう判定は下さない。嘉光はマゾヒストだから、多少厳しい評価をしてもいいじゃないか。
まあ、だからといって無礼を働いていいってわけでもないか。
「内藤」
「おうおう」
もの凄い食いつきっぷりだな。そんなに私から話し掛けてもらえるのが嬉しいか。
「新聞部室での件、悪かったな」
「ああ、いいのいいの。というかあの日ちゃんと言ってくれたろ？感謝する、って」

「そういえばそうだったな」
言って損した。
「まあ……がめつい事を言うとご褒美は欲しいけどな」
「がめついな」
「分かってるって。まあ適当にスルーしていいから」
「アイス落としたからって道を塞いで通行料をせしめようとするジャイアンくらいがめついな」
「そんなにか！？」
まあ、冗談はこれくらいにしておいて。
「褒美なら出来るぞ。丁度いい事に」
「本当にか！？」
「ああ、ゴールデンウィークまで待ってろ」
「本当だな！　本当なんだな！」
うるさいな。しかも声が裏返ってるぞ。
それにしても、廊下で擦れ違う奴らは私達の事をどう思っているんだろうか。やはり嘉光の言う通り「付き合ってる」事になってるのか？　それは認めたくない事実なのだが。
そうこうしているうちに部室が見えてきた。考え事をしていると目的地につくのも早く感じられるな。
私は、扉を開けて――
「失礼しま――」
「晴希先輩！」
いつもと様子の違う朱鷺羽に遭遇した。
「ほー、微笑ましい光景じゃねえか」
奥では惨劇と兵器を好む大曽根誠文先輩が笑っていた。
「笑ってないで事情を説明してください！」
「晴希先輩……自分の胸に訊いてみて下さいよ！」
朱鷺羽が私の腕を掴んだままそんな事を言ってくる。何だ？　私が何かしたのか？

「さて、朱鷺羽の行動にも理由がある」
中途半端な金髪をした文芸部の「参謀」こと一宮敦次さんがポケットに手を突っ込みながら部室内を巡回し、説明を始める。まるで探偵漫画のラストにでもありそうな展開であるが、意識してやっているのだろうか。
私が椅子に座って話を聞こうとすると、嘉光がわざわざ椅子を持ってきて私の右隣に座った。朱鷺羽は私が言い聞かせると渋々（しぶしぶ）手を離し、しかしその後椅子を持ってきて私の左隣に座った。要するに右から嘉光、私、朱鷺羽という隊列だ。若干窮屈だなこれ。
そして朱鷺羽はこれまで私の事を「秋津先輩」と呼んでいたが、今日は「晴希先輩」だ。
朱鷺羽に何があった？　何が朱鷺羽をこんな風にした？
まさか一宮さん……あなたが……？
「変な想像をするな、秋津」
さすがは一宮さん。地の文まで指摘してくるとは。
「これを見ろ」
一宮さんが大きなプリントを渡してきた。これは……。
「……校内新聞」
先日一悶着あった新聞部の発行したものだった。大きく見出しで書かれているのは……。
「『二年のスター、秋津晴希の謎に迫る』……いつの間に私はスターになったんだ？」
この校内新聞というものはあまり見ていなかったが、『九割の嘘と一割の偽り』は嘘じゃないようだ。
「続きを読め」
促されるままに続きを読む。

・二年のスター、秋津晴希の謎に迫る。

二年D組、秋津晴希。
自身の恋人である内藤嘉光と並び、入学当初から多くのファンを出した秋津晴希。

「はいここなんですか」
「ん？　どこがおかしいんだ？」
嘉光がいかにも何も問題ないといったように疑問を唱える。
「一年の時に一騒動あっただろう。あれで結局皮相的には付き合ってることになったはずだ」
一宮さんの一言で納得する。何があったか一言では表せないが、とりあえずあれは大変だった。
まあいい、続きだ。

『彼女を抱きたい、もしくは抱かれたい』という意見をもつものは男子の約３１％、女子の約５％を占めている。

……おい女子の５％。
「敵は全校生徒の三分の一以上……上等だ」
なぜか嘉光が唸っていた。……いや、お前はもういいよ。

今回はそんな、秋津晴希の正体に迫る！

「正体も何も普通の女子高生だなうん」
「いや、全裸でライオンキン――」
「しつこい上に横から出てくるなお前は！」
似非無口キャラ、杭瀬弥葉琉が横から変な事を言っていた。
「全てはこれを見れば出てくるから。ライオンキングとか」
たとえ私にやましいことがなくてもその言い方は怖い。

というわけで我々は、ある方から有力な情報を得た。

……誰だ。邦崎か？　いや、本当にそれぐらいしか思いつかないんだが。

『まず秋津晴希は、文芸部の貴重な一員です。人間国宝です』

「人間国宝とまで持ち上げられてたのか私は！」

まあ拉致された時に怒り狂うどっかの誰かさんもいたがな。

『彼女は文芸部にとって貴重な、腹黒キャラなんです』

「そして知らないうちにそんなキャラが立っていたのか！」

「じゃあ晴希が腹黒だと思う奴、手を上げてくれ！」

すると次々と手が上げられた。なに、全会一致だと！？

『あと彼氏こそいるものの、若干百合傾向があります。レズでロリコンで胸は大きくても小さくてもどっちでも行けます。つまりは節操が無いということですが、当然彼女のそういう所も好きですね』

「誰だよ！」

「秋津、落ち着け」

くそっ、これが落ち着かずにいられるか！

「今から新聞部に行こう！　そして新聞部室の壁を奴らの血で彩って後々『赤壁』とか言われるようにしてやるんだ！」

「……晴希先輩」

朱鷺羽に呆れられた。うん？　どこかおかしかったのか？

「さて秋津」

場を仕切る一宮さんがプリントを取り上げ、話を纏め上げるかのように言った。

「朱鷺羽の行動の真相、分かったな？」

「……はい」
認めたくないが、認めたくないことだが、この誇れる後輩は――
レズだ。
こいつの好きな人は嘉光ではなく、私だった。
こいつが嘉光の近くに座ったのは、嘉光が私の近くにいたからだ。
嘉光のことが好きかと訊いても答えないのは、好きな人が嘉光ではなかったからだ。
「たいした朴念仁(ぼくねんじん)だな、晴希」
「普通は気付かないだろ馬鹿！」
「それで晴希先輩……」
「あのだな朱鷺羽」
この後輩に真実を教えてやるしかないと言う事だ。
「言っておくがあれはデマだ。私はレズなんかじゃない、ごく一般的な女子だ」
「え……」
朱鷺羽が呆然としている。その反応は少し傷ついたぞ、うん。
「晴希、自分を卑下するな」
「……嘉光、『一般的な』の所に突っ込むのかお前は」
というか誰も朱鷺羽に間違いを指摘しなかったのか。心優しくない部だな。
とりあえず、新聞部に差し止めて回収してもらうだけじゃいけない。
「一宮さん」
「簡単な情報操作なら出来るぞ」
「頼みます」
これで変な噂を掻(か)き消せば後は何とかなるだろう。
「あと秋津」
「はい」
「さっきのプリントだが、ここを見ろ」
「嘉光についてのデマ情報も出来れば流してください」

「承知だ」

さっきのコメントの後に（二年男子・Y．N．）なんて書いてあったらそれはもう反射的に依頼を追加してしまっても仕方がない事だ。一体あいつはそ知らぬ顔で何を。

後日私についての噂は収まり、代わりに『内藤嘉光は秋津晴希にしか興味が無いと思わせて実はショタコンだ』という記事が上げられたが、すぐに噂は掻き消えた。なお、その噂を耳に入れた邦崎は口から泡を吹いて倒れていた。

第十五話　戯言の交錯（後書き）

久しぶりに長い一話を書いた、そんな気がします。

第十六話　デジャヴ――闇夜のワルツ――（前書き）

今回は新キャラ一人だけしか出てきません。それもアホの子です。
……それにしても、相変わらずサブタイトルと内容が噛み合わんのはたまげたなぁ。

第十六話　デジャヴ――闇夜のワルツ――

「あーもう、暗い。可哀相なわたし」
暗い暗い廊下をわたし、葛原水月（くずはらみずき）は歩いていた。ちなみに幽霊とかはものすごく苦手だから出来れば行きたくなかったんだけど……。
それでも、備えあれば嬉しいなって言葉が世の中にはある。これはわたしの好きな言葉。
「ジャジャーン。携帯のライトで懐中電灯の代用が出来るのよねー」
やっぱりなんだかんだ言ってわたしは賢い。皆わたしのことを三年生なのに実力試験で五教化合計１１４点だったってバカにするけど、世の中は学力だけじゃないってことがありありと分かる。
だからそう、人間の価値は点数なんかじゃ決まらないのよ！……ごめん、失礼したかしら。

とにかく、この明かりがあれば地面から生えた手とかが足首をつかもうとしてもたったって逃げ切れるんじゃないかしら？
「うん、そこらへんの動きは何度も脳内シュミレーションしたから大丈夫よ」
携帯を手放さないようにしながら階段を上る。ここは、前から突き落とされないように用心しなきゃいけない。
「そもそもこういう事態になったのは……」

状況を振り返る。独り言が五月蠅（うるさ）い？……静かだと怖いから仕方ないじゃない。
確か……そう、教室に大事な参考書を忘れていたのよ。
あれがないと、わたしは枕を高くして寝られない。世界史と物理の組み合わせが結構快適なのよ。高さ的に。
「色々試行錯誤してたけど、やっぱり世界史と物理！　この二つば

っかり。おかげでもう参考書もボロボロよ」
まるで受験生みたい。実際に受験生なんだけどね。

無事階段を上り、そのまま廊下を歩く。
「目的地は教室なんだけど、鍵って必要かしら。運がよければそのまま開いてるかもしれないけど」
先生がおっちょこちょいだったりとか、泥棒が侵入した後だったりしないかしら。あ、泥棒が来てても参考書が盗まれてたら残念ね。
けど、開いてなかった時の対策も賢明な私は考えてある。
「ジャジャーン。伸ばしたクリップがあるのよねー」
テレビとかでこれを鍵穴に入れて適当にカチャカチャしてると扉が開いた気がする。実際にやった事は無いけど、なせばなるでしょ。

階段を降りる。万が一お化けに後ろから突き落とされたりとかしないように用心しなきゃいけない。とりあえずクリップはしまっておく。
当然、賢明な私なので無事に降り終わった。そのまま廊下を進む。

そこもやはり、闇に包まれ怪しさを出しているものの見慣れた場所だった。っていうか……
「何度同じ場所に来ればいいのよ！」
実はこの景色、何度も見てるのよね……。これで四回目くらいかしら？
これはまずい。わたしが同じところをループしているだけのような気がする。
しかしここでようやく、確実な変化が訪れたことになる。

――ガシャン、ガシャン

そんな足音を響かせ、その悪魔は現れた。わたしはあまりに恐ろ

しくて声を出せなかったし、タッタッと逃げる事も出来なかった。
そして目の前に、無機物的な体が現れた。手にはアニメとかでよく見る光る剣が。
……機動戦士ガン◯ム。
「きゃーーーーーーーーー！」
しかし、わたしの中ではおかしさよりも恐ろしさの方が上回っていた。あんなビームサーベルの攻撃を喰らって、痛いはずがないんだから。このシュールさによって出来るようになったのはせいぜい悲鳴をあげることぐらいで。
そのまま近づいてくる。足はまだ震えたまま動かない。
射程範囲に入って、そうして攻撃が振り下ろされ――
「きゃーー！　きゃーーーーー！」

――ザクッ

見事に刺さった。ただし――そのモビルスーツの腕に、それも――煮干しが！？

……。

「きゃーーーーーーーー！」
怖い。この目で見ている状況がシュールすぎて逆に怖い。
と、そのままわたしは誰かに抱えられて、連れ去られるはめになった。
もうやだ、これ……。

第十七話　その除霊師は兵器をも繰る

気がつくとそこは、広い広い教室だった。わたしはなぜかそこで、床に倒れ伏していた。いつもの参考書（マクラ）がないせいで首が痛い。

「ああ、気がついたんですね」

そんな少年の声が聞こえた。どこだと思ったら――真後ろ。

「§†〃〆∴！」

そしてわたしは、口からスワヒリ語が出そうになるほど驚いた。仕方ないじゃない、こんな狙ったような対面。

「すみませんが日本語を喋ってください」

「そんな失礼な！　誰がスワヒリ語なんて喋っ……というかここはどこ？　わたしは誰？」

さっきどうなったかを思い出してみると確か、いきなりここに運ばれた。多分例のモビルスーツからこの子が助けてくれた可能性が高いと推測できる。うん、さすがわたしの名推理ね。

「ここは、文芸部室です」

「ここが文芸部室……」

それは思ってたより広かった。同じクラスに文芸部員って人がいたけど、あの人たちは放課後いつもこんな所にたむろしているのかしら。

「そして、あなたはどこかの言動が馬鹿っぽい人です」

「誰が馬鹿なの！？　あとわたしが誰かなんて知ってるわよ！」

「じゃあなんで聞いたんですか？」

「……うーん」

ちゃんとこの子に説明しないと。わたしは馬鹿じゃないって。

「あなたの考えてる事は大体察しが着きますがもう手遅れだと思います」

ふふ、またそんな冗談を。ちゃんとこの子に教えてあげないと。
わたしは自分の胸に手を当てて、こう告げた。

「頭のよさってものはテストの点数だけじゃ決まらないのよ！」

「あ……テストの点数も悪かったんですか」
「なにそれ！　まるでわたしの言動が馬鹿だと言わんばかりの！」
「え……？」
「あのね、きみ一年生よね？」
なんか二年上の人に対する態度じゃないと思う。いくらわたしの才能が妬ましいからって。
「あなたは……三年生、ですよね？」
「なにそれ！　まるでわたしが留年した二年か一年だと言わんばかりの！」
「……ごめんなさい」
「その返しはナチュラルに傷ついた！」
「でもその……あなたの言動はいいと思いますよ。みんなに愛されそうだし。漫画やゲームに出てきそうですし」
「へへ、そう言ってもらえると……」
……え？　漫画？　ゲーム？　フィクション？
「盛大に馬鹿にしたわね、今！」
「気付くのが遅いです！」
むかつく。何がって、この子に悪気がなさそうなのが一番。
「とりあえずわたしは馬鹿な人じゃないわ。葛原水月（くずはらみずき）よ」
「そうですか。僕は、菅原卜全（すがわらぼくぜん）と言います」
そうやってお互い頭を下げる。こちらの方がちょっぴり深く頭（こうべ）を垂れていたのがなんだかむかつく。

「そう。じゃあ菅原くん、さっきの怪異について説明してくれる？」
そう聞くと、この子は人差し指を下唇に当てて考え、言葉を発し

た。普通そんな動作をするのは女性ばかりだと思っていたけど、これも結構様になっていて利する。
「怪異と言うと、携帯電話を明かり代わりにしたことですか？」
「違う！　それは発明！　偉大なるエジソン先生の！」
「さすがに携帯の明かりとは関係ないのでは？」
「発明王だから！　発明王に不可能はないの！」
「……ではそういうことにしておきましょう」
「何その言い方？　まるでわたしが聞き分けのない馬鹿みたいな言い方を……」
「では携帯電話ではないとすれば、怪異と言うのは夜の校舎を徘徊して独り言を言っていた……」
「それもわたし！　怪異関係ない！」
「ちょっと不気味な怪異ですね」
「余計なお世話よ！　静かだと怖いじゃない！」
「知ってますか？　シュミレーションじゃなくてシミュレーションなんですよ」
「そんなの知らないわよ！　とりあえずそんな話じゃない！」

「まあ、とりあえずこれでも飲んで落ち着いてください」
そういって菅原くんは、飲み物の入っているペットボトルを差し出してきた。これ、なんかぷかぷか浮かんでるんだけど……。
「……念のために聞くけど、中身は？」
「基本的にコンセプトは蝉ですね」
「ゲゲーーッ！」
本当に聞いといてよかったわ。この子、一体わたしに何を飲ませるつもりなのよ！
「素数ゼミジュースですよ。海の向こうで売ってるじゃないですか」
「聞いた事はあるけど本物の蝉は入ってなかった気がするわよ！　こんな蝉だけのジュース……」
「安心してください。そう言うかと思い――砂鉄も入れときました」

「ゲゲーーーッ！」
何なのよ！　そんなにたっぷり鉄分いらないわよ！
「なんかもうこれは化学兵器よ、化学兵器！」
「料理を馬鹿にしないで下さい！」
「少なくともきみが言う事じゃないわよ！」

話を戻して。
「他に怪奇となると……やはり……」
また思考を始め、そうして数秒後に答えを出した。
「あなたが全くの勘違いの校舎をずっとぐるぐる回ってたという話ですか？」
「そう言うオチだったの！？」
怪異はわたしの中にあったと、本当に怖いのは人間と！？　そういう戒めなの！？
「……どうして三年間も通ってて道を間違えるんですか？」
一年生徒からの素朴な疑問。お願い、そんな目でわたしを見ないで！
「間違えるものは間違えるわよ。だってほら……学校はまず全校生徒に方位磁針を配布すべきだと思うわ」
「ものすごく画期的な方策ですね。小学生に防犯ブザー配るのとはまるで違うと思うんですが」
「間違いないわ。これの施行で確実に日本は変わるわよ」
「確かに変わるでしょうね。色々な意味で」

一息ついたから、そろそろ本題に入らなきゃ。一応今って夜なのよね。というかさっきも本題に入ろうとしたのに、気付くと話がそれてたから。
「そうよ、それよりあの連邦のモビ――」

――ゴオオオオオオオオ！

すると、ここで轟音。タイミングが悪いわね、もう！
すぐさま彼は窓を開けた。
「しっかり掴まっててください！」
「なにそれ、ってきゃーーーーー！」
何が起こったのか説明すると。
彼はわたしを抱きかかえて――そのまま窓から飛び降りた。記憶が正しければ、ここは二階だったような……。
「どうして！　どうして窓から！」
「敵はドアのほうから来ますから！　それに命に別状はありません！」
「いやっ！　命に別状は無くてもトラウマがいやーーーーーーーっ！」

落下、そのまま着地し、さっきの部室よりもっと広いグラウンドに到着した。後ろを見ると明らかに半透明のお化けのようなものが追って来ていたけど、非常に不気味。
「あんなの映画でしか見た事ありませんでしたか」
「いや、映画でも見ないわ！　だって苦手なんだもの！」
椎茸の小さいのが密集してるのを見るだけで気を失いそうになるわたしにホラー映画なんて見れるわけないじゃない！
「まあいいです、ここで反撃しますから」
「え？」
菅原くんの一閃で、飛び出してきていたお化けが一匹消えた。……どういうこと？
「改めて自己紹介をしましょう。僕は一年生の菅原卜全。文芸部員兼コック――兼、夜のゴーストスイーパーです」

第十八話　例えエゴイズムの塊であろうと、彼は本物であることを望んだ。

「改めて自己紹介をしましょう。僕は一年生の菅原卜全（すがわらぼくぜん）。文芸部員兼コック――兼、夜のゴーストスイーパーです」

幽霊（みたいなもの）を掻き消しながら、この子はそんなことを言った。

……え？　コック？

「……どうして文芸部から一人も食中毒が出ないのかしら」

「そんなことはどうでもいいです。まずはこの弱い悪霊たちを一掃しましょう」

そんなことを言いながら身構える菅原くん。周りを見れば、その奇妙な幽霊たちは何十匹もいた。

「いつもより多いですが、こんなこともあろうかとね。今日大安売りしてて助かりました」

そう言いながらどこからか取り出したのは……

「海苔！？」

海苔だった。

「札や掃除機なんかは高額ですからね。結局安い消耗品で済ませた方がお得なんですよ」

「掃除機にも驚いたけど、それらがないからって海苔なんて……」

大丈夫かな……これ、ものすごい大ピンチのような気がしてきたんだけど……。

「僕を信じてください」

「手元で海苔を並べてる絵面で言う台詞かしらそれは？」

とはいえ信じないよりはマシかも。というわけで結局わたしは彼を信じることにした。頼むから上手くやって……。

「シャルウィダンス？」

そう言って彼は、手元の海苔を連ねて鞭のような――よく南京玉すだれって呼ばれるものを作り上げた。
「嘘……」
ちなみにさっき彼が何を言ったのかはよく分からない。きっとフランス語か何かでしょ。
「あ、僕と背中あわせになってください」
「……え？」
見たいのに！　海苔の南京玉すだれ見たいのに！
「あのお化け、背中を見せると近づいてくるんですよね」
「それなんてテレサ！？」
「さっき弱いと言いましたが、それでもファイアーボールすら効きませんからね。気をつけてください」
「だからそれなんてテレサ！？　そしてそれ海苔で死ぬの？」
「安売りだからって馬鹿にしないで下さい。この海苔は――瀬戸内産ですから」
「知らないわよ！」
「後ろ！」
南京玉すだれがわたしのすぐ後ろにいた幽霊を貫いた。
「とにかく背中合わせになってください！」
南京玉すだれが見たいという思いを泣く泣く殺して、言うとおりにした。さっきのもなんだか危なかったみたいだし。

「あれに触れたら頻繁にタンスの角に小指をぶつける呪いがかかりますから」
幾多の幽霊が炸裂する音と海苔の擦れる音、そして少年の声が背後から聞こえてくる。
「なんて半端なの！？」
確かにすごく厄介だろうけど！
「さて、半分潰しました。場所を交替してください。もう半分を潰

します」
「分かったわよ！」
何かもう言われるがままに交替する。

幽霊の炸裂音をＢＧＭに、少年は瞬く間に全てを消滅させた。
「これで、この辺りにいた幽霊は全滅しました。さて、行きましょう」
「待って！」
どうしても言わなきゃいけないことがあったのよ。そう、これはすごく重要なことで……。
「？　なんですか？」

「上履きでグラウンドに出ると、裏に砂が挟まって面倒なのよね」
ものすごく呆れられた。それも二つ下の後輩に。

というわけで玄関から入って必死に砂を落とし、再び校舎に入るわたしたちだった。
「さて、行きますよ」
この子はそういうのを気にしないらしく、そのまま靴箱を上がっていった。なんて子なのかしら。きっと避難訓練の時とかも同じような感じなのよね！
「さて、萩原（はぎわら）……じゃなくて荻原（おぎわら）くんだっけ？」
「いえ、菅原です」

……。

「きみは今日から荻原くんよ！」
「つまらないエゴイズムで人の名前を変えないで下さい茅原（かやはら）さん」

「わたしは葛原（くずはら）！　茅原違う！」
「失礼、噛みました」
「なにそれ！？」
よく分からないけど、何かのネタなのかもしれない。
「喋ってないで行きましょう」
「先に喋ってきたのそっちよね！？」
「そっちですけど」
え？　いやいや、そんなはずはないでしょ。だってほら、振り返ってみると……
……。

「さあ行くわよ！」
「もはやめちゃくちゃですね」

今度は二人して廊下を進む。前列が一年の子で後列がわたし。まずはこの荻――菅原くんが文芸部室の戸締りとかをしなきゃいけないらしいから、先にそこに行くことになった。
「さて、じゃあちゃんと説明してもらおうかしら菅なんとかくん」
廊下を歩きながらわたしは話し掛けた。
「僕は菅原ですが、あなたが求めているのは何の説明ですか？」
そうだった。菅原だったわね。

「あの廊下に突然出てきた連邦のモビルスーツよ」
「白い悪魔（仮）ですか」
え？　かっこ仮？
「それは本当の名前とかあるの？」
「だから白い悪魔（仮）ですよ」
「（仮）って何よ（仮）って！」
「業界では白い悪魔（笑）とも呼ばれます」

「もう括弧の中身がどうのこうのより除霊業界なんてものがあったことの方がトリビアじゃない！」

道理で札とか掃除機とか言ってたわけね。納得してしまえるわたしはもはやおかしいんじゃないかしら。

「それにしても、頭が柔らかい方ですね。こんな話を信じられるなんて」

そうかしら？　わたしはそんな……そんな……

「わたしはそんな狂牛病（びーえすいー）なんかじゃじゃないわよ！　誰がスポンジ脳なの！？」

「自分を卑下しすぎです！」

……それもそうね。

「……なんかこうやって叫んでいたりすると、またさっきみたいなのが出てきそうで不安なのよね」

「大丈夫です」

そう言って態度で彼が説明を始めた。相変わらず動揺とかをしなさそうな、何だか腹が立ったりもする態度で。

そもそも今日は例が特別多く、それにも理由があるということ。

その理由というのは例のメカニズムが地震のようなもので、自然に蓄積されていくから早いうちに小さな爆発を起こさせて対処していった方が効率的、そのため菅原くんが今日と言う日に多くの幽霊を起こしたこと。

そしてさっきそれらを全て倒したこと。

あと、それより前にわたしを襲った白い悪魔（仮）は強大な幽霊であり、運悪くこんな時に便乗して運悪くわたしも来てしまったと言うこと。

きてれつな話だったけど、この説明だとおかしい所が見つからなかった。

……まあ、どんな説でもわたしはおかしな点なんて見つけられないんだけど。

「若干大変でしたが、あとは白い（仮）だけです」

「今大幅に省略したわよね！……まあいいけど。それで、わたしたちが騒いでいる所に（仮）は来ないの？」

「来ませんよ。そんなことが出来ないよう、釘を打っておきましたから」

「？」

「すぐに分かりますよ。……と、ようやく部室に戻ってきましたね」

彼の言うとおり、開け放たれた文芸部室の明かりが見えてきた。

それにしてもね……。

「文芸部室の窓閉めと電気消すのと蝉の処分をやるのは分かったけど――」

「蝉の処分はやめてください」

「蝉の処分をするのは分かったけど、この後どこに行けばいいのよ？」

「蝉の処分はお薦めできませんが、この後僕たちは――」

第十九話　ラストダンジョンは曲がり道（前書き）

まさかこんな番外の番外でこんなに話数を使うとは……。

あ、まだ続きますとも。

第十九話　ラストダンジョンは曲がり道

さっきと同じように、わたしたちは廊下を歩いていた。

「あのさ、ところで」

ちょっとした疑問を口に出す。

「（仮）を倒してからわたしの教室に行くみたいだけど、普通に考えてわたしを教室に送ってから一人で倒しに行った方が楽よね？」

ちなみに（仮）っていうのは菅原くんの言う強力な幽霊「白い悪魔（仮）」のこと。ほんと、正式名称なのになんで（仮）なんてつけるんだろ。

「ああ、色々理由があるんですよ」

「理由？」

（仮）に理由が？……いや、そうじゃなくてこのプロセスがどうのこうのって話よね。

「だってほら、あなたも見たくないですか？　幽霊」

「見たくないわよ！　お断り！」

わたしがこういうの苦手だと知ってながら……そうか分かった。単にわたしが怖がるのを見たいからこそこういう道程なのね？

「冗談ですよ。ただちょっと喋る相手が欲しかっただけで」

「そう……」

わたしが独り言を言っていたのと同じような理由でね……。

確かにこんな仕事なんて校内に複数いる方がおかしいだろうし、この子はずっと一人で戦ってたわけね。そりゃ寂しくもなるわよね。けど――

「わたしは本当にお化けとかが苦手なの。さっき言ったでしょ？ホラー映画とかも見たことないって。だから――」

「後輩を気にかけてくれる先輩は、優しくて知的だと思います」

「――さあ行きましょう。手を取り合って、いざ決戦の地に……」
わたしはこう見えて知的なのよ。人間の価値は点数なんかじゃ決まらないわ、行動よ。そう、行動が全て！
「……扱いやすい人ですね」
「ん？　なに？」
今菅原くんが何かつぶやいていた気がする。
「何か聞こえましたか？　きっと空耳ですよ」
そうよね、空耳よね。
「さあ、気は進まないけどさっさと行くわよ！」
「……本当に」
空耳まで聞こえてくるなんて、夜の校舎って思った以上に怖いわね……。

「僕、仕事柄から言って夜行性になるじゃないですか」
ふと菅原くんが、そんなことを言いだした。まあわたしとしても静かだと怖いし、会話で場をやわらげてくれるのは嬉しいし、ここは適当に相槌を打って話を進めていこうかな。
「うん、それで？」
「おかげで昼間は半分寝てるようなもので、『お前はよく分からん』なんて言われてたりするんですよ」
「うんうん、今は夜だけどそれでもよく分からないわよ」
だからおかしいのは絶対眠気から来てるわけじゃないと思う。
「まあ昼間でも料理とかしてる時は冴えますけど」
「その時が一番おかしいんじゃないかしら？」
結局、この子は眠ってる時が一番普通なんじゃないかしら？　どんな生物でも同じだとは思うけど。
「夜の校舎で独り言を言うよりはいいと思います」
「最悪ね！」
「知ってますか？　シュミレーションじゃなくてシミュレーション

なんですよ」
「知ってるわよ！」

「冗談ですよ。話題ならたくさんあります」
「じゃあ何か出してよ」
そう言ってやると、彼は口を開――
「……」
かなかった。
「え！？　ネタ切れた！？」
「ｚｚｚ……」
「寝た！？」
「ああ、ちゃんとありますよ。むにゃむにゃ」
「むにゃむにゃのところがわざとらしすぎる！　絶対寝言とかじゃないわよね！？」
もう、あるならあるって普通に言ってくれればいいのに。意地が悪い。

「モンスターハンターでもしましょう」
「なにその謎展開！？　どこからそんな発想が出てくるの！？」
忘れ物を取るために学校に来て、何でそんなことを！？
「だって僕らはお化けハンターじゃないですか」
「どうして複数形！？　わたしは除霊とかしないわよ！」
「じゃあモンスターハンターですか？」
「それでもない！　わたしは犬や猫を殺して三味線の皮にしたりするゲームなんてしないの！」
生き物の死体なんて見たくないわよ！　バイオハザードじゃあるまいし！
「犬や猫……？　三味線の皮……？　すみません、モンスターハンターって知ってますか？」
「ふ、ふん、知ってるわよ！」

実際知らないけど。……でも、わたしの演技力なら誤魔化せる！
さあ見なさい！　わたしの力を！
「あの……あれでしょ？　モンスターを、あーしてこうしてハンティングしてウレシイナーってやつ！」
「……」
ああっ、後輩に確実に白い目で見られてる！
「まあいいです。モンハンは冗談ですし」
そうよね、冗談よね。
じゃあ冗談じゃなくて、こういう時にネタになるものといったら……。

「もしかして……怪談とかじゃ！？」
「階段？　階段ならさっき下りましたけど」
「そうじゃない！　怪談って怖い話のほうよ！」
「ああ」
一応納得してくれたみたい。まったく、なんて古典的なギャグ……。

「……それで、怪談とかじゃないわよね？」
わたしがそう言うと、菅原くんは振り向き、邪気のなさそうな笑顔を見せた。そして、前を向いて言葉を紡ぐ。
「……これは僕が初めて霊に出会ったときの話なんですけどね」
「きゃーーーーー！　いやーーーーーーーー！」
もう嫌だこの子！

そして目的地の体育館。ここに最初にわたしを襲った幽霊――『(仮)』がいるとか。
「さて、そんなこんなで到着しましたが……」
「そんなこんなじゃないわよ！　わたしがどれだけ甚大な被害を受けたか！」
あれからずっとずっと怪談を聞かされつづけた。邪気のない顔で

邪気たっぷりのことを言ってくるのがすごく辛かった。まったくもう、ダチョウ倶楽部じゃないんだから！

「と言うか何？　やけに時間がかかった気がするんだけど」

「そういえば、何度も同じ景色を見ませんでしたか？」

「……ん？」

一見会話が成立していないように見えるけど、なんとなく言いたいことが分かった気がする。

「まさか……！？」

「ご想像にお任せします」

「この性悪ーーーーーーーーーっ！」

この性悪、わたしを怖がらせるためにわざわざ同じところをぐるぐる回ってたと！？

今日は参考書（マクラ）があっても、さすがに眠れそうにないかも……。

第二十話　全力の魂は決して呪われない（前書き）

はい……こんな出来で、すんません……。

第二十話　全力の魂は決して呪われない

「さて、行きましょう」
除霊師の菅原卜全（すがわらぼくぜん）くんが精悍（せいかん）な顔つきでわたしの方を見た。その瞳からは確かに「覚悟を決めた」という意思が見える。
「やっとここまで来たけど、本当に長い道のりだったわね……」
わたしはついそんな言葉を垂れ流してしまう。
確かにここまでは長かった。時には道に迷い、何度も同じ所を回りもがき、時には大きく道を外れた。
けどそれも、もうすぐ終わる。
そんなわたしの思いを汲み取ってくれたのか、菅原くんもわたしのほうを見て頷いてくれた。

この向こうに、やつがいる。やつはわたしの大切なものをことごとく奪っていった。
わたしたちは、悲しみの連鎖を断ち切らなきゃいけない。悲劇は終わらせなきゃいけない。
確かにやつを倒しても失ったものは戻ってこない。だからこそわたしたちは何も失っちゃいけないんだ。
絶対に、負けるわけにはいかない。

しかし――
「ぐっ……！」
「どうしたの菅原くん！？」
突然菅原くんが苦しみだした。
「まさか四天王がこんな厄介な呪印を残していくとは……油断しました……」
どうやらさっき戦った四天王の呪印が、彼の体を蝕（むしば）んでいるらしかった。現に彼の顔が少し青く見える。

「菅原くん!?　大丈夫!?」
「難しいかもしれませんが……せっかくここまでいったのです……全力を尽くすしかないでしょう……」
「そんな!?　じゃあ今すぐ戻って――」
「いえ……それより葛原(くずはら)さん……いいですか?……これだけは覚えておいてください……魔法の言葉です……から……ぐふっ!」
　床に血の赤が花弁(はなびら)を散らせた。
「菅原くん!」
「大丈夫です」と言いたそうな辛そうな笑みを浮かべて彼は足を重く引きずりながら、わたしの耳のほうに口を寄せ、こう言った。

「う～ら～め～し～や～」

　そしてわたしは、恐ろしさのあまり悲鳴を上げた。

「まったく、最悪ですね」
　そして彼がそんなことを言う。当然異変など何もないといった様子で。
　勿論わたしにとっては、そんなことを反省する気なんてない。それどころか――
「最悪なのはそっちよ!　耳もとでそんなことを言わないで!」
「言わなきゃ駄目じゃないですか。そうでなきゃ面白――やつが倒せませんから」
「今面白くないって言いかけなかった!?」
　多分この子、わたしを玩具か何かと間違えてるんだわ……。
「面白いやつが倒せませんですから」

「むりやり繋げた!?」
確かに見た目がモビルスーツで正式名称が『白い悪魔（仮）』なんて面白いといえば面白いけど!
「大体四天王ってなによ!　いつ出てきたの!?」
「いましたよ。道が長いから忘れたんじゃないですか?」
「道が長いのはきみがわざわざわたしをもてあそぶためにわざわざ先導して同じ所をぐるぐるぐるぐる回ってたから!」
「ギャルゲーにだってごまんとあるじゃないですか。ループなんて」
そんな風に彼は肩をすくめて言う。それはやけにさまになっていたんだけど――
「ごまかさないで!　あとその例えが分からない!」
「だから成績が悪いわけです」
「成績は関係ないわよ!」
それに何度も言うけど、人間の価値は成績じゃ決まらないもの!
「知ってますか?　シュミレーションなんて言葉はないんですよ」
「そんなの耳にタコが出来るほど聞いたから!　シミュレーションでしょ!」
怪談の合間にも聞かされたくらいだし!　だからもうそのネタやめてくれないかしら!　馬鹿じゃないんだしさ!
「よく知ってましたね。努力すれば成績も上がると思います」
「なにその上から目線!?」
「成績といえば……そうですね、扉を開けましょう。（仮）が待っていますから」
「もう流れが破綻してる!?」
なんて話題転換がシャープなの!?

……とまあ、わたしが何かを言う前に彼は扉を開けてた。
そういえば説明してなかったことがあったけど、彼が（仮）に最初に突き刺した煮干しの効果によって、（仮）は体育館という場所に縛り付けられる暗示にかかっているらしく、それが煮干しの効果

だとか何とか。ちなみにわたしは煮干しにそんな効果があるなんて１８年間の生涯で一度も聞いたことがなかった。

「ところでどうして鍵なんて持ってたの？　依頼人みたいな人がいて受け取ってるとか？」

「惜しいですね」

「じゃあどういう？」

学校にそう言う説明をしてるとか？　そういえば宿直の人とかいないけど。

「学校に許可を取るのもいいですが面倒なので先輩が偶然にも持っていた合鍵を貰いました」

「全然惜しくない！　あとさらっと犯罪行為！？」

そういえばクラスにも犯罪じゃないかって思えることしてるのはいるけど！……っていうかそれ文芸部員だった！

「菅……」

「どいててください！」

突然突き飛ばされた。そして光る刀の一閃とそれを止める音が聞こえた。

目を凝らすと、暗闇の中に（仮）がいたらしいと言う事が分かった。あの白いボディからすぐわかる。見間違える方がおかしい。

で、ビームサーベルを止めたのはなんなの？　まさか素手とかじゃあるまいし。

「この『魔剣ノーズ・オブ・カジキ』の前にはそんなものただの光る棒です！」

カジキマグロの鼻！？　確かにあれギザギザしてるけど！　だけど！　く……つっこみたいけどへたに出て彼が集中力切らせたら元も子もないしあれでも本気かもしれないしなんかもうなにがなんやらさっぱりでわたしとしてはどうすればいいのか分からずただこうやってループの中に身を任せて菅原くんのわざわざわざわざ言ってくれたおぞましい怪談の諸々を思い出して吐き気を覚えるしかないっていうのはすごくあれなことであれがああなって……はっ、頭が

錯乱してた!?
あぁ……つっこみたい……。

「そんなことが分からないからシミュレーションの事をシュミレーションなんて言ったりするんです！　あと蝉の良さが分からないんです！」

しばらく殺陣（たて）を続けた末、そんなキメ台詞（？）とともに悪霊・（仮）を真っ二つにした。その間、なんと三十秒！
……けど今のセリフのそれわたしだよね!?　悪霊関係ないよね!?　あと蝉は大体の人が分からないと思うんだけど！
そしてもう一つ！

「こんなにあっさり終わって、これまでのあの長い長い道のりはなんだったのよ！」

力の限り叫んだ。それはもう全力と書いてマジで。

第二十一話　戦いは終わらず（前書き）

ようやくです。ようやく終わりです。

第二十一話　戦いは終わらず

菅原くんの一閃（カジキマグロの鼻）が、（仮）を両断した。勝負は僅か三十秒。

いや……これは虚しすぎる……。

「無駄な回り道ばっかりしてたけど、これでようやく終わり、わたしは大事な大事な参考書を持って帰って終了ってわけ？」

もう本当に疲れた。早く家に帰って、世界史と物理を枕に敷いて眠りたい。

「いえ、そうでもないようです」

「……え？」

まさかと思って体育館の闇の中を見やる。そこには、なんと三本の足と二つの頭を持った人間がいた。どうせあれも幽霊なんだろうけど……。

「きゃーーーーーーー！」

「まさか、『煉獄兄弟』までいるとは……」

また変なの出て来た！　というか見てくれすごく怖いんだけど！

「大丈夫です」

そう言って彼は、煉獄兄弟とやらに向かって走り出した。

ズバババババッ！

纏めて一閃。この間、なんと十五秒！

「だからそんなあっさり終わるなら難しそうな顔をするのはやめて！」

「まさか……この上、『天魔六芒星』まで！？」

更に奥を見ると、翼を生やした六人の人間――いや、幽霊がいた。

「よかった……これはまだ怖くない……」
「見た目だけで判断しないで下さい！　あいつらは――」

ズバババババッバ！

「とても強いですから！」
「とか言って五秒で倒してるけど！？」
まぁ、いずれにせよ、これでようやく――

「あれは……『冥皇神（めいおうしん）』！？」
「もういいわよっ！」

話はそこから劇的な展開をする。
何があったのやら、目を覚ませばそこは教室、わたしは自分の机で寝ていたみたい。
まさかの夢オチかなんて思ったけど、上履きの裏がざらざらしてると思ったら砂が挟まってたから、そんなことはないと思う。もしかしたら「夢じゃないけど夢だった」なのかもしれないけどね。
昨夜のことはよく覚えちゃいないけど、とりあえず彼が何らかの術でわたしをここに寝かせるという不親切極まりないことをして、せっかくわたしが怖い怖い夜の校舎に入り込んだという苦労を不意にしてくれたのは確か。

だから、放課後わたしは文芸部室に行って、彼に責任を取ってもらわなきゃならない。
……ところで、文芸部室ってどこだっけ？　まあいいか。
わたしは立ち止まり、叫ぶ。

「荻原（おぎわら）くんの馬鹿ぁ！　何してくれてんのよ！」

叫んだ後、歩き出そうとして机に引っかかり、わたしは派手に転んだ。

周りの目？……もういいもん、わたしは諦めが早いから……。

第二十一話　戦いは終わらず（後書き）

杭瀬「というわけで、ご愛読ありがとうございます。白龍閣下の次回作に乞うご期待下さい」
晴希「待て。話を終わらすな」
杭瀬「確かに晴希の気持ちは分かるけど。今回こんな短い話を書くくらいだったら余白で全裸になりたいっていう気持ちは」
晴希「だから待て。初見の人にわたしのおかしなイメージを与えないでくれ」
杭瀬「そして、次回からは通常巡業で晴希が脱ぎます」
晴希「それも嘘だ。お前はそんなにこの小説を消されたいか」

第二十二話　悪意と悪夢の結晶（前書き）

と言うわけで作者の大好きな杭瀬回です。

第二十二話　悪意と悪夢の結晶

朝、教室までの長い廊下を歩く。

今日はやけに早く目を覚ました。しかし当然だが私こと秋津晴希は基本的に消極的自由を振りかざすつまらない若人であり、感想など「爽やかな朝だ……」の代わりに「わざわざ起きていなきゃならないのか。面倒臭い」などといったところだ。

いや、それでも爽やかといえば爽やかな朝なのかもしれない。今日は早く登校したおかげで内藤嘉光に絡まれなかったからだ。

そんな朝の爽快さを噛み締め、教室の扉を開く。さすがに某文芸部とは違い黒板消しは落下してこなかった。

しかしやはり、こんな朝に来ても暇だった。よく会話するのは邦崎綾女だったが、あいつは比較的朝が遅い。例に漏れず今日もいなかった。

さあどうする。私自身は有名らしいが私が知ってるやつなんてクラスに……。

「……」

いた。文芸部で意味不明の本を読んでいるあれだ。ただあれは駄目だ。

「こんにちは」

「……おう、こんにちは」

向こうから来たよ、もう。しかしクラスメイトがこの似非無口キャラこと杭瀬弥葉琉を見て「こいつ誰なんだ」的な視線を向けてきているのはどう言うことだ。地味どころかクラスメイトに存在の認識すらされていないのかこいつは。

まあ大丈夫なはずだ。あの以外にも口数の多い杭瀬弥葉琉はあくまで部室での姿。教室でのこいつは——無口キャラだ。そいつが何故向こうから話し掛けてきたのかなんて知らんが。

「今日は早いね」

「そうだな。早く起きられた」
適当にそう返しておく。こいつは私の苦手な人物リストに入ってるから適当にスルーしておくことに。ちなみにその苦手リストには最近レズだと判明した朱鷺羽（ときわ）みのりが追加された。
「こんな朝だと口数も多くなる気がする」
なんて事だ。嫌な予感がする。
「すまない。お前と話す事なんてないんだ」
「そんな……家で全裸になってるときの感想とか欲しかったのに……」
「だからいちいち私に変なキャラを与えようとするな」
「仕方ないからあれでも……」
そう言って杭瀬は自分の机に戻っていった。あれって何だ？　一体何なんだ？
「これ。私の書いていた恋愛小説」
……それかよ。あの『爪が割れても死なない方法』とか『撲殺用マグカップ論』とかの本で得た知識を活用して書いたと言う幻の恋愛小説かよ。
「感想を貰いたいの」
感想も何も、現時点でカオスの予感しかしないんだが。
「読んで」
「……」
仕方ないな。なんだかんだと訊かれたら答えてあげるが世の情け。これで杭瀬ルートに入ったら全力で後戻りしなければならないが、まあこいつはレズではないので過度な心配は必要ないだろう。さて、読むか。
こんにちは。私は文芸部の秋津春姫（はるき）。顔立ちのせいでたまに男の子に間違えられたりするけど、心は恋する乙女のつもりなの。
「……すまん、一行目からあからさまな悪意が感じ取れるんだが」

「気のせいに決まってる。目の錯覚でそう見えるだけ」
「馬鹿言え」
「馬鹿じゃない。気のせいに決まってるから。確定的に絶対」
なんだその言い回しは。

出会いは一年生の頃。
「文芸部室に行きたいのかい？」
私が迷っていると、突然横からそんな声が聞こえた。だからそっちのほうを見ると、そこには私と同じ一年生の男の人がいた。
その人はものすごくカッコよくて、それでいて愛想がよかった。とりあえず、まあ、なんていうか、見た途端に全身に電流が走ったような、それでいて温かみもあるような感情に襲われた。
それが私、秋津晴希の初恋だった。
「……うん」
「おう、ちなみに俺は内藤義晃（よしあき）。俺も文芸部に入るつもりなんだ。よろしくな」
「うん！」

「……保健室に行ってきていいか？」
「何？　タミフル（タミフル）が欲しいの？」
「違う。民馬鹿（フール）じゃない。寧ろ（むし）馬鹿はお前だ」
誰だよ内藤義晃って。悪意バリバリだよこの似非無口キャラ。
「違うの。これは言うなれば光の屈折」
「屈折してるのはお前の心だよなあ！」
「とりあえず読みなさい、晴希」
「おいいつの間に上から目線になった」
寧ろ最初からかもしれないがな。

「あっあの、義晃！」
「ん？　どうした？　愛の告白かい？」

「そ、それが……」
何でこんなときだけ義晃は鋭いの？それになんで私は首を縦に振れないの？　もう、馬鹿！
「なんてな。冗談だよ」
そう……って、こっちは冗談じゃないのに！　私は本当にあなたのことが……

「……」
「……」
反吐（へど）が出そうだが、まだ大丈夫だ。堪（こら）えられる。

「義晃！」
「ん？　まだ話があったか？」
私は覚悟を決めた。もう大丈夫、言ってやる！
「私は本気で、あなたのことが――」
「ああ先輩！　ここで何やってんですか！　早く行きましょうよ、部室に」
「う、うん……」
ここで残念な事に後輩が来て、わたしの手を引いていった。ああもう、どうしてこんなにタイミングが悪いの！？

「……後輩、よくやった」
非常にグッジョブだ。寝覚めの悪い展開でなくてよかった。
「そう？　私はこの後輩大嫌い」
「だと思ったよ」
どうせこいつはネタに特化している義晃×春姫が本命なんて言うに決まってるからな。
「さて続き」
「読みたくない！」
「読んで。それが晴希の存在する理由」

「私の価値はやけに低いんだな」
とまあこんな風に話は続いていったが、途中から変なシーンばっかり出てきたりした。何がどう変かと問えば全てが変で、例えばリモコンのネジを買いに行く時に寄ったメイドカフェにテロリストが乱入してきたと思ったら頭にパンストを被った『トランス脂肪酸仮面』に助けられたりする。あとは邪悪な魔王とか言う明らかに高校生の領分じゃない敵が現れた時に偶然予備校で習っていた必殺技『洗濯バサミライオンアタック』によって一瞬の内に封印したり。名（『迷』と言った方がいいかもしれない）台詞と思われるものには「女子高生の絶対領域はアニメの作画より大切なんだ」などなど。
そして、ようやく……だ。
「ここまでか」
「その通り。まだ未完だから……ところで晴希、非常に疲れているように見えるのは私だけ？」
「ああ、非常に疲れたよ。お前のせいでな」
「失礼な。人を何だと思ってるの？」
「知り合いと同姓同名のキャラで妄想小説書く奴が言えた事かよ」
あれで凄いプレッシャーが掛かったんだぞ。だが安心しろ杭瀬、私はお前を非常に厄介な奴だと高く評価してるぞ。
「とりあえず第一にキャラの名前を変えてくれ」
「嫌。やめて」
やめてはこっちだ。こんなの部誌なんかに載せられたら、即座に終了のお知らせだろう。
「私にはネーミングセンスが無いから」
「五月蝿い、自分を卑下するな。私達には無限の可能性がある」
おまえの持つその無限の可能性のおかげで今私は苦悩しているんだから。
「何なら戦場ヶ原とかでもいい」
「それは大きくアウト」
「それもそうだな」

となると……それでもまあ適当につけていけばいいんじゃないかと思うんだが。私は。

「やっぱり開き直って春姫と義晃しかない」

「開き直りすぎだ。やめなさい」

「やめない」

「やめろって。警察呼ぶぞ」

と、こんなやり取りを私達はまた暫く続けていたんだが、それも酷い形で終焉を迎えるに至った。

さて、それがどういう終わり方かというと。

「おはよう晴希……ところでこれは？」

邦崎綾女の登場である。あまりに杭瀬の相手に夢中になっていて気付かなかった。

そしてその隙が災いし、杭瀬の小説を隠す事も叶わなかった。

「晴希……いや、秋津さん……これは本当に……？」

「待て邦崎、全力で避けようとするな。これは私が書いたんじゃない」

「そう？　じゃあ他に誰が？」

「杭瀬が……待て杭瀬、頼むからそのステルスを発動させないでくれな！」

こんな時だけ影を潜める似非無口キャラなんて大嫌いだ。

「秋津さん……妄想の友達まで……！？」

「妄想じゃないだろ！　てか同じクラスにいたよなおい！？」

「私って親友もいたのに……もういやっ！」

そう言葉を吐いて邦崎は教室から出て行った。全く事情を知らないやつらの視線が痛い。

「女の子泣かしちゃった」

「私は何もやっちゃいないけどな、杭瀬」

またあいつの誤解を解かなきゃいけないわけか。友情云々じゃなくて私のイメージが非常に心配だ。

しかし、本当に親友なら意味不明な勘違いをする事もないんじゃ

ないだろうかと思うのだがどうだろう？

第二十三話　黄金週間は輝かない

ここ董城高校には様々な部活があるがその殆どが文化部であって、その傾向は「運動部は生徒達の心の中にのみ存在する」などというフレーズが誕生するほど極端なものだった。

その文化部の中でも特に有名なのがかの『文芸部』であり、三年の大曽根誠文や一宮敦次がその代表であるが、二年の内藤嘉光、そして秋津晴希の二名も少なからず影響していた。

そこで、先日新聞部が秋津晴希を誘拐すると言う事件が起こった。

それに対し文芸部は内藤嘉光らを送り込み晴希を奪還したが、その時に奪還部隊の神城羅央が暴走。結果的に新聞部と文芸部との同盟が出来上がったものの新聞部員数名が怪我をし、設備は壊れ、部長仁科由宇の指と爪の隙間には粘土が詰められた。幸い部員は骨折までには至らず設備の損傷も一割ほど、そして部長は実際無傷だったが。

ちなみにその犯人である神城はその後「修行に出る」と言って姿を消した。

そして、ようやく新聞部の設備が回復したといった具合である。

だが新聞部にとって話はこれで終わりではなかった。

最終的に同盟を結んだとは言え「文芸部に大敗した」という事実は揺るがず、その事実が新聞部の株を大きく下げていった。よって力を取り戻すために、ここで一つ大きなネタを出す必要があったのだ。

「と言うわけで、手助けをして頂きたいのですよ」

「はあ……」

今日は文芸部室に来た所で、普段見ない人物がいた。眼鏡をかけ

た三年生の女生徒だ。
だが私はこの人物を知っていた。というか忘れるわけがない。この間私を誘拐していった新聞部の部長、仁科由宇さんだ。
どうも新聞部のネタが欲しくてこちらにＳＯＳを求めてきたようだが、そんな面白おかしい話もない。単におかしい話なら佃煮にするほどあるが、殆どが自虐ネタなので勘弁してほしい。
「とりあえず他の方にも協力を仰ぎたいのですが、まだ来ていませんから」
「ですね」
実を言うとまだ放課後ではなかった。私のクラスは六時間目の教師が休んでいて、そのせいで授業が五時間目で終わりだったからだ。仁科さんのクラスも同じようなものだったらしいがやはり、皆考える事は「折角早めに授業が終わったんだから遊びに行きたい」といったようなもので、こうやって律儀に部室に顔を出したりしているのは私や似非無口キャラの杭瀬弥葉琉くらいのものだった。
「それはそうと、ちょっと言っておきたい事があるんですがね」
「はい？　何か？」
この人には心辺りってものがないのだろうか。
「先日の学校新聞。あれはないと思います」
あれは下手をすると基本的人権すら守れていないんじゃなかろうか。銃刀法違反やプライバシーの権利無視の私達が言っても説得力は皆無だが。
「あれですか……いいお礼になると思ったんですけどね……」
仁科さんが額に手を当て言う。いや、そっちからするとお礼だったのか……そうとは夢にも思わなかった。
「あのネタのおかげで新聞部の地位が失墜するのは避けられましたが、まだ全快には至っていないんですよね……」
知った事じゃない……と言いたいが、前向きに考えればあれで後輩（♀）の好意にも気付けた事になるんだよな。うん、こういう時は合理化だ。自分を納得させよう。あの取れなかった葡萄はきっと

不味かったんだ。
と、ここでドアが――
「あら、どうしたのよ新聞部の人！」
――開かず、しかしそのまま外見だけ清楚（せいそ）な天森小枝（あまもりこのえ）さんが部室に入ってきた。
「天森さん……」
「ああ、先日の事件の時に我が部に来た人ですね……」
――ドアではなく、二階の窓から。
『何故無意味に窓から！？』
私たちが疑問を発したのは同時だった。しかしなんかもう、まるでアーセナルギアの天狗兵みたいだ。
「ああ、別に土足じゃないわよ！」
そういう問題じゃないと思う。無礼とか迷惑とかじゃなくて、ただ単純に意味不明なんだ。人の行動に意味を求めちゃ駄目か？……駄目なんだろうな、少なくともこの部においては。
「それで新聞部の、えーと……ニシンさん？」
そんな間違いは普通しない。たった一文字で響きが大きく変わってくるじゃないか。
「仁科です」
「そうそう仁科さん！　どうしてここに来たのよ？」
「かくかくじかじかです」
仁科さんが端的に述べる。いや、漫画じゃあるまいしその説明は説明にならないはずだが……。
「ああなるほど、前の争いで新聞部の人気が落ちたから頑張ってネタを集めなきゃいけないって事ね？」
天森さんは化け物だな。まさしく化物語（ばけものがたり）だ。怪異だ。
「だったら、いい話があるわ！」
「ほう」
天森さんは私の方に視線を動かした。
「ハルちゃん、忘れたとは言わせないわよ？」

まずい、あれか……。

まずは私の口から言わせたいようなので、仕方なく口を開く。

「例の、内藤との……」

「嘉光君との？」

くそ、天森さんはその続きも私に言わせるつもりか。とは言え、逆らうわけにも行かない。それが例え有り余った身体能力で二階の窓から部室に侵入してくるような人であれ、先輩は先輩なのだから。

「……デートですね」

「よろしい！」

あの内藤嘉光との、デートだった。一部の女子なら歓喜のあまり死ぬかもしれないが、私は別の意味で死にそうだ。ああ、ゴールデンウィークが待ち遠しくない。

第二十三話　黄金週間は輝かない（後書き）

＞ｉ６０２０―９４８＜

というわけで（どういうワケだ）、シャーペンでさらっと晴希を描いてみました。

実はこのビジュアルはずっと前から決まっていたり。

ではでは。

第二十四話　内藤嘉光の出陣

まさかこんな事態になるとは、俺こと一宮敦次も思ってはいなかった。

天森小枝が秋津に何を言ったかは知らないが、おそらくは新聞部室で何かがあったのだろう。秋津はああ見えて上からの圧力に弱い人間だ。どうせ天森小枝はそこにつけ込んで無理矢理話をつけたわけだ。

しかし、相変わらず行動の読めない女だ。もしかしたら新聞部の損害は奴が狙って生んだものかもしれないというのに。

「来たみたいですよ、参謀先輩」

同じ場所にいた小柄の後輩、朱鷺羽みのりがそんなことを言う。彼女は女子ながら秋津に好意を寄せているが、だからといってこの流れを阻止する勇気もないのだろう。結果、その選択肢は見物のみ。どうせ動かないなら見る必要がないのではという声もあったが、その意見を「私は逃げません」と断ち切った。

そして物陰から見ると、今確かに秋津と内藤の合流した所だった。カメラを秋津に持たせてある他に周囲からの監視も行っているし、それでも見失うなどの事がないように無断で発信機を付けてある。準備は万全。

そして忘れてはいけないのが、後輩への忠告だ。

「俺は参謀じゃない」

後輩への指導は先輩としての義務だ。錯乱した内藤によって俺は部室内で謎の呼称を付けられた。誠文も爆笑していたが、やはりあの事件は小さいようで大きかったのかもしれない。

ああそんな話が合ったなあだるいなあ、このまま時が進まなければいいのにループしてしまえばいいのに、いやループしたらあいつ

とずっといなければならないからそれも考え物だな、いっそ目が覚めたらゴールデンウィーク後になっていたりしないだろうか、それで「ゴールデンウィークオワッチャッタネ、エヘヘ」なんて路線だとまだ許せるのに、何とかならないかな主人公クオリティみたいなの発揮出来ないかな――

そんな妄想が通用するはずもなく主人公補正がプラスに働く事もなく無情にも日は経過し、ついにゴールデンウィークに突入した。私の日頃の行いが悪かったんだろうか？

当然といえば当然の事だ。悲しい事があれば雨が降り、怪しい事があれば暗雲が立ち込め、嬉しい事があれば快晴になるなんて法則は所詮空想の産物なのである。

合流地点である公園はもうすぐだ。そこであいつが待っているはず。

しかしまあ嘉光とのデートなんて、天森さんも面倒な交換条件を出してくれたものだ。というかあれって私が責められる義理なかったよな？　交換条件も何もただの脅迫じゃないか。

ああくそだるい。けどすっぽかしたら首が飛びそうだ。

大体何なんだ文芸部。人のデート見て楽しむとか、お前らに妬みという感情はないのか？

ちなみに私は現在カメラ装備（天森さん指定）、衣服は適当なジーパンにジャケット。お前それ女子高生の恰好じゃないだろだのやっぱり本物だなだのと野次が飛んで来そうな気もするが、これは私の教育を兄に委託するという意味不明な我が家の方針に由来する。おかげでまともに女物の服がない。親消極的すぎだろ。そして兄積極的すぎだろ。

「おう晴希！　こっちだこっち！」

そして到着、私の歩む先には嘉光がいた。おい大声出すな。少しは周りの目ってものを考えろ。

待ちに待ったこの日がやってきた。この内藤嘉光、今日という今日が晴れ舞台にございます。

知らせを聞いたのは一週間前。部員達が俺と晴希がデートするなんて根も葉もない噂が流れてるななんて思ったりしたら、まもなく晴希の口から誘いの言葉が来た。

ああ、さすがに俺も夢かと思ったさ。けど頬をつねってみても普通に痛いんだなこれが。それでも信じられなくて毎日毎日つねってそれでも痛くて、気付けば右だけ赤くなってた。

まあそんなわけで、俺はちゃんとこれは事実だと受け止めることにする。あんまり疑ってて逃げられたら敵わないしな。きっとこんなことになったのも日頃の行いがよかったからさ。

おっと、相手がついに来たようだ。

秋津晴希。俺の彼女、というか嫁。今日は制服ではなく、適当にジーパンやジャケットを重ね合わせた格好だ。やっぱ私服姿もいいもんだな。ああ、可愛い。けどシャイな俺の口からそんなことは言えっこないのが残念だ。

「おう晴希！　こっちだこっち！」

シャイな俺は、こんな風に緊張してあまり声が出せない。ああもう、折角のデートだってのに。

……ところでどうして晴希はカメラなんか構えてるんだ？

第二十五話　そして僕らは式場へ……。（前書き）

紛らわしいサブタイトルだ（苦笑）

第二十五話　そして僕らは式場へ……。

「待たせたな」
「いいのいいの」
晴希はまるで憮然とした表情だった。自分で誘っておきながらその様子がおかしくて、俺はつい笑ってしまった。そしたら晴希は更に不機嫌そうな表情をした。
それは照れか、あるいは……いや、そういう考えはよそう。折角の晴希の厚意、俺が楽しまなくて誰が楽しめばいいんだと。一人で戸惑って、それで幸せが逃げていってしまっちゃたまんないもんな。

「……俺たちが楽しむんだろう」
内藤の独白に、陰から本人に聴こえないように言ってやった。
「参謀先輩、どうかしましたか？」
「いや、こちらの話だ」
どうやら心中ためらっているようだった。内藤はああ見えて細かい人間で、本能に任せた暴走などそれこそ秋津の身に危険が及んだ時ぐらいのものだ。
「しかし参謀先輩も素直じゃありませんよね」
案外物好きですね、と朱鷺羽が言う。俺は、
「俺もまだ一人の学生だ。物好きで何が悪い」
と返しておいた。

「そうだ。内藤、似合ってるぞ」
一つの礼儀のような感じで晴希。別にそんなこと言わなくてもいいのに、変なところで堅いんだよなこいつ。まぁそういうところも含めて俺は晴希のことが好きなんだけども。

「おう、ありがとな」
「そんなわけで、じゃあな」
晴希は別れを告げると、その言葉どおり立ち去っていった……って待て！　俺適当にファッション誉めてもらっただけじゃん！　くそっ、まだ「腹が減ったな。どっかで食べるか」「晴希、今日はボクが弁当を作ってきたんだヨ♪」とか「晴希、あーん」「あーん。もぐもぐ、ごっくん」とかの甘い展開がないのに！　あいつ、本格的にツンツンしやがって！　幸せが逃げてったらどうするんだよ！
ああもう！
「晴希！　その格好似合ってるぞ！」
俺は追いかけながら、立ち去ろうとする晴希の背中に向かって声をかける。
「こんな適当な男子高校生みたいな格好誉められて嬉しい女子高生がいると思うか！？」
「じゃあ似合ってないぞ！」
「失礼な奴だな！」
じゃあ何て言えばいいんだよ。ああ、爺には女心がわかりのうござりまする。
……いや、考えるんだ！　こういう時のベストワード！　とにかくこのまま晴希を帰らせちゃいけない、何だかそんな気がするんだ！　このまま放っておいたら何かがループしそうな、そんな気がする！
すぐさま俺は脳内Ｙａｈｏｏの知恵袋にアクセス、そしてベストアンサーを弾き出す！　この間およそ０．００４８０５６秒（体感）！
「晴希！　今日は（パンツの色が）ライトブルーなんだな！」
「どういうスキルで見たんだよ！　わたしジーパンだぞ！？」
いかん、更に晴希の歩幅が広くなった。だが俺は負けないっ！
「昨日はバックにせんとくんがプリントされてる奴だったな！」
「……」

おかえり、晴希。
「大嘘つくな！　ご当地にも売っちゃいないぞそんなもん！」
「はは、晴希はパンツが好きなんだな。この可愛いやつめ！」
晴希は目を細め、呆れたように言葉を繰り出す。
「……三つ言っておこう。まずパンツの話を切り出したのはお前でありわたしは何も喋っちゃいない。次にわたしたちを見る子供たちの目が非常に辛い。そしてパンツ好きと言うのがプラス評価になる理由がわたしにはさっぱりわからない」
ああ、的確すぎる突っ込みだよそれは……。

「晴希先輩に対しあの引き止め方……さすがですね、内藤先輩は。私も見習いたい所です」
「……いや、見習うな」

「ところで、どこ行くんだ？」
晴希は「お前は考えなくていい」なんてことを言っていたから俺は下調べとか全然していないんだけれども。
「とりあえずは……式場だな」
「うわ大胆」
そのあまりの心ある計画っぷりに涙が出た。やっぱりなんだかんだ言いながら晴希は俺のことを――
「何言ってんだ？　わたしが言ったのは葬式場のことだが」
「葬式場！？」
なんてこった。というかそれ葬儀場って言うだろ普通。
「そこで黒い車の数でも数えていればいい」
「すっげえ鬱だ！」
学生のやることとは思えない。いやむしろ学生じゃなくてもありえないと思う。

「何言ってる。お前も小学生の頃やったことがあるだろ？　一日に黄色い車を三つ見つけたらハッピー、赤い車を三つ見つけたらアンハッピーという」
「……晴希、お前はこのデートをどうしたいんだ？」
「……そんなこと、わたしの口から言わせる気か？」
ちゃんと楽しみたいんだよな？　そうだよな？
「ちなみに、その後はどこか？」
恐る恐る訊いてみる。
「ああ、汚水処理場の見学……と言うのを考えた」
「何故！？」
俺の晴希がそんなマニアックな趣味を持っていると言う話は聞いたことがない。これはつまり……？
「わたしも一度嘉光（よしあき）が微生物と共に沈殿槽で泳ぐ姿を見てみたい」
「やっぱりかあああっ！」
やっぱりそういう企みですか！　お前って奴はもう！
「ついでにゴミとして沈殿してテトラポットにでもなってくれれば清々（すがすが）しい」
「……だが断る」
「今物凄く悩んだよな！？」
いや、まぁ晴希の頼みならいいかもって一瞬だけ思っただけさ。やっぱり無理だけど。
「というわけでさようなら」
「ちょっと待て！　葬儀場は！？　汚水処理場は！？」
「一人で見学して来い！」
「晴希！　新聞部に攫（さら）われた日のパンツは確か『カブトボーグ』のだったな！」
「だから思いっきり嘘を交えるな！　お前とはもういい加減――」
さようなら、と晴希が言おうとしたであろうその時。
轟音（ごうおん）と共に、遠くにあった木が――火を吹いて垂直上昇していった。

「……と思ったが続けようじゃないか。そのデートとやらを」
冷や汗を掻きながら晴希が言う。というか今の晴希は漫画なら確実に顔に縦線が何本も入っていることだろう。
「それじゃ……行きますか！」
デート開始！　俺たちの戦いはまだまだこれからだぁ！

「……誠文、公園の木に変な兵器を取り付けるのはよしてくれ」
つい先ほどのロケットの犯人に忠告を促す。
「何言ってんだ。効果はあったじゃねえか。晴の後押しが出来た」
「それはそうだがな……あの子供を見ろ。呆然としたままあれから身動き一つしていないだろう」
「確かにな。まぁ大命には犠牲ってもんがつきもんだろ」
言葉でいうほど大して格好よくはないがな。
「先輩、私たちも移動しましょうよ」
「それもそうだな」
朱鷺羽の言う通り、秋津の後を追うことにした。
「……秋津に伝えるべき言伝があったな」
そう思い俺は、隠れて移動しながらも懐から携帯電話を取り出した。

第二十六話　鍵、セーラー服、王道展開

胸ポケットを調べろ
偶然にも保健室の鍵が入っていたりするかもしれない

謎のメール。そして……入っていた。保健室の鍵が。
「余計にも程があるだろっ！」
「ん？　どうした晴希？」
「何でもない！」
くそ、これは間違いなく一宮さんの仕業だな？　何が「偶然にも」だよあんちくしょう！
生憎保健室で痛みと快楽を伴うはじめてのアレをするつもりはないんだ。しかしこれ、どう処理すればいいんだ？
迷った末に私は、鍵を再び胸ポケットに戻す事にした。
ああ、ちなみに。カメラだが流石に身体能力に著しい弱みのある私が持つと手首を骨折しかねないので嘉光に持ってもらった。……というかこれ、必要あるのか？　これで録画してようがしてまいが一宮さんの事だから周囲から盗撮とか……。

「……晴のヘタレめ」誠文は、舌打ちしていた。ただただ、舌打ちしていた。「俺らのありがてえバックアップがあるってんのに何もしねえで、それでも男か！」
「晴希先輩……」反対に朱鷺羽は、安堵していた。ただただ、安堵していた。「よかった……晴希先輩が決して欲望に流されないような人間で……」
公園で誠文の仕掛けた脅迫が効いたのか、晴希がこのデートを放り出す気配は一向に見られなかった。最初は葬儀場だ汚水処理場だと言っていたがそれを実行する気にもなれなかったらしく、実際に

そんな場所に行こうとする様子も見られない。
更に先ほどの秋津の推測だが、まったくもって鋭い。その通りであり、この光景も現在進行形で多方面から撮影されている。
さて、内藤（ないとう）たちはどこへ行くか……。

どこも糞もない。大体何が悲しくてこんな奴とデートしなきゃならんのだ。
……という疑問はさっきから何度も何度も繰り返されているわけで、私はすっかり参っていた。
「毒を食らわば皿まで……か」
「俺毒呼ばわり！？」
嘉光（よしあき）が驚いていたが、まあ今更なので突っ込まないでおこう。それより――そう、やるなら徹底的にだ。といっても保健室などに行って二人で甘酸っぱい――というより濃硫酸ばりに酸味のある時間を過ごす気などはさらさらない。そんなのは秋津春姫（あきつはるき）さん（※恋する乙女）に任せておけばいい。私は私だ。
「内藤、折角だから一緒についてきて欲しいんだが」

「しかしデートの王道……なのかね？　女の買い物に付き合うって」
「違うだろ。王道はテーマパークとか、あとは海とかだな。なんなら墓地でもいい」
「いやあ……墓地は出来れば勘弁して欲しい」
晴希が言うには「わたしの服を買うからついて来い」と。それで二人してデパートへレッツゴー。もしかしたらこんな感じのラブコメ臭を俺は待ってたのかもしれない。そう感慨（かんがい）深く思ってみたりもする。
積極的なアプローチのあまり俺は涙が出たよ。ああなんだかんだ言って俺は信頼されてんじゃん、とね。台詞では『内藤』なんて呼

んでるけど心中では『嘉光』なんて呼んでるんだ。きっとそうだ。
「……そう言えば気になってたんだが、晴希は家に女物の服がないのか？」
「馬鹿言え。三桁行ってるぞ」
「嘘だ」
「……ああ、嘘だ」
本当だったらそんな適当な男子高校生みたいな格好で来ないだろうからな。特に反抗したがる晴希の性格なら。
というか晴希は、そこで意地を張る必要があったのか？　本当に可愛い奴だ。
思い出したことでもあったのか、晴希は更に説明を続けてくれる。
「兄が酷い奴でな」
「え？　お義兄さんがいたのか！？」
「その言い方やめろ。……まあそいつが酷い奴で、実の妹たるわたしのことを男呼ばわりだ」
「酷いなあそりゃ。じゃあ本人に会ったら俺が晴希を女にしたって言っとくよ」
「絶対に言うな。とりあえず我慢して息を止めてろ。いやむしろ息の根を止めてろ」
……なんだってんだよ。俺なりに出来る事をしようと思ったのに。言っとくけど俺、大好きなことならメチャクチャ頑張れるぞ？

そうこうしている内に売り場に到着。うわ、今まで気付かなかったけど女性用の服売り場ってこんな異世界的な空気なんだな。なんか張り詰めてる感じ。これが慣れの違いなのだろうか。
「お帰りなさ……いらっしゃいませ。ご主……お客さま」
同じように困惑気味の晴希に店員さんが話し掛けてきてくれた。
……さすが、これがプロの対応か。きちんとしている。
きちんとしている――はずなのに、晴希は更に困惑していた。え？　どうして？

「嫌な……予感がする……」
晴希の額に縦線。しかしそれを気にした様子もなく、店員さんは、
「さあ行きましょう。お客様」
そう言って晴希の手を掴み、更衣室に連れて行った。
「ああなるほど、俺は暫く待ってろと。そういうことか」
しかし女性服売り場でデジカメ構えてるって、通報されないか…
…？

数十分後のことである。息を切らせて更衣室から飛び出してきた
……というか涙目で逃げ出してきた晴希はなぜか、ワザとらしいカ
ラフルなセーラー服を身に纏っていた。俺はとりあえず録画しとい
た。

第二十六話　鍵、セーラー服、王道展開（後書き）

さあ、この波乱なデートは、この波乱すぎるデートはどうなるのやら。

……実は見切り発車で書いてます。どうしようかこれ（苦笑）

第二十七話　ラヴァーズ・ムービー

時間も時間と言う事で、昼食タイム。学生の懐に優しい、少し安めのカフェにて。

「あの売り場は……魔窟だ……」

息も絶え絶えになりながら女性服売り場から逃げ出してきた私は、一応ながら嘉光に対しそんな警告を促しておいた。

とにかく、あの場所は地獄だ。パンデモニウムだ。

「何が起きたんだ？」

何も知らない嘉光がそんな事を訊いてくるが、今の私にそんな事を言わせようとするのは残酷すぎるのではなかろうか。

まず序の口にメイド服を着せられた。そして反論したらチャイナ服、更に反論したら――というループの末まさかのクイーンズブレイドのコスプレをさせられそうになったところで、私は命からがら逃げ延びた。

ああ、ちなみに今は大丈夫だ。嘉光が元のジーンズやらを取り戻してきてくれたので、とりあえずトイレで着替えておいた。

「別の所でもあたるか？」

と、ストローでガラガラと音を立てて氷だけのコップから水を吸おうとする嘉光。おい汚い真似はよせ。

「いや」

と私。

「まさかって話だが、別の場所をあたっても同じ事になりそうな気がする。とりあえず洋服店は暫くトラウマになりそうだ」

「そうか……じゃあ晴希、気分転換に映画でも見にいくか？」

なるほど王道。ここで嫌だといったら……消されそうだ。嘉光にではなく、主に天森さん辺りに。仕方ないから了承しておくとしよう。こいつとゆっくりネチネチ楽しむくらいなら死んだ方がマシだと言いたいが、やはり私も命は惜しい。いざ言うとなると躊躇われ

る。

先ほどは秋津が必死そうだった。もしかしたら悪い事をしてしまったのかもしれない。

しかし、いいか悪いかなどつまるところどうでもいいことだ。

このように店員を買収してあのようなことをさせるのが、俺たちの役目なのだから。

「俺さ、本当に嬉しいんだ。お前がこんな風に誘ってくれて」

映画館への道を横並びに歩く。途中嘉光が三度に渡りカメラを持たない方の手で私と手を繋ごうとしてきたが、私もそれを三度に渡り阻止した。

「分かってる」

先ほどの嘉光の台詞には、そう返事をしておいた。冷たいと思うかもしれないが、実際はこの反応のしよう、無視するよりは幾分良心的だとは思わないだろうか？

ああ、嘉光の気持ちも分かってる。言い訳がましいが、今の返事だって何の考えもなしに言ってるわけじゃない。

確かに嘉光の私への好意は凄い。それは前の新聞部との一軒で大いに理解している。こんな奴におかしくなるほど愛されているのは邦崎辺りからいつか嫉妬で呪い殺されそうだが、しかし問題はそれだけじゃない。単純に、重いわけだ。

こんな言い方もなんだが、私は一度、嘉光を好きになった事がある。黒歴史もいいところだが、まあ黒歴史というもの自体人間の背中を押すために存在するものである。だから赤裸々（せきらら）な過去というのも悪くない。なんて戯言も言ってみる。

まあそんなこんなで、免疫が出来上がってしまったわけだ。

これでどれだけ愛されようが、盲目になることなど出来やしない。

ただでさえ私達には波風が立っているのだから、そりゃ付き合えと言われても無理な話だ。ああ、当然命が懸かってるなら例外だがな。

何が言いたいのかと言うと、これはデートじゃないんだ。デートとは認めない。ただ二人で成り行きにより買い物に行ったり映画を見に行ったりするだけだ。なんだかデートっぽくなるのも偶然だきっと。

「ありがとな、晴希」

「うるさい」

見に覚えのない礼を言う嘉光は、なんだか本当にうざったかった。ほら笑うなお前。

「ほらほら映画館だ。テンションが上がってきた！　君の勢い感じる！　熱い気持ち伝わってくる！」

「映画館が一体お前の何を刺激したんだよ！」

まずいな。嘉光が精神疾患に侵されている可能性がある。

嘉光が見たいといった映画は、やはりと言ったところか恋愛映画だった。

席に座る。流石にここまで撮影しているのは確実に法律に違反するであろうため、カメラの電源は切っている。

私の左の席にいるのは嘉光。油断すると手を触れられそうなため私は迂闊に左手が出せない。そして右隣にいるのは――

「……晴希？」

「……なんて偶然だよ」

私のクラスメイトかつ自称ライバルの邦崎綾女だった。

「よかった。お前に頼みたい事がある」

そして私は邦崎に、互いにとって有益な提案を出した。

現在、私の左隣の席には邦崎がいる。

どういう事だって？　簡単な話だ。席を交換しただけの事。

それにしても冷静に見てみると席の左の方が凄い。嘉光は隣にい

る人物に気付かないまま邦崎の手に触れていて、それに対し邦崎は緊張による熱のあまりドライアイスのように昇華（しょうか）してしまいそうだった。

ちなみに、私の左隣には――

「……どうしてお前までいるんだよ」

「……なんて偶然」

「いや、お前の場合は故意だろうが」

見た目は無口系、中身は野次馬の文芸部員、杭瀬弥葉琉（くせみはる）がいた。

第二十八話　フィナーレのエンドテロップ

恋人たちが手を繋いでいる幸せそうな姿がスクリーンに映っている。そして左方を眺めれば幸せそうな御二方。とりあえず嘉光には真実を伝えないようにしよう。嘉光が邦崎の好意に気付いたら気付いたで私の肩の荷も二グラムほど降りそうだが。

「……杭瀬」

そうやって最近の若者らしからぬ多忙な自分に気を配りつつ、私は右隣の席に座る似非無口キャラに声を掛けた。

「お前がここにいるって事は、やっぱり一宮さんたちもいるのか？」

その言葉に、杭瀬はそ知らぬ顔で頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「とぼけるな。お前の無口キャラなんて私には通用せんぞ」

「……晴希」

「何だ」

「……これからあの二人、ヤるの？　ヤらないの？」

私ではなく、私の横の二人でもなく、スクリーンの方を見ながら訊いてくる杭瀬。

「実に斬新な誤魔化しだな。お前の興味はそんなところにあるのか」

「そんなわけない。晴希じゃないんだから」

「私にもそんな趣味はない」

いつものように降りかかる杭瀬の妄言に呆れながらも、そう返事をしておく。スクリーンの中の男女は唇を重ね合わせていた。

「……ここからベッドに入るのかも」

「やっぱり興味津々じゃないかお前」

これを最後に、暫く私と杭瀬との対話は途切れた。下手に声を出して嘉光に感付かれると面倒なことになる。

この後、映画ではスイーツ（笑）が乳繰り合っている所に破壊神

が舞い降り、ホームレスのおじさんが破壊神を倒す方法を探すために体に風船を巻きつけ偏西風に乗って旅に出るという展開をし、最後の最後に「続編出します！」というメッセージで観客を半分呆れさせ半分昂ぶらせた。杭瀬が「おおっ！」といったような様子だったのにはもう何も言わないでおこう。私の優しさだ。

ちなみに嘉光には奇跡的にもバレなかった。手が重なり合わない一瞬の隙を突いて邦崎を外してその後私が入る、そうやって席を再び交換したのだ。その後嘉光は鈍感にも邦崎と杭瀬を見て「おうお前ら、偶然だな」と言っていたのには全員呆れざるをえなかったが。

「晴希先輩、思い切ったことをしますね」

朱鷺羽が感心したように呟く。確かに親友を身代わりにするなど、まともな発想ではなかった。いや、普通に思いつきはしても、実行などしないものだ。

「さて、時間帯から言えばもうすぐデートも終わるはずだ」

どうやら秋津の方は、デートだと認めたくはないらしいが。

「んじゃ、そろそろフィナーレのエンドテロップってか？」

誠文が嬉しそうに訊いてくる。

誠文の言うことは当然だ。だがその前に俺の予測の範囲外だったイレギュラー、あの秋津の級友をどうにかして排除しなければならない。

私と嘉光と邦崎、その三人で映画館を出た。ちなみに杭瀬はいつの間にか消えていた。

「内藤、私の首の方に手を回すな」

そう言いながら変態の手を払いのける。

「家に帰った後入念に洗う必要があるじゃないか」

首周りは結構洗いづらいんだぞ。ふざけんな。お前は暫く落ち込

んでいろ。ほら見ろ、さっきから沈黙している邦崎にも睨(にら)まれてるじゃないか……睨まれてるのは私もだが。

なんて思い私がこれから基本的人権について纏(まと)めて嘉光に説(と)こうとした所で。

「ああ、なるほど」

何故か納得したと。

「晴希はツンだなあ」

「これが本性だ馬鹿」

というかやっぱりそっちか。

「確かに綾女(あやめ)も見てるしな」

「いや、確かにそれはそれで合ってるんだがな……仕方ないな。邦崎、もうこいつに本当の事言ってやれ」

さっきまで黙っていた邦崎に声を掛けてやる。

「え……そ、それはまだ！」

このヘタレめ。少しはうざったいほど噛み付いてくる嘉光を見習え。

「ん？　何の話だ？」

「黙ってろ部外者」

「いや、俺への話ってさっき言ったよな！？」

部外者である嘉光を尻目に、私達は話を続ける事にする。

「そんな……私が内藤君の事をどうこうだなんて！」

「ん？　おれがどうしたって？」

「黙れ内藤。お前は部外者だ」

「だから今明らかに俺の名前出たよな！？　何だこれ、苛(いじ)めか！？」

「苛めじゃない、ただ苛(さいな)んでいるだけだ」

「漢字で書くと同じだろ！」

喚(わめ)きつづける嘉光。仕方ないな。そんなに卑屈(ひくつ)な態度を取ってくれるなら渋々（しぶしぶ）言ってやろうか。

「……分かったよ内藤。いいか？　こいつはお前の事を――」

と、私が言い掛けた所で。

「悪いぜえええええええ！」
「おいてめえら、見せつけてんじゃねえよウンコマンにウンコビッチ。死ね。爪割れて死ね」
「兄貴？　見せてやります？」
「おう、先月ドライアイスでうっかり火傷したこの黄金の右腕を解き放つ時が来るとはな」
絵に描いたような不良（？）の方々が、降臨なさった。

第二十九話　三輪車に君は何を思ふ

「待ってくれ、ここは……なんだ、ええと兄貴が出る幕じゃねえだろ」

「いんや、悪いが、ええと、とりあえず適当に俺自ら頑張るぞ」

何だか物凄く不自然な絡み方をしてきた不良……かどうか分からない人たち。

とりあえず、ここは一つ鎌をかけておくか。

「あー、とりあえず訊きたい事があるんだが」

「おうよ、冷蔵庫の上手な収納法から玉子を片手で割るコツまで何でも答えてやろうじゃねえのウンコビッチ」

……いや、そんなお得な家庭情報はいらない。というかやっぱりこいつら全然不良じゃないだろ。

「董城高校の、大曽根さんと一宮さんって、知ってます？」

『……』

おや？　やっぱり黙った。

「ん？　どうしてそんな事を訊くんだ晴希は？」

「嘉光のアホめ。ドクターペッパーの飲みすぎで脳が溶けたか？　少しは自分で考える力を持て」

私がそう言うと嘉光が落ち込んでしまった。そんな嘉光に邦崎は「大丈夫？」と声を掛けている。

そして例の不良達といえば。

「そ、そんな誠文さんなんて聞いた事すらないなあ！　はっはっは、そうだよな！」

「と、当然だ兄貴！　俺たちゃその敦次さんなんて人も知らないんだなあばばばばばばばば！」

……図星だ。完璧に図星だ。てか私はあの二人の下の名前を言っ

た覚えはない。
それであの御二方、私達にどういうリアクションを取れと？　さっぱり意図が分からないぞ。
仕方ない。こういう困った場合の選択肢は――。
「とりあえず私は帰――」
と、ここで視界の隅には火を噴いて暴走する無人の三輪車。
「ろうと思ったが歩きで疲れて足が棒になってしまったな。さあ逃げられないどうするか」
それが似非不良君達の仕業でないことはすぐに把握した。だってあいつら顔が真っ青なんだもん。
口は災いの元。下手なことを言うと大曽根さんにあの三輪車みたいにされるかもしれない。
「そ、そうだ！　おい貴様！」
こちらに震える指を向けて声を絞り出す不良君（の振りをした奴）。何だか哀れに思えてくるので、とりあえず応じておいた。というか私もよくもまあこういう自体にもかかわらずこんな冷静に分析できるものだ。
「どうした」
「お、お前じゃねえよ！　女の方だ！」
なんだ、邦崎のことか。あいつに用があるのか？　というか――
「私も女だよ！」
「……ああん！？　てめえ何だその口の利き方は」
なんて理不尽な怒り方なんだそれは。とりあえず悔しいから難癖つけたって所か。
「俺らにそんな口の利き方していいとでも思ってんのか？」
「いやそりゃ……思ってません、はい」
迷った末に謝罪。大きく出すぎる必要はない。何せこちらはコイキングより弱いのだ。
「まあいいけどさ……こっちもごめんなさい」
結局いいのかよ。そして素直に謝ったし。おい、完璧に素が出て

るぞ、なんて言ってやりたい。
「……と、とりあえずあんたを呼んだんじゃないんだ姐さん。おいそこの娘！」
そう言って邦崎を手招きする不良君（の振りをした奴）。ところで自分でも知らない間に姐さんにまで昇格してしまったんだがどういう事だ。
「私を……どうする気……？」
声を絞り出す邦崎。やはり火炎三輪車に驚いたのか……いや、思い込みが激しいこいつの事だからまだ本物の不良だと思っているのかもしれないし、単にこいつらに怯えているのか？
そして、そんな邦崎の様子に威勢を取り戻す不良君達（の振りをした奴ら）
「ふっ、話はこっちに来てからだ」
「痛いようにはしねえからよ」
まだ迷う邦崎。似非不良と似非親友の対面だ。いや、それで私はどうすると？
「姐さんは向こうに行ってろ！……いえ、行って下さい！」
そんな私の思考を読んだかのように呼びかけてくる。……って、おい。
「だからなぜいきなりそんな扱いなんだ！？」
まずいな。邦崎にまたあらぬ誤解を受けてしまったかもしれない。あいつ自身は本気のつもりだからこっちとしては非常に辛い。
――と。
「俺がいつドクターペッパー好きキャラになったんだよ！」
嘉光が叫んでいた。
「……馬鹿が目覚めたか」
「いつも思うんだが晴希は最近俺に対する態度が酷すぎると思うんだ！」
「気のせいだ気のせい」
それはきっと杭瀬の言う、光の屈折というものだろう。

「いやこの前晴希俺からの電話舌打ちして切ったよな!?」
「それは多分電波が悪かったんだ。きっと平行世界にいたからだろうな」
「晴希、ひょっとして怒ってるのか?」
さあ、どうだろうかね。私は何も答えやしない。
とりあえずさっさと似非不良君達の言いなりになって嘉光を邦崎から離そう。さっさとデートを終わらせればそこでおさらばだ。
「行くぞ内藤(ないとう)。どこへかは知らんが」
場から立ち去りながらそう言う。これに対し嘉光は。
「それはここから俺のエスコートという解釈でいいのか?」
違う。
「……内藤、脳の健康のためにも炭酸飲料の少しくらいは控えろよ」
「だから俺はそんなキャラじゃないし炭酸飲料で脳は溶けないから!」
なんて奴だ。折角の人のアドバイスを跳ね除けるなんて、こいつの体に人の血が通(かよ)っているとは思えない。
ところで、邦崎は何をしているんだろうか。悪い人達に絡まれた後果たしてどうなったんだか。

第三十話　一時終点

イレギュラー分子であった邦崎綾女は偽の不良から内藤の写真を渡すことで処理した。なお、その写真の例を挙げると「風呂上がりの内藤嘉光」「寝起きの内藤嘉光」「寝起きの内藤嘉光その2」など。おそらくは嬉々（きき）として帰っていったであろう。

「しっかしあいつら、めちゃくちゃ晴にばれてんじゃねえか。あれならまだ大根の方がマシだぜ」

そして先の対邦崎綾女用部隊の無能さに誠文は呆れていた。

「あれは大曽根先輩が途中で変に脅かしたのも問題だったと思います」

朱鷺羽はそう反論を述べる。結局こいつも逸る気持ちを抑えて忍耐強くここまで来ていた。無駄な根性にしてはよくやったものだ。

「何言ってんだ、あのままじゃ晴も家に帰ってた。こんな面白……先輩としての義務を果たすためなら木の一本や二本、チャリの一台や二台の犠牲はあっても仕方ねえだろ。むしろあれよ」

「本当に大曽根先輩は……どう思いますか？　参謀先輩」

「だから参謀ではないと言っている……」

思えばこんな呼び名がついたのも些細なきっかけだった。人の噂も七十五日。たかが二ヵ月半なら上等だが、しかしこちらが僅かながらだが弱みを握られているというのは厄介だ。

「んで敦次、この後なんか考えでもあんのか？」

誠文があるだろというように聞いてくるが、実際ない。

「ん？　考えてなかったのか？」

「馬鹿言え。俺はあえて何も仕掛けないことにしただけだ」

何も考えてなかったから、あえてだ。

姐さん、小娘の説得、完了しましたb

こんなメールが来ていた。さっきのあの似非不良からなんだろうが、如何せん私は他人にメアドを教えた記憶がない。どうせ嘉光の時と同じなんだろうな。プライバシーとかそう言ったものを悉く跳ね除ける一宮さんの所業なんだろう。

「そうだ、京都に行こう」

馬鹿嘉光の提案。だがそんなものに釣られる気はさらさらない。

「黙れ、お前一人で地獄へ行け」

こんな感じで返しておけば万事オッケーだ。基本、対嘉光用コミュニケーションは罵倒に始まり罵倒に終わる。ソースはこれまでの経験論だ。ベーコンさんは偉大だな。

「いや、冗談無しで尻切れ蜻蛉ってのはちょっとな……」

「尻切れ蜻蛉、良いんじゃないか？　一部の価値観の偏ってる人なら多分風情があるとでも言ってくれるさ」

「じゃあ晴希、お前の行きたがってた――」

「葬儀場か？　別に行きたくなどないが」

「じゃあどこへ行けばいいんだよ！」

まあ確かに嘉光の言う通りか。終わらせるならきっちり終わらせないとな。区切りのよさは大事だ。

「なら、学校でも行くか」

文芸部室にでも行ってみるか。そこでも適当にゴールにしてしまえばいい。

「保健室か？　誰かが偶然にも鍵持ってたりしないだろうか……なんてな。っておい、そこはすぐ突っ込んでくれって！」

すまない。お前の勘の鋭さについ呆れてしまった。

しかし冗談じゃない。確かに私は貧弱だが保健室で休む必要もないし、ましてやデート以上の事をする気などまっさらだ。

「とりあえず、行くぞ」

「そんじゃ、保健室へレッツラゴー！」

「もういいお前は帰れ」

「ええ！？　ちょっと待……だから無視するなよ！」
こうして、私達は文芸部室に赴いた。

文芸部室は、なぜか鍵が開いていた。また一宮さんが事態を想定しての事かもしれない。
ちなみに扉は先に嘉光に開けさせた。その時黒板消しが嘉光の頭に直撃してくれればありがたかったが、やはり今日も黒板消しはなかった。
「……というわけでこれが大まかなあらすじです、仁科さん」
机に座って空調でくつろいでいる新聞部部長にカメラを渡す。
「おう由宇さん由宇さん――っていつの間にいた！？」
嘉光は驚愕していた。いやしかし、それを私に訊かれてもだな……。
「仁科さん、なぜここに？」
嘉光の疑問をそのまま仁科さんに伝える。普通新聞部が勝手に文芸部室に入るなんて事はしたくても出来やしないはずなんだがどうした事か。
その質問に仁科さんはあははと笑い、それからゴホンと咳払いをし、改まって説明をした。
「この方が案内してくれたのですよ」
と、上からいきなり女生徒が降ってきた。そいつは誰かって？
そんな登場のしかたをするのは、私は二人しか知らない。ちなみにそのもう一人は新聞部の扉を蹴破る召喚獣なのだが、まあその話は良いだろう。
「や、ハルちゃんに嘉光くん、お疲れさん！」
それは、三年の天森小枝さんだった。
隣で嘉光があまりの意味不明な展開に困惑しているようだが、そんなことは知った事じゃない。
結局の所、私達は今日一日先輩方の手の平で踊らされていただけ

なのかもしれない。唯一抵抗できたと言えるのは映画館での邦崎との邂逅くらいだ。

ああくそ、だるい。さっさと私は寝たい。

そう言えば保健室の鍵があったんだったな。折角だからベッドでも拝借していくか？

「ん？　晴希、もう帰るのか？」

「……ああ」

やっぱり帰ろう。せめて嘉光のいない世界で眠ろう。

私は、そう思った。

第三十話　一時終点（後書き）

えー、ちょっと聞いてくださいよ奥さん。
デートとか実際どんなのか俺知らんとですよ。
あと最近の俺は妄想力に欠けてる気がしてならんとですよ。
んでぶっちゃけ微妙なんですよ。
ってか会話部分だけやけにはっきり書ける自分はもうあれなんですよあれ。
つーわけで（どんなわけかなどと言う苦情は一切受け付けておりません。あしからず）、地球の皆、おらにネタを分けてくれ。後生だから。俺はその間保健室のベッドで寝てるから。うん。

第三十一話　茜色革命（前書き）

新章スタート！　しかし終わりが見えねぇ！

第三十一話　茜色革命

こちらスネーク、時は朝礼前、とある事情によって結界のようなものの張り詰めた教室からは席を外し、階段付近に移動。

それでもまだ感じられる何者かの視線についてはもういい。この視線が消える日が来るとすれば、おそらくそれはこの騒動が収まるか私が転校するか、そのどちらかだ。妥協の末に開き直り。カルシウムを取っている私、秋津晴希はあくまで寛容なのだ。

壁に背中を預けて、さあ話そうじゃないか。こいつに対しこちらから会話を始めるってのは少し気が進まない所もあるが。

「どうしてあんなつまらん事でわざわざこんな事になんだろうな。……一般的な一学生が体験すべき事じゃないだろ。常識的に考えて。

……ああ、あと昨日は帰ってきたそばから一体どうしたなんて親に訊かれたぞ。説明も面倒だったし、どうせこんなスチャラカな説明しても狼少年みたく冗談と取られて流されるだろうからもう何もないと言っといたが」

「……」

話の相手はそれに対し、無言でこちらを見ている。

ちなみに誤解されそうだが、母親が私みたいな中性顔だったりする事はない。かといって私は父親似でもないのだけれど。そして兄に似ているとも言い難い。遺伝子学の奇跡だな。迷惑な奇跡だ。

いや、話を戻そう。声を掛けてきた理由としては、私の顔色が相当悪かったのかいつもより溜め息が深かったのか。多分その二沢。お母様、貴女の勘は鋭いですね。今の私はややこしくて頭皮を掻き毟りたくなっていますよ。

とりあえず悩みの種があり、おかげで今時の若者らしく心が健やかでない。死にはしないだろうが、禿げるのは避けたい。私女だし。

「本当にくだらん理由だよ。人間ってそこまで根に持てるのかね。しかし嘉光も、あんだけ人をネタにするってのはどうなんだか」

「……」

それでも話し相手は無言を貫いている。……今唯一頼りにできる奴がこれだもんな。ストレスも相乗効果で溜まっていく。不快指数も高まっていく。

「とりあえずだな、邦崎すらどっか行ってしまい使い物にならないんだ。これはお前にしか頼れないって事だ。」

「……」

「……だから喋れ、杭瀬」

「……」

話し相手、杭瀬弥葉琉はそれでも喋らない。喋った所でまともな事を言うかは分からんから、これでいいのかもしれないけどな。それでも私が一人で喋っている痛い人に見えると言うデメリットは余りある。

さて、読者諸君にそろそろ事情を説明しておくべきかもしれない。実は、内藤嘉光と私と文芸部と、その繋がりが断ち切られてしまった。

「ああくそ、内藤はいてもいなくても迷惑だ本当に」

「……ツンデレ」

「ちょっと黙っていようかそこの杭瀬さん」

やっぱりこいつは黙っていてよかったかもしれない。だれがツンデレだ。私はそんなキャラを確立した覚えなど一切ない。

「……しかし、嫌な事件だったな」

私はあの時の事を思い出す。嘘のように短かった、あのゴールデンウィークが明けた日の事を。

第三十二話　夕日はこんなにも眩しかった（前書き）

更新遅れました！　すんません！

第三十二話　夕日はこんなにも眩しかった

何がゴールデンウィークだ、などと思う事が多々ある。

私は眠りこけている生徒達を眺めながら授業を終え、今から部室に向かう所だった。

長期休暇とは言え所詮数日、皆何の変わりも無かった。変わっている物があったとすれば、それは最初からおかしいと言う意味で変わっている物だろう。文芸部とか。いわば「昆虫の不完全変態」の「変態」と「きゃあ、こんの変態！　脳漿ぶちまけて死にさらせや！」の「変態」のような違いだ。

さて、それはそうと、何がゴールデンウィークだ、という話だったな。

実際はその長期休暇に便乗して家族旅行などに赴く人々も少なからずいるが、プライベートでは所詮そんな充実した生活を送っていない（ただし部活では充実とかのレベルじゃない）私は文芸部・新聞部による強制デートで嘉光とのいらんフラグを立て、そして邦崎にあらぬ誤解を受けたまま残りの休みを過ごした。

ああ、分かっているさ。悪いのはゴールデンウィークじゃないってことぐらいは。

本当に悪いのは私と、私を取り巻く環境だった。くそったれめ。

まぁ誰が悪いのかはさておき、私のゴールデンウィークは非常に退屈なものだった。平凡な日常にこそ価値があるなんて嘘だな。ちなみにだからといってこの混沌とした学園生活の方がましとは言いがたい。寧ろこっちには負の価値があるように思えてならない。

ちなみに今年は秋にシルバーウィークなんてものもあるらしい。

ああ、退屈だ。死ね。氏ねじゃなくて死ね。

私達が今いるのは過去でも未来でもなく今？　うん、それは正論だ。私も賛同する。

というわけで、これからまたじっくりと時間を掛けて邦崎の誤解

を解いていかなければならないわけだ。
まあ持久戦だな。好きではないが苦手でもない。つまり得意だけど嫌い。私にばっかり役目が回ってきて、もうノイローゼに近い感じだ。もうリア充ってレベルじゃないだろ。
そんな精密機械ばりに複雑な人間関係に僅(わず)かながらの不安を覚えつつ、私は部室のドアを開けた。
「晴希(はるき)、なんだか浮かない顔だな」
するとなんの不自然さも無く中にいた嘉光が当然というように話し掛けてきた。
「なんでお前は当然の流れといったようにいきなりそんな発言をするんだ」
まるでそれまでもこいつはそこにいたかのような感じだ。
「いや、直感だな。せめてもの理由を付け加えるとしたら『愛』の一文字だ」
なんてこった。直江兼次(なおえかねつぐ)もびっくりのスキルだな。いやどっちかと言うと宮間夕菜(みやまゆうな)とかが持ってるアレに近いか。
「……ま、正直お前と話すのは疲れる。今日は勘弁な」
そう言ってスルーを決め込む。この休暇で疲れはかなり取れた。しかしだからといって連休明けで調子よく文芸部でやって行けるとは限らない。前述の通り持久戦など大ッ嫌いだが、それでも私は持久型なのだ。短期決戦に持ち込まれ無駄に体力を浪費するのはよくない。
準備体操無しで水泳をすると足が攣(つ)ったりするだろ？　あれと同じような事だ。といっても私自身は攣った事なんてないけどな。だって元々泳げないし。
「じゃあさ」
嘉光はそれでも引き下がらないようだった。しつこい男は嫌われるぞ？
「今日は疲れないトークをしよう」
「なんだそのふわっとしたコントみたいなネタは」

私がそう言うと嘉光は「例えばなあ……」と考え始めた。
その間に一人の小柄な後輩が話し掛けてくる。
「先輩、晴希先輩……」
「ああ、朱鷺羽か」
朱鷺羽みのり。私を慕い、あろうことか女同士でありながら私に恋愛感情を抱いている変わった人間だが、根はまともで気配りもできる。逆に言えばレズなのが珠に瑕の、大変残念な後輩だ。
「どうした、残念な後輩」
「いえ、その冠詞は必要ないと思います……」
「すまん」
失言を詫びておく。
「そういえばあれだな朱鷺羽、『残念な』とつけるだけでも大分イメージが変わるな。例えば『残念なときめき』とかな」
「ですね。『残念な凄まじさ』とか」
朱鷺羽が適当に相槌を打ってくれる。この辺りが他の文芸部員と違う所だ。まったくあいつらときたら勝手に話を進めるわ、私を変なキャラに仕立て上げるわで（特に杭瀬だな）。相手をリスペクトする事がコミュニケーションの第一歩だとあいつらは習わなかったのだろうか。はあ、けしからんぞまったく。まさにこれが残念な部活だ。
更に私達は例を挙げていく。
「『残念な希望』『残念な新学期』『残念な春』……」
「『残念な最強』『残念な伝説』『残念な魔王』……」
ふむふむ……なるほど、確かに残念さが滲み出ている。ならばと私も更に例を挙げてみる事にした。
「後は……『残念なゴールデンウィーク』『残念なデート』『残念な映画鑑賞』とかな」
「他には『残念な尾行』『残念な試着室』『残念な三輪車』とかですかね？」
「ああなるほど、とりあえずお前があの日何をやっていたのかは大

方理解した」
　その私の言葉に、朱鷺羽ははっとした表情。
「晴希先輩……誘導尋問は卑怯です……」
　それは世間一般では誘導尋問とは言わなんじゃなかろうか？　まあそこまできつく言う気はないが。嘉光じゃないし。
「でも今日は珍しいですね。晴希先輩の方から話を切り出してくれるなんて」
「いつもお前の方から話してくるからな。まあなんだ、気が向いただけだ」
　だからあまり調子に乗るなよ、と付け加えておいたが、言った後で後悔。まずったな、これは反作用でまた変に好感度が上がってしまう。
　本当、朱鷺羽はいい奴なんだがそれゆえ苦手でもある。一回きつく言っておいた方がいいんだろうか。レズの彼女持ちの高校生活なんて、どう考えても嫌だぞ私は。
「おし晴希、待たせたな！」
　と、嘉光がようやく話し掛けてきた。えらく時間をかけたな。どうしたんだ一体。
「『疲れない話』のテーマで脳内Ｇｏｏｇｌｅ検索していたんだが」
「お前の脳内には検索用ソフトがインプットされてるのか」
「言葉のあやだ言葉のあや。まあとりあえず、それらを箇条書きにしてみた」
　そう言ってルーズリーフを差し出してくる嘉光。えらく献身的かつ無駄なことをしでかすなこいつは。表面真っ黒だし。その割に字綺麗だし。
　内容はと言えば、『リュウとケンだとどっちが強いのか』とか『襟袖の染み付きを取る有効的な方法』とか、やけにピンポイントな話題が並んでいた。全く、そんなの語れんぞ……リュウケンは語れるが。
「今日はこの話題を――ミックスして話そうと思うんだ！」

「最悪な選択肢だろそれは！」
なんて事だ。それは一番ないだろう。
「いや違う！……いや、違わないか。確かに美味い食材を混ぜれば美味い料理になるわけじゃないもんな……」
嘉光の言う通りだ。ただ一つ決定的に違うのは、食材すらも駄目だと言う事だが。
「くそ……女一人満足させるテクニックすらないのか俺は……」
「おいなんだその誤解を生みそうな言い方は」
「私も晴希先輩を満足させるテクニックを学ぼうと思います」
「折角の真摯な態度に水を差すようで悪いが、学ばなくていいと思うぞ……」
嘉光と朱鷺羽の発言に、私はそれぞれげんなりしながらもそう諭す。
「大体難しいよな。『面白い話をしろ』なんて無茶振りされても無理だって普通」
「内藤先輩の言う通りですね。芸人でもないんだし、私たちにできるのはごくありふれた会話だけですから」
……いや、通常お前らや杭瀬の会話は私を疲弊させるのに特化していると思うんだが。
「エンターテイメントだな。要は刺激だ。ニコニコ動画とかＹｏｕｔｕｂｅとかにおける『〇〇で人類滅亡』を見れば分かる通り」
仕方なく話の流れに乗ってやり、私はそんな事を言う。聞き慣れない単語があったのか朱鷺羽は首を傾げていたが、まあいいだろう。
嘉光の「いや、その発言はアウトじゃ……」と言う発言も同上。
「まあ要約するとだ、『内藤が死ぬ』だとか『内藤が核爆発に巻きこまれる』とか『内藤が風船で偏西風に乗ってアメリカを目指す最中に太平洋に沈む』だとか、そういう事だな」
「流石は晴希先輩」
朱鷺羽もなんとなく理解できたようで何よりだ。
「いやいやいやいや！」

ただ一人、嘉光は不満そうだった。お前はいつだってイレギュラーだな本当に。主人公にでもなりたいのか？
「どうして全部俺が巻きこまれてんの！？」
「馬鹿言うな。他の人だと訴訟問題になるだろ」
お前は私にとって特別な存在なんだよ。呆れるほど鈍感だな。
「俺の人権！」
「はっはっは、何を言い出すんだお前は」
「なんなんだそのわざとらしい笑いは……」
「内藤はマゾだから大丈夫」
「俺が決める事だよそれは！」
嘉光の必死の抗議。何だよ、我儘な奴だな。
私はそれまで座っていた席から立ち上がり、そうして内藤に向き合う事にする。
「内藤、私はな……そういう目に遭ってるお前が見たいんだよ」
「晴希、病院に行くか？」
そんな嘉光の心遣いをも心を鬼にして跳ね除け、こう言ってやる。
「よく聞け内藤、これはお前にしか出来ないことだ。そして、これは単に私のためだけじゃない。お前のためでもある」
「晴希……わかった！」
「その心意気だ内藤……え？」
……やるのか？
「今から川に行こう。簀巻きにして川に叩き込んでくれ！」
「内藤！　お前って奴は！」
「内藤先輩……あなたはそこまで……」
なんて無駄に輝いているんだ、あいつは……。

「ア――――ッ！」

こうして、私達は一年達の力を借りながらも、嘉光を川に突き落とした。とりあえず携帯で撮っている奴もいたが、私はその目に焼き付けておくだけにした。それが無力な私があいつにできる、ただ一つの弔(とむら)いなのだから。

「朱鷺羽、私はあいつを止めるべきだったのだろうか……」

「いえ、そんな事は内藤先輩も望んでいないと思います……」

「……優しい奴だな。分かった。私は、あいつの事を絶対に忘れない……」

「ええ……」

その日の夕日は、とても眩(まぶ)しかった。

第三十三話　暫く二人で独り言

翌日、怪我病気と無縁のはずの嘉光（よしあき）は、学校を休んだ。
まさか本当に死んだんじゃないだろうな、なんて馬鹿げた事を思いながら、土曜日曜が過ぎていった。
「そして昨日の朝学校に来てみれば、これだよ……」
「……」
溜息（ためいき）。杭瀬（くせ）は相変わらず沈黙。
それからさりげなく生徒が私服警察のように距離をおきながらも私のことを監視していたのを知ったし、それまで会話した事すらない同級生に無理矢理どこかへ遊びに連れていかれたおかげで文芸部室に行けなかったり。挙句の果てには、少し前まで携帯の三本立ってた電波が妨害によりいつの間にか圏外になっていたりした。正直言って、困る。電波が悪いと電池の切れも早い。
簡単に言えば、文芸部室に行けない。嘉光にも会えない。
ちなみに私だけではなく嘉光の方も文芸部室に来ていないらしい。杭瀬によると。
差し込む光の方に視線を向けながら、そのまま私は話を続ける。
「まあ後悔というか、反省はしてるさ。痛いほどに。
やっぱり人道的に間違ってるからな。不法投棄なんて。多少遠かろうがクリーンセンターを目指すエコロジー精神は確かに重要だったのかもしれない」
「……」
嘉光の生命？　さあね。あいつは道頓堀川にダイブしようがハイジャックに巻き込まれようが爆弾を抱えて宇宙空間に飛び出そうが主人公補正らしき何かで無事帰還してくるさ。
私は信じてる。信用、大切。ここら辺が最近の冷たい若者どもと私の、誠意の違いだな。覚えとけ、これ学校じゃ習わんから。
「でも結局問題なかったじゃんか。誰も死ななかった。誰も傷付か

なかった。
　それで、あの後どこかの勇者のごとく帰ってきたらしいって噂もあるな。しかも無傷で。カービィばりに復帰力の高い奴だ。心配して損した」
「……」
　生命力はゴキブリと同等……いや、スリッパでも死なない分ゴキブリよりたちが悪いか。
　まあとにかくその不法投棄が引き金で戦いが勃発したとか、そんなてんやわんやな状況なわけだな。確かに不法投棄は社会問題だが、些か事が広がりすぎじゃなかろうかね。
「しかも戦線が殆ど女子とか。これだから女ってのは」
「……」
　……ああ、そう言えば私も女じゃないか。
　人道に反する感触ってのはこういうものなのだろうか？　悪に染まった気なんて毛頭ないんだがな。
　まあ正義とか悪とかは知らんけどさ。菓子パン男が正義でバイ菌男が悪だろ？　それくらいの知識しかないね。
「ああ、自分がこの下らん騒動の火種にいると思えば照れなくもないな。まあ端から見れば随分コミカルだけどさ。なんせ当事者二名差し置かれてるんだから。それも含め、いやまったくもって意味の分からん騒動だ」
「……」
　聞き手であるこいつの口は断固として沈黙を守っていた。退屈そうな顔だな、おい。
「……とりあえず杭瀬、何とか言え。愚痴がただ独り言みたくなるのは精神的に来るものがあるから」
「……」
　さっきから話を聞いている杭瀬は何も答えない。まあ確かに私の一方的な愚痴に対しては特に言うこともないかも知れんが。
　それにしてもこういう時、こいつのステルスが羨ましく感じるね。

こいつだけは絶対こんな騒動に巻き込まれる事がなさそうだ。本質はネタなのに。

そう、こいつは自分で混沌を作り出しておきながら決してそれに巻きこまれる事はないんだ。都合のいい奴だな。

……いや、いかんな。私、愚痴ばっかりじゃないか。

さらにもう一つ戦況を言っておくと、この騒動に便乗してる輩もいるらしい。特に今年の一年が凄い事になっているらしく、賭けをする生徒や応仁の乱みたいに大義名分にして私的問題で争ってる生徒もいる。言っておくが私は中世に行ってみたいなんて思った事は一度たりともないんだよな。

学級崩壊ならぬ学校崩壊。別の意味では団結。まるで東西ドイツだな。そして何かの最終回の一話前のようだ。

……あー、ここまで行くと嫌でも罪悪感を覚えるな。この心情、どう言い表すべきか。

「仕方ないな。杭瀬、頼むぞ」

何を頼むかなんて言うまでもない。

この心情を言い表したい？　違うね。詩人じゃないんだから。

中世に逃げたい？　違うね。何度も言うがそんな希望願望は持ち合わせちゃいない。

ステルスしたい？　違うね。出来るなら本望だが、まさか近頃の携帯ゲーム機じゃあるまいしシェアリング出来る物ではないだろう。

現状打破だ。私はこの通り文芸部とコンタクトが取れない状況にある。しかしこいつなら、あるいは。

すると、それまで黙っていた杭瀬が、ようやく口を開いた。そうして抑揚のない口調で言葉を紡ぎ出す。抑揚はないが、それでもさっきより２‰増しの活力が感じられる。

「……それじゃ、愛に殉じようとする晴希に敬意を評して」

「甚だ不本意な第一声だな！」

とりあえずは第一段階。こいつの口を開かせた。

……どうして騒動の中心でもないちょっとした話に苦心しなけれ

ばならないんだ私は。

第三十四話　腹打ちの音

「それで、これからどうするかだ」
勿論杭瀬や他の文芸部員にばかり任せているわけにもいかない。私は基本的に周りが動いてくれるなら自分は動かなくていいやなどと思う無気力人間だが、今回は事情が事情だ。
それは宿題と同じで、さっさと終わらせてしまいたい。じゃないと精神的に死ぬ。禿げる。で、それは勿論困る。
とにかく、この事態にはもう辟易するしかないんだ。一年とかのアホどもは楽しんでるみたいだが、アホの思考など知った事か。
「……どうするかって、晴希の持て余してる性欲の話？」
「黙れ杭瀬、今の私はシリアスモードなんだ」
ざわざわと福本マンガみたいな幻聴が聞こえてくるくらいにな。
「杭瀬、文芸部とのコンタクトは取れるか？」
「晴希と話せて、一宮先輩たちと話せないことがあるとでも？」
杭瀬はどこからか取り出した本、『図解雑学――プールの飛び込みの腹打ち音』を読みながら答える。……まあその通りか。……読んでる本の事じゃなくて言ってる事の方な？　分かってるだろうが。
「大体文芸部は普通に続いてる。いないのは晴希と嘉光だけ」
後晴希がいないから朱鷺羽後輩も、と杭瀬は付け加える。朱鷺羽も欠席か。あいつはもうちょっと真面目でいると思ったんだが。
しかしすっかり忘れていた。そう言えば文芸部自体は変わってなかったな。頭が鈍ってるのかもしれない。多分これが五月病なんだな。
「じゃあさ、私は何か出来ることがあるのか？」
「……やけに積極的だけど、本当に晴希？　偽者？」
「偽者言うな」
お前の張っているレッテルはどれだけ強固なんだ。もっと柔軟に生きろ。

「状況が状況なんだ。ま、お前には分からんだろうがな」
「うん、分からない」
開き直るな。
「それで、どうなんだ？」
杭瀬は一応これでいて賢い奴だ。こいつに訊いて損はないだろう。
「どうなんだって、晴希の持て余している――」
「性欲がどうこうの話を女子高生がするな淫売（いんばい）。この状況で私が動けるかって話だ」
「今の晴希の発言の方が女子高生とは思えないけどね」
「……微妙に正論を言うな」
非常に相手にしづらい。相手が言っていることを否定出来ないと言うのは辛いな。
「微妙じゃなくて正論。……それで、晴希は一応動ける、と思う。私以外の文芸部員と接触しないなら」
「……大丈夫なのか？」
あまりにも拍子抜けした答えだったので、私は思わずそう訊き返してしまっていた。
「争いの中心の半分は晴希を担いでる。目立つことをしない限りそう滅多に手も出せないの。確定的に絶対」
「なるほど」
私は秋津派だろうが内藤派だろうがこの状況だと敵と見なしてたが、そういう考え方もあったな。それで確定的に絶対って何だよ？
「それで晴希、この無口で恥じらいのある私に全てを任せる事を少しは躊躇（ためら）わないの？」
「誰が恥じらいあるんだよ。前にあのデートのビデオ見せてもらったら、あらゆるシーンの背景にお前が映ってたんだからな。パンダマンかお前は」
「きゃっ／／／／／／／（ななめななめ）」
「その頬染めてるみたいな記号は口に出して言うなよ。というか何だその棒読み」

私は嘆息(たんそく)して言った。

まあ正直、話相手に杭瀬がいるのが嬉(うれ)しいと言うのは秘密だ。言ったらあいつは調子に乗る。確定的に絶対。

するとここで、休み時間の終了、朝礼開始五分前を告げる鐘が鳴った。私と杭瀬は教室に戻る。ただでさえ変なことで目をつけられている私なので、時間に遅れて浮いてしまうようなことは出来れば避けたい。

廊下(ろうか)に出ると、また慣れない視線に取り巻かれるのが厄介だ。しかしそれを、杭瀬はまるで別次元にいるかのようにすり抜けていく。全く、似非(えせ)無口キャラはいいもんだ。

あいつには分からんだろうな、今のこの私の苦心なんて。

第三十五話　援軍要請之理

世の中は大まかに分けて二つ……いや、二つ＋αの人間に分かれる。

それは男と女（そして曖昧な性別）だったり、勝ち組と負け組（そして仙人）だったり、右利きと左利き（そして両利き）だったり――場合によって基準は様々。だからこそよく使われる表現なわけで。

そしてそのうちの一例として、積極的な人間と消極的な人間（そして……ああ、これは二つでよかったな）にも分かれる。なお当然ながら私は後者だ。そりゃもう最悪でも人並みには消極的だ。

私がわざわざこんな長ったらしく説明し、言いたかった事を二秒で説明するならば、とどのつまりその消極的な私が自ら動かなきゃならんほどのプレッシャーがあるって事だ。多分二秒超えたな。

と言う事で、私こと秋津晴希は可能性を見出だすべく動いた！

……おかげで少し気が緩いで授業が受けられなかったが。だがそんな事は無問題、過去を省みたら人間嫌になってしまうものだ。積極的思考と言うのは人類の進化に則った物であり、やはり悩みすぎると禿げる。それにどうせ緩まなくてもかえって授業は受けられなかった。妙な視線は授業中にも消えないわけだから。

そうさ、学生ってのは意外と緻密繊細なものなんだ。中には万華鏡を覗いただけで吐き気を催す生徒もいるはずだ。未だに学校では大便に決して行かない生徒もいるかもしれない。ロリコン呼ばわりすることを怖れ、十分焼けていない焼肉を食うようなことは絶対にしない生徒も、もしかしたらいる。十代の若者はデリケートだからな。

そんな回想から戻ってきて、今は昼休みの時間。実に日常的な風景……というわけでもなかった。具体的な違いは述べられないが、これは多分……いや絶対視線のせいじゃなかろうか。

そんな私には目的があった。同じクラスでいて文芸部ではない、ある男子生徒の席。それにしても昼休みは長い。昼休みの存在が特別なのは最早世界の意思が決めた常識だな。この時間学校は一つのエデンとなる。……私のような場合を除いてだが。

その特別な時間――約３０分程度の休暇を学生たちは様々な事に充てる。

ある者は未だに飯を食っていて、ある者は元気なことにサッカーボールを持って人差し指の上でくるくると回しながら友人たちと校庭に行ってしまっていて、ある者はこれまた別の方向で元気なことに二次元の魅力について熱弁していて、ある杭瀬（くせ）はへんちくりんなタイトルの本を読んでいて、また誰だか知らんがある者はわざわざ私の監視に充ててくれていて。

こういうデータは文部科学省とかが持っているかもしれない。出来れば昼休みの時間を監視に充てる生徒は１％もいないで欲しい。

そんな中で一人の生徒――大柄で嘉光（よしあき）みたく気さくなイメージの男。映画のジャイアンみたいなの――は窓際の席に座り、机の下で携帯ゲームをしていた。

おい見えてんぞと言いたくなるが、実際の所は見つかろうが無問題だから下に隠すこと自体が無駄なんだが。

何か意味があるのだろうか。シャイな奴って訳じゃないだろう。となれば宗教上の理由で晒せないとか、机の上に置くと化学反応が起こるとか。

それでもこちらから近寄ると顔を上げて応対してきた。ご丁寧にイヤホンとか装着しておきながらよく気付いたな。山勘か、はたまた覇気（はき）でも感じ取ったか。いや、私が持ってるかは知らないけどな。覇気。

「どうしたよ時の人？」

「どうしたってな……」

「すげぇ引っ張りだこじゃんかよ。これでみんなのアイドルだな。かっけぇよ！　憧（あこが）れるぜ！」

「なんて嫌なアイドルだ。冷やかすな。こっちは修羅場だぞ。おい何笑ってんだ。ああむかつくな、くそっ！」

と、と、と言う事でっ、私こと秋津晴希は可能性を見出だされさんと動いたっ！

……大丈夫かこれ？　秋津さんは非常に心配だ。

「それはそうと、頼みがある」

「お？　何だ、須らく言ってみろ」

携帯ゲームを中断した男子生徒――幡野克剰は笑いを堪えながら面白そうに聞いてくる。当然私は笑えない。

「お前確か、新聞部だったよな？」

新聞部――先日私を部室に拉致した因縁深い相手だ。と言っても現在文芸部と同盟を結んではいるのだが。

新聞部員達は全員眼鏡をかけている。これは偶然とかではなく、そういうルールらしい。現に今幡野は眼鏡をかけてはいない。

また新聞部員は私の見る所、どうも頭のネジが少しばかり緩んでいるように思えて仕方ない。「馬鹿には見えない服」なんて物に出会ったら、多分あいつらは「自分たちが馬鹿だから見えない」とでも言うんじゃなかろうか。下手すると嘉光以上に残念な奴らだ。

またこれはあくまで私の推測なのだが、そのあれな頭を誤魔化すために「眼鏡ルール」があるんじゃなかろうかと思う。

そして部長の仁科由宇さんには、他人に水道水を勧めるという突飛極まりない交渉術がある。一体それでどれだけ交渉を成立させてきたんだろうか。まったくもって不明だ。

……ま、前回それに救われたと言うのは否めない。真に残念ながら。誠死ね。

「馬鹿言え、俺は新聞部じゃない」

「いや見たからな？　あの時お前が新聞部室にいたの」

あの時とは前述した、私が拉致された時の事。新聞部との接触は

他にはゴールデンウィークの時の、思い出したくもない嘉光とのデートぐらいだ。なんだ、いい思い出が全くないじゃないか。

まあそんなわけでギブ&テイク。どちらにしろ同盟なるものがあるんだ。手助けくらいしてくれるよな？

にもかかわらず。

「……やなこった」

目元に微(かす)かな笑みを浮かべた幡野の答えはこうだった。

……はあ？

第三十六話　ハーバーとオストワルト

いや全く、呆然唖然とするしかなかった。

文芸部員である私が困っているのだから、新聞部が手を貸してくれるくらいはいい――いや、是非とも手を貸すべきである筈だ。

それなのに一新聞部員に過ぎないこいつから出てきた言葉は「やなこった」の一蹴だ。こんなの誰が納得できるだろうか、いや、誰も納得出来やしない。

「いや待て、『駄目だ』ならまだ考える余地があったが、『嫌だ』って何だよ！」

我を取り戻し、慌てて私は反論する。

幡野は半分シリアス、半分笑みの器用な表情で答えた。

「そりゃお前、こんな面白い……大変な事、俺らが手出せるもんか」

「おい今面白い言ったよな？　訂正の余地が無いほどはっきり言ったよな？」

「そんな状況をどうにかするなんて俺らにはめんどくさい……荷が重過ぎるっての」

「おい今度はめんどくさい言ったよな？　これまた訂正の余地が無いほどはっきり言ったよな？」

やはりただの惰性と好奇心だった。……お前はそれでいいかもしれんが、私はそれじゃ良くないんだよ。

「いい加減にしろ」

軽く、それでいて私が出せるだけの殺意を込めて言葉を放った。

「私は嫌でもやれと言ってるんだ。これはお前の好き嫌いじゃない。単純に義務の話だ」

「すまん……俺、他に付き合ってる子がいるんだ」

「……この期に及んでその口は何のジョークをほざくんだ？」

そう言ってやると、この野郎も流石に反省し――

「あーはっはっはっは！」

――なかったようだ。くそ、その笑顔が憎たらしい。そしてうざったいぞ。

「やれやれ、どこにでもいそうなある新聞部の一員こそが天下一純粋であるというごく単純な摂理さえも人は覚えちゃいないのか。狂った世界だ」

確かにとち狂っているな。多面的な意味で。

「百歩譲ってそれを認めたとしても、純粋さが時に悪となるというのも覚えておいた方がいいぞ。道徳の授業でもあまり習わんだろうがな」

「すごく反省しているのに（笑）」

「ここまで誠意の無い反省は稀に見る」

というか、反省じゃない。

「日進月歩、切磋琢磨、血の滲むような努力の結果として人間いじりに特化した厨性能を手にいれたんだよ（笑）」

「なんて迷惑千万なコンセプトの新人類だ。しかも誇らしげに」

「そうだ、この力を持ってすれば非現実が現実になる（笑）」

「勝手に意味も無くダークサイドに落ちるな」

両の拳をグッと握り締める幡野。お前は涼宮ハルヒの如く世界を引っ掻き回したいのか。モブキャラの分際で。

「これからは『チートのハタノ』とでも呼んでくれ（笑）」

「天地が崩壊しても呼ばない。そして（笑）をやめていい加減に話を進めさせろ。シャーペン突き刺すぞ」

「それは困るな」

一転。思いつめた表情の幡野。何か事情があるのだろうか。「何が」と私は訊いてみた。

「尻にシャーペンを突き刺されるというのは困るだろ、そりゃ」

そこだったのか。しかも誰も尻とは言ってないのに。

「……まあいい、ちゃんとやれ」

実は尻じゃなくて首筋で一撃必殺狙いだったことも、まあいいだろう。

しかし尻を突く拷も――処罰も良さそうだ。ただそのアーツの代償にシャーペンが消耗品になるというのが大きな問題か。

「わかった。自重する。サーセンw」

まあ――よくないな、これは。

「いや、草も生やさないでくれ」

「はあ？　草なめんな！」

《楽》→「草について触れる」→《怒》。どんなメカニズムだ。

新手の化学反応か？　お生憎様、私はハーバー法もオストワルト法もよく知らんのだが。

「いつ誰が馬鹿にした」

「いつもそうやってペチャクチャと卑怯な手を！　そうやって詭弁を吐いてばかり！」

「いつもっていつだよ！　私がいつどういうプロセスをもって何を騙――」

「文芸部屈指の腹黒キャラが何言ってんだかな！」

言い終わらないうちに返された。腹黒ってのは嘉光が勝手に言った事なんだが、ちょっとカチンとくる。いかんいかん、冷静になれ。

そうして私が思考している間に、再び幡野が喋りだす。

「秋津……思えばお前は昔からそうだったな」

「お前昔の私なんて知らないだろ」

確かに物心ついたときから私は歪んではいたが。ついでにその頃からひ弱ではあったが。

「イメージだイメージ。オーラを見れば分かる」

「オーラなんて見えないだろ。出鱈目はお前だ」

「そんなあなたに、このパワーストーン。今ならたった２０万円で、この騒動が――」

「収まらないから後でその小石を捨ててこい」

私の真摯な突っ込みに、幡野は――

「んだと！？」

逆ギレした。

……皆さん、これが現代のキレる若者でござりますよ。

第三十七話　詭弁論の衝突

「とにかく騙しすぎだろ！　その腹黒とか、見た目と口調と性格で男かと思ったら実際は女とか、そこらへんの擬態する昆虫より騙してらあ！」

「おい糞新聞部員、お前はこの私をナナフシか何かだと思っているのか！」

「ナナフシに罪はねえ！」

「んなこと分かってる！」

言葉と言葉のぶつかり合う、非常にどうでもいい戦い。こいつを下せば、新聞部の協力を得られる。

……って、なぜ私はこんなに熱くなっているんだ？　熱血漢属性など皆無だったはずだが、何かに当てられたのかもしれない。現に幡野も登場間も無くこうやってキャラ崩壊した。

……まあ、いいんだけどさ。だって若いんだもの。

「大体何だ、容姿云々を責められるのに慣れてはいるがそれでも傷つかんわけじゃないんだぞ!?　私は女だ！」

「はっ、笑わせる！　言葉にしなきゃ伝わらねえ事もあるんだ！」

「言動をオブラートに包まん奴は大人になれんぞ！」

「うるせえ！　現実から目をそらすな！」

「それお前だろ！」

「……ああ言えばこう言う、これだから最近の若者は……！」

「だからそれはお前だ！」

ここで息切れ。幡野も同じく猫背に肩を上下に動かしている。

ああ、どうして新聞部への要請一つでこんな一つの戦いを生み出さなくちゃならないんだ。どれもこれもこいつの身勝手のせいだろう。

不毛だ。不毛すぎる。このまま続けていたら、それが終わる頃には日が暮れているだろう。そろそろこれを収めるか。

……そういえば視線云々をすっかり忘れてたな。私は身の危険とかじゃなく、それより若干の恥ずかしさを覚えた。よく分かるぞ。耳たぶが熱いと言う事ぐらい。

でもまあ、ここまで行ったらいくら恥ずかしくてももう後戻りできやしない。出来る限り他の人からは視線を外しながらも、話を続ける事にしよう。中途半端な状態で引いたら末代までの恥になる。

阿呆は――やはりまだ落ち着かんか。

「二つだ。二つ言わせろ」

さっきのような大声ではない。なぜなら今の私は必死である以上に、集中している以上に、羞恥心にアラートを鳴らされているからだ。

「どうした！　変な詭弁は許さんぞ！　お前をそんな人間に育てた覚えは――」

「まず一つ。変な詭弁をほざいているのはお前一人しかいない」

「……ひょ？」

間の抜けた声を始めとして新聞部員の暴走に翳りが見え、大きな体躯も少しばかり小さく見えた。というかこの反応、本当に無自覚だったんだな。やっぱり新聞部は馬鹿だ。

私は容赦なく続ける事に。というより本来ただの頼み事で容赦しなければならないシーンなどこの十六年間まるで聞いた事が無い。だから幡野が泣こうが喚こうが頼み事を了承してもらわなければならないと言う事になる。

「哀しいね。人の欠点を指摘しておきながら実はそれが自分だったなんて」

「い、いや……これは、言う事とやる事の矛盾によるコントラストを――」

「はい詭弁一つ」

「うっ……」

辛そうだが、結局は自業自得だ。それに先ほども言ったが、本題は頼み事。頼み事をするのに容赦はいらない。言葉のキャッチボー

ル？　なにそれおいしいの？
「し……しかし、それはちょっとした冗談であって――」
「言葉にしなきゃ伝わらないこともある」
「……！」
　幡野の顔色、青く変色（ｐＨ１０）。
「現実から目をそらすな」
「……！」
　幡野の顔色、さらに青く変色（ｐＨ１３）。
「人は駄目でも自分はいいのか。なんて卑怯卑屈なやつなんだろうな」
　これが決定打になったのか、幡野は頭をストンと落として机に打ちつけた。
「くっ……話は……終わりか……？」
　暫く経つと幡野は、片腕で重い体を持ち上げ、そう訊いてきた。
「『二つ』あると言ったろうに。そんな鼻血を出しながら言われても話は終わらんぞ」
　どうやら今の机打ちつけで出血したらしい。少し――２．３３％ほど心配だ。
「今ので二つ目か……？」
　当然だろ。今の机で右脳か左脳でも損傷したか。
「二つ目が重要なんだよ。残念ながら今の私には残り時間で有意義にお前をいたぶって過ごす事は出来ない」
「残念じゃない。というかこんな状況じゃなかったらもっと言ってたのか」
　それはどうだろうね。あえて答えないでおこう。いらん事を言って他人を怯えさせるほど私はサディストじゃない。ちなみに何も言わずに怯えさせるくらいはする。
「なあ本当、勘弁してくれよ」
　さっきからまだ幡野的な何かが喚いている。いちいちうるさいな。
それが人に物を頼まれる態度か。

「酷いって。あんだけ言っておきながらまだ終わってないなんて」
「腹黒だからな」
「それを理由に出すか」
「腹黒だからな」
アンケートでも何も考えず全部「普通」で答えるくらいのものぐさだしな。返答は簡潔かつ的確が望ましい。そしてこれは、いかなる日常会話に関しても揺るがない。え？　これって口論じゃなくて私が一方的に甚振（いたぶ）ってるわけでもなくてごく普通の恥ずかしい日常会話ですよね？
「まあそんなことはいい。二つ目がそう――時間の無駄だと言う話だったんだ」
実を言うと先にこちらを言っておけばよかったという後悔もあるが、それは悔しいので言わない。
それにしてもやはり視線を忘れていた。うわ、皆こっち見てるな。どうせ杭瀬も……いないのか。どうせ図書室だろうな。きっと『プロジェクトＭＡＸ――うぐいすパンに青酸カリの中和性質を見出した男』とかの意味不明の過ぎる本を借りているんだろう。
「……ごめんなさい」
「いや、そんな土下座で謝られてもだな……」
さっきの勢いが嘘のように萎れている幡野。青菜に塩ってこういう事なんだな。お前は青すぎた。
「もうどうすればいいんだかさっぱり」
「開き直って普通にやれよ」
「ありがとう」
わざわざお礼する幡野。そして気付くと周りからなぜか巻き起こる拍手。あの重い空気はどこに行ってしまったのやら。妙な視線もなんだか和（なご）やかモードになっている。
ああ、馬鹿馬鹿しいが疲れた。この詭弁論、もう日本の国技に指定していいだろ。
「んで、本題は？」

「ああ、それなら――」

第三十七話　詭弁論の衝突（後書き）

ちなみに、うぐいすパンのエピソードは、閣下の母が大学の頃の、教授のエピソードだったそうで。

第三十八話　白米的理論

その昼休み、ほぼ同じ時刻。場所は変わり、ここは一年教室。

今年の新入生というのは何故だか不明だが曲者が多い。単なる「奇人変人」なら三年や二年にもいるが、一年はそれだけに留まらず、言うなれば「悪質」な生徒もいたりする。

この学校分裂という状況を生み出している理由の大きなもので、当然のごとくこの状況に便乗していた。

具体的にはこの状況を大義名分にしての個人的闘争――いわゆる喧嘩。そしてお互いの状況がわからないという閉鎖的状況を利用した博打などで、挙句の果てには全く関係のない債権を売りつけようとする者までいた。もしかすると、これが社会の縮図なのかもしれない。

そして何より凄いのは、そんな混乱が一切教員に知られていないと言うこと。

勿論文芸部を火種に何かが起こったというのは既に知られていて、それについて教師は渋々（しぶしぶ）見て見ぬ振りをしている。これについては教員に金が流れているという説もあるのだが。

だがしかし、二次的な事態についてはさっぱり知られていない。情報が厳重に隠蔽されている上に、たとえ知られても「少しばかりおかしな生徒たちだが、さすがにそれは無いだろう」という考えに帰結する。当然ここでの間違いは「少しばかり」という点だ。

まったくもって世も末と言った所である。

そんな第一学年の一年Ｂ組教室にて、一人の女生徒が溜息をついていた。ポニーテール、スレンダーな体つき、強い眼光、他人を近づけないようなオーラ。

「椎ちゃん、元気ないけどどうしたの？　そんな晴希先輩みたいに溜息ついて」

同じクラスである朱鷺羽みのりが溜息をついていた少女――守坂椎乃に訊いた。

晴希先輩、という言葉にクラスメイトたちの視線が向けられ、守坂は朱鷺羽に視線を飛ばす。それを朱鷺羽が感じ取ってくれた所で、守坂は口を開いた。

「いや、母さんと喧嘩して」

そっけなく守坂は答える。一応これでも彼女なりに親しみを込めてはいるのだが、それを感じ取ってくれる人間は身内も含め数えるほどしかいない。当然ながら朱鷺羽はそのうちの一人だ。

「ふーん、珍しいね。椎ちゃんあんまり喧嘩とかしなさそうなのに」

「いや別に、そうでもないんだけど……」

そう言ってまた溜息。

「嘘だぁ。椎ちゃん大人しいじゃん」

本当に意外、といった感じで朱鷺羽が口を開ける。

その後、朱鷺羽は「あっ」と何かに気付いたように再び口を開ける。

「……そういえば椎ちゃんの家って厳しいんだっけ……」

「そう。だから卵焼きが和食か洋食かで口論になって……」

「いやそれは……まあいいや」

その答えに、朱鷺羽はかなり驚いた。なぜなら、喧嘩の内容が思いのほかどうでも良かったからだ。

ただ、あくまでそれは自分の基準での話だ。この世界に常識などあったようでないもの。

守坂にとってはそれでも大変大きい話なんだろうなだと思い、朱鷺羽は口をつぐんだ。

「まあいいや。早くお昼ご飯を食べようよ」

「ああ……」

テンションの上がらないまま守坂は答える。そういえば今は昼休みの時間だった。

朱鷺羽は鞄から弁当を出し、守坂はビニール袋に包装された惣菜

パンを出す。朱鷺羽はその事に僅かながら疑問を覚えた。それは――。

「あれ？　椎ちゃん今日はお弁当じゃないの？　椎ちゃんご飯好きだったよね？」

朱鷺羽の言う通り、守坂は相当な米至上主義の人間でありながら今日は豊富な米を湛えた弁当ではなかったからだ。

「言ったでしょ？　母さんと喧嘩したって」

「へえ」

実を言うと、先ほど朱鷺羽が守坂の事を「元気がない」と察した真の原因は母親との喧嘩自体にはなかった。

詰まる所はただ単純。米が口に入らないと言うこと。

守坂椎乃と言う人間にとって決してそれは「ご飯がないならパンを食べればいいじゃない」などというわけにはいかず、仮にそんなことを言う不届き物がいたら一秒間に数十発蹴っている所だった。その辺り容赦はしない。

「それはそうと、秋津先輩の事だけど」

声を出来るだけ殺して守坂は話を告げる。流石におおっぴらにこのクラスメイト達に聞かれるのは敵わなかった。

「晴希先輩……大丈夫なのかな……？」

文芸部二年、秋津晴希は朱鷺羽みのりが想いを寄せている相手だった。

晴希の顔を、あの日以来朱鷺羽は目にしてはいなかった。

というのも当然の事。晴希はこの騒動の中心人物であり、その身は本人の望まない取り巻きによって守られていたから。

朱鷺羽も事件の主犯格ではあるものの今こうして「秋津晴希と同じ文芸部にいたただの一生徒」として存在していられるのは確実に文芸部の働きのおかげだろうと守坂は推測し、それは間違ってはいなかった。ひとえに文芸部参謀・一宮敦次の力である。

「文芸部とのコンタクトは出来る？」

「え？」

「だから文芸部とのコンタクトを出来るかと」
聞き逃していた朱鷺羽に、守坂は声を殺してもう一度繰り返す。
「この事態をどうにかするための力になりたい。だから……」
親友の顔を見据える。朱鷺羽は「な、なに……！？」と動揺していた。確かに彼女は同性愛者という立場ではあるものの、その対象は今のところ晴希一人なのだ。親友との間にフラグなど不意討ちにも程があった。

「ご飯、分けて……ください……」

「え！？　そっち！？」
目の前にいる朱鷺羽にすら語尾がほとんど聞こえないような小声で、守坂は頼んだ。
守坂椎乃から米を奪うのは、地球から酸素を奪うのに等しい鬼の所業だった。

守坂は、朱鷺羽の弁当の米をよく噛み締め、十分かけてゆっくりと平らげた。
朱鷺羽によると、その時ほど嬉（うれ）しそうな守坂を見たことは今までなかったという。

第三十九話　男の聖典

帰宅して、今は部屋の中。机の上には面倒くさい問題集とノート。ノートの端っこには福本マンガみたいな顎が尖ってて汗水垂らしてる顔の落書きが描きこんである。こんなの誰が描いたんだ。私か。

学生と言う立場上、たとえ学校で不必要なプレッシャーに苛まれている私といえども最低限の勉強をしなければならない。だるいな、ゆとり教育って冗談だろ。

流石に例の視線を学校の外にまで感じる事はないから、ある程度気が楽な所はある。ああ、勿論の事、考えうる最悪の情況と比較しての話だぞ？

まあいずれにせよ四六時中という訳ではないのだから、嘉光のような迷惑な悪霊か何かに憑かれたりしているわけではないだろう。

非常に『疲れて』はいるが、そんな事は言うまでもない最早日常茶飯事だ。男女でキャッキャウフフと戯れているリア充どもとは住んでいる世界観の構築からして違っている。こちとら毎日が現在進行形でXファイルだ。アハハ。

それはそうと。

杭瀬に文芸部のことは頼んだし、幡野には新聞部のことを頼んだ。ああ、そうだ。幡野との話のあの後の事を少しばかり説明させてもらおう。

「んで、本題は？」

「ああ、それなら……いや、さっき言ったよな？」

幡野は本当に知らないといった感じで首を傾げている。そうか、そんなに詭弁論に夢中だったか。……いい加減にしろよ。

「お前ら頭のいかれている新聞部の挙兵だ」

で、私はこんな感じで説明。周りに聞こえないように声量も抑えたし、人に物を頼む態度としては我ながら合格だと思う。花丸つけていいだろもう。

にもかかわらず。

「ああ？　いかれてんのは新聞部じゃなくて新聞部員だぜ？」

思いもしない反論を食らった。反論になってるかは甚だ疑問だが。

「……いかれてるってのは否定しないのか」

ついでに、まだ鼻血が垂れてるぞ。ティッシュを使えティッシュを。持ってきてないならせめて指で抑えててくれ。分かってるとは思うが穴を塞ぐんじゃなくて上のほうを摘む感じで抑えるんだぞ。

「とりあえずそう言う事だ。是非ともいかれているお前らの協力を期待している」

「まだだ」

「……お前はいちいち従わないな」

「抗いたくなる年頃なんだ。文芸部だって社会の束縛と戦ってるんだろ？」

誰が社会の束縛なんかと、と反論しようと思ったが、あながち間違っていないかもしれない。……現状は非常に残念な事になってるがな。

「で、どうしろと？」

「はっ、そんなの決まってんだろ！」

面倒臭すぎるうざったいテンションの幡野が一拍置いて、そうして続ける。

「対価だ対価！」

……？　対価？

「人は対価を支払わないと何かを得られないんだよ！」

「……どこの錬金術師だよお前は。

それにだな、さっき私が同じような話をしただろ？　ギブアンドテイクと。あれか？　お前は英語が分からんのか？」

「秋津、お前は本当に浅はかだな」

幡野が意味もなく侮蔑の視線を向けてくる。その言葉、お前にだけは言われたくなかったよ。後その目も。

「これは新聞部への依頼でもあるが、同時に俺への依頼だったりもするんだぜ？」

「チップをやれと？　残念ながらここは日本だぞ」

「なに、金じゃなくてもいいんだぞ？　さあどうする？」

本当、どうするんだよ。こいつ全く私の話を聞いてない。

……折れる、か。

「仕方ない、だったらあるぞ」

「おうなんだ、言ってみろ」

それは、確か私が中学を卒業した時に友人から貰ったものだった。絶対に出してくることがないだろうと思ったあれを、まさか今出してくることになるとは。

「エロ本だ」

言った瞬間、周りがざわついた。

……いや、私も捨てようか迷ってたんだよなあれ。よかったよかった。

ちなみに幡野はと言うと――。

「ヒャッホオオオオオイ！」

非常にご満悦の様子だった。

「おう、それなら了解だぜ！」

「ああ、後払いだからな。欲しかったらさっさといかれてるお前の頭で最善を尽くして私に貢献してくれ」

「よっしゃ、早速今日から動くぜ！」

「ああ、頑張れよ」

と、こんな感じで幡野の協力を得た。モブキャラなんてチョロいもんだな。

というわけで、これで暫く私のすべき仕事はないわけだ。

言い換えれば、私は現状にて勉強以外ですべき事を全て終えてしまった事になる。……まあ、それでここまで達成感を感じられないのは珍しいが。

なんて私は思っていたのだが、ここで私の携帯電話が振動する。どうやらメールが来たようだ。

一体誰からなんだ。こっちが誰かも知らない、体を持て余しているらしい人妻さんからのメールならごくたまに来るのだが……。

第四十話　第二期の事

『どうも、秋津晴希さん。
あなたの境遇はすでにこちらで聞き及んでおります。
さて、早速ですが、今から学校に来て下さい。
来て頂けない場合は、かつてあなたの孕ませた女性の事を公表するなどの強行的措置を取らせて頂きます』

メールの内容はこうだった。ちなみに送り主は不明。でありながら私の本名が記されている。
いやまさか、これは……。
「……なんだ一宮さんか」文面から一瞬で理解した。
一見ただの脅迫状のようにしか思えないような内容にもかかわらず私がこういう反応で済ませてしまうのは、その強き信頼ゆえだろうか？　それとも単に私の感覚が致命的に麻痺しているからだろうか？　……どちらかと言うと後者かもな。
そもそも私は生物学上ＸＸの女性であって女を孕ませるなどありえないのだが、それでもきっとあの一宮さんの事だ。根も葉もない噂を立てるなど赤子の手をひねるようなものだろう。
……現に自分で教えたこともない私のメールアドレスを握っていたくらいだしな。先輩ながら才能の無駄遣いも甚だしい。
「……これは酷い。行くしかないのか」
しかし脅迫されては敵わない。私は制服に着替え、外へ出る準備を整えた。
いや、結果的に早く終わりそうならいいんだけどさ。今からの用事じゃなくてこの騒動が。それならちょっとした犠牲も仕方ない。
ちなみに私が女を云々と言うのはちょっとしていないので無視は出来ない。世の中には何よりも大切なものと言うのが存在するんだ。

「こんにちは、秋津さん」
ところで、私が夜道を歩いていた時、そうやって微笑を浮かべて話し掛けてきた奴がいた。纏っている雰囲気はなんというか……微妙。一体誰だ？　変質者か？　このいたいけな少女に何をすると？
まあ不思議と悪い奴には見えないのだが。ちなみにやばい奴には若干見える。その辺りの勘において私は絶対的な自信があり、そして避けた方がいいと読めていながら避けられなかったりする。
私がその悪役的なオーラの感じられない笑顔を見ながら頭に疑問符を浮かべていると、「僕ですよ、僕」と相変わらず笑いかけながら言う。ああ、嘉光や幡野のおかげで気付かなかったが、本来笑顔って向けられてもむかつかないもんなのな。
あー……ところでこいつ、確かに見た事ある気がするぞ。確かこいつは……。
「……二期の第五話に出てきたアニメオリジナルの……」
「誰の事ですか。それに第二期ってなんのアニメですか」
ああ、勘で言ってみたら間違ってたし。それに怒られたし。いい加減にしろよおい。誰がそんな事を吹き込んだんだ。私か。
「菅原ですよ。菅原卜全」
「……ああ、菅原な。覚えてる覚えてる」
どうやらそいつは微妙さにおいて他の追随を許さない文芸部の後輩、菅原卜全だったようだ。
なぜか文芸部室内で調理実習でもないのに蝉の羽とかそう言ったものが入ったゲテモノ料理の作成に勤しみ、当然の如くそれは私たちに振舞われる（本来凄く気持ち悪いはずなのに、味に別状はない。逆に怖いな）。にもかかわらず仕方なく試食してやっているのはその強き信頼ゆえだろうか？　それとも……もうどうでもいいよな。
まあ蝉云々については杞憂としておこう。仮に問題があったら一

宮さんが既に気付いてくれてるはずだし。……さて。
　こいつとあまり話をしたりはしないのだが、その微妙さのせいで確かに記憶に残ってはいた。最も本人からしてみれば実に嫌な記憶の残り方だろうが、人と人との馴れ合いなんて須らくそんなものだ。
「……秋津さん、絶対忘れてましたよね」
「何を言う。そんなわけがないだろう」
　秋津先輩は後輩には優しく、嘉光には厳しいんだよ。その辺り重要な？
「まあいいですがね」
「そうだ、お前が誰だったかなんて過去の話、思い出しても哀しいだけだ……荻原」
「菅原です。前にも他の人にそんな間違いを受けましたが」
　哀しいですね、と菅原。それは失礼した。私は適当に言ってみただけだが、まさかそんな間違いをする奴が他にいるとは思わなかった。一体どういう流れで間違えたんだろうか。もしかしてそいつは相当なアホの子だったのか？
「それで菅原、お前はどうしてこんな所にいる？　夜のお仕事か？」
「そんなわけ……ああ、その通りでした。すいません」
　その通りだったのかよ。自分の勘の鋭さに私もびっくりだ。
「まあ、あまり大きな声では言えない仕事ですけどね。だから内緒にしておいてください。頼みますよ、秋津さん」
　菅原は声量を抑えながら言った。どうやら真っ赤な嘘という訳ではないらしい。
「分かったよ。けど気をつけろよ？　女を孕ませたとかそういう噂が立つ可能性がなきしにも非ずだ」
「……どうしてそういう誤解に至るんですか」
　菅原が小声でよく分からない事を言っていたが、まあいい。秋津先輩は後輩には優しいんだ。
「しかし大丈夫なのか？　法律的に」
「いえ、それはもういいですから」

「いや、よくない。作者の手が後ろに回ったらどうするつもりだ」
「言っている事がまるで杭瀬さんですね。ここ数日で何かありましたか」
杭瀬みたいとかは余計だが、何もかもありまくりだ。こっちはようやく嘉光から解放されたはずなのに全然そう思えない。寧ろ下手に心配誘ってるようで自由なんてありゃしない。くそったれめ。
「嘉光がいなくても、私は文芸部なんだよな……」
「当然です」
私の呟きに、菅原は変わらない笑顔できっぱりと言った。分かってるよ。大体私が嘉光のことしか考えてないなんてわけがない。あんなの私に被害がなければどうでもいいんだよ。一応信頼といったものはあるのかもしれないが。
学校が見えてきた。夜であろうといつも通っている道なので、もはや私達が迷うはずもなかったな。
ん？　私……達……？
「……菅原、お前夜の仕事に行くんじゃなかったか？」
「ですから学校に行くんです」
「さっぱり分からん」
「お互い様です」
どうでもいい話をしながら、私達は何故か……おそらくは一宮さんによって夜にもかかわらず開かれている校門を潜った。
分からないのはお互い様……そうだよな。お互い分からない事ばかりだ。嘉光の事も、杭瀬の事も、他の文芸部員の事も……そいつらの境遇も考えも、私には分からない。逆もまた然りだ。
それでも——そんな曖昧な人間関係でも、今みたいな閉塞的な状況よりは幾分かマシだ。
だからこそ、こんな馬鹿げた騒動はさっさと終わってほしいと願う。強く願うよ、私は。

第四十一話　偽りのスパイラル

校門を潜り抜け、暗い道を更に進む。

「夜のお仕事をしにいく」などともし警察に聞かれたら補導されてしまいそうな発言をしていた菅原だったが、しかし今も私についてきている。やはりたとえ如何わしい響きの用件でも、目的地は一見縁が全くなさそうに思える学校に違いないらしい。社会には色んな仕事があるんだな。

こいつの言っていたそれが果たしてどういう意味だったのか、いずれ五世紀くらい後に私も知る時が来るのかもしれない。問題としてあげられるのは、おそらくその頃にはもう冬眠技術でも用いない限り、私が生きているはずがないという事だ。生まれるのが早すぎたな。

まあいいだろう。こいつのキャラがつかめないのは今に始まった事じゃないんだ。ええと……菅原。

それで、更に進む。どうでもいいが学校のどこに来いとか細かい場所聞いてないぞ。

「菅原」斜め後ろに顔を向けて言う。

「なんです？」

「なんだったらお前の仕事とやらを……いや、やっぱりいい」

「だからなんですか」

私は急いで言おうとした言葉を止めた。危ない危ない。菅原の仕事……夜の仕事というからにはおそらく良くて夜王、悪くて遊び人といったところだろう。

ちなみに偶然か必然か、実際の遊び人は某ＲＰＧとは正反対に賢者にはならないという仕組みになっている。何が言いたいのかと言うと、要するに遊び人としか思えない嘉光君は死になさいという事。こういった結論に至った時って、何だか数学的な美しさを感じるよな。

「よく来たじゃんか晴。それに蝉屋もいやがる」
『大曽根さん！』
二人して声のした方――なぜか下駄箱の目の前にあることで有名な禿頭の銅像の方を向き、その人の名前を呼ぶ。ご丁寧にも真っ黒な学ランをホックまで締め、同じように真っ黒な短髪に縁の薄い眼鏡という一見真面目な学生――でありながらその本質は誰よりも混沌を尊ぶ先輩、大曽根誠文さんが八重歯を見せながらこちらにグッと親指を立てていた。ちなみにその行動のモットーは「混沌のない人生なんて尻尾のないエビフライみてえなもんだ」だとさ。私はそんなもの食べた事はないのだが、どうやら大曽根さんは名古屋人志向だったらしい。
大曽根さんがいるならとその辺りを見回すと、当然のようにあの人もいた。
「一宮さんも……勿論いますよね」
きつそうな目つきに一部が淡く染まった黒髪、大曽根さんと並び文芸部を統率している立場で近頃「参謀」の名で呼ばれるようになった一宮敦次さんだ。ちなみに読心術と言う特技があり、そのチートじみた読み性能にも定評がある。別に場所が学校と言うだけだからと考えたのか学生服ではなく私服姿で来たようで、私達の姿を一瞥するとそのまま携帯電話に視線を落とした。というか今更な話だが、どうして私含め制服なんだろうな。まあ学生服は学生の特権だからと結論付けておくか。うんそうしよう。
そして、その二人だけだと思ったら、
「晴希」すぐ横から声がした。「ああ」と返事をしておく。
声の主は杭瀬だ。私たちと同じように制服を着てきていた。キャラ的には正解だな。
一見こいつの存在感は全くといいほどない。一見と言う言葉の用い方がおかしい気もするが、おかしくならないのが杭瀬なんだよな。ちなみに大曽根さんにも「似非無口」と呼ばれていたりする。
それにしても三年生二人とこいつの組み合わせは珍しい。じゃあ

誰といるのが自然かと問えば、これが私になってしまうというおかしさだ。

「あー……」菅原が恐る恐る口を開ける。「よくわかりませんが、僕はこれからバイトがあるので――」

「おい待て蝉屋」

呼び止めたのは当然大曽根さん。気持ちは痛いほど分かる。制服で学校まで来て「バイトです」なんていう奴は何だかなあ……。

「それなら承知してるぜ。呼んだのは俺だしな」眼鏡を上げながら菅原に説明をする。

……あれ？　何ですかその反応？　置き去りなのは私だけですか？

大曽根さんと菅原がよく分からない会話をしていて丁度よく私が置き去りにされていた所に、

「晴希先輩！」

またもや別方向から聞き慣れた声が聞こえた。ああ分かっている。朱鷺羽だ。どうやらこいつは私服みたいだ。どうでもいいがこんな感じの私服――というかスカートを見ると羨ましく思える。自慢じゃないが下の私服なんてズボンしか持っていないもん。

「晴希先輩！」また朱鷺羽が呼びかけてくる。「はいはい」と私は適当に相槌を打っておいた。

「晴希先輩がいなくて私辛かったんですよ！　だから会えると聞いてここに……」

「ああ、悪いな朱鷺羽」

そうだったなと納得し、その後輩の頭を撫でてやる。本来こういった行為はあらぬ誤解を招きそうで嫌だが（というか向こうは最初からそのつもりだが）、まあ朱鷺羽なので許そう。同じ文芸部でありながら本来会えるはずの相手に数日とは言え全く会えないんだからそりゃ辛くもなる。

……だったら嘉光はどうなんだ？　とも疑問。あいつは辛いと思っているのか、それとも……思っちゃいないのか。いつか言ってた「お前が違う世界に行ってしまっても、俺は絶対にお前を見つけ出

してみせる」なんて戯言は、本当にただの戯言だったのか。
もしそうだったら、甚だ呆れざるを得ないだろう。
「それよりお前は無事だったのか？　お前も内藤を（川に）落とした中心だったんだろ？」
「あ、それなら参謀先輩がどうにかしてくれたんだと思います」
朱鷺羽の発言後に向こうの方から「誰が参謀先輩だ」という一宮さんの声が聞こえてくる。なるほど納得だ。被害を私と嘉光だけに抑えられたのは、どうやら一宮さんのおかげだったらしい。結果的に私は被害をこうむったわけだが、それでも流石と言わざるを得ない。
「本当に仲がいいわね！」
更にそんな声が後ろから。そちらへ振り向くと、すらりと背が高く唇のきゅっと引き締まった制服姿の先輩がいた。
「……ああ、こんばんは、天森さん」
「どうしたの？　テンションが低いわよ！」
「こんな状況でテンションなんて上がりませんよ」
天森小枝さん。見た目はまともなのに言動がやりたい放題という、若干大曽根さんに共通しているような所のある先輩だ。しかし何故かその大曽根さんの相方である一宮さんにはあまりよく思われておらず、今も一宮さんはこちらを見たや否や「ちっ」と小さな舌打ちをしていた。……ん？　一宮さんが呼んだんじゃないのか？
「……まあいい、集まれ！」
一宮さんが携帯をポケットにしまい、この場の全員――私と杭瀬、朱鷺羽と菅原、大曽根さんと天森さんに呼びかける。この場に嘉光がいれば、まさしく文芸部の中心メンバーが完成する事だろう。いやいなくていいけどさ。
「これから、一気に現状を打ち破りに行くぞ」
そういうと一宮さんは、すぐさま全員に、的確に指示を出した。
それぞれの状況などはどうなんだとも思ったが、それはもうとっくに全員に訊いていたのかもしれない。ちなみにその指示、私はとい

えば……。

「秋津は新聞部に頼っていけばいいだろう。下手に動くな」

との事。立場が強いと色々大変なんだな。いやあ照れる……わけあるか。窮屈としか思えないね、例によって。しかもあれだろ？新聞部ってあの残念なのばっかりの……まあ文芸部が言えた事じゃないか。……まあかつて嘉光が死滅させようとした新聞部に頼ることになると考えれば、「ざまあみろ」なんて思えてくるからいいけど。

そしてこの後、九時四十五分ごろに帰宅。ちなみに家を出たのが丁度その一時間くらい前だったな。ああ眠い眠い。

その夜は酷い寝つきだった。毎晩私を苦しめていた気持ち悪い嘉光の幻影が見えなくなって、それでかえって眠れなくて。嫌なスパイラルだ、全く。

第四十二話　葛原水月の憤慨

……文芸部って本当、なんなのかしら？

って、最近切実に思うの。

いやほんとに、外野のわたし、葛原水月からしてみれば、どうもただの変な人たちの集まりには思えないのよね。

あんまりよく覚えてないけどちょっと前にお世話になった一年の子がいて、確か……萩原くんだったかしら？　いや、荻原くん？　うーん……顔は思い出せるんだけど名前がちょっと思い出せない……。まあいいわ。どうせ荻原くん（仮）で。

……あれ？（仮）ってなんかいたような気もするわね。じゃあ（株）で。意味はよく知らないけどきっと同じような意味でしょ。うん。

さて、じゃあ話を戻して。その荻原くん（株）を見て、それからわたしの彼らに対する認識は変わってしまったの。そう、あの部は――

――とてつもない変人の集まりだったって、そう思ったの。

「よおアホ」

……それで、人を馬鹿呼ばわりするのはどこの誰？　わたしはちょっと学校の成績が悪いだけなのに！　人の価値はあんな数字の羅列じゃ決まらないって分かってるでしょ？

「だからなんなんだアホ。またあれか？　電波でも受け取ったか？」

「またって何よまたって！」

結局その眼鏡をかけた一見真面目そうな男子生徒――大曽根誠文に、わたしは少しヒステリックながら叫んでしまった。周りの視線がもう「相変わらずだな」って言ってるように感じるのは気にした

くないけど。
　アホじゃなくて葛原、とも言いたかったが諦めた。二度あることは三度あるというか、彼にはその呼び名を修正する気がさらさらないみたいだし。
「っていうか電波って何！？」
「あれだ、おめーが今この時にも『組織』から送られてきているそれだ」
「そんな設定初めて聞いたわよ！」
「俺も最近知ったことだ。けど認めたくなくても認めなきゃ行けないことってあんだよな……」
「た、確かに……わたしもそんな気が――」
「まあ嘘だけどな」
「嘘ぉっ！？」
　いや、なんかもうすごくびっくりしたじゃない。このわたしをこけにするなんて……！　ああもうっ！
　わたしの横の席でいちいちちょっかいをかけてくる大曽根は今日も元気だった。もちろん悪い意味で。
　わたしから見た文芸部って、彼のイメージばっかりなのよね。あとは同じクラスで大曽根の友達の一宮敦次（いちのみやあつし）ってきつそうな男子くらい。いずれにしろ普通じゃない。
「ああもう、学生生活やり直せないかしら」
「留年しろっての。お前なら出来る」
　なにその言い方。まるでわたしが馬鹿みたいに。
「……わたしはただ、テストで毎回赤点取ってるだけなのに」
「よく三年までこれたな」
　偉そうに言う大曽根。きっと彼は三年間ずっとわたしのことを馬鹿だと勘違いしてるみたいだけど――。
「それであんたは人のことをどうこう言えるの！？」
「うんそりゃあもう」
　即答。同時に机の上に広げられる実力テストの結果表。わたしは

もうカッと目を見開いた。というか瞳孔を見開いた！
「学年……四位……！？」
恐ろしい点数だった。偶然でもこんな点を取るなんて……。
「インテリ少年なめんなよ。インテルも入ってるんだぜ」
「認めないわ！」
けどわたしは断固反対する。確かに大曽根は見た目はインテリっぽいけど言動があれだから、まるでキャラに合わないじゃない！
「こんなのは偽装よ！　耐震偽装！」
「諦めろアホ。っと、おう敦次」
散々わたしを馬鹿にした大曽根はわたしとの会話を中断し、教室の後方入り口に歩いていった。
わたしもそちらに目を向けてみると、そこにいたのは大曽根の言ったとおり一宮敦次。大曽根はそのまま「それじゃな、アホ」と言って一宮と話し始めた。
……まあいいわ、昨夜はテレビ見てて寝られなかったし、寝ようかしら。はあ、でも……
ほんとに大曽根はうざい。彼と知り合ったシチュエーションは今思い出してもムカついてくる。
一年の頃、運悪くわたしは学年ビリを取ってしまったわけ。仕方ないの。あんまりにも物理の参考書の寝心地が良かったからついっ！……ごめんなさい。ただ自分の運のなさに呆れてね。小学校の頃から今までの十二年間ずっといい点を取ってないってどういう運の悪さかしら。まあ過ぎたことをだらだらいうのもなんだから続けるわね？
それでその頃は夏で、エアコンの風がわたしの席に届かないで、すごい暑かったの。
でもわたしは小学校の頃によく見た、男子が下敷きでパタパタしてたのを思い出して、「これだっ！」って思ったわ。
これこそまさに運命――と思ったけど運命の神様は残酷にもわたしに下敷きを与えなかった。でもそこで気付いてしまったの。

だったらプリントか何かでパタパタすればいいじゃないっ！　ってね。

思わず脳に電撃が走ったわ。それにアドレナリンも分泌されたわ。思えばそれは、わたしの発想の素晴らしさに我ながら打ち痺れていたのかもね。まさにライトニング。……ところでライトニングってなんなのかしら？　きっと英語のライティングみたいなものかもね。

……まあいいわ。それでわたしは颯爽と机の中からプリントを出したわ。今のわたしは風とばかりに。

そしたら一人の男子が好奇の眼差しでこっちを見てたの。ああこの人はなんてミラクルをやってのけるんだろうって言わんばかりに。

……そこまではよかったわ。けどまさか――

そのプリントが運悪く成績のすごく悪い成績表だったなんてね。あ、当然数値の上での成績なんだけどね？　人の本当の良さって数とかじゃ表せないものだから。

だけど彼はそのわたしの成績を見て大爆笑。それ以降すごく話し掛けてくるようになっちゃって、わたしも惰性でここまで来て。

それは今思い出しても最悪の出会いだったわけで。

そういうわけだから別に彼とは男女の関係にあるわけじゃない。いわば彼からすれば遊び道具みたいなもので、本当に不快。

二年の内藤嘉光くんに愛されてる秋津晴希さんなんかは羨ましくてたまらないわよ。……まあ、今はちょっとトラブルが起きてるみたいだけど。

机の上に教科書を出す。当然用途は枕。

一宮の「大曽根、あれは失敗したものと考えてくれ」という言葉が聞こえたけど、その時わたしは何のことだかさっぱりわからず、そのまま眠りについた。

第四十三話　そして死んだ

正直言って、おかしいんじゃないかと私は思うんだ。

翌朝の教室にて、私はそんな風に考えた。

おかしいというのは嘉光（よしあき）の事じゃない。いや、確かにあいつのおかしさは屈指だが、もはやあいつにまともさ等というものは残されていないようにも見受けられるが、御自ら簀巻きになったまま川に飛びこむほどのマゾだが――今私がしているのは嘉光の話じゃない。しかしボロクソだな、嘉光。

嘉光の話でないとすればつまり私がおかしいと言っているものは自ずと絞られるわけで、文芸部諸君でもなく、新聞部諸君でもなく……すまん、人数的には全然絞れてなかったな。

とにかくおかしいのはこの騒動、その起因だ。

簡単に言ってしまえば今こんな状況になったのは、マゾの嘉光が阿呆みたいに体を拘束された状態で川に落ちていったのが第三者のあらぬ誤解により発展していった――こんな一連の流れが原因だそうだ。突っ込み所は色々あるだろうが、まあ私のいる環境はデフォルトでそんな感じなので承知してほしい。

だがそれらを差し引いても、普通それだけでこんな事態になるなんてのはありえない。たとえあんな文芸部であってもだ。

そういえば一年がどうこうと言っていたな。昨日の夜に朱鷺羽が言っていたが、一年がこの騒動を加速させているらしいとか。実際の中心は一年だとか同じような事を一宮（いちのみや）さんも言っていた気がする。けど――それだけじゃないと私は思う。

さてここで突然話が変わるが、諸君は物質の燃焼において必要な三つをご存知だろうか？　酸素と燃料と、そして一定の熱だ。一度点火してしまえば後は燃焼熱で賄えるが、少なくとも火が点くまではそういった一定の熱が必要になる。確かにこの騒動という名の火を大きくしたのは一年が中心だろうが、火種は一体どこから来た？

嘉光か？

「……まあいいか。そんなのは後から考えれば」

一つ溜息をつき、自分を諭すようにそう言った。とにかく私はこのままが嫌だからどうにかしようと考える。そこには一分の葛藤も必要ない。頭で考えるより先に体を動かせ。

「……ってか私のやる事って――」

つまりは全てあの仁科（にしな）さんのいる新聞部に任せるって事じゃないか。まあいいや、それで何とかなるんだったら。焦ったら駄目というなら私はそれに従うさ。

あとあれだな。邦崎（くにさき）。そういえばあいつの姿をここ数日見ていないんだ。まあきっと大丈夫だとは思うが。あいつは私と違ってそういうのには巻き込まれない人間だからな。文芸部とかと関係ないし。強いて言えば私のクラスメイトであり、好意を持っている相手が嘉光ってとこぐらいか。もしかしたら平行世界にでも行ってしまったのかもしれない。なんてね、そんなのに騙されるのは新聞部ぐらいで十分だ。

ん？　親友が心配じゃないのかって？　いや、あいつは腐れ縁ではあるが別に親友じゃない。だってあいつの方が私の事信じてないもん。

ふと杭瀬（くせ）と目が合った。ああ、なんか私は色々と疲れたから話さないようにしよう、と思って目をそらそうとした――所だったが向こうから目をそらしたようだ。……ん、いつもの似非無口キャラの杭瀬ならうざったいほど積極的に関わって来るんだが。ひょっとして先輩方の意思か？

……しかしあれだ、こう見ると何もかもが信じられなくなってくる。出来れば人間不信に陥る前に終わって欲しい所である。

と、いつの間にか我らが担任が来ていた。考え事だけで時間が潰れてしまう私って主人公っぽくて案外かっこいいんじゃないかと思うんだ。冗談に決まってるけどな。

かっこいいと言えばどうやら私のファンとかほざく奴らが全校生

徒の３６％（うち男子３１％、女子５％）いるそうで、その主な理由が「かっこいい。ゾクゾクする」「ツンデレっぽい。というかまさしくツンデレ」等らしい。それって単に物事を斜めから見てるとかそれだけの意味なんじゃないかと私は思うんだがどうなんだろう。自分で言うのもなんだが。

「秋津（あきつ）……おい秋津」

「……はい」

担任に名前を呼ばれ、慌てて返事をした。どうして出欠を取る時に男子から名前を呼ぶんだろう。私とかは出席番号が若いから女子からだと本当に真っ先に回ってくるのにな。男女差別だ。

しかしもうあれだな。視線は依然として私を取り巻きつづけているわけだが、この視線に対して私はある程度の耐性が出来てしまった。喜ぶべきか悲しむべきか。どっちにしろ今はそんなゆとりなんてないだろうな。

「……邦崎は今日も休みか」

「平行世界に行ってしまったそうです」

「そうか」

そんな担任とクラスメイトのやりとりが耳に入る。おいおい、初耳だ。というか何故そんな所で私と発想が被るんだよ。

やがて出欠を取った担任が出て行って、私の前に現れたのは、

「……なんだ、モブキャラか」

「俺だよ！　幡野（はたの）！」

私称モブキャラこと幡野だった。誰だっけこいつ。

「何の用だ。私は今忙……」

立っている幡野の顔を見上げた。どんな時でも相手の顔を見て話すのが礼儀だからな。

「……どうして鼻にティッシュが詰まってるんだ。鼻炎）か？」

「鼻血だ。昨日秋津のせいでな！」

幡野は大層憤慨した。そういえば昨日……ああ、私があんな本をくれると聞いてこいつは……。

「……気持ち悪い奴だな。この妄想族め」
「どうして俺が責められるんだよ！」
「黙れ。私はさっきまで男女差別を憂いていた所なんだ。警察呼ぶぞ」
「呼んでも来るもんか。今これだぞ」
「……それもそうだな。これだから公務員は」
幡野の見解に、私は吐き捨てた。今実際はこんな混沌とした状況にもかかわらず教員の一人すら気付いてないんだ。こんな調子で警察なんて来る訳ないよな。
「それでどうした。詭弁論はお断りだが」
「いや、今は鼻血がやばいしそんな力はない」
ああなるほど、だからあのうざったい笑いもなかったわけか。それにしてもどうして一日経ってもたかが鼻血ごときが止まらないんだろうか。普通なら三分間あれば止まると思うんだが。
そんな私の疑問など意に介せず、幡野は続ける。
「そうじゃなくて、部長からの伝言だ」
「仁科さんからの？　私がどうすればいいとかか？」
「おう。『もういっその事新聞部へ来ませんか』だとさ」
「まだ諦めてなかったのかよ、あの人……」
本気かどうかは知らないが、いずれにせよ今の私に出来るのは呆れるしかなかった。本気でやったら文芸部に消されるぞ。
「断るのでよろしくな」
「即答だな。ま、あれをくれるってんなら別にいいけど」
幡野もまた呆れたようにそう言いながら自分の席に戻っていった。
「あ、後な！」
幡野の背中に声を掛ける。幡野は「なんだよ」と振り向いた。
「鼻血が止まったら、私に言えよ！」
「お前また俺に鼻血を出させる気だろ！？」
よく分かったな。くそ、鋭い奴め。

私は死んでいた。

当然比喩的な意味でだが。的確に言えば死んだように眠っていた。おお晴希(はるき)よ、死んでしまうとは情けない。情けない？　全然情けなくなんかない。

自慢できる事ではないが、近頃私の背負っているリアルプレッシャーは尋常じゃない。たとえほんの少し慣れたと言ってもだ。

というわけで真面目な事に毎時間起きて授業を受けていた私も流石に寝る事にしたというわけだ。成績、下がるかもな。ここ最近起きてたといっても全然集中できてなかったし。

寝てたのは大体一時間目から三時間目まで。先生方は起こそうと思ったがクラスメイトたちの視線に気圧されスルーするしかなかったらしい。そんな気配りが出来るなら最初から私にこんなプレッシャーなどかけないで欲しかったが、まあ言っても無駄だろうな。

それで授業中、寝ぼけ眼で机から起き上がった。右手が痺れる。あと少し額が痛い。鏡で見たら真っ赤になってるだろうな、なんて考えていた所で――

遠くで爆音が響いた。

なんだなんだ、ついにテロでも始まったのか。

第四十四話　大脱走、ヴァルハラ、邂逅

その窓から聞こえてきた爆音によって私の意識はかの目薬のコマーシャルのようにまどろみの世界から一気に引き戻された。……ごめんやっぱまだ若干眠い。

校内で私をずっと見張っていたであろうクラスメイト達も、今は皆戸惑いの表情を浮かべている。まあ当然だろう。普段授業中どころか、学校で聞こえる音じゃないもんな。結構遠くから聞こえてきたようだが、どうせ近くでも遠くでも同じようなものだ。いや寧ろ見えない方が怖い事もある。一種のホラーみないなもの。

しかしこんな反応をするなんて、ここのクラスメイトどもも案外普通の人間なんだな。やっぱり思い込みは良くない。

黒板に「ＢＵＲＮＩＮＧ！」だの「ＰＡＳＳＩＯＮ！」だのと偏った方面の英単語ばかりを僅かながら、しかし確実に右上がりに羅列させている英語教師が「お前ら迷うな！　もっと自分の思いを俺にぶつけて来い！」だのと怒鳴るが、そんな事を言われると余計戸惑うだろう。現にそんな英語教師の話を聞いている奴は一人たりともいなかった。

杭瀬はといえば、いつの間にかどこかに行ってしまっていた。また例の特殊能力でどこかへ抜け出したんだろう。最強だなある意味。たとえ電撃文庫的な世界観でも何の問題もなく闊歩していけそうな奴だ。

……あと約一名、鼻にティッシュを詰めたでかい馬鹿がブンブンと手を振り回していたようだが、私はあんな奴知らない。知らないったら知らない。

さてと、おかげで授業は滅茶苦茶だ。担当が担当なので元々滅茶苦茶なのだが、世の中には突っ込んだら負けと言うものがある。嘉光のクラスとかもまさにそんな感じらしい。

そう言えば嘉光はこれをどう思っているんだろうか。いや今そん

な事考えても仕方ないよな。

さて、おそらくこれは大曽根さんの仕業だ。他にこんな事をやってのける人間なんて考えられない。一宮さんもやる可能性はあるが、まあ一緒だな。というか――

「早すぎるだろう、常識的に考えて……」

「何かやるぞ」的な流れを見せたのが昨日の夜だった。それから半日少ししか経ってないわけだ。……いや、どうせ仕掛け自体は昨日の内にとっくに用意していたんだろうけどな。

というか、本当に警察は何をやっているんだろうか？　爆弾って持ってるだけで犯罪じゃないのか？　非核三原則と同じで。それとも大曽根さんは軍の関係者か何かか？　ひょっとして背後に秘密組織でもあるんじゃなかろうか？　ファンタジーだな。

まあいい。あの人たちが何者かなんて今はいい。それこそ突っ込んだら負けと言う奴だ。とにかく状況が混沌としてきたので――

「……トイレに行ってきます」

逃げなきゃ駄目だ逃げなきゃ駄目だ。お暇させていただきますと言ったように私は教室を抜け出した。文芸部に行けなくなってから余計に私の頭がアレな方面に行ってしまった気がするのは、あくまで気がするだけであってほしい。別に私の頭の中に妙な世界が出来上がっていたわけじゃない。

――と、私は信じたい。

さてどうするか。「新聞部に任せていろ」なんて一宮さんは言っていたが、肝心の新聞部員はあの様子である。とりあえず階段の方にでも行くか。多分あいつがいるかもしれない。あくまで「かもしれない」であって、根拠なんてものはないが。

そしてやはりというか、杭瀬はいた。階段の付近に来ると声が聞こえ、そちらに行ってみるといたのは案の定そいつだったという訳だ。幽霊なんかいない。どこからか声が聞こえてきたらそいつは多分似非無口キャラなんだ。

もしかすると私を待っていたのかもしれない……なんてな。きっと他の理由だろ。

ちなみに爆音はさっきの一発に留まらず、まるで隅田川花火大会の如く続けざまに鳴り響いていた。音がするのは体育館の方、ここは位置的に正反対の場所らしい。

例の視線はと言えば、これが実は何故かは知らないが今現在剥(は)がれている。罠というのも考えられるが、悩むよりはさっさと前に進んだ方がいい。……何だか私のキャラに合わないよなこれ。なんだなんだ、新手の洗脳方法なのかこれ？　そんなに私の人格は駄目なのか？

「待ってた」

「冗談だろ」

平然とした顔でまるで私の心を読んだかのような発言をする杭瀬に、私はとりあえずいつものように返しておいた。杭瀬はやれやれと溜息をつくが、溜息をつきたくなるのはこちらの方だ。まあいつもついてるんだが。

「お前から話し掛けてくるなんて珍しいな。何か用でもあったか？」

わざわざこんな時に。まあ同じように教室から飛び出した私が言える立場じゃないか。と、杭瀬は私から目を逸らし、

「晴希(はるき)と話さないと、私は死ぬから」

「嘘つけ。お前がそんな内藤(ないとう)みたいな奴だったとは初耳だ」

私を弄(いじ)るような事ばっかり言いやがって。朱鷺羽(ときわ)でもそんな事は言わないぞ。それにしても爆音が五月蠅(うるさ)いんだがどうにかならないのか。

「私と話さないと、晴希は死ぬから」

「そこで私に責任転嫁(せきにんてんか)かよ！」寧ろこいつと話した方が寿命が削られそうだと思えてくるんだが。

「そう。この世界の森羅万象(しんらばんしょう)、実は全部晴希のせいなの」

「違う！　全部内藤のせいだ！」

「その返し方もどうなの」

杭瀬はまた溜息をついた。だから溜息つきたいのはこっちだっての。

「それで、その晴希と話さないと死ぬ嘉光はどうしてるの？」

そうだよ。だから嘉光はどうしたんだ？　新聞部騒動の時にあそこまで暴れてたから、考えられるのは――。

「――魂が抜けてるか、死んでるか、あるいは仙人になったかだろう」

そう言いながら私は、外の方に目をやった。空は広いが地は狭い。いっその事鳥になってしまいたい。……ごめん、やっぱり人間様の方がいいや。未練を持って何が悪い。

「どっちにしろ晴希は寂しいと」

杭瀬はそんな結論を下す。ちょっと待て。寂しいんじゃなくて寧ろ凄い窮屈なんだが――

「ま、お前には分からんか」

いつの間にか五月蠅い爆音もやんでいたので、そう言って私は話を切り上げた。本当、何も得たものがなかったな。だがもしかすると誰かが何かをやっていた可能性は十分ある、というか多分そうなので期待しておくか。

と、教室に戻ろうとした所で――

「やばい、トイレ行かなきゃな。トイレのトはトローチの……」

私は訳の分からない事を言いながらトイレに行く一人の生徒とぶつかった。身長の差があるせいで、そいつにとっては肩がぶつかっただけでも私にとっては顔面の位置だったりする。顔を抑え、そいつの顔を見て、やっと私は気付いた。

そいつには、ようやく会えた、というべき所だろうか。

しかしまさかこんな呆気ない出会い方をするとは思っても見ず、私はそいつへの反応に暫くの時間を要したが。

「……お前」

ようやく口から出た言葉は、そんなありきたりな台詞だった。

内藤嘉光は、まるで済まないといったような顔をこちらに向けてきていた。

第四十五話　いっそ溺れてしまうなら

秋津晴希が死んでいたその頃、一年の守坂椎乃もまた死んでいた。当然ながら両方とも比喩表現だ。

その授業の間、どう米無しで生きていくかという深い悩みの中に守坂は浸かっていた。この状態が長引くといずれは溺れてしまうだろう。どうせ溺れるなら米の中で溺れた方が百倍いい。米を食べられない人生など死んでいるのと同じだ。

ならばどうするか。またみのりに分けてもらうしかないのかもしれないが、それは少し気が引ける。前にも分けてもらった上、それに対し自分は何もしてやれていない。これでは面目ない。

だが焦りは禁物だ。まだ自分が動くべき時じゃない。ここで焦って動いたら、今までの文芸部達の努力も水泡と帰す。

だから待つ。自分の動くべき時が来るまで。

自分は別に秋津晴希が、内藤嘉光が、文芸部がどうなろうが興味はない。大切なのはただ米と、親友だけだ。自分にはそれだけしかない。そしてそれだけでいい。

……しかし、米が欲しい。米が無いと何を食べても……正直言って断食に等しい。

こちらが何度謝ろうと、母親は決して許してくれなかった。そこまで玉子和食説に拘るのか？――否、母の事だからこのような事態にどう自分を律するか試しているのかもしれない。そういう親なのだ。この騒動が終わる頃には何とかなると、守坂椎乃は何となくだがそう予測していた。

今黒板に数式を綴っている一年目の若い教師の声など聞こえないまま、何気なくノートに鉛筆を転がしながら考える。ちなみに守坂家ではシャープペンシルなど使わず、当然の如く彫刻刀で鉛筆を削っている。

「いつまで待てば……」思わず考えた事が口から漏れる。誰かに聞

かれたかもしれないが、今更どうでもいいだろう。「どこかで爆発でも起きれば……」

その時、爆音が聞こえた。

いきなりの爆音に生徒達は——平然としていた。強いて言えば朱鷺羽だけはおろおろとしていたし、普段こんな事で驚かない守坂も自分が何気なく放った一言が本当に起きてしまった事に内心驚いていた。

誰の仕業か、と聞かれればクラスの大半は答えられるずだ。いや、逆に知っててもしらばっくれるかもしれないが、いずれにせよあの文芸部のおかしさは誰もが知っている事である。現在の一年生も違った意味でおかしいが。

が、平然としてると——そう思ったのもつかの間、生徒達は顔を見合わせ、一斉に机から筆箱を落とす。そうして教師が驚いている隙に全員教室から出て行った。授業をしていた教師が何か言おうとすると生徒の一人が「今から抜き打ちの避難訓練なんですよね！早く外に出なきゃ！」と言い残していくが、勿論避難訓練などではない。

同じ一年の別クラスも同じ考えだったようで、多くの生徒達が騒がしく廊下を走っていた。避難訓練といいながら押さない・走らない・喋らないの三つは悉く無視。

そうして教室に残されたのは頭を抱えながら唸る教師と呆然とした朱鷺羽、そして米を断たれた守坂の三人だけだった。

そんな教師を尻目に、守坂の席の方へ朱鷺羽は向かう。その朱鷺羽に守坂は口を開いた。

「それで」

「うん？」

「何かあったの？　あの文芸部が何か言ってた？」

「あ！　すっかり忘れてたんだけど——」

朱鷺羽は昨夜の事をやっと思い出し、それを守坂に話した。本当

は学校に来たらすぐ話そうと思っていたのだが、久しぶりに晴希に会ったという事もあり、記憶から抜け落ちていたのだ。
「それにしても早い……これが文芸部……」話を聞いた守坂は感心しきってしまった。
「そうだ椎ちゃん！」
もうそこに教師などいないかのように朱鷺羽は叫ぶ。
「私たちも早くしないと……」
だがそこで「何もなかったので落ち着いてください。決して教室から出ないで下さい」といった内容の放送が聞こえてくる。これではもう自分たちは出れないだろう。どうせ他のクラスメイトは鞄を取りに来るまで帰っては来ないだろうが。
「……先輩たち、大丈夫かな」
「さあ、今は分からない」
朱鷺羽の問いに、守坂は答えた。
「……確かに、放課後になって先輩たちに訊かないと……そうだ！」
「今度は何？」
「椎ちゃん、放課後にうちの部室に来てよ！」
親友の言葉に、守坂は頷いた。今日は予定もないし、文芸部と接触してそれがいいほうに働くなら、断る理由など何もなかった。

ちなみに、授業をしていた教師はその精神的ダメージにより学校に休養を申請したが、聞き入れて貰えなかった。

第四十六話　最近よく見る夢のこと（前書き）

やっと彼の登場ですね、ええ。

第四十六話　最近よく見る夢のこと

やけにあっけなく、トイレだの何だのとくっちゃべっていた嘉光（よしあき）に出会ってしまった。

「っと、ごめんな！　ごめん！　俺が悪かった！」

その嘉光はと言えば、嘉光の分際で私にぶつかっておいたことを多少なりとも申し訳なく思っているようで、こうやって私に申し訳なさそうな顔を見せていた。

ま、私は分かってるけどな。ああいう外面してても内心では気持ち悪いくらい喜んでるって。全くこれだから嘉光は。気持ち悪い。

ちなみに杭瀬（くせ）は空気を読んだつもりなのか階段の奥に潜んで姿を見せない。おいこら、お前空気読むな。そこで出てくるのがお前じゃなかったのか。

私が何か言う前に、嘉光は話を続ける。

「怪我（けが）はないか？　ないみたいだな、うん」

「……？」ああ、この沈黙はかの似非無口キャラのものではなく、私のものだ。

嘉光の台詞に違和感を感じ、私はそれを流せずに入られなかった。どうも胸に突っかかる。正直言って、内藤（ないとう）嘉光と言う名の一人の変態が久し振りに会って言う発言ではない気がするのだ。

そんな私の疑念も気にかけず、

「んじゃ大丈夫みたいなんで。あートイレ行かなきゃなトイレ！」

そういって嘉光は颯爽（さっそう）と走り出していった。

「……」

私は何も言うことが出来なかったが、どうも明らかにおかしいらしい。ノロウィルスにでも感染したのかもな。うわ、じゃあ死ななきゃ直るのか。いやでも、恋は精神病の一種だって言ってた人もいた気がするぞ。じゃあそっちも消えないかな。無理か。したら死ぬかな。

そんな複雑な思考を私はしていたわけだが、
「んじゃ、綾女も待ってるかもしれないんでな！」
「……ああ！？」
走り去っていく嘉光の言葉に私は、どうも不意を突かれたような気分を覚えた。綾女……あのクラスから消えた私の腐れ縁、邦崎綾女の事か？
何か訊こうと思ったが、気がつくと既に嘉光はトイレの方に消えていってしまっていた。
「……どういう事だ？」
いったい何なんだ？　どうしてこうなった？
秋津晴希十六歳、一気に話が分からなくなりました。
「と言うわけで早速説明をしてくれ、杭瀬」
「……そこで丸投げ？」
私があまりにも考えるのを放棄していたおかげで、杭瀬に呆れられてしまった。どうかと思うかもしれないが、私は四六時中こいつに呆れ返っているのでお相子と言う事でいいだろう。
「……まあいいけど。まず嘉光の話から」
杭瀬は仕方ないなとばかりに話を始めた。最近なんだかこういった杭瀬の演技力が上がっている気がする。前はもっと無表情な感じだったと思うが、大方私を馬鹿にするために鍛えたのだろう。誰だ教えた奴は。
……そういえばさっき階段を昇降していた生徒がいたような気がするが、大丈夫だったのだろうか？……きっと大丈夫だろうな。杭瀬の事だし見つかりはしなかっただろ。

最初に言っておくと、これは夢だ。最近よく見る、夢の話。
何故か俺は、高い橋の上……それも、手摺りの外に立っていた。

しかも何故か体を拘束されたせいで、もう俺は身動きなんか取れやしない。一体誰が結んだんだろうなんて疑問も湧いてくるが、まぁ夢に理屈なんていらないよな。もしかしたら最近見た映画の影響で、危ない組織に捕まったスパイって設定の夢なのかもしれない。

それで、ふわっと言った感覚。それも一瞬で、直後に重力を受け加速していった。言ってみればバンジージャンプみたいな感じだな。当然紐なんてないけどさ。

で、目に映るのは真下の川。それがどんどんどんどん近づいてきて――

ばっさーん！

となってしまい、それも一瞬の事――

ゴンッ！

と鈍い音。どうやら川底に頭をぶつけてしまったらしい。そして夢とは思えないようなリアルな痛み。あれに比べれば小学校のころにやってたプロレスごっこなんて児戯だ。

そんで朦朧とする意識の中、また浮かび上がってきて――

そこで目が、覚めるんだ。毎回毎回。そんな俺が頻繁に見る、夢のない夢物語だ。気持ち悪いと言うか何と言うか……まぁ、小説とかならこれが複線になったりするんだろうけどな。

さて回想はここまでにしておこう。トイレにも行って気分転換もしてきた所だし。

「えっと……な、伊藤君っ！」

「おうどうした綾女」

ヘアピンの女生徒、邦崎綾女がいつものようにガッチガチに緊張した面で話しかけてきた。ちなみに俺は伊藤ではなく内藤だ。

どうも俺と話すときだけはいつもこんな様子で、俺の事が苦手なのかもしれない。多分何かの罰ゲームか何かかな。ただ俺はこいつといるのは嫌じゃないんだよな。むしろ好きって言った方がいいくらい。だからちょっと残念ではある。だからこっちからの歩み寄り

もしてたりするんだが、こっちから行くと向こうは頻繁に逃げる。かくして二人は、微妙な間合いを保っていると言ってもいい関係なのだ。

……というかこいつ、確か元々このクラスじゃなかった気がするんだけどな。ま、来る者は拒まないけどさ。賑(にぎ)やかになるし、俺にとっては嬉(うれ)しい事だしな。

「な、伊藤君はっ！……最近部かっ……部活とか、行かない……？」

「部活か……」

「うん……」

何だかもうカミカミでどうしようもない綾女の質問に対する答えをどうなんだと思いながらも考える。

「何でなんだろうな……」

結局出たのはこんな答えだった。釈然としない。俺も綾女も。

実は俺の入っている文芸部の件は自分でも気になってる事で、前は毎日行ってたのに何故だか最近は全然行ってなかったりする。第一どうして前までは毎日活動したりしてたんだろうか。

何かが引っかかる。いつも「死ね」とか「地獄に落ちろ」とか俺に喝采(かっさい)をしてくれるクラスメイト達も何だかよそよそしい気がするし。

もしかしたら俺は、何か忘れてしまっているのかもしれないな……。

第四十七話　友情と意地と時々疑惑

「内藤はおそらく記憶喪失だ。そして内藤派のリーダーは……邦崎綾女だろう」

すごく騒がしかったその日の放課後、約束したとおりに椎ちゃんを連れて行って文芸部室に入ってみると、参謀こと一宮敦次先輩が不意に話を切り出し始めた。

「ええと……」

あまりの話の唐突さにわたしは、その言葉がわたしたちに向けられたものだとはっきりと気付くまで開いた扉の前で立ち尽くすしかなかった。

「いいから入れ。朱鷺羽、そして守坂椎乃」

参謀先輩はまるで椎ちゃんの存在までも当然のように捉えていた。参謀先輩ならありえると思ったけどそれでもさすがに、参謀先輩のこの落ち着きようと対称的にわたしは驚きを隠せなかった。

「あと、その呼び名はなしだ」

「は、はい……」

驚くべきことに、参謀先輩はどうやらわたしの心の中まで見通していたらしい。晴希先輩がたまに「読まれたか」なんて呟いていたけど、それはこのことだったのかもしれない。晴希先輩への感心と同時に、わたしは参謀先輩に感心した。すごいです、参謀先輩……。

「だからなしだと言っているのに……」

参謀先輩が半ば何かをあきらめた様子で、しかし静かにしゃべり始めた。

「さて守坂椎乃、お前は友人である朱鷺羽のためこの騒動を片付けんとするためここに来た」

椎ちゃんのことなのに了承もとらず、まるで相手に教えるみたいに説明をする。

「そして今日誠文の起こした騒ぎ。そこで一年の他の生徒が勝手に

出て行ってしまった時、朱鷺羽がお前を文芸部に行くよう誘った」
あれ、やっぱり大曽根先輩だったんだ……。
不意にパソコンを見ている大曽根先輩と目が合い、こっちに向けて親指を立ててきてくれた。大曽根先輩、もしかしたら前の新聞部とのいがらみに入り込めなかったせいで鬱憤がたまってたのかな……。
「お前は基本的に不必要に他人と接触しない人間だからな。数少ない理解者であり親友である朱鷺羽の力になってやろうと考え、最善の手を選んだ」
という事だ、と参謀先輩がこっちを見る。見事なまでに完璧な説明だった。クラスでは「一宮敦次は現状でこの学校の頂点にいる」とか言われてたし晴希先輩もそんなことを言ってたけど、その話は何の誇張も偽りも含まれてない、純粋な情報だったみたい。……問題は、誰に説明してるのかって事だけど。
だけど――
「違います」
なぜか椎ちゃんは否定した。
「自分とみのりが――朱鷺羽が親友であることには肯定ですが、自分はこの騒動に興味など全く抱いていません」
「それで、ただ単に朱鷺羽が誘ってきたから来たと」
「はい」
椎ちゃんはわたしのために……違う、わたしのせいでここに来ることになったってこと？　だとしたら……。
けどそこで、わたしが一人勝手に悩んでいたところで、
「なら守坂」参謀先輩は相変わらず落ち着いた様子で一息ついて、また椎ちゃんに呼びかけた。「頼む。手伝ってくれ」
「……なぜ？」
そして椎ちゃんは相変わらず参謀先輩の言うことに反発していた。やっぱりそうなのかな？　意地張ってるのかな……？
「蹴りますよ？」

そしてなにやら椎ちゃんが、席を立って近づいてきてる参謀先輩を神経質に威嚇した。けど参謀先輩は怯まずに、逆に「何を言った？」なんて聞いてきてる。椎ちゃんって意外とけんかっ早いんだよね……。

そうして椎ちゃんが足を振りかぶったときに、

（米が欲しいか）

参謀先輩はわたしに聞き取れなかったくらい小さな声で話した。椎ちゃんの左足が止まって、ちょっとだけ首を縦に振るのがわかった。

（だったら手伝ってくれ。お前の力が必要だ）

「……仕方ないですね。どうしてもというなら手伝いましょう」

そういって椎ちゃんも足を戻した。何の話をしてたのかは分からなかったけど、一応椎ちゃんも文芸部とつながったみたいでわたしは安心した。

「ところで邦崎って人は誰なんですか？　その……敵のリーダーっていう……」

「秋津の親友だ」

晴希先輩の？　これは敵がまた一人……。

「お前は本当にずれてるな」

参謀先輩は理由も分からず呆れていた。

ちなみに今日のあの爆音について聞こうと、菅原くんの出した蝉料理を当然のように放置していた大曽根先輩のほうに行くと、

「大曽根先輩、それは……？」

「ああ、知ってっかこれ？」

「これは……」

なんだかパンツ一丁の男の人たちがレスリングをしている、左から右に文字が流れてる動画を見てた。……一度見たら頭から離れないような映像だった。

「っと、別に俺はこんな興味ねえけどな」

なんて言われたって、わたしのその大曽根先輩への疑惑が晴れるまでは結構時間がかかったわけだけど、それはまた別の話。

第四十八話　クロスワードを埋められれば

「内藤はきっと記憶喪失。それで内藤派のリーダーは……邦崎綾女だと思うの」

あの嘉光との接触後、依然として場所は階段。私が説明を丸投げした――否、自然の摂理によって説明をせざるを得なかった杭瀬曰く、状況を簡潔に説明するとそういった感じだそうだ。まあご存知というか我ながら性格がアレな私の反応といったらまあ当然の如く、

「はあ？」

こんな感じ。多分これまで私の言った「はあ？」の中でも屈指のものだったんじゃないかと思う。相当の呆れ力（反応に関わる数値。これが高いほどその反応が呆れている事になる）を持っていたんじゃなかろうか。今の杭瀬の話は少々、というか普通に奇抜すぎた。

大体まずだ。記憶喪失って都市伝説だろ？　加藤鳴海は左腕を失って瀕死になった際に記憶を失ったが、あの嘉光が五体不満足になるなんて図は考えられやしない。腕が落ちても接着剤でくっつくんじゃないか？　たとえそれで駄目でも糸で波縫いでもすれば何とかなるさ。返し縫いは面倒だが波縫いならきっと早く終わるだろう。

当然、疑問点はそれだけじゃない。というかもう一つの方がおかしいのだ。記憶喪失の件は嘉光なら――いや逆に嘉光だからこそなるって展開も考えうる。いい音立てて川に落ちたもんなあれ。……や、そうじゃなくてだな――

「――どうしてそこで邦崎が出てくるんだ？」

邦崎は確かに親友かというと怪しい。中学の頃からの腐れ縁で私の事をよくよく知っているにも拘わらず、いつもいつも変な疑問を抱いてその度に呼び名は「晴希」から「秋津さん」に変わる。それに勝手に嘉光に惚れ、勝手に私をライバル視しはじめたりした。

――が、つまらない誤解をすることはあれど、あいつは絶対に私を欺くような事はしないし、そんなつまらないことを考え付く筈も

無い。
「もしあいつがこんな事態を招くような奴だったら、それこそ異世界だろ」
異世界。召喚。転生。どこかの主人公ならきっと「私は変わったんだ」なんて言うかもしれない。あるいはダークサイドに堕ちた哀れな人間か。どっちにしろ厨二病って括りだな。
……ありえん。どれだけ足掻こうが逆立ちしようが、変えられないものはあるんだ。そんな楽に変われるなら今頃私はこんな生き方してるかよ。人の性格なんて育ってきた環境で大体は決まるんだ。
つまり、だ。私達は何だかんだ言って植物と同じなんだ。どこかに根を張ってしまっていてそこから足を踏み出せやしない。できるのはただ腕を伸ばす事だけで。
……なんてね。ついよく分からん相田みつをみたいな事を徒然と呟いてしまった。なんて気持ち悪いんだ。人生にも役割ってものがあるんだ、気持ち悪い役割は嘉光だけでいいのに。まあとりあえず、邦崎はそんな奴じゃないって事。あんなのが変われるわけが無いだろ。
「……ま、お前の戯言は冗談半分に受け止めとく。さっさと教室に戻るぞ」
そう言って教室の方へ歩き出した。杭瀬は何か言おうとしていたが正直こいつと会話するのは疲れる。だからさっさと背を向けて闇から抜け出し、教室の方へさようなら。私はホームに戻る。
だが杭瀬は、
「おいどうした杭瀬。行かないのか？」
「晴希は先に行っててて。放っててくれていいから」
なんて、動こうとはしなかった。流石、ジョークが通じなかったのがそんなに嫌だったか。まあこいつだったらサボったところで気付かれなさそうだもんな。私は多分欠席ついてるけど。あー、欠席か……。
「……お前はいいよな」

そんな下らない事に半ば羨望半ば呆然、そうした微妙な心境で私はその場を去った。

そうして私は拉致されていた。右には眼鏡左には眼鏡。眼鏡めがねメガネ。放課後ぶらりと歩いていたら突如鮮やかに連れて行かれましたでござるの巻。連れて行かれるときに嘉光のように簀巻きにされてしまったのはどういう因果だろう。

ところで私は、こんな状況に非常に見覚えがある。というか真面目に言うと、それは近頃私の方から歩み寄った方々であり、また文芸部とも因縁のある相手であり。

「では話をしましょうか、秋津さん」

そして当然の如く三年の仁科由宇――新聞部の部長さんが、テーブルの向かい側からそう声をかけてくるのだ。ちなみに左右の新聞部員達を見回してみると、やはりというか鼻にティッシュを詰めたでかい奴がいた。相手にしとくと面倒だからスルーしておくが。

というか本心から言わせてもらえば仁科さんとの話だってものすごく疲れる。それはもう杭瀬とかと同レベルに。……けど、やらなきゃいけないんだよなあ。とにかくここで新聞部としっかり呼吸を合わせて事態を解決に導いていく事が私のすべき事なのだから。

世の中ってのは決してクロスワードみたいにピタリと埋まるようには出来ていないわけで、そこには絶対に「やりたくなくてもやらなきゃならない事」ってのが生まれてくる。はて、そいつはどうしてだろうか？　私は受験生でもないんだがな。世の中理不尽すぎるだろ。

「――はい、仁科さん」

葛藤している余裕も無い。いいさ、要は早く終わらせればいいんだろ？

「文芸部の動きについて、何か知っていますかね？」

そう訊いたのは私の方。今この状況、文芸部に近いのは私より新聞部の方だろう。昨夜は朱鷺羽達と久しぶりに会ったが、所詮は所詮会っただけ。仲良くお互いの立場を伝え合うなんて事も残念ながらなかった。

「聞いていませんね」

だがあっさりと否定されてしまった。「そうですか」ととりあえず返しておく。大体予想は出来ていたのでそこまで辛い事でもなかった。寧ろ辛いといったら嘉光と出会ってしまった事自体が辛い。ああそうだ、嘉光と言えばだ。

「知ってますかね？　内藤の事」

「彼がどうかしましたか？　未だに彼の情報は掴めていませんが」

「それが今日、会いました」

私がその事を告げると、部室内が沈黙したと思うといきなり騒がしくなり――

「な、なんだってぇー！」「な、内藤が……！？」「どういう事だ！？　平行世界にいたんじゃなかったのか！？」「まさかとは思うが……あの羅生門を抜けてきたのか……！？」「畜生！　この世に神はいねえってのかよ！」「……なあ、無事にこの戦いが終わったら付き合ってくれないか？」「うん……」「おい待てそいつは俺の嫁だ」「違う俺の嫁だ」

……そういえばこんな奴らだったな。やっぱり帰りたいかもしれない。

「それで、詳しく聞かせてもらえないでしょうか？」

こう普通に訊いてきてくれる仁科さんがまともに思えるのはどうしてだろう。

……と思ったら仁科さんは知らないうちに私の目の前にコップに水道水を入れて勧めてきていた。安定の前言撤回。

「別に何もありませんでしたよ。……いや、何も無かったというの

が異常ですが」
「というと？」
仁科さん、コップから一瞬でもいいですから視線を外してください。そんな凝視されるとまるで水を飲まないこちらが悪いみたいじゃないですか。
仕方ないので水を飲んで一拍。
「内藤は、もう私の知っている内藤じゃありませんでした」
「ほらそうだ！　やっぱりそうだ！　羅生門（ヘルズ・ゲート）の闇の力に捕われたんだ！」「何やってんだ神様仕事しろ！」「やっぱり戦いは避けられないかも……」「そう……」「おいだからお前何俺の嫁口説いてんだ！」「よろしい、ならば戦争だ！」「嘉光さん×闇嘉光さん……意外といけそうですねこれ！　むはー！」
うるさいお前らちょっと死ね。
とにかくだ。さっき人は変われないといったが、しかし内藤嘉光は変わってしまった。これだけは真実なのだ。あんな好青年みたいなキャラに成り果てて……嘉光のくせに生意気だ。さっさと死ねばいいのに。
「ふふっ」
そんな私の苛立ちを知ってか知らずしてか、突然仁科さんは笑い始めた。ワライダケというのは横隔膜の痙攣を引き起こすものらしいが、それと同じような病気に仁科さんも感染しているのかもしれない。大変だな。
「それでも内藤さんが嫌なんですね。秋津さんとの接点が消えても」
なるほど理解した。どうやら仁科さんは、私が実は嘉光の事を大好きなんじゃないかと、そう言いたいらしい。……は？
「いや誤解しないでください。私はただ単にあいつの幸福が腹立たしいだけで」

「はいはい。とりあえずこちらで善処しておきますからね」
笑顔のまま仁科さんは話を切った。くそ、これだから年上は困る。何でも見通した気になってるんだ。

結局、新聞部は出来るだけフォローするから私は最善だと思う動きを取る、という事になった。
実際に尻拭いをしてくれるかは知らないが、悔しくも新聞部が心の助けになるのは確かだった。

第四十九話　ささやかな作戦会議

そして翌日に移る。

はっきり言って、ただでさえ自販機に売っている飲み物の缶程度しか容量の無い私のスタミナは、最早底をつきかけていた。今の私はなんと言うかあれだ、まるでチューブから残り少なくなった歯磨き粉を搾り出しているようなものだな。まあ私は歯磨き粉なんて滅多に使わないが。

自己再生能力が欲しいと思う今日この頃。なければE缶（エアーマンとの戦いに最後まで取っておくといいらしいアレ）でもいいな。しかしまあ私がそんな現実逃避をしてしまうレベルまで疲労しているというのに嘉光はといえばおめでたい事に毎日をエンジョイしているわけだ。あいつ死ねばいいのに、もう一回くらいな。

全くこれだから。恋なんてしなくて正解だったな。私は何も間違っちゃいなかった。いくらどこかの詩人のように愛を歌おうが、質量も無いそれは気付かないうちになくなってしまうものなんだ。最初から期待しなければ失望も糞も無い、まるで理想の形だ。無欲、仙人、賢者モードって所か。

いずれにせよ人は分かりあえやしないものなんだよ、本質的に。そんな事無いなんて反論したくなる事など……無いわけでもないが。女の子だし。――けどやっぱり、それは所詮綺麗事だろ。夢物語は実際に起こりえないから夢物語なんだ。

要するに、私の苦労なんて私しか分からないって事。他の奴に分かってたまるか。同情するなら金をくれ。上限はない。

「おい杭瀬」

「……」

……少なくとも、こんな風に『宇宙人に拉致されないコツ』なる本を読んでいる自称無口キャラには分かるはずがないわけで。もし分かったら世界の終焉だ。ちなみにだが私にもこいつが何を考えて

るかなんて知った事じゃないね。
「そんな本はいい。五世紀後くらいに必要になりそうな知識を今身に付けて何になる」
私がそう諭してやるも、こいつは、
「近未来小説の参考として」
なんて答える。ふてぶてしい奴だ。そんな弁解で安定した位置を築く気でいやがる。
「少なくとも『近』未来にはなりそうも無いからな。ほい行くぞ」
奴の腕をパンと叩き、立ち上がりを催促。
かくして私は杭瀬を例の場所――つまり階段の所に連れて行った。
「……そんなに私と逢引がしたいの？」
「……いきなり何出鱈目を言い出すんだお前は」
当然ながら逢引などではない。話をするのに場所を移した方が気が楽だからだ。教室は治安維持法的な空気を感じるんだよ。というかぶっちゃけて言えば人の多い場所でこんな話したくないからな。あー、話というのは……なんだったか忘れたよ馬鹿野郎。これも精神力を擦り減らされたおかげなんだろうな、全く。
「人の多い場所では出来ない話……」
「何故そこで顔を赤らめる！？」
杭瀬は一人で変な妄想をしていた……という振りをしていた。この頃こいつの私を弄るスキルが上昇している気がしなくもない。実際にするのはおそらく邦崎くらいだ。……ああ。
「そうだそうだ邦崎だ」私はやっとここに呼んだ目的を思い出した。
「言っておくが私はお前と妙ちくりんなコントを繰り広げるためにここに来たんじゃない」
「それはそうとこのやりとりにもそろそろ専用ＢＧＭが出てきていい頃だと思うの」
「知るかそんなメタな話」
まあ確かにアニメとかなら確実にありそうだがな。前に変な事言ってたっけ。自分は作者のお気に入りだからメインヒロインなんだ

みたいな事。いや本当に。どうでもいいけど。
「――じゃなくてだな、私は」
「見て晴希。階段がある」
「だから知・る・か！」
しかもそれどういう話の逸らし方だよ。階段なんて最初からあっただろ、ルイージマンションじゃあるまいし。
それに何だか杭瀬が「最近の晴希はつまらない話ばっかり……」だのとまるで最近の若者がどうこうと嘆いている酔っ払いの如くほざいてらっしゃるので、ご要望どおりさっさとつまらない話を進めてやる事にする。
「結局邦崎は何なんだ？　何か分かった事は？」
あの時杭瀬の言った『邦崎黒幕説』はあくまで私がその場で適当に杭瀬に考えさせたものだった。つまりそれは、根拠の裏づけもない単なる憶測だったという事だ。
だがあれから丸一日経った。それだけあればバラバラだった考えも纏まるだろうし、私と違い放課後は部活で先輩方の見解――おそらくは一宮さんの一方的な説明だったのだろう――でも聞いているはずだ。私？　私は自慢じゃないが何も考えてないね。そんな事より飯を食う方がよっぽど大切だ。
であるからして、杭瀬は須らく――
「わかんない」
――うんうん、わろすわろす……え？
「杭瀬……お前、正気か？」
「……酷い言い方」杭瀬は肩をすくめた。まあ気持ちは分からないでもない。
「ならお前……偽者か？」
「……すごく酷い言い方」……まあ分からないでもない。とは言っても元々お前が言ってた事だがな。
少し失言をしてしまった気がする。杭瀬には同情しよう。スプーン一杯分くらい。ちなみに金なんかやらんぞ。

「にしても分からんって何だ？　一宮さんとかには言ったのか？」
杭瀬は表情を変えないまま、首を縦に振った。
「けど、参謀先輩もよく掴めてないって」
一宮さんにもこの混沌とした現状は把握しづらいのか。新聞部とかの特定の団体の仕業じゃないからなんだろうが、意外と難しいんだな。あと杭瀬、お前も参謀先輩言うか。
「けどそれでも、邦崎の潔白は証明できないと？」
その問いにも杭瀬は肯定した。対して私は内心呆れてしまっている。
「……あのな、潔白の証拠なんて『私が信用しているから』で十分だろ。仮にもあいつとは五年目の付き合いだぞ？」
「じゃあ晴希は、私を信じてる？」
どうしてそうなるんだよ。さっぱり意味が分からん。とりあえずその思わせ振りっぽいお前の言動がなんか腹立んだよ。何が欲しい。
「ああ信じてる信じてる」他に適当な答えも見つからないまま、私はそう答えておいた。「もういいだろ、戻るか」
そうしてささやかな作戦会議は終了。さっさと教室に戻る事にする。
疑問に思う。判断材料に勘が含まれてて何が悪いんだ、と。頭が固いと言われれば、そうなのかもしれないが。
私が杭瀬を信じてるかだって？　あいつほど信じられない奴がいるかよ。……ああ、一人いたか。大嘘ついて私の前から消えた男が。全くどいつもこいつも。
「チッ……」
今更こんな事を嘆くものでもないなと思いながら、授業に遅れないよう私は歩き出した。杭瀬の舌打ちなんて聞こえない。

第五十話　素人と玄人の明確なる格差（前書き）

ええ、このキチ小説もついに五十話突破ですとも！

第五十話　素人と玄人の明確なる格差

その日私は、初めてサボタージュというものを体験した。サボタージュと聞いてコーンポタージュを連想する素人どもがもしかするといるかもしれないので説明しておくと、要するに「サボる」という事だ。

ああ、ちなみに昨日のあれはノーカンな？　あれはただトイレに行ってただけなんだから。結局行かなかったが、まあ約束が違えるなど往々（おうおう）にしてある事だろう。それが大人のルールだ。

と言っても屋上で煙草を吸っていたり、学校の外に出て買い食いをするような事はなかった。大体そんな度胸がないし体力もない即ち意味がない。

とりあえず通常の授業なら寝ていれば多少不真面目だがどうにかなる。不眠症でもないし夜更かしもしていないのだが、どうも悪い癖になってしまったらしい。勉強不足は後で必死に補うさ。苦肉の策だがな。

よって辛うじてだが体力は残っているのだが――ここで鬼門だ。何かと言うと、英語で言うところのP．E．である。

体育の授業とかふざけるな。そんなに私を殺したいのかこのフレディめ。

というわけで私は出席時間数を犠牲にして体育の授業をサボタージュするという非常にアクロバティックな結論に至ったわけだ。なに大丈夫、それを言ったら邦崎なんかここ数日大変なんじゃないのか？　理由は知らんが異世界的な場所に行ってしまったわけだし。

要するにまあ、今日の五時間目の体育などという鬼畜授業を保健室のベッドでのうのうと過ごしたわけだ。え？　お前ら体育が一番好きなのか？……なんなんだこのリア充め。

そして無事に保健室より凱旋してきた所で、杭瀬に会った。また色々とアレな本を抱えていたのでスルーしようとした所で「晴希」

と呼び止められた。おいおい後でいいぞ後で。出来れば百年ほど後でな。だってお前そんなの持ってて大変じゃないのか？

「手短に話せ。もしかしたら私は死ぬかもしれない」と私。最近の学生生活は本当に命の大切さを教えてくれる。ある意味泣き小説だな。

「死なないって。あんまり自分を卑下しないで？」

「死ぬかもしれないだろ。絶対死なないとは限らない。お前考えてみろ、関羽も張飛も桃園の誓いなんて立ててながら先にあっさりと逝ったじゃないか」

手刀で首を刎ねる動作をしながら説得を試みる。九九・九九九％で表って事は、同時に〇〇・〇〇一％で裏って事でもある。物事は常に慎重に行くべきだ。まあ何が言いたいかというと、要するにこいつとの会話がだるいって事。

「晴希は死なないわ」

「お前が守るから、とか言うなよ」

「……」

……沈黙。図星かよ。まあそりゃ読めてたけど。言ってた時に自分でも思い浮かんだんだから。どうでもいいが元ネタ見た事ないんだよなあれ。あれで見た事ある奴といったら……ああ、『ムスカ、来日』なら見させてもらったな。

「……晴希は死ぬわ」

そして不吉な開き直りをするな。

「ああ、だから休ませてくれというんだ。達者でな」

とりあえずそう言ってやり杭瀬の脇を抜けようと試みる。

確かに私と杭瀬では素の運動能力に違いがあるが、しかし相手は何冊も本を抱えている。それも文庫本サイズではなくハードカバーの大きいものを三、四冊だ。ならばその隙を突く事など造作はない。

「待って」

……そう思っていた時期が、確か私にもあったと記憶している。

サッカーにおいてドリブルでディフェンスを突破する、もしくは

ボールを持ったフォワードに突破されないようにしたい時、諸君は何が大切だと感じるだろうか？

引き離す、もしくは追いつくための純粋な速さ？　崩れないためのフィジカル？……確かにそれも大事だろう。

だがそれだけではない。やはり私としては、大切なのは勘……というか、筋（すじ）だと思うんだ。

邪魔でないとは言い切れない荷物を抱えていながらも、杭瀬の動きは見事なものだった。私がうまくすり抜けたと思いきや、たった三歩で真正面に回りこみ、更に私が横を抜けようとすると同じ動きをし……そうやって、気付けば壁際に追い詰められていたというお話だ。

「今回は大切な話なの」

「私の命よりか？」

「うん」

……こいつ、はっきりと言いやがった。今まさに鮮（あざ）やかな動きで私を追い詰めた杭瀬曰くそういう事らしい。なんでだよ人の命は青い地球よりも重いんだぞふざけんな、などと力強く言ってやりたい所だが多分そんな主張をすれば心臓発作で死んでしまいそうなので仕方なく話を聞いてやる事にする。要するに反抗する方が面倒臭そうだから。

というわけでまたまた階段付近。多少ながら少なくなるとはいえ、やはり例の視線は止まなかったりする。大丈夫だ、もうそれを零（ぜろ）と同じようなものとして捉（とら）えられるだけのふてぶてしさは手に入れてしまった。これも大人になるって事なのかな。哀（かな）しいもんだ。

「昼に図書館で、参謀先輩と会ったんだけど」と無表情で杭瀬。「今日また仕掛けるって」

「またかよ……」

先輩方については懲（こ）りないというか、とにかく信じられないという思いがある。二日連続でよくやるものだ。

「で、それだけか？」

私がそう訊くと、杭瀬は首を横に振った。
「晴希にも動いてもらう。失敗しないように」
えー、正直面倒だな。素人なんだから少しは優しくしろよ。
「……何の？」
「……何が訊きたい」おかしなことを聞く奴だ。
「何の素人？」
「気にするな。そしていつお前にまでモノローグを読むという特技が身についた」
驚きだ。一宮さんの技でもトレースしたのか？　お前もコピーなんて厨二病っぽいスキルを持ってるんだな。
「私は作者の――」
「お気に入りだからとかいうなよ」
「……」
……また黙ったよ。なんて残念な生き物なんだこいつ。
「それでどうなんだ？　作者により力を付与されたとでも？　やめろよそんなメタな発言」
「だって晴希が口に出してたから。『素人だから優しくしろ』って……」
「げっ……」あれ口に出してたのか。私の疲労もここまで来たんだな。仕方ない。自分がサボタージュという言葉からコーンポタージュを連想するようなのと同レベルの素人だったとは認めたくないが……。
「よし――寝よう」言って私は歩き出そうとしたが、
「待って」と、睡眠学習に勤しもうとした私をわざわざ杭瀬は止めてきてくれた。全く迷惑な事に。
――ハードカバーの本を振り上げながら。
「……おい杭瀬、その高く振り上げた腕はなんなんだ」
「……永琳を呼ぶために」
えらいごまかし方だな。でもここ幻想郷じゃないからな？　ちょっと意識が異世界に飛んでる人はいるが所詮はそれだけの事で。

「……あ、手が滑って」
「話を聞こうじゃないか。出来る事なら協力しよう」
だからその手に持った本を私の脳天めがけて振り下ろさないでくれ。もしやったらこの小説『残酷描写あり』とか設定される目に遭(あ)うから。

第五十一話　頭で理解しても出来やしない

『人は、自ら動かなきゃならない時がある』。確かそんな事を、私は言ったはずだ。人という字は人と人が支えあうようにして出来ているみたいな金八先生理論もまああながち間違ってはいないと思う。

さてそこで、私からはこういった経験を通してもう一つ言わせてもらいたい事がある。

それは何かというと、『分かってもかったるい』という事だ。理不尽に降り注ぐ夕立を自然だから仕方ないといって受け入れられるほど私は利口な人間じゃない。

まあ考える事をしなくていいと思えばこの役回りも軽い方なのかもしれないが、そんな事知った事じゃないよな。

まあそんなこんなで、考える間もなく杭瀬に連行されたわけだ。きゃあ助けて。

「……それにしても、まさかこの私が二限連続で授業をサボる事になるとはな」

前の時間は体育だったから休んだというのに。全くもって自称品行方正（笑）の私らしくないじゃないか。少しは寝かせてくれ。しかも場所が屋上と来た。屋上ってあれだぞ？　学校における立ち入り禁止区域の代表格だぞ？　たまに屋上開放されてて仲良くそこで昼飯を食べるってリア充的展開もありうるがな。そんな所にいたら私は自殺志願者かあるいは「顔はやめな。ボディーにしな」とか言うような不良生徒じゃないかと思われてしまうじゃないか。それは駄目だ。私はそんな事、嘉光くらいにしかしない。あと風邪を引いたらどうするんだ。花粉症は厄介なんだぞ。ああ、あと先に言った通り夕立とか降ってきたらどうするんだ。風邪ルートに直行する上体拭くタオルとかも持ってないから服が濡れてサービスシーンにもならないサービスシーンをお見舞いする事になる。明らかに駄目だろう、不憫な事になる。主に私が。ついでに屋上って事は雨だけじ

ゃなくてカエルが降ろうがオケラが降ろうがアメンボが降ろうが無防備なわけだしな。あと原爆でも落ちてきたらどうするんだ。お前原爆舐めるなよ、学校の図書館ではだしのゲン読めば分かるから。元は軽症だったとは言ってもそれでも禿げたからな？　嫌だよ私は。所詮禿レベルでも嫌だ。そういえばメタルギアでファットマンとかいう自分の体の下に爆弾隠してた爆弾魔がいたがあれは原爆の名前から来てるらしい。ちなみに長崎の方だけどな。まあなんだ、本気で嘉光ここに来るの？　来させるの？　分かったよ分かった。だったら任せたから。

……とまあそんな愚痴を私はこぼしていたわけで。いやお恥ずかしい――なわけあるか。

それにしてもさっきの脅迫、珍しく似非無口キャラの嫌な本気を見た気がする。普段穏やかな奴って怒った時が怖いんだよ。たとえそれが似非でも。

まああれは怒ったのかすら分からなかったが――そこがまたかえって怖かったりして。腕振り上げたときも気配見せなかったし、あれは完全に暗殺者かアサシンか必殺仕事人だろ。全部同じような意味だけどな。

「違う、私は私」

「……いたのかよ」

いつのまにかその杭瀬がいた。さっき私を屋上に送って「じゃあ」なんて言ってたんだが。その神出鬼没に特別私が驚かなかったのはひとえにこの緊急事態によって作動したスルースキル（スルーレベル：高）によるものであり、多分そんな感じに近頃の私の精神力はガリガリと目に見えるように削られているんだろう。でなければ思った事を無意識に呟いてしまっているなんて末期症状は起こりえない。

……などと自分が軽い精神病に侵されているなんて本来考えたくはないし認めたくはないのだが、事実なのだから仕方ない。

「……チッ」

こんな風につい舌打ちをしてしまう域まで達してしまっているのは、どうにかせねばなるまい。

「何だその目は……とりあえず私はここで待っていればいいんだな？」

何か残念なものを見るような微妙な表情を見せた杭瀬に、私は確認を取った。

「そう、それで嘉光をここに呼ぶから、来たらアイラブユーって抱きついて嘉光の髪に頬を擦り付けてその匂いを存分に味わい――」

「仕方ない、教室に戻ろう」

やっぱりお前に他人を否定する権利はないんじゃないかとしみじみ思いつつ、品行方正（笑）な私が踵（きびす）を返そうとしたその時、

「待って」

と杭瀬の声がし、私の首筋に何かが突きつけられた。

「おいそっちが待ってくれ。その逆手（さかて）に持ったシャープペンシルは何のつもりだ？」

「……最近ＮＡＲＵＴＯをよく読んでて」

「……そうか、せいぜい架空と現実を混同しないようにしろよ。別に私は忍じゃないからな」

お前は本気で忍っぽいけどな。冷や汗を垂らしながらも何か義務感のようなものが芽生えた私は警告をしておいた。もう確定だ。最近こいつ怖い。いや怖いというか恐ろしい。

やっぱり私も杭瀬も、この騒動で変わってしまったのだろうか。戦争は人を変えるんだな。まさしくはだしのゲンのようだ。

「まあちゃんと待つがな」

仕方なく話に乗る事にする。当然アイラブユーとかもふもふとかする気はないが。

「その嘉光はお前曰く記憶が飛んでるんだろ？　一体どうするんだ？」

そんな問いに杭瀬は、

「そこが晴希（はるき）の仕事。頑張って」

などと冷たい口調で言い放った。なんだ、ずいぶんと重い仕事じゃないか。

「あのな、考えてみろ。私は昨日一回はあいつと直面しておきながらそれがスルーされたんだぞ？　そんな全てが終わったような状態が今日や明日で変化するもんか」

「だからそれが晴希の仕事」

と、また杭瀬は冷たく言った。言っている事は根性論そのものだが。根性論なんて、私が最も苦手とする物の一つじゃないか。

「だから、『やらなきゃならない』の心構えだけでどうこうできるもんじゃない。一つ言っとくが、私は正直何も出来ないんだぞ？　お前らとは違ってな」

「……任せたから」

……あいつ、人の話ちゃんと聞いてたのかよ。なあ、呆れていいか？　なんて言ってやろうと思ったが、もうそこには奴はいなかった。

そして、計ったようなタイミングで六限目の始まりを告げる鐘が鳴った。

……全く、私にどうしろと言うんだ。あいつの言いたい事がさっぱり分からん。

第五十二話　完膚なきまでに私は

屋上への扉を閉め、階段を下る。そうして肩の力を抜き、ゆっくりと深呼吸した。

本当はこう見えても大変だった。「お前は楽でいいな」なんて晴希（はるき）は言うけど、でもそんなことはない。確かに晴希も大変そうだけど、私も楽ってわけじゃないし。むしろ私の方が……いや、そんなことは言っちゃ駄目かな。

「……あらま、疲れてるみたい」

降りる際にそんな気の抜けたような女子生徒の声が聞こえた。

……関わりたくない。

そう思ってすぐさま横を通ろうとすると、私がさっき晴希にした時のように遮られた。後輩相手だったし私ならこんなの通り抜けられるはずだったけど、でも出来なかったのはなんでなんだろう。

だから私は、せめてもの反抗として沈黙を保った。

「……む、やっぱり何も言わないんだ」

肩をすくめ口をへの字にしながら言う。

「さっきまではすっごい饒舌（じょうぜつ）に喋ってたのにね先輩。こう本持ってバーンって振り上げてさ」

あはは、と奪った本を振り回す。それを取り上げると「あはは、先輩怖いよ」なんて笑っていたけど、やっぱり私は黙っていることにした。

「先輩のおかげで文芸部のやることもみんな台無し。ほんと、残念もいいところだよ」

飽きてしまわないかと思うくらい彼女は笑っている、そんな振りをしている。それはまるでさっきの私と晴希のようだった。

「ねえ先輩、先輩のやったことはすごいよ。頼ってくる人が気に入らないからって騙（だま）してさ」

……いや、違う。私と晴希はそうじゃない。決して今この瞬間み

たいな関係じゃない。
晴希は言った。「お前には分からんだろうな」なんて。「お前は楽でいいよな」なんて。
だからそう、これは私一人の反抗なんだ。
「ありがとうね先輩」
「……違う」
「ん？」
「私は――」
私は、あんたなんかにお礼を言われる筋合いなんてないっ！

話を持ちかけられたのは昨日あの時、階段でのことだった。
晴希が先に戻っていくといって階段から廊下に出て、記憶喪失になってしまったであろう嘉光とぶつかったときのことだ。
「っと、ごめんな！　ごめん！　俺が悪かった！」
廊下の方からそんな声が聞こえてきて、私はそこで何が起こっているのかを把握した。見てみると、やっぱり嘉光。
――でもおかしい、ずっと（少なくとも本人の感覚では）逢えなかった晴希と再開したのに、まるで嘉光の反応じゃない。
と、そう思った。何も言わないがきっと晴希も同じ考えだと思う。
と、
「あらら、遭っちゃったか」
階段の下――というか奥の方からそんな、どこか気の抜けたような声が聞こえた。それほど興味のなさそうな口調だったし軽い野次馬のようなものなのかな――という考えを、私は思い浮かべですぐさま振り払った。
今の言葉は、私に向けられていたんだから。
晴希もいつも言ってると思うけど、私は晴希とか以外には無口で地味な人間で、他人に認識されること自体がない。晴希も密かに私

にこんな状況下でも文芸部との梯子を頼んでいたから、その辺りでどんなものかは分かってると思うけど。

だけど、この娘は普通に私を見て、普通に私に話しかけてきた。今にして思えばそう、多分調子が悪かったんじゃないかと思う。典型的な言い訳かもしれないけど、今の私にはそれくらいしか考え付かない。もちろん他に何かあったのかもしれないけど。他人事みたいな言い方でごめん。

「どうして」

「む？」

「どうして、ここにいるの？」

私はそう聞いてみた。まず彼女がなんなのかも気になるけど、結局はこれが一番の疑問だった。

「トイレだよ、トイレ」

「本当のことを言って」

「あれひどいなぁ。後輩を信じてくれないの？」

信じるわけがない、そう心の中で毒づいた。トイレに行くために階段移動、そんなことするはずがないし、野次馬だったとしてもごく普通に私に関わってくる時点でそれは普通じゃない。特別なんだ。私も彼女も。

「わかったわかった。ちゃんと話すから」

やっとのこと、そう言ってくれた。と――

「んじゃ、綾女も待ってるかもしれないんでな！」

「……ああ！？」

晴希と嘉光の、そんなやり取りの終わりが来たらしい。

「それじゃあ、細かいことは後で話すから」

だから待っててね、という言葉を残して階段の方に消えていった。

「と言うわけで早速説明をしてくれ、杭瀬」

「……そこで丸投げ？」

無理もないだろうけれど、晴希がいきなり困惑した顔で私に説明を丸投げしてきたときはさすがに呆れてしまったのだけれど……。

とりあえずさっきの嘉光の様子とか『綾女』についての発言とかを鑑みてみると……。

とそこで、階段の方にまだ気配が残っているのに気がついた。

「……どうした杭瀬」

「……なんでも」

「……そうか、ならいいが」

晴希はこの気配に気付いてなかったみたいだった。多分彼女が、私にだけ気付かせたのかもしれない。

「……とりあえず、お前の考えた理論を適当でもいいから纏めろ。私が突っ込んで叩いて出来れば原形をとどめず完膚(かんぷ)なきままに潰してやるから」

晴希はそんな優しくないことを言い放ち、私がさっさと説明をするのを待った。

――さっさと晴希との話を終わらせて、あの後輩の話を聞こう。

「待っててね」と言っていたから、向こうもそう催促しているみたいだし。

第五十三話　この手はつなぎあうためにあるんだ（前書き）

すいません、更新が非常に遅れました！

第五十三話　この手はつなぎあうためにあるんだ

「あれ、いつものニヒがり勉臭い眼鏡はどうしたの？」
午後に入るなり、俺こと大曽根誠文（超真面目草食系男子）の顔を見て奴ことアホ（葛原水月阿呆系女子）が変なことを言い始めた。
なんでい、俺の眼鏡がどうした。
「……何なのよその『何だこのアホ』的な目は！」
「……おめー、人の心でも読めんのか？」
「場の空気くらいは読めるわよ！　っていうかやっぱりそうだったの！？」
二十四時間三百六十五日、睡眠時とテスト時を除き常時休むことなく騒がしいアホは今現在も例に漏れずそんな反論をしてきた。あぁ、アホも空気くらいは読めたのか。つまんねぇ。俺は幸せとともに深くため息を吐き出した。これは後輩の晴がよくやってる事だが、やっぱいたずらにも心地よくはない。当然か。
「言っとくがな」
アホに空気が読めた事に落胆を覚えつつも、俺は右の人差し指をピンと突き立てながら言った。
「俺が一度でも葛原水月をアホとして……間違えた、アホを葛原水月として見なかった時があるか？」
くそ、肝心な所で口が滑ったぜ。
「そこはせめて間違えてて！」
「生真面目な俺にそんないい加減な事が出来るか」
「あんたは基本いい加減よ！」アホはそんなことを言う。
「なんてこった……こいつ、歪んでやがる」
俺は憎憎しげに呻いた。まだこんな歪んだ奴もいるんだなぁ。
「どっちの話よ！」
喚き続けるアホ。いやぁ、どっちってそりゃあ……
「アホと葛原、両方だ」

「どっちもわたしじゃない！」
「よし認めたな」
「あ……」
どうやらアホは己の失態に気付いたらしい。素直じゃねぇな。晴と同じくらい素直じゃねぇ。
「あ、あのねぇ、わたしはアホなんかじゃないわよ！……ってなんなのよみんなその反応はっ！」
アホの自己ＰＲの叫びに教室中がざわめき、それに対してアホが喚いた。
「なぁアホ」
「うん？　誰の事？」
目の前の奴に決まってんだろが。
「おめーはどうしてそんなにアホなんだぜ？」
「そんなきざったれた言い方しても知らないわよ！　わたしアホじゃないし！」
「なぁアホという名の葛原」
「だからさっきから私の呼ばれ方ひどくない！？」
「気のせいだっての。人間な、自分が蚊帳の外だって誤解すんのもよくあるんだぜ？」
つーか名前がアホであだ名が葛原じゃねぇのか？　インパクトって結構大事だぜ？
「そんな呼ばれ方するくらいなら蚊帳の外の方がいいわよ！」
「……あぁ分かったよ、アホさん」
「呼び捨てとかの問題じゃないっ！」
「大丈夫だっての。それでなぁアホさん、悔しくねぇのか？」
「今この瞬間が一番悔しいわよ！」
「そうか……まぁいいや」
俺は雲一つない、青々（あおあお）と晴れ上がった空に目を向けながら、淡々と話しを始めた。
「今部の後輩がさ、色々と大変なんだ」

「いきなり話が飛んだわね……何だっけ？……二年の二人がケンカしてって話？」
「あぁ、それな。けども実際あの二人はケンカなんてしてねぇし、それどころか今は会話すらできちゃいねぇんだ。もし仮にケンカしてたとしてもだ。それならそれで謝らなきゃならねぇだろ？
けどまるで、周りの奴らはそう思っちゃいねぇときた。爆発が怖いからってあいつらは、地雷の回収すらしようとしねぇのさ。多分そんなもんは自然となくなっちまうもんだと思ってる。
いいか？　人間歩み寄らなきゃ分かり合えねぇんだよ。理解しようとしなきゃならねぇ」
だってな、人間、前にも後ろにも進む事しか出来ないんだぜ？完全に戻るなんて、所詮（しょせん）無理な話なんだよ。
「むぅ……かなり考えてるんだ、バカのくせに」
「いんや、別に俺は全然考えちゃいねぇよ。単に難しく聞こえるだけだ。分かろうと思えば分かれる」
「……そうかもね」
「だから俺は人と分かり合うためにこうやってうぜーくらいに関わるし、おめーの事をアホとも呼ぶ」
「いや待って！　それはおかしいと思うけど！？」
「多少の犠牲（ぎせい）はしゃあねぇよ」
「……後輩達の犠牲は仕方ないの？」
また感情に乗せて突っぱねてくるかと思いきや、アホはアホのくせに開き直って生意気な事を言ってきた。それを今から取り戻すんだろが、と言い返そうと思ったがまぁそれもそれで言いにくい。けど少しは言ってやらないと葛原であるアホは当然、調子に乗る。
要するにうざったいパラドックス……でもないんだなこれが。やれやれ、この手を残しておいてよかったぜ……。
「おいアホ」
「な、なによ……」
「『似非』はニヒじゃなくてエセって読むんだぜ？」

「……」

当方、制圧完了っと。アホを苛(いじ)めるのは楽しいなぁ。

さて暇(ひま)も潰れたし、俺もそろそろ行くかね。敦次(あつし)のやつはもうとっくに行っちまってるみたいだし。

しゃれて伊達(だて)眼鏡なんて掛けず、今日の俺は全力で飛ばしてやる。

「待って！」

しかし教室を出たところで、そんなさっきのアホのように騒がしい声にまた呼び止められた。しかしアホではなく、

「……おうコエダ」

「コエダじゃないけどね！　コノエ！」

天森小枝(あまもりこのえ)ことコエダがそこにいた。しかしまぁ口調こそいつも通りだったがその表情が本気と書いてマジだったもんで、とりあえずは話を聞いてみる事にした。俺は人の調子を見る事にかけても天才なんだ。

「どうした？　話があんなら敦次に――」

「私が彼に言って、そしたらどうなる？」

「……なるほどなぁ」

敦次とコエダの関係はぶっちゃけて言ってしまえば、あまりよくない。なんというか、敦次の方がコエダを信用してないらしい。俺がいなかった時の新聞部の件での失敗、あれで信用も地に落ちてるってとこか。

「それで何が言いてぇんだ？　もしかして何もすんなとか？」

「そのまさかよ？」

「……マジかよ」

冗談のつもりで言ったんだけどな。

まぁしかしこいつが関わってる以上、敦次の判断は決まっている。ビジョンが目にありありと見えるぜ。結局ちゃんと見極めてやるべきは俺だけってか。めんどい役回りだぜ本当に。

けど、

「お前、俺がどんな奴かちゃんと分かってんだろうな？」

「……さあ？」
「……とぼけんな。大曽根誠文は何よりも波乱と混沌と坩堝を愛する男なんだよ」
予定は六時間目の途中、俺があああしてこうしてやればたちまち、バーンだ。学校をメチャクチャにしてやる。そういうのって心地いいだろ？　やめられねぇ、とまらねぇってな。
「ここであえて何もしないのも、それはそれで波乱だと思うけど？」
「んなもんシュールなだけだ」
「残念ね、気が合うかもと思ったんだけど！」
「それにあれこれ考えんのもめんどいだろ」
ま、実質後者が主だが。変なプレッシャーなんぞを背負ってたまるもんか。
「とうとう本音を出したわね！」
……はぁ、どうしてこう俺の周りには妙に鋭い奴がいるんだろうか。
けど、はいそうです実は面倒くさかったからですと引くわけにも行かない。さっきアホに言ったとおり、人間歩み寄らなきゃならない。
だったらそうだ、こうしてやろうじゃないか。
「お前の言う事なんてこの俺が聞くわけねぇだろ。敦次より説得しやすいだ？　なめんなよ」
俺は今更引かない。だからそう――
「止めたいんならてめえで止めろよ」
こうやってこいつに、敦次の代理の宣戦布告を仕掛けてやるしかないじゃんか。
「んじゃ、俺は文芸部室に行くぜ。お前はどうする？」
そう聞いてコエダは一瞬沈黙。だが、
「……手助けなんてするわけないじゃない！」
と叫んだ。
「はいはい、それがおめーの本性か？」

「……ええ、これが本当の私よ！」
「そうかい、分かったよ」
思わず苦笑した。俺のいないときに暴れておいて、こんな所で本性を晒す。こいつはどんだけ三流悪役なんだよと。
そうして俺は教室を出た。その時に、
「んじゃ、待ってるぜ」
なんて言っとくのも当然、俺は忘れやしなかった。カオスでも何でもどんときやがれ。楽しけりゃいいんだ俺は。何よりさっき言ったろ？　人間歩み寄らなきゃならねぇって。
だから、止めるんなら素直じゃねぇ態度じゃなくて真っ向から歩み寄ってきやがれ、コエダ。

第五十四話　カタチを持たない暗い何か（前書き）

最近更新が少なく、申し訳なく思いますっ。

第五十四話　カタチを持たない暗い何か

「それじゃあ、また後でね」
「分かった」
椎(しい)ちゃんとひとまずの別れを言っておいて、私はある場所を目指し教室を出た。そう遠いわけでもないし、あんまり焦(あせ)らなくてもいいのかな。まあそんな意識しなくても、焦る事はなかった。というか、
なぜだか焦る事が出来なかった。
昨日授業中に爆発が起きて、その放課後に椎ちゃんを文芸部に連れて行ったらなぜだか分からないけど椎ちゃんが正式に協力してくれる事になった。……うん、今までも「私を手伝う」とは言ってたけど。
……で、その椎ちゃんは今さっきご飯を満足そうに食べていた。とはいっても椎ちゃんのお母さんに許してもらえたってわけじゃないらしいけど。じゃああれってどこから手に入れたんだろう。まぁいいけど。
一方参謀先輩によると、どうやら今日で一気に流れを作って終わらせるつもりでいるらしい。昨日今日の二日連続で仕掛けて意表をついていくそうだ。戦略がどうとかよりそんなことを実際に出来るのがすごいと思う。例えれば、絵に描いた餅(もち)を実際に焼いてみせた、みたいな感じ。
嬉しいか悲しいかでいうと、すごく嬉しい。晴希(はるき)先輩も今の様子だと相当困ってるみたいだし、しばらくのライバルだとは言っても内藤(ないとう)先輩だって心配だし。
……ライバルだからこそ、こんな形で忘れてしまってほしくないし。
それで私は焦ることができないとは言ったけれど、それは決して心配していなかったわけじゃなかった。むしろ逆で、これが成功す

るはずがないって、そう思えてしまう。自分で勝手に決め付けて勝手に諦めるなんて真似はしちゃいけない、そんなことは最初からわかってるはずなのに。なんだか――

「なんだかおかしい……そんな気がしますね」

「……っ!?」

「おや、どうかしましたか？」

そんなことをいいながらいつの間にか隣にいて私を驚かせたのは菅原君だった。そういえば菅原君にはこうやって同級生にも敬語で話す癖があるけど、部のみんなは理由を聞くことなく納得している。一体なんでなんだろう？

それはともかく、いつもの彼にある余裕というか、何を考えているのかよくわからない雰囲気が感じられず、今はまるで顔に不安と書いてある、そんな表現がぴったりのようだった。

「いや、予期せぬ登場に驚いただけで……それで、そっちはどうしたの？」

言い訳をしながらこっちからも聞き返してみる。こっちとしては菅原君の方もやっぱり気になった。菅原君はそれを聞くと、

「……いや、これから起こることが何だか不安でしてね」

と、その言葉とは反対に微笑を湛えて言った。どうして無理に笑おうとするんだろう？　気になるけどやっぱり部のみんなに聞いたら沈黙されそうだな。

「はて？　さっきから様子がおかしいですよ？」

それはそっちの方だ、なんてこと私には言えるわけもなく、

「そ、それより不安って何かな？　参謀先輩なら大丈夫だと思うんだけど！」

話を変えてごまかすしかなかった。そうだよ、参謀先輩がいるなら大丈夫だよ！　なんたって人の心読むんだもん！

「どうでしょうか？」

しかし菅原君は退かず、

「まぁ、話は後にしましょう。こんなこと、廊下で話すことではあ

りませんからね」
と言って、部室に向けて歩き始めた。

「では、話を続けましょう」
部室に着いてすぐ、菅原君は適当な椅子を探して座り、止めていた話をまた続けた。ちなみに部室にいたのは参謀先輩、それによく知らない三年の女子の先輩だった。なんだっけ？　なんか覚えてはいるんだけど……。
「さて、肝心の『おかしな点』についてですが、これが正直な話、うまく言葉に表せないんですよね」
「うん……」
言葉に表せない、だけど何かおかしいのはわかる。それはほとんど直感で、証明してくれるものなんて何もないけれど。あそこにいる参謀先輩だったらどうかな、「非科学的だ」なんて切り捨てるかもしれないし、「なら何かあるのかもしれないな」なんて聞き入れてくれるかもしれない。なんだかんだ言っても私は参謀先輩のことはよく知らない。私の知ってるのはせいぜい、晴希先輩のことくらいだ。晴希先輩のことならいろいろ知ってる。
「けどそう思える理由はまったく関係ないところにあって、実際は何にもないってこともあるんじゃないかな？」
「確かにそういう可能性もありますね。ですが」
「だけど？」
「気になるものは仕方ない」
「そうだけど……」
確かに今すぐにでも晴希先輩の所に行きたくはあるけど、それは結局不確定な不安で、証拠なんてない。結局自分一人で決められるわけじゃないんだよね。証拠って。
そういえば晴希先輩とは一昨日の夜久しぶりに会ったんだっけ。あの時晴希先輩とはあんまり話せなかったけど、あれはいろいろ話したいことがたくさんあったし後にしようって我慢してたから。け

ど今になって思うと、ここからさらに大変なことになりそうな、そんな予感がして、少し後悔してる。

……あれ？　よく考えてみるとあの時晴希先輩と一緒に来てたのは菅原君だったっけ？　なんか色々話してたみたいだったけど……。ええと、それってつまり――。

「ん？　どうして僕の方を睨み付けてくるんですか？」

「いや、何でもないよっ！」慌ててごまかして、内心を悟られないように注意した。

――それってつまり、ダークホースの可能性も否定しきれないってことになるんだよね。

「前途多難ですね」

「そうそう、内藤先輩だけじゃないなんて」

「応援しますよ」

「またそんなことを言って……勘違いしないでね、私たちは敵同士なんだから」

「そうですね」と菅原君は相槌を打ち、そうして時間にして数秒経ってから聞いてきた。

「ところでそれは、何の話なんでしょうか？」

……。

「――――ッ！！」

声にならない叫びが、私の喉の奥からびっくり箱のように飛び出してきた。

第五十五話　反自然主義体制（前書き）

活動凍結、お許しください！

第五十五話　反自然主義体制

あの後参謀先輩や話をしている間に入ってきた他の人たちに「うるさい黙れ」なんて注意されてそれに軽くげんこつを振るわれて、私は正気を取り戻した。「え、あ、ええ……」そしてどう言いつくろうか大いに迷う。

それはそうと――もうすぐ、盛大に文芸部が動き出す。こんな馬鹿げた騒動を終わらせるために。

「さて、これから話を始めるが」

私のせいで微妙な空気になった場を、鳥のような鋭い目で見渡しながら参謀先輩が取り仕切る。……あれ？　そういえば大規模にやるって言ってたけどそれにしては人が少ないような？

そんな疑問に答えてくれたかのように参謀先輩は話を続ける。

「まずは今回の人員についてだ。今この場にいるのが少ないと思うかもしれないがこれでいい。あまりに多いと不自然が過ぎる」

……ああ、なるほど……っていやいやいや！　この人数でも十分怪しいから！　本当、参謀先輩は何を考えているんだろう。多いでも少ないでもなく、こんな中途半端にするのにはたして意味はあるんだろうか？　それともただ単に私の感覚がおかしいだけとか？

しかしその疑問も、ちゃんと拾い上げて参謀先輩は答えてくれた。

「そして少なすぎても駄目だ」参謀先輩は言う。少なくともこんな事態を招いた奴らには真っ向から見せ付けなければならないと。「静寂かつ盛大、自然過ぎない程度の不自然さをな」

え？　という気分。いきなり何を言い始めるんだろうこの人は。私にはよくわからなかった。

「不自然さ？」「普通に出来ればいいんじゃ？」他の人たちも同じ感想だったらしく、広々とした文芸部室はざわめいている。だが想定内も想定内といったように参謀先輩は説明する。

「言っておくが今回の作戦はそういうものだ。これは絶対に完全で

あってはならない。必ずしも一時の勝利は全体の勝利に繋がらない」

「ま、そういうこったな」

と、参謀先輩の隣で一人で納得していたのは……ええと、大曽根（おおぞね）先輩か。いつも付けているトレードマークの一種とも取れる眼鏡がなかったから一目見てもよく分からなかった。いったいどうしたんだろ。じつは伊達眼鏡でいつもは集中してるとか？

「じゃなきゃこいつがこんな強行手段取るかよ」

ま、どっちにしろ俺にとっちゃ楽しい展開だからいいんだけどな、とも上機嫌で付け加えていた。大曽根先輩も凄いと思う。憧れすら覚える。なにしろ今の状況を楽しんで、でもそれを破ろうとするのをもっと楽しんでるんだから。

だったら私も、やれることをがんばらなきゃいけないのかも。いや、がんばらなきゃいけない！

「話を続けてもいいな」

「いや、まだ少し……」「ちょっと理解出来ませんね」「結局何と戦ってるんだよそれ」参謀先輩が言ってもまだ周りはざわめいている。……うん、やっぱり無理がありすぎると思います。その理論は。

「喋るな息を止めろ。この中で少しでも自分は文芸部員であるという自覚を持つ奴は黙って俺に従え」

睨みながら恫喝すると、裏返しになったかのようにそのざわめきはたちまち沈静化してしまった。ああ、なんかごまかしたよね……参謀先輩……。

「今回は協力者がいる。その代表がこの」そう言いながら私たちが入ってきたときに一緒にいた女の人の方に手を払った。「新聞部部長、仁科由宇（にしなゆう）だ」

仁科先輩。私は心の中で呟いた。そう言えばそうだった。仁科先輩。前にもネタが欲しいとかなんとか言ってここに来てたな。あのせいで内藤（ないとう）先輩と晴希（はるき）先輩がデートすることになったんだった。うん……晴希先輩はあんまり気にしてなかったからよかったけど……うん……仁科先輩……。

「辛気臭い顔ですね」
ふと後ろからそんな声。菅原(すがわら)くんだった。
「そんな顔してた？」
「ええ、当然です」
本当かな……顔には出てなかったと思うんだけど。無理して笑おうとしたつもりもないし……。
「……って、私の顔見えてなかったよね？」
「ええ、当然です」
「じゃあ何で分かったの？」
「僕があなたなら、そう考えます。それに正直なので」
「正直って、私が？」
「ええ、当然です」
「そうかな？」
「ええ、当然です」
「そうかな？」
「ええ、当然です」
そうかな……確かに菅原君の指摘は正しかったんだけど、私が正直かどうかって言われるとそれはわからないし、第一照れる。
「菅原、朱鷺羽(ときわ)。喋るな」
「はい」
「……はい」
こっちを睨み文句を言う参謀先輩に菅原君が答え、それに合わせて私も答えた。
「お前らは……まあいい、たかが一人や二人いなくても構わないが、少なくとも他の奴の足は引っ張るなよ」
『はい』
今回は二人同時に答えた。そして反省。私も他の人の邪魔になっちゃいけないなんて思いながら。他の人たちだって真面目にやってるんだから、ここで私だけが折れるわけにはいかなかった。
「今回の目的は内藤を動かし、秋津と引き合わせる事であり、他の

事などどうでもい。全て終わってからの話だ。一度『点火』したら迷うな。内藤の教室を目指せ」

『点火』、それは昨日起こった……いや、実際には起こしたあの爆発と全く同じ事らしい。思えばあの時実際に何もしなかったのも、参謀先輩なりの宣戦布告だったように思う。

「邪魔が来てもこちらからは手を出すな。あくまで出されたらやり返すまでで、損害と敵は可能な限り少なくしろ。後が面倒だ」

そうして参謀先輩の説明は終わった。

「五分後に『点火』する。トイレなら今の内だが、でなければ出るな」

そう付け足してはいたけど、あいにくながら私もトイレが近いわけでなく、そのまま時間を待っていた。皆は緊張半分興味半分といった様子で、私もその例外ではなかったみたいだ。心臓がどきどきする。けど――

それと同時に、得体も知れない不安が頭をよぎってしまう。参謀先輩も何だかいつもらしくない気がするし。少しだけだけど臆病な力技。

晴希先輩を求めてこの部にやってきて、しばらく経った時のことを思い出す。まっすぐに行って、本当になんとかなるのかなって。

確かあの日は新聞部の人たちがなんか書いてて、それで慌てて行動してみて。

だけどいざやってみると私はすごい不器用で、晴希先輩も何も言えなくて。

結局晴希先輩に想いは伝えられたけど、それでも前と全然変わらなくて。

だけどそれをどこかで安心してたりもして。

そんな臆病で不器用でどうしようもない私の、あっけなくて馬鹿らしくて言葉にもならない告白だった。

「振り返ってみれば、おかしな話ですよね」

「……菅原くん、今日は自己主張強いね」

「はてはて、さっぱりですね」
そんな風に肩をすくめているけど、やっぱり菅原くんはあまりにもおかしい。違いない。
「また秋津さんのことでしょ？」
でもこうやって鋭いから困る。
「うんそうだけどっ！」
「男子の３１％、女子の５％でしたっけ？」
「そうそう！　晴希先輩人気ありすぎるもん！　周りにいる人だって――」
そう言いかけたやいなや、何かの爆発するような音が耳の中で反響するように聞こえてきた。
それが、火が点いたサインだった。

第五十五話　反自然主義体制（後書き）

久しぶりですね。久しぶりすぎて鼻水出ますよね、はい……。

えー、受験勉強などもあるのでこれから亀更新をも下回る更新頻度になりそうですが、是非ともご理解いただけると幸いです。白。

第五十六話　もう何もかもが狂おしい

――けれど、それはすぐに終わってしまった。

「……え？」

参謀先輩の表情が微妙に歪むのが見て取れる。他の皆も困惑した様子でいるのは明らかだった。

――ただ一人を除いて。

「……あー」

何か思い当たることがあるかのように大曽根（おおぞね）さんは苦笑し、

「なぁ敦次（あつし）、俺トイレ行ってきていいか？」

……え？　そんな話？

「……行くなら早めに行けと言ったはずだが」

「仕方ねぇじゃん。どうしても我慢できねぇんだから」

睨み付ける参謀先輩とは対照的に笑いを絶やさない大曽根先輩。

……ほんと、この人たちが仲いいのってどうしてなんだろう？

「我慢しろ。お前に限界なんて無い、そうだろう？」

と、閉鎖された状況を打ち破ろうとしている所で一人でトイレに行こうとする大曽根先輩に参謀先輩は表情も変えず言う。まさかそんな言葉をこんなシチュエーションで聞くとは思っても見ませんでした……。

しかしそんな言葉にも大曽根先輩は反応せず、

「わりぃわりぃ、お前ら適当に頑張っててくれや」

と、走りながら部屋を出て行ってしまった。

一体どうしたんだろう？　ちょっと前までは何かがおかしいって思ってた。けど今はそうじゃない。そうじゃなくて、何もかもがおかしいって思えてくる。

すると、今度もまた菅原（すがわら）君が反応した。今のやり取りのどこがどれだけおかしかったのかは私には分からないけれど、とにかくちょ

っと笑い声を溢しながらもそれを堪えている様子だった。宝くじでも当たったのかな？

「別に、何でもありませんよ。それより、ゆっくり大曽根さんでも待ちましょう」

と、彼は笑った。まるで私にはさっぱりわからない何かを分かっているみたいに。

「今は待つのが、僕らの役割ですよ」

急ぎのために廊下を突っ走り、早速角の一つに到着した。ここは俺が彼の美しい花火の一つを仕掛けていた場所で、そういう場所なら脳内に全て刻み込んであるなんてことは今更言うまでも無いよな。

窓の外側に目をやると、俺の爆弾が小さな爆発すらも防ぐように力づくで潰されていた。窓の隅に小さなひびが入っているのは、それだけ大きな力が余分なまでに加わったって事か。

そんな業をやってのける奴なら、別に俺の記憶にもいる。

「んじゃ出て来いよ！　コエダ！」

俺はそいつの名前を呼びながら、ピンを外した手榴弾を上に放り投げた。皆のアイドル大曽根誠文様お手製の、音だけ無駄に強いブツ。

そんな酸味の利いたパイナップルが約一秒後、音を立て——爆発はしなかった。

「皆のアイドル天森小枝様、ここに推参——かしら？」

女子にしては背の高く、一見そこらにいるただのＪＫにしか見えないそいつの手には、巻き戻されたようにピンの刺さった手榴弾が握られていた。

「何のつもりマコト君？　今は授業中なんだけど？」

「わりぃ、つい受験勉強のストレスでな。ついでに俺はそんな包丁で刺し殺されるような名前じゃねぇんだぜ？」

そう言いながら俺は懐からおもむろに銃を取り出した。おっと、

一応言っとくがＢＢ弾な？　威力は極端に高くしてるが、まぁ俺はちゃんと全力でやる人間だから安心しろ。
　要するにそういう事なんだよ。言葉なんてのは飾りだ。少なくともコエダがそんなものを必要としていない限りは、力づくでいってやるまでの事で。
「んじゃ行くぜ。こいつで一気に貫いてやるさ」
「へえ？　こちらは初めてだからやさしくしてくれるとうれしいな？」
　そんな表面上はやけにノリのいい会話をしながら、俺達は廊下にてぶつかり合った。
　すごく、体が熱かった。

第五十七話　凍えた思い溶かしたい（前書き）

「閣下さーん！　出番ですよー！」
「任せとけ！」
……これの元ネタに気づく人は果たしているのか。ヒントは別の閣下さんが出てくるアニメです。そして今回のサブタイにも気づく人はいるのか。
えー、御託はともかく、久しぶりの更新ですね。いろんな意味ですいません。

第五十七話　凍えた思い溶かしたい

「さあ逝くぜ！　まず一枚目！」
ドロー！　モンスターカード！
上着の中から拳銃を取り出し、一瞬で照準を定めて一発撃つ。男は黙ってヘッドショット！
躊躇はしない。当たればほんのちょっと非常に激痛を受ける事はあるだろうが、死にはしない。たまに人を殺せる性能の改造エアガンってのがあるが、こっちはその逆で、殺さない改造を施した実銃だ。専門的なことはともかく、あまり声を大きくして言えたもんじゃないな。見ての通り俺はごく一般的な学生君なんだから。ただ少し変わっているのは、ちょっぴりロマンを求めてしまうってところかナ。
それに、手加減なんぞしてやれる相手じゃない。つーかこっちが手加減してほしいくらいだ。
足を崩し身を翻し、大仰な動きでコエダは避けた。俗に言う「見切り」ってのとは正反対の動きだが、こいつにはしっかり弾道は見えてるんだろうな。そのまま回転の勢いに乗ってこちらに向かってくる。
左からももう一本拳銃を取り出し、足元を狙って撃つ。ここで当たると思えるほど俺は浅はかじゃない。これは必要な撹乱だった。一旦相手のペースに呑まれたら終わりだ。ヘッドショット？　とうに男はすたらせた。まぁ、もう一人の俺は、いい奴だったよ。
「んなっ！？」
ついつい驚愕が漏れる。こう撹乱しても構わず前に出てくるのかこいつは。馬鹿なのかこいつは？　少なくともこの強さは馬鹿ってかバグか。
そのままコエダは踏み込んで、拳をまっすぐ打ち込んでくる。咄嗟にガードした。

だが拳は届かない。ガードを打ち破ろうともせず、そのまま後ろにステップで下がっていった。背中に目があるのかは知らないが、足元の弾も綺麗に避けながら。すげえ。

「一筋縄じゃいかないってレベルじゃねーぞこれ」

「そっちこそ、咄嗟のゼロフレームでスタンガンが出せるものなの？」

「出たもんは出たんだ。仕方ねえだろ」

「それなら仕方ないわね」

右手に持ったスタンガンを再びしまい、代わりに一個拳銃を取り出す。名前？　忘れたね。覚えてられる数でもないし。せいぜい性能を身体が覚えている程度だ。

それにしてもさっきの突きは本当に冗談じゃねえぞと小一時間問い詰めたい所だ。踏み込みの時の音とか半端なかったぞ。恐るべしコエダステップ。

「さて、更に行こうかしらね？」

来るんじゃねえ。

なんて嘆いてみても仕方なしに奴がこっちに走り出してきている事に変わりはない。仕方なしにまた迎撃体制を――。

「っし！」

そんな鋭い呼吸音と共に見た目胡桃ほどの大きさの何かが直線軌道で飛んできた。これは――。

「弾かよ！　しゃらくせえ！」

小枝がさっき拾って弾き飛ばしてきた弾丸を、俺は咄嗟に銃の柄尻で叩き落とした。

その隙に、奴は突っ込んできている。想定内だったが、反応が遅れる事に変わりはなかった。元々蟻の穴一つ見逃さないような奴なんだ。当然だよな。

膝蹴りを飛ばしてくる。小癪にも弾丸を弾き落とした銃で視界が塞がれた右下からだ。

だがそうであったにしろ所詮想定内は想定内。今更視界を塞ごう

が、俺には関係ない。その奇襲で作れたのはたかが弾丸一個を叩き落とす動作の分だけの隙だけで、その成果なんてものは些細極まりない。

何より、その死角からの蹴りを待ち望んでいた。手と違い足は、一度勢いに乗ると止められない。特に高い蹴りはだ。

「甘えよ！　てめえにとっての最大の好機が――」

「私にとっては最大の好機！」

この野郎、人の言いたい事を先に言いやがって。ここだけ見りゃただの合体技みたいじゃねえか――などと言うよりも先にコエダは身体を捻り、

空中で跳んだ。

いや、「翔んだ」って方がいいかもしれない。そんな空中コエダステップ。いずれにせよこいつはそんな非科学的な動きをして、その上で鋭いローリングソバットだ。全く馬鹿げてやがるよな。

「ああ、全くだ」

だが、その会心の一撃は、俺には届かない。

剣にも槍にも銃にも、何にでも間合いってもんがある。当然足にもな。接近戦の大技だろうが何だろうが、それが超接近戦ならどうだ。

とはいえそんなリーチだとこっちもやりづらいだろうが――

「生憎こんなもんがあってな」

「それは残念」

両手に取り出したスタンガンを持ちコエダに当てようとする。だがそれも叩き落とされ、

「俺の勝ちだな、コエダ」

深く呼吸した後、得意げに言ってやった。スタンガンを捨てた両手は、そいつを捨てさせた両手首を掴んでいる。

「いいぜ、敦次」

直後、つい偶然にも、爆発が起こった。

風を感じる。これが私の力か……

……なーんてね。

「はあ……」

自らを取り巻くあまりに混沌で不愉快極まりない状況に、私は人知れず嘆息した。

今の私の恰好はカッターシャツにスカート、そして男子用の上着、それに靴下と上靴を履いている。

要するに今現在私は、下着を身に付けていないのである――なんてシュールな展開は勿論あり得ないから安心してほしい。何言ってんだ私。

まあ結局何が言いたいかというと、衣替えの時期がまだ先で助かったという事だ。

春風という単語がある。そいつは実に暖かな響きであるんだが、それでも所詮風は風というか、実際のところ外は実に寒い――今のところこうやってサボり、貴重な授業時間を立ち入り禁止の屋上で何もせず費やしていて得られたのは結局その程度の教訓だった。これだから言葉の響きってのはあてにならないんだ。くそったれ。

そう、これは最早一種のクソゲー。嘉光の存在ばりに非効率で私の士気もだだ下がりだ。そういうと落ちるだけ落ちた気がしなくもないが、しかし残念ながらこれ以上落ちないという確信はない。やはり嘉光の存在ばりに不条理で、上がるのは不快指数だけ。状況が変化するのが先か、私が折れてしまうのが先かという、これもまたクソゲーとなる。どこかでポジティブに切り替えなければ、いつまでも悩んでいられる気すらする。

杭瀬曰く今現在文芸部の方々は下で色々と頑張ってくれてるそうで、その無価値な嘉光のあんちくしょうをここに連れて来るからせいぜい腹くくって待ってろなどという、確かそんな話だったはず。これ前回までのあらすじな。

んでここから出るな、ともあいつは言ってたな。そういえばここは屋上、つまり外であるわけで、日本語ってややこしいな、などとどうでもいい事をふと思ってしまう。

そして寒い。……あ、今のジョークがじゃなくて周りの気温がな。地球温暖化とかヒートアイランド現象とかただの都市伝説だろ。フェーン現象ぐらい起こってくれないだろうか。……無理か。

まあだがこんな風に呟いている私にもそれなりに忍耐力というものは存在するわけで、利口にも我が生命を掛けてここで待ってやっているわけだ。分かりやすく言えばツンとデレ。何か違う気もするけど。それはともかく、どうだ。不覚にも泣けてしまう話だろ？

……いやしまったな、最初にハンカチの用意を促しておけばよかったかもしれん。これを見る時は部屋を明るくして画面から離れ、なおかつハンカチの用意を、みたいな感じで。

ああ、あと一つ重要な報告。さっき何かが爆発したような音が聞こえたが、すぐに止まったみたいだ。何が起こったのかはよく分からないが、とりあえずだらしねえなと言ってやりたい。つか寒いんだから早く来い。私が死んでしまってもいいのか。下着つけててよかったよ。外す気なかったけど。

「くそ、内藤……！」

ついついその名が口から出た。そうだ、この状況も全て内藤嘉光が悪いんだ。そうに違いない。そうでなければならない。自然の摂理である。

大体あの事件が起こるまでは、

『ヘイ晴希！　僕は互いの親睦を深め合いたいんだ。だからそういう意味でも結婚しようＺＥ☆』

確かこうだったはずが、再び会った時には、

『オウ済まないネお嬢ちゃん。……ン！　そういえばマイハニーを待たせてたじゃん！　ＡＨＡＨＡＨＡ！』

こんな感じになっていた。うん、確かにこんな感じだったね。一字一句間違いない。だんだんと怒りが込み上げてきたぞ。怒りゲー

ジマックスだ。マックスハートだ。プリティでキュアキュアだ……うえなにそれ気色わる……まあとにかくだ！

「……勝手に近寄ってきて勝手に忘れ去って、そんで勝手に消えて？　ふざけんな馬鹿野郎」

こんな風に私は束縛されてばかりなのに、どうしてお前はやりたい事やって、いてほしい時にいないんだよ。ヒットアンドアウェイ気取ってんのか。ふざけんな。

……いや、少し理屈が違ったかもしれない。

ふとそこで冷静になった。一度怒りゲージを消費してしまったからかもしれない。とにかく少しばかり反省タイム入ります。

まず、嫌いじゃないとは言った。だが当然そんなものは逃避であり、そんな逃避で事を終わらせようとした。あいつは限りなくしつこいからな。

ああ、確かに嘉光はしつこいさ。それだけに留まらずゴキブリ並に気持ち悪くうざったく、そしてしつこい（繰り返させてもらうが）。死ねばいいとさえ思う。重ね重ね言うが、死ねばいいとさえ思う。本当に大事なことなら二度言ったっていいじゃない。

そしてそいつから、私は逃げたんだ。

それは人として、いや、生物として当然の行動だったのかもしれない。仕方がない事だったかもしれない。

だが、一体それは何を意味する？

私は非力な人間ではあるが、それでもあんな奴から逃げなければならない負け犬じゃない。そんなの私が絶対に認めるか。こっちはゴキブリ見ただけで腰を抜かすアマどもとは違うんだ。

そうだ、結果的にはイエスかノーかの二択じゃないか。馬鹿言え、そんなもん嘉光に出来て私に出来ないはずがない。

「仕方がない」なんて糞食らえだ。いつまでも逃げてるだけだと思うなよ。

そっちが逃げるなら、こっちが追うまでだ。

「ふん、糞ったれめ」

そう吐き捨てて、来た扉の取っ手に手をかけ――
ガタッ。
「……」
……いや待て。ワンモアタイム。
ガタッ。
「……」
……ああそうか、これは引く扉じゃなくて押す扉で――
ガタガタッ。
「……」
……いやいや、『ガタガタッ』じゃねーですよ。SEきちんと仕事しろ。ドアの音ってのはもっと……いやいやそうじゃなくてだ。
どっかの誰かさんがお茶目な事に内側から鍵を掛けてしまっている、という事なんだな要するに。
「ははは、糞ったれめ……」
……いや、落ち着け私。ひとまずは素数を数えて落ち着くんだ。
逆境の中でも思考を放棄するな。
まず状況を判断しよう。屋上は高くにあるから気圧が低くなって、ボイル・シャルルの法則に従って気温が非常に下がっているわけでとどのつまりこのままだと私は凍死、少なくとも凍傷で体の一器官が動かなくなってしまうだろう。漫画のブラックジャックでヴァイオリニストの人が指切るしかなくなるって話があったしな。さすがにこの年で五体不満足は勘弁だ。いや死ぬまで勘弁なんだけどさ。
しかも困った事に私はこの脱出ゲームといったものの経験など『さっぱり妖精』が見えてしまうほどにさっぱりである。今度こんな事があった時のためにしっかりと予習しておこう、うんそれがいい。
まあいい、それでも私なりにヒントを探そう。いつまでもたらればで引き摺っていても仕方がない。
一見殺風景に見えるが実は一つ取り外せる石畳があるなんて展開でどうだろう。よし床を調べるぞ。
「……なんてな」

そんな地道でシュールな脱出ゲームあってたまるか。もしあったとしてもそりゃただのクソゲーだろう。何回クソゲーって言葉使えばいいんだ私は。気をつけろ。

……実際人生はクソゲーなのだが、もしそのクソゲーがここにまで及んでいるというならもうそれは私の知ったこっちゃない。勝手にしろ。

ガタガタッw

「うるせえよ！」

ついにドアにキレてしまった。これで普段温厚たる私も最近のキレる若者の仲間入りである。なんだかとっても嬉しくない。……いや、なんかドアが嘲笑ってるように聞こえたんだよ。

そうだ、まずはそのお茶目などっかの誰かさんに助けを求めよう。堅実にそんな考えに至り、私は携帯電話を開いた。こんな私でもアドレス帳にあいつらの名前はある。もっとも気付けば設定しておいたセキュリティすら勝手に潜り抜け登録されていたという次第なんだが。

『圏外』

……ああ、そういやそんな設定でしたね。すっかり忘れてましたよこんちくしょう！　中途半端に学校から離れると使えるようになるから悪いんだ！

「くそ、恨むぞ杭瀬！　あいつ私の事が嫌いなのか！」

激昂。そんな私の怒りに呼応するかのように、下から、足元から爆発音が響いてきた。

空気を読んだな、流石は大曽根さん。そこに痺れる憧れる。

後はまああれだ、空気を読んでこの寒さをどうにかしてほしい所存だ。

第五十八話　そんなものは似非だ

「わわっ！」

突然の和太鼓を打ち鳴らしたような大音響に、それまで時計を見つめていた私は驚いた。

時計の長針に目を向け、ついに授業を休んでしまったな、なんていう状況確認を何度やったかってような時で、要するに具体的にどれだけ悩んでたかってのはわからないんだけど。

ともかくそれは、つい十分くらい前に止んだ爆発が、また始まりを告げた音だったらしい。

「どうやら大曽根さんが妨害の動きを止め、そこで一宮さんが起爆させたようですね。自分一人で起爆させるように見せかけて、最初から大曽根さんはそのために……」

「菅原くん……今日はなんでそんなにアグレッシブなの？　あとなんでそんなに説明口調なの？」

菅原くんは思案顔で今日に限って何度目かも分からない割り込みをしていた。気付いたら背後にいたりするからどう反応すればいいのか分からない。彼は一体私に何を求めているんだろう。

「ああ、いえ、これはいわゆる名誉挽回ですよ」

と思案顔を崩して言う菅原くん。

「名誉挽回？」どうも菅原くんの言っている意味がよくわからなかったのでおうむ返しに聞いてみる。

「ええ、どうも僕が近頃この小説で空気キャラなんじゃないかと疑われているようなので」

キリッ！

なぜかそんな感じの擬音語が聞こえた気がした。これまた反応に困る。少なくとも空気じゃないとは思うんだけど……。

「いえいえ、空気も空気ですよ。なにしろ登場時期があなたと同じにもかかわらずアニメオリジナルキャラ呼ばわりですからね」

どうしよう。菅原くんが何を言っているのかまったくわからない……。

「まあこの辺りの話は杭瀬さん辺りが得意とするかと」

「杭瀬先輩、そんなのが得意だったんだ……」

実は杭瀬先輩と話したことはあんまりなかったりする。というか晴希先輩と話してる所しか見たことがなかった。ん……？

「杭瀬は存在感が薄く他人にほとんど話しかけないが、ただ秋津に対しては人が変わったかのように舌が回る。奴が似非無口キャラと呼ばれる所以だな」

どこからかずいぶんな説明口調が聞こえてきた。さっきの菅原くんにも劣らない説明口調だった。

「ああ、今のは『刹冥王（せつめいおう）』さんですね」

「せつめい……おう……？」なんだか凄そうな名前だって事はわかるけど……。

「三年の先輩ですよ。その名の通り説明口調に特化し、何よりすごいのは今のようにどのような状況からでも説明口調に繋げられる点ですね」

僕も見習っていますが、とつけ足す。

どうしよう、本当に菅原くんの言ってることがわかんない……。

「更には超必殺技の『最終鬼畜説明～アコースティックバージョン～』というのもあって、これはどういう技なのかというと――」

「無駄話は終わりだ。さっさと始めるぞ」

菅原くんが説明話をしようとしたところで、参謀先輩が呼びかけた。

「ああ、確かに急がなければなりませんね。行きましょうか」

「あ、菅原くん？　その最終鬼畜説明って？　ねえ、何それ？！」

「静かにしろ！」

怒鳴る参謀先輩。私たちの戦いはこれからだ。

……結局、説明口調先輩が何のためにこのタイミングで出てきたのかは分からずじまいだった。

「では、行きましょうかね」
眼鏡を上げて悠然と身を翻すのは新聞部部長の仁科先輩。新聞部員達を連れて、私達とは別方向に廊下を歩いていった。
確か内藤先輩の所へ行くのが目標とか言ってた気もするんだけれど……。
ちなみに私達はちゃんと内藤先輩の教室を目指している。別ルートとかそういうのかな？
「ああ、あれは――」
「うん、菅原くん説明頼む」
「いいですとも！」
私が振ってみると、菅原くんはなぜか水を得た魚のように説明を始めた。ところでどうして参謀先輩はここで注意しないんだろう？
「新聞部は今頃教室にいるであろう秋津さんを例によって攫い……もとい迎えに行き、僕ら文芸部は同時に内藤さんを確保、一緒に豚箱……もとい愛の巣にブチ込みます。新聞部は戦力が少なくても秋津さんを攫い慣れてるし、秋津さんの方も攫われ慣れてる。そこからは秋津さんが適当に頑張り、場合によっては再び簀巻きにして川に放り込み、イイハナシダッタナー。こういう事ですね」
……うん、後半はともかく、そういう事なんだ……。
でも色々と釈然としないところもあるなぁとは思う。攫われ慣れてるの意味とか、そういうのとはまた別に。
「ちなみにさっきから参謀先輩に咎められないのは、参謀先輩がこれを見ている皆さんを気遣っての事で……おっと誰か来たようですね」
「いや、誰も来てないけど……」
私がそう言っても、菅原くんは口を開こうとしなかった。ほんと、彼は一体何が言いたいんだろう。
「それはともかく、守坂さんは大丈夫ですかね」
あれ……？　菅原くんって椎ちゃんの事知ってたっけ？　まぁい

いや。
「椎ちゃんが何を頼まれたのかは知らないけど、きっと大丈夫なんじゃないかな？」
だって椎ちゃんは、すっごい強いし。
「大した信頼だな」
いつの間にか横に参謀先輩がいて、会話に加わっていた。
「俺も大丈夫だとは思っている。そんな事より重要な事だ」
「はぁ……」
自分で言うのもなんだけど、私はごく普通の女子高生だ。好きな人が女の子だとか、そういうのとは別に、例えば私にしか出来ないような事なんてないと思ってる。一体この人は私に何を求めているんだろう？
「俺は参謀じゃない。一宮だ」
「……ごめんなさい」
どうもそういう事だったらしい。何かと思ったらそれはまた――
「とはいえ、秋津の方も面倒な事になりそうな予感だな……」
「……どういう事ですか？」
「人間は、発作的に何かをやってのける事がある」
「え……？」
最後の一宮先輩の一言に、私は全く理解が出来なかった。

――思えばそれは、発作のようなものだったんだろう。

「ふーん……何だかよく分からないなあ」
無邪気さを感じさせる快活そうな声が、今は混乱したように頭の上に？マークを作っていた。そうして困ったような顔で、

「先輩の言う事はいちいち文学的で難しいや」
とも言う。
実際のところ、全てわかっているんだろうな。晴希も知らない——知ろうとも思わないような私の喜怒哀楽も何もかも。
すべてわかっていながら、それでも私の心を抉りにくる。それだけはまぎれもなく、ただの好奇心によるものなんだろう。こう言ったらどうなるか、こういう態度をとったらどうなるか、そういうのをまるで化学反応を取るように見ているんだ。
だから、はっきり言うと私は目の前にいるこの少女が嫌いだ。笑顔で心を傷つけてくるこの少女には、早く消えていってもらいたい。
それでも私はこうして戦いもせず向かい合っている。それは、私情より強い別の私情があるからだった。いや、私情だけじゃなくて課せられた義務さえも払いのけたわけだから、もっと深い心の奥底で思うことがあったのかもしれない。
どっちにしろ、我ながらおかしな選択をしたとは思う。これじゃまるで、最初から晴希を裏切るために力になろうとしたみたいじゃないか。最初はまぎれもなく、晴希の力になろうとしてたはずだったのに。
晴希はどうしているんだろう。そんなの決まってる。
「大丈夫、先輩？」
「……大丈夫」
まるで本当に心配しているような素振り。けど彼女は結局——。
「秋津さん、怒ってるだろうね……」
「……怒るに決まってる」
「だろうね……」
「……」
そうしていてくれないと、私がいったい何のためにこんな事をしたのか分からなくなる。そんな、たかが皆が不幸になるだけの反抗なんてごめんだ。
理解はしていたし何を言ってくるかもわかっていたはずなのに、

言われてみるとそれはそれは苦しかった。
「私は……」
そう言いかけて、また詰まる。私は、いったいどうなんだろう？
晴希の言うところの『似非無口キャラ』である私は、不意に晴希を裏切って、それで？
晴希を怒らせ、失望させ、何もかも白紙に戻して、それで？
いったいそれで、どうするの？
一度きり。退く事も叶わないのに？
そうした無意味も無意味な問いかけをしている私に、彼女は救いの手を差し伸べた。けどそんなものは、
「ああ……ごめんね先輩。もしいいなら、晴希さんの代わりにあたしがいるからさ」
私を突き落とすための、楽にするための手に過ぎなかった。
「私はっ！」
詰まった言葉が、やはりまた飛び出た。たださっきと違うのは、
「あんたなんか、大っ嫌いっ！」
と、ついにその言葉が続いた、続いてしまったことだった。
一度救いの手を振り切り、メーターを振り切ってしまうと、どんどん言葉の奔流が溢れ出てくる。今目の前の彼女はどんな顔をしてるんだろう。振り切れてしまった事への嘲笑か驚愕か、もしくは落胆かも分からないが、きっと呆れているんだろうなと思う。
けど私は目を背ける事しか出来なかった。一度でもそっちを窺ってしまったら止まってしまいそうだったから。ここで全て吐き出し

てしまわなきゃならないような気がしたから。
「あんたが晴希の代わり!?　ふざけないで!
私はそんなに人に飢えちゃいない!　確かに結果的に陥れたのは私だけど……けど人の背中を押して、なのに人を責めて、それで気持ち悪い仲間の輪に組み込もうとしてるのは誰だと思ってんの!?
大体さ、元々一人だったの私は!　孤独なんて今更辛くない!
下手な同情よりはよっぽどましだ!
そんな些細な孤独よりはあんたの仲間の方がよっぽど嫌だ!　虫酸が走るったらありゃしない!
腫れ物に触れるような態度されて嫌じゃない人間なんているわけないだろ!　そんな自己満足の優しさとっととやめちまえ!
触れるな!　抉るな!　知ったふりをするな!　痛いと思うなら何もしないのが本当の優しさだろうに!
大っ嫌いだ!　あんたも!　何もわかってない晴希も!　誰も彼もわかってくれないんだ!　ふざけんな!
そんなものは――似非だっ!」
いったい何を言っているんだろう自分は。わからないけど、まるで口のほうが勝手に動いたみたいだ。私ってこんなに情けなく、そして騒がしく叫んでしまう人間だったのか。
ところで前が見えない。どうしてだろう?――目を閉じているからだ。
じゃあ目を閉じているのはどうして?――泣いているんだ、私は。
それじゃどうして痛がってるの?――目が痛くてたまらないからだ。
なんだそれ。本当に狂おしいじゃないか。
「もう、戻れないんじゃないかな?」
何かを暗示したような言葉に畏怖のようなものを覚えながらも覚悟を決め、顔を上げると、睨みつけるべき相手は、もうそこにはいなかった。
そうだ、心を病んでいる場合じゃない。他人であるあれが何をし

ようが、結局は私の問題なんだから。立ち止まるな。そうだ、戻れると思うな。自分にやれる事だけを、ただやるだけだ。

そうでないと壊れてしまいそうだ。いや、もう壊れてるのかな？

どうでもいいや。

こういうのをなんて言ったっけ？……そうだ、『闇堕ちフラグ』とか言ったっけな。

そんなことを考えていると、なんだか外から『あいつ私のことが嫌いなのか！』なんて恨み節が聞こえてきて、

「……ごめんね、晴希」

決して聞こえないであろう、謝罪の言葉を口にした。

直後、晴希の憤りに呼応したかのように爆発は再開された。

第五十九話　『在る』が故の束縛（前書き）

毎度のこと遅筆、お許しくださいっ！

第五十九話　『在る』が故の束縛

「いいか、積分方を使う事で整関数の次数は一増える」
五時限目。数学教師がくどくどと説明していたが、聞いている奴は半分にも満たない。俺としてはこの人の話は結構面白いと思うんだが、今はちょっと懸案事項があって聞けない。
懸案事項ってのは、最近クラスメイトの俺を見る視線が変わってきたような気がしてならないってことだ。
「例えば一次関数を積分すれば二次関数になり、二次関数を積分すれば三次関数になるといった具合だ」
例えば綾女なんかはいつもおかしいんだが、近頃は更におかしくなったような気がする。授業中でもチラチラとこちらを窺い、目が合いそうになると避けるといった具合だ。綾女ほどはっきりとはしていないが、他のやつらもそんな感じ。
最初は何か俺に付いてるのかもしくは憑いてるのかと思ったが、別に内藤家に血塗られた歴史があったわけでもない。たぶん。
「これを発展させることで、さまざまな可能性が開けるわけだ」
思い当たる節はないわけではないが、

・件の夢の事。
・ここ一週間より前の記憶がはっきりとしない。
・教室には窓があるにもかかわらず携帯の電波がなぜか圏外。
・そもそも綾女は確かここのクラスじゃなかったはず。

とまあこの程度の些細な出来事で、どれとどれにもつながりが見えない。
自分一人で悩んでいても仕方ないのでクラスメイトに聞いてもみたが「ああ……そう」とかそんな曖昧な答えばかりで話にならなかった。

「今このように三次元の世界にいる我々だが、七次元の世界に行く事も理論上不可能ではない」

綾女について？　そんな個人を詮索するような事聞けるか。

と、後頭部に軽い何かが当たった。

何かと思って拾ってみると、丸めたルーズリーフだった。きっと俺宛てに何か話があるんだろう。投げやすいように重りとして消しゴムが包まれていて、紙にはこう記してある。

『消しゴム貸してくれ　ｂｙ廣前』

後ろの方に目をやると、クラスメイトの廣前と目が合った。なるほど、得意顔だ。

俺も素早くルーズリーフを取り出し、『死ね』と書く。消しゴムに丸め、一度振り向いて場所を確認し、奴の方に全速力で投げた。

「そう、今こそ次元の壁を越え、我々は更なる進化を目指すべきではないかと思うのだ」

後ろを確認すると、果たしてそれは額直撃コースだった。ざまあみろ、とほくそ笑む。せいぜいその消しゴムを使ってろ。何が貸してくれだ。普通に持ってるじゃないか。

それで、何の話だったか……そうだ、自己紹介を忘れていたな。俺は内藤嘉光。ごく普通のありふれた高校二年生だ。

……冗談だ。確かこの状況がどうなってるのかって話だったな。

「そのためのひとまずの目標は四次元世界だ。おそらく二十三世紀には一般的なものとなっているだろう」

四次元の世界……次元の境界……なるほど、一理あるな。思えば俺のいるここは些か三次元だけに縛られすぎているのかもしれない。という事はまずこの理を崩すために……

「まずは今いるこの世界で絶対的なものとされている三次元の理を崩すため、積み上げられたバベルの塔を根本から破壊する必要がある」

そう、バベルの塔だ。あれが崩れれば万物を結び付けている言霊は消え去り、その時こそこの世界は次元の壁を突き破り、新たなる

ものとして生まれ変わ――
「いっ！？」
不意に後頭部に雷撃が走った。俺は後頭部にぶつかり上に跳ね上がったブツを取った。一体誰だ！　思わず目から星が出たぞ！
『だが断る』
言うまでもなく、廣前だ。ルーズリーフは威力を増すためか、消しゴムを五個包んでいた。お前消しゴムどれだけ持ってんだよ。
それならこちらにも考えがある。
『黙って死ね』
ノートにそう書き、ブーメランのように手首にスナップを利かせ後ろに投げる。見事命中だ。
すると今度は、後ろから教科書が飛んでくる気配がした。おそらく四冊だ。
だがその行動は読めていた。懐からノートを四冊取り出し、教科書が飛んでくるのと同じ方向に投げて相殺する。こんなの朝飯前だ。
だが、それでもなぜか後頭部に衝撃来る。なるほど把握した。先の四冊は囮で、もう一冊をまったく同じ軌道で投げたのか。そこまでしてくるなら、やるべきことはひとつ。
「ぶっ潰す！」
体ごと反転させ、ありとあらゆる武器を揃える。シャーペン、三角定規、コンパスは当然の事、前にある黒板消しや教室の隅のプラスチックバット、偶然ポケットに入っていたカッターナイフなどもだ。廣前も教壇においてあるチョークの箱や美術室からくすねてきた彫刻刀を手に持っている。
たちまち戦争が始まった。俺と廣前の間を、『死ね』やら『地獄に落ちろ』だのと書かれ言霊で威力を増した飛び道具が凄惨に飛び交う。
『授業妨害とは何事だ！　廊下に立て！』
ふとそんな文字が目に入る。それが数学教師が俺たちに投げつけた机に書いてあったものだと理解したときには、既に俺は飛んでき

た机に頭を強打していた。

「お前のせいだ内藤」

「死ね」

今度こそ目から星を出しながら、俺は廊下に立たされた。廣前も一緒だ。やったね！

「正しいから死なねえよ」

どういう理屈だそれは。

「……まあいいや。死なない代わりにひとつ質問に答えてくれ」

「その理屈はおかしいが、それでも親友だ。話ぐらいは聞いてやる」

「いつから親友になったかは知らんが」

「ひでえ」

何やら変な事を言っているが、俺は無視して続けた。

「最近俺の周りで、何かあったのか？」

直後、廣前の表情が硬くなった。そして目線をきょろきょろと動かしている。誰がどう見ても怪しい。言い逃れは流石（さすが）に無理だろうな。

「あー……なんて言えばいいんだろうか」

「……言えないのか？　それとも知らないだけか？」

「知ってるぜ」

こいつ……あっさりと言いやがった……。

「けど言えないな」

「どうして」

「俺が言うべきことじゃないと思うんで」

廣前は肩をすくめて言った。その様子があまりにもムカつく上、若干事務的だったので、

「言えよ馬鹿！」

俺はキレた。きっと理不尽な怒りではないはずだ。

「いきなり胸倉掴んでキレんなよ！　さっきまで理解してそうな態度だったくせに！」

「まあいいや」俺はつい熱くなって掴んだ廣前の胸倉から手を離した。「使えないやつだとは思ってたからな」

あーあ、本当にがっかりだ——そんな視線を向けると、廣前は全く同じ視線を俺に向け、

「馬鹿か」

と言い放った。

「何言いやがる。馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ」

「黙れ馬鹿。ここで俺が言う事で生じる弊害を理解しようとも思わんくせに」

「弊害……？　どういう事だ」

言っていることがよく分からなかった。お前が言わない事で宝くじでも当たるのか？　それとも俺に事実から目を逸らさせる事自体が目的でその隙に事実を捻じ曲げるつもりか？　よくわからんが許せん！

「なんなら邦崎に聞け。お前のためにわざわざうちのクラスに来たんだぞ」

「俺のため？　冗談よせよ。なんで綾女がそんな事」

俺がそう言うと、なぜかこいつは、

「まだまともな馬鹿だと……思ってたんだけどな……」

更に非難するような視線を向けてきた。何が言いたいんだ！　意味が分からない！

「お前は本当に馬鹿だったんだな……」

ただ、とりあえず馬鹿にされていることだけは明白だった。

「男には、戦わなければならない時がある！」

「ほう……言ってみろ小僧」

両手を大きく広げ目の前の相手を正面に見据える俺と、学ランをマントのように翻し挑発する廣前。

「己の存在を笑われた時だ！」

覇気で窓ガラスにひびが入るが、そんな事どうでもよかった。俺はこいつをぶっ倒す！　たとえこの命に代えても！

「……何をやっているお前ら」
そして、今ぶつからんとした時、教師が俺たちの間に入り、両者の拳(こぶし)を止めた。
「お前らはやはり私の手の届く範囲にいなければならないらしいな」

「またお前のせいだ馬鹿」
「死ね」
とうとう俺は簀巻(すま)きで教壇の横に転がされた。今度も言うまでもなく廣前と一緒だ。やったね！
ちなみにその張本人である教師は今第四の壁を壊せる可能性について言及しているが、誰も聞いている生徒はいない。俺もこういう状況でなければ聞けているのだが……。
こうなってみて気付いたことなんだが、どうやら俺は簀巻きにされる事に一種の懐かしみを感じてしまう体質らしい。なんだ、ただの変態じゃないか。
そういえば廣前がさっき言っていた、弊害だの綾女だのは一体どういう事なんだろうか。単純に繋げると、俺が知ってしまうと綾女が何か損するって事か？　何が何だか意味が分からない。
――一体どういうことだよ、綾女……。
綾女の方を向き、目でそう伝えようとしたが、目が合った瞬間に俯(うつむ)かれた。ひょっとして俺、嫌われてるのか？
と思ったのもつかの間、教室内がざわめく。
「とうとう来たか、文芸部」
すぐ側で簀巻きにされている廣前は既に状況を悟っているようだ。
「何の用だ」
教師の声だ。教室の入り口に向かって話しかけている。
その相手が、口を開いた。
「どうも、文芸部の一宮敦次(いちのみやあつし)です。幽霊部員の内藤君を引き取りに来ました」

第五十九話　『在る』が故の束縛（後書き）

今回のタイトル、単なる数学教師の台詞です。本当にありがとうございました。

第六十話　分かったんだよ、全部全部な

二十一世紀、太平洋戦争が終結し六十年ほど経ち、人々が多次元に憧れ始めたその時代。

俺とクラスメイトの廣前は正確的なまでの武力と暴力的なまでの知略をぶつかり合わせていたが、その闘争は惜しくも数学教師の手によって止められてしまった。

結果、俺と廣前は共に簀巻きにされ、教壇の横に転がされてしまったのだ！

そしてそこに現れたのは文芸部の実質最高顧問。カリスマ、火力、素早さ、読心術、説明口調と、どれにおいても学内トップクラスの実力者、一宮敦次……ってやべぇ！　文芸部の事なんてすっかり忘れてたから、なんともあるぜ！

「その独白はいまいちわからない。いずれにしろ幽霊部員たるお前の身柄は今から文芸部が引き取る。依存はあるか」

ある。だって簀巻きなんだぜ？　普通に拉致されるならまだしも、簀巻きじゃなぁ……。

クラスメイト達も納得できないらしく、無言の視線を一宮さんに向けているが、当の一宮さんはびくともしていない。

「経緯がいまいち分からない。だが、お前を縛っているそれなら解いてやる」

やった！　それなら……

「納得できないな！」

という所で制止の声が入った。今の声は統率部の音無！　その名前とは裏腹に大きな声で第一声を張り上げる事で流れを引き寄せる事を得意とする男！

でもどうしてだ？　だって拉致っつったら男のロマンじゃね？

「そうだそうだ！」

「七次元にぶっ飛べ！」

「空気読めよ、文芸部！」
そんな俺の思いも空しく、クラスメイトたちは矢継ぎ早に一宮さんを非難していく。
「黙れ」
だが一宮さんはあろうことか、その一言で一気に切り捨てた。
「この中で自分は正しいと、胸を張って言える奴が果たしてどれだけいる？　右に倣えの精神だけでここまで来ていると言うならそんな根性は一つの正義の前には無力極まりないな」
『……』
一宮さんがそう言うと、皆は黙り込んだ。流石にそこまで言われると、非難の目も向けられないんだろう。そりゃ正義なら拉致されても仕方ないもんな……え、そうだよね？
周りを見渡す。そこには毅然とした態度の一宮さんがいて、突然の展開に戸惑う中二病の数学教師がいて、どう反論をするか考えあぐねているクラスメイト達がいて。
そして何とも言えない、辛さと悲しさと切なさの混じったような表情の綾女がいた。
……。
「……すんません、やっぱり俺は行けません」
どうやら、俺には黙って一宮さんについていくより先に、まだやるべき事があるらしい。
どんな理由であれ、こんな様子の綾女をそのまま置いていく事なんか出来るわけないじゃないか。
「……そうか、よく分かった」
呆れたような悟ったような表情で一宮さんは俺の方に近寄り、縄を解いていった。ちなみに「おい、俺のも解いてくれていいはずだ」と訴えている廣前はガン無視である。ざまあみろ。
縄を解きやっとの事で解放された俺に対して一宮さんは、
「ちょっとくすぐったいぞ」
襟首を掴み、顔面を黒板に叩きつけた。

「ゑ……」
力技か！？　まさかの力技ですか！？　それくすぐったいってもんじゃねぇよ！　ごく普通に痛ぇよ！
これにはクラス内も騒然となった。皆、さすがにこれをスルーするなんて真似は出来なかったらしい。
「内藤！　大丈夫か！」
「いくら幽霊部員相手にもやっていい事と悪い事があるだろ！」
「ちょ！　あんた何黒板凹ませてんですか！」
お最後の苦情！　何か論点違うぞそれ！
「気にするな！」
一喝。さすが文芸部部長、鶴の一声というか何というか。
……ねぇ一宮さん、怒っていいですか？　今俺、すごく頭がくらくらしてるんですけど。
ふと、教室のドアからまた新たに別の人間が入ってきて、こう叫んだ。
「一宮さん！　秋津が見つかりません！」
「……やっぱりか」
一宮さん！　腹いせだか何だか知らないけど俺の頭を黒板に連続で叩きつけないで！
そう叫ぼうとしても、無情の右腕は止まらない。まったく、わけがわからないよ！
ってか秋津晴希って誰だ！　俺はそんな奴は……
……どうして下の名前が分かったんだ、俺？
「新聞部どもに探すよう伝えろ！　それとこちらの一年も回せ！」
「了解！」
未だに手の動きを止める気配を見せず、一宮さんは指示をしていく。よく見ると廊下には結構な人数の文芸部員がいた。もう分かった。最早これは単なる幽霊部員への刑罰じゃない。　俺一人への当て付けでこんな盛大に動く必要なんてない。
「あえて」の可能性を外してみると、俺一人ではなく、俺を含むた

くさんの人間への当て付けになるか。
それでも、発端は俺なんだよな。
俺が忘れて、綾女のためにこいつらが思い出させないで、そこに文芸部が現れた。
全ての元凶の俺は思い出さないといけないだろうが、かといって綾女をほっておくわけにもいかない。
そもそも思い出すべき事なんて……ああ、秋津晴希か。
……晴希じゃないか！
どうやらこれでもかというくらいの頭部への衝撃で、俺は全てを思い出してしまったらしい。
全部分かってしまった。晴希の事も、記憶喪失の経緯も、全部全部。
綾女がここに来た理由も含めて、だ。
だったら俺は――
「とべっ！　いぢっ！」
止めて下さい、一宮さん！
「あと十二回だ」
「なるほど、百八回――煩悩の数だけやる気か！」
一宮さんの何気に計算された力技に、廣前が叫んだ。という事は九十六回やったのか……って今まで全部数えてたのかよ！？　そんな暇あったらさっさと止めやがれ！
そんなこんなで十二回終わり……
「もうやめろ！　内藤のライフはゼロだ！」
音無！　それ最後までやり終える前に言いやがれ！　利口にもタイミング計りやがって！
「やめたげてよお！」
「内藤の体はボロボロだ！」
お前らも便乗すんな！　そんなこと一宮さんも分かってるから！
「おい一宮、内藤の顔が四次元物体のようになっているぞ」
……先生、何が言いたいかは分かりませんが、怒っていいですか？

「元々だ」
「一宮クゥゥゥゥゥゥン！」
もう駄目だ！　我慢ができねえぞぉ！　俺はあまねし星空の力を集め――
「内藤」
「すんません調子こいてましただから頭を鷲掴みにしないでください」
駄目だ……たとえそんな力を揃えたとしても、この人には勝てる気がしない……。
「内藤」
「すいませんすいません！」
「秋津はいいのか」
「はっ！？」
そうだ、大事な事を忘れてたじゃないか！
「晴希の事……？　って事はやっぱり全部思い出して……」
「……っ！」
と、強く反応した綾女の方に目が行った。そうだ、こっちも大事だったじゃないか。
もう俺は綾女の本心を分かっている。だからこそ、どうにかしなきゃならない。
とはいえ俺に出来るのは些細な事。だがしかし躊躇う理由はない。
俺は綾女の前に歩き、安心させるために表情を和らげて言った。
「綾女、ありがとな。お前は俺のためにずっとここにいたんだろ？」
「それは……」
だが綾女は俯いて、視線を俺の顔から逸らしている。……ええと、これは？　どっちなんでしょうか一体？
「肯定だとさ。よかったな内藤」
と廣前は言っているが、所詮廣前だからな……。
「肯定だ」
ああ、一宮さんの言う事なら間違いないな。

「だから言っただろうが！　何いっちょ前に俺をディスってんだ！」
聞こえない聞こえない。
……しかし、そうか。綾女は川に落ちて記憶喪失になった俺を心配して、ただそれだけの理由で元のクラスまでほっ放り出してここに来てたのか……まったく。
「馬鹿が」
……なあ一宮さん、物には言い方ってもんがあると思うんだ。
「言っておくが邦崎綾女の事ではないぞ。内藤、お前の事だ」
「馬鹿なっ！？」
「馬鹿はお前だ」
……いや、思えば確かにそうかもしれない。
なんせ俺は、自分にとって大事な女一人の事まで忘れて、何も知らないままクラスメイトと楽しく消しゴムやノートを投げ合っていたんだからな。
「残念ながら論点はそこじゃない」
「馬鹿なっ！？」
なんてこった、俺はそんなに馬鹿だったのか！？
「だが、お前の馬鹿などどうでもいい。今は口より手を動かせ。ここは文芸部室じゃない」
「！！」
一宮さんのその言葉に、俺ははっと気がついた。
……まったく、あやうく本当の馬鹿になるところだったじゃないか。
やることが限られてるなら、そこは口より手だ。その手で俺は、
「綾女！　行くぞ！」
「えっ！？　えっ！？」
彼女の手を引っ張り、教室を飛び出した。
「……とうに本当の馬鹿だがな。せいぜいやる事をやれよ、内藤」
すれ違いざま、一宮さんはそんな嬉しいんだか悲しいんだか分からない事を言ってくれた。

「内藤の奴、どこに行く気なんだ？」
「案外何も考えてなかったりしてな」
「まさかそんな事はないだろうよ」
……。
やっぱり俺は、ただの馬鹿なのかもな。

第六十一話　この世界は自分が全てを知ったと思い込むには広すぎて適わない

「……さて、たっぷり話を聞かせてもらうぜ？」
再着火を無事成し遂げた俺は、小枝（このえ）の手首の拘束を解いて訊ねた。
今のこいつはコエダじゃなくていい。単なるコノエだ。
「……あのさ」
と呆れた様子の小枝。そこに普段のテンションの高さはない。やっぱり猫被ってたのかね？　普段のこいつも結構好感持てたんだけどな。
「ここでこの私が悪役だったとして、その程度で口を割ると思うのか？」
と聞き返された。まるで馬鹿を見るような目で。
「おい、誰が馬鹿だ誰か」
「誰も馬鹿なんて言ってないな」
そういやそうだ。まるでそう思ってるような気はしたけどな。それはそうと、急に口調まで変わるのか、こいつってば。
「まあいいや馬鹿……あのな」
未だに呆れて物も言えない様子の小枝だったが、気にせず俺は進めた。勿論、こっちも馬鹿を見るような目で。これで晴れて対等の立場だ。
「てめぇが敵なわけねぇだろ。なんなら俺をただ止めようとしかしてねぇ時点でてめぇは悪役失格だ」
それからも俺は説教を続けた。やれ普段のキャラの割にぬるい、やれそういう立ち位置じゃない、やれ既に証拠（フラグ）は立っている、エトセトラエトセトラ――。
自分でも散々と思えるほど言い終えた後、改めて詰問（きつもん）する。
「んなわけで、言ってみろよ。お前の真意をよ」
「だから、どうしてこの私がそれを言わなきゃならない？」
小枝は相変わらずこんな感じだ。これだから世間を斜めに見てる

奴は困る。
そんな奴の相手なら、足元を見てしまえばいい。
「一人の部員としてだ。文芸部なめんな」
こいつには何らかの文芸部にいる必要があるらしい。それが何かは知らないが、利用してやるに越した事はないだろう。
思惑通り、小枝は渋々説明してくれた。
「……弥葉琉(みはる)が裏切って晴希(はるき)を屋上に閉じ込め出したから、ここで急ぐとかえって状況が悪くなる、なので止めようとした、これだけだ」
似非無口が……あー、なるほどな。
急がず焦らず、まずそいつをどうにかすりゃ安泰だったってか。現に教室に晴はいなくて、状況は最悪な方向に行ってやがる。
けどな、勘違いすんな。多分お前にもお前なりに葛藤があったんだろうが、そんなお前でも全部の全部を知ってたわけじゃないんだぜ。
「敦次(あつし)はな、んなこたぁ知ってたんだよ」
それが答えだ。誰も信じやしないだろうが、この風当たりの強い状況を、敦次の奴は誰よりも正しく予測していた。
「それでも行ったんだよ、ガツンとな」
俺は自分の左の掌に右の拳をガツンとぶつけながら言った。
「……嘘だ。でなかったらただの無謀だ」
「ちげーっての」
その両手をポケットにしまい込む。
まぁ確かに今頃晴(はる)の奴は一人屋上だ。リスクが馬鹿にならない、非情なやり方だな。まぁいい、あいつには泣かずにせいぜい頑張って貰おう。
「晴はいざって時にゃ、きっちりやってくれるんだよ。信じる力をなめんなよ」
「……は？　信じる力と？」
「そそ」

軽く首肯し、ポケットから取り出した眼鏡をかける。
それに対して一欠片の信用もない、半分呆れ顔の半分無表情――
どうもてめぇはまるで信じちゃいないみたいだけどさ、実際あるんだぜ？　そういう少年漫画的な理論ってさ。
だからさ。
「もうすぐ分かるっての」
顎を上げ、人差し指で晴のいる屋上を指し示した。
百聞は一見にしかず、それを今からこいつに教えてやるんだ。俺が、晴が、誰もかもがな。

第六十二話　Ｉｓ　Ｓｈｅ　Ａｌｉｖｅ？

廊下を歩き、新聞部の後に続く。
何もせずただ腰を据えてさえいればよかったはずの晴希先輩は、突然消失してしまった。これは今の私たちにとって、まさに死活問題だ。あの時私の感じた嫌な予感は、見事に的中してしまったらしい。
……そして久しぶりに見た内藤先輩は、頭を黒板に何度も叩きつけられていて、ひどく痛そうだった。最後に会った時の、川に落ちていった姿がフラッシュバックしてくる。
「あの様子ならもう思い出してるんじゃないでしょうかね」
と言って底の見えない笑みをたたえて割り込んでくるのは、やっぱり菅原君だった。どうもこの騒動が始まって以来、彼の出番が異常に多い気がする今日このごろ。
「思い出すって……晴希先輩の事？」
逆に記憶が飛んでしまってそうだけど。
「そうです。ちなみにあそこから記憶が飛ぶ事はありませんよ」
「どうして？」
記憶が不安定な状態からだからむしろ危なそうなんだけど……。
「ボリュームじゃなくてスイッチなんですよ。頭への衝撃でオンオフする、ね」
歩きながらそう言って菅原君は振り返る。
「これをハロー効果といいます」
「嘘だよね」
「ええ」
「……」
冷めた。
「安心してください。スイッチについては本当のことですよ。そしてきっと今頃は邦崎（くにさき）さんとのジレンマに悩まされてるんじゃないん

ですかね？」
「……まさか。それも冗談だよね？」
「勿論ですとも」
菅原君は当然のように言うけど、私には本当のところどうなんだか分からない。だからこそそんな冗談はできればやめてほしかった。真に受けたらどうするんだろう。
「本当のところ、どうなの？」
「知りません」
そこだけなぜかやけに軽薄そうなにやけた顔で、菅原君は爽やかに言い切った。
「ええ！？」
「驚きすぎでしょう」
まあ確かに言ってる事はそうなんだけどさ……なんせ菅原君は単なる一人の文芸部員でしかなく、言っている事も単なる憶測でしかないんだから。
けどそれから表情を正し、
「ただ、たとえ内藤さんが邦崎さんの想いを知ったにせよ、結果的にあの人は秋津さんを選ぶでしょうがね」
と言って、その言葉は更に私を混乱させた。
「……どうして？」
「邦崎さんは、脇役なんですよ」
「……」
ちょっと菅原君が信用できなくなった。
「安心してください。半分冗談ですよ」
「半分は本気なんだ……」
脇役って理由で弾かれるんだったら、私的には胸が痛い話なんだけど……
「秋津さんも脇役です」
「……」
更に菅原君が信用できなくなった。

「わかりました。ちゃんと話をしましょう。本気と書いてガチで」
あくまで憶測ですがね、と釘をさしながら個人的な観測を述べる菅原君。本気と書いてガチって……。
「内藤さんは、それほど周りをどうでもよくは思ってないんじゃないですか？　秋津さんを溺愛していたのも周知の事実ですが、そこにはある種の開き直りを感じましたよ。まるで自らを軽薄にしているかのように、ね」
「ええと、それは、実際は色々悩んでいるんだけど、何にも悩んでない振りをしてるって事？」
「そうですね」
……ちょっと分からないや。
「よくある話だと思いますよ。僕だってこんなキャラ通してますけど葛藤ぐらいありますからね」
「例えば？」
「実はあなたの事が好きでした」
「っ……！」
「冗談ですよ」
「……」
恨めしげに菅原君を睨み付けるが、彼はいつもの微笑のままだった。
まったく、菅原君は本当に……。
「ところで、秋津はどこにいるか分かるか？」
と聞いてきたのは新聞部の大柄な先輩だ。名前は分からないけど、この人たちはみんな眼鏡をつけているから、先輩の名前とかをほとんど覚えてない私でもわかりやすい。文芸部で眼鏡というと、大曽根先輩くらいしかいないし。
「それがわかったら、こんなのうのうと不真面目に過ごしてはいませんね」
と菅原君。どうやら彼は真面目に探してなかったらしい。やっぱりというか……。私なんて晴希先輩が心配でたまらないんだから、

たとえ雲をつかむような話でも真面目にやってほしいんだけどな。
「おかしいよな。一体どうして消えたのやら……内藤が嫌になって途中で逃げたか」
「それはないでしょう。ああ見えて秋津さんは内藤さんに内心メロメロですよ。モノローグで三行に一回デレる程度には」
先輩と菅原君はなおも話を続ける。けどとりあえず、菅原君は適当な事を言わないでほしい。黙っててとは言わないから。
「じゃあ誰かに連れ去られたか？」
「そうじゃないですかね」
「誰がやる？……いや、誰が出来る？」
確かにそうだ。動機がある人が山ほどいても、それが可能な人は限られる。晴希先輩に近づいて、どこかに匿ってしまえる程度に親しい人なんて――
「……いた」
ふと、一人の先輩の姿が思い浮かぶ。ある意味私や内藤先輩以上に晴希先輩と親しくて、しかも一歩間違えればこんな事件を起こしてしまいそうだった先輩。
あの人がこんな背水の陣の引き金になったとしたら、それも仕方ないかもしれない。本当に残念な事だけど。
「いたよ！　確かにいた！」
私は叫んだ。
「杭瀬先輩を、探しましょう！」
その言葉に、周りの新聞部員たちは首を捻った。どうやら誰も杭瀬先輩の事を知らなかったみたいだ。確かに文芸部で有名な人って限られるから、仕方ないんだろうけど。
「ああ、確かにそんな人がいましたね」
そして同じ文芸部の菅原君までもが、今の今まで忘れていたような反応だった。
「確か秋津さんと同じクラスでしたっけ」
「いや」と口を開いたのは眼鏡の先輩。「同じクラスだが知らねえ

なそんな奴。亡霊か？」
　なんと失礼な。クラスメイトを亡霊扱いしますか。
「無理もないですけどね。あの人はある意味で亡霊以上に影が薄いですから」
　と菅原君も失礼な事を言う。この人たちは一体なんなんだろう。
「よく気付きましたね。朱鷺羽（ときわ）さん、あなたはなぜ杭瀬さんの事を？」
　だってはっきり言って、先輩の名前なんて全然知らないでしょう？　なんていうごくごく当たり前の質問に、私はごくごく当たり前に回答した。
「だって好きな人の周りにいる人くらい、見てないわけないじゃないですか」
　晴希先輩の周りにはたくさん人がいる。内藤先輩は前まで当然の事だったし私もそうだった。
　けどさっきは内藤先輩は邦崎先輩と一緒だったし、私にも椎ちゃんって親友がいる。
　それなのに、杭瀬先輩だけは晴希先輩としかいる事がなかった。そういう意味で、あの人は私や内藤先輩よりも晴希先輩に近い存在だったわけで――。
「私がそんな杭瀬先輩を見てないわけがないんですよ」
「なるほど、つまりあなたは隙あらば秋津さんと一緒に杭瀬さんも戴いてしまいたいと？」
「違うよ！」
「え？」
「なんでそんな意外そうな顔をしてるの！？」
　菅原君はわざとに決まってるけど、眼鏡の先輩まで！
「いやだって、聞いたところお前レズみたいじゃん」
「それは好きになった人が女だっただけで、私は元々女好きだったってわけじゃないですから！」
「そういえば秋津さんって男でしたね」

「菅原君！」
「……すみません、これも半分冗談でしたね」
「半分じゃ駄目だよそれ！」
確かに晴希先輩の中性的な所にも私は惹かれたわけだけど、少なくともこんな時に水を差すような事は言わないでほしかった。
「分かりました。では一緒に杭瀬さんを探し出して、攻略しましょうか」
「……え？　攻略って？」
「ただ、僕も出来る限りの手伝いはしますが、あくまで杭瀬さんをデレさせるのはあなたの仕事ですからね」
「え？　え？」
何だかよくわからない方向へと話が進んでしまったみたいで、私はただただ困惑した。
対して菅原君は真正面から私の両肩を掴み、「いいですか？」と目を見開いて諭してきた。
「誰かがやらなければいけない事なんです。そして秋津さんの動けない今、それが出来るのはあなた一人なんですから。いいですね！　覚悟してくださいよ！」
「う……うん……」
菅原君の突然の妙な熱意に気圧され、私は意味も分からないまま頷いた。キャラを作っているとは言ったが、彼のキャラクターはなんなのかまったくわからない。
まぁ要するに、杭瀬先輩を見つけて説得出来るのは私だけだって事なんだろうけど。
「……まずどこにいると思うかな？」
と訊ねた。
やらなきゃ駄目なら、やるしかない。バッドエンドになんてさせるものか。
いつもの私ならそんな考えなんてしないんだろうけど、皆頑張ってるからなのかな。そんな私がすぐに決心してしまえたのは。

杭瀬先輩はわりとすぐに見つかった。
四階の、屋上に続く階段の前。そこに杭瀬先輩はいた。はっきりといた。
ちなみに菅原君達には邪魔だからと廊下で待機してもらっている。その時に「わかりました。ではしっかり杭瀬さんを攻略してくださいね」と言われたけど、直後に「ああ、気にしないでください」とも言われた。余計なお世話だ。
「杭瀬先輩」
そう呼びかけても、杭瀬先輩は返事をしてくれない。
「杭瀬先輩！」
もう一度呼びかける。けど、それでも反応は変わらない。
きっと聞こえてはいるんだろう。それでも返事をしてくれないのは、あの人が晴希先輩以外を認めていないから――そうじゃない。
今のあの人は、晴希先輩さえも認められなくなってるから。だからこんな事をしてしまったし、私にも返事してやれないんだ。
とにかくわかったのは、晴希先輩が屋上にいる事と、杭瀬先輩をどうにかしなければいけない事。どうにかするっていうのは突破するって意味じゃなくて、ちゃんと説得して、出来れば杭瀬先輩の手で晴希先輩を解放してもらいたい――それこそ菅原君の言う「攻略」をしなければいけない。
だから、どれだけ無視されても諦めるわけにはいかない。だって、今の杭瀬先輩を動かせるのは私しか――
『おい、杭瀬！　ちゃんと生きてるか！』
「……いた」
ふと、一人の先輩が思い浮かぶ。屋上に閉じ込められながらも杭瀬先輩の理解に努めようとするような、紛れもなく杭瀬先輩に最も近いであろう先輩。
どうやら今回も私の出番はなかったみたいだ。全部全部、何もできないはずの晴希先輩がやってくれた。

……でも、生きてるかって呼びかけはどうなんだろう……。

第六十三話　風、爆音、屋上にて。

「……わからん」

風、爆音、屋上にて。冷たい床に腰を降ろし、今の私は悩みに悩んでいる所だった。

「……頭が痛い」

悩みというのはどうここから出るかでもなければ、どうこの寒空の下生き延びるかでもない。寒さについてはあろうことか慣れてしまっていた。喉元過ぎれば熱さを忘れる……いや、寒さを忘れる、か。どうやらこんな私にも屋上というワイルドライフを生き抜く資格はあったらしい。

それで問題というのは他でもない、杭瀬の事だ。嘉光の事はひとまず置いておく。

まず杭瀬の、私を屋上に放つという行動が果たして裏切りだったのかどうかも分からないし、それが裏切りだったとしたら何がきっかけで何のためなのか分からない。裏切ってないにしても私をここに閉じ込める事に何の意味があるんだかって話。複雑な孫子の兵法みたいなのでも使ってたりするんだろうか。私にはさっぱりわからなくて、こんな作戦を考えられるなんてすごいなと思いました、まる。

で仮に裏切られたとして、私があいつに嫌われる理由があったかといえば、これがよく分からなかったりする。とはいっても嫌われる心当たりが全くない不意打ち的な行動だったかといえばそうでもなく、その逆で「もしかしてこれが嫌だったのか」というような候補も結構多かったりするせいなのだが。

もしかして↓こき使われたのが嫌だった、とか。それもなんだかな。私はあいつを信用した上で頼んでいたのに。

「でもまあ、嫌われたんだろうなあ……」

やっちまったな、とつい溜め息をついてしまうがどうでもいい。

幸せでも何でも勝手に出て行ってしまえ。
　嫌われたとしか思えない。こんな味方を閉じ込めるなんていう非情な作戦を、私は決して認めない。そんな不幸は糞食らえだ。幸せなんてどうでもいいが不幸はいらん。
　なのでもうここであえての非情という可能性は断ち切り、様々な情報を礎とし裏切られた理由をグローバルに考えてみるとしよう。
……うん、自分で言ってて意味が分からなくなってきた。でも気にしない。
　まずは客観的に見た私の印象というのを推測してみると。

「なんで上学ランなの？」→学ラン好き

「５０メートルも走れないのか」→コイキング以下の雑魚

「あんなに内藤嘉光に愛されてて何が不満なんだ」→糞ビッチ

「秋津晴希は俺の嫁」→嫁

「秋津晴希は私の婿」→婿

「秋津晴希をペロペロしたい」→ペロペロさん

「秋津晴希の学ランをペロペロしたい」→ペロペロさんを神器学ランとして従える者

「コイキングペロペロしたい」→ペロペロさんをその鱗に携える伝説のコイキング的な

　……いかん、色々と錯乱してるみたいだ。いくら慣れたとはいえ、こうやって寒さは私たちの精神を蝕んでいくんだろうか。

まあペロペロさんとかの件はともかく、この辺りだろうか。
なるほど、我ながら酷い物だ。ペロペロを抜きにしてもすごく酷いのが酷いのになった程度だからな。まあ腹が立つので思考停止で全部嘉光のせいにしていいはずだ。きっと誰も責めないさ。だってどうでもいいからな。
しかしこれらの要素が果たして裏切るに値するものなのだろうか。はっきり言ってあまり有力な情報とは思えない。そんな馬鹿げた一般的な意見なんてここでは頭の潰れたネジ同等だ。なにしろ相手は杭瀬だ。
……一般的？
まあいいや、知らん。なので別の情報――例えば最初の頃はどうだったのかとか、その辺りの昔話でも発掘してみるとしよう。過去は大事な物で、それゆえ振り返りたくはないのだが。いや要するに黒歴史は覚悟して振り返ろうと。
初めて会った時のあいつは、そりゃ無口な奴だった。存在が希薄というか、ＲＰＧでいうと村人Ｂですらなく単なる木の役回りって感じ。要するに今とほぼ同じなんだが、あの頃のあいつはまるで似非とは思えない、真性の無口キャラのような奴だった。
「……そういや、いつからあいつは私を許したんだっけな……」
いや、許したってちょっと違うか。
許したというか、獲物として認識したというか。その両者には大きな隔たりがあるだろうが、どっちにしろいつからか杭瀬は私の事を特別な存在として認識していた事は確かだ。
「……変な奴だったからな。私もあいつも」
私は自分を常識人だとは思っていても、残念ながらどこにでもいる一般人だとは思っちゃいない。
あの時周りに沈んでしまっていたあいつの目に、あの時周りから浮いてしまっていた私は果たしてどう映ったんだろうか？　私のどこにあいつを惹き付ける要素があったんだろうか？
「……どうでもいいだろ、そんなの」

あれこれ考える暇があるならさっさと動け。脱出ゲームはもう終いだ。悩んでいる振りなんてやめちまえ。

私はこんな事態に至るまでずっと甘ったれていた自分を叱りつけた。

「そうだ、理由なんて簡単なものだったじゃないか……」

下ばかり見ていても鍵など見つからないし、そもそも屋上から出る事が最終的な目標なんかじゃないし、信じていたつもりの杭瀬には皮肉を言って、裏切られてしまう。どれもこれも間違いばかりだ。正しいと思っていた事は全て裏目に出てしまう。

全くもって似非だ。似非だらけだ。何より似非無口キャラである所の杭瀬を全く労ってやれなかった私が似非だ。

だが。

「それがどうした……」

私なりの決意を込め、私は立ち上がった。

人間不可能ばかりだが、その中にだって頑張りゃ出来る事はあるもんだ。

なに、たかだか似非じゃないか。それくらい正せずに何が信頼だ。

それが下らないやり取りの積み重ねで出来上がった塵の山なら、わざわざ綺麗に鍵で開けてやる必要なんてない。真正面から、歪み無く、愚直にでもぶち壊して、吹き飛ばしてやるまでだ。

「おい、杭瀬ェ！　ちゃんと生きてるか！」

足を広げ、拳を握りしめ、そして腹の底から、この程度の扉など突き破るほどの勢いで、不謹慎な爆音など物ともしないほどの勢いで、大きく声を張り上げた。

「いいか、勘違いすんなよこの似非弥葉琉！

私はな！　お前の事ぐらいちゃんと分かって、ちゃんと買ってやってんだよ！

ああ、確かにお前は影が薄いし周りは誰も見てくれないだろうし、それはそれで楽だと開き直るのも当然の事だわな！

だけどな、お前はそれだけじゃないだろうが！

そんな立ち位置の割に私には一切遠慮しないで弄るし、実際思慮深く読んでるのは全く訳の分からん本だし、挙げ句の果てに作者のお気に入りだからなんていうふざけた理由で調子に乗るような抜け目ない奴だったろうが！

それからまだあるよな！　お前が単に希薄で独りがちな奴ならここまで私のために動く事なんてなかっただろうが！

お前が思ってるほどお前は徹底したようなやつじゃねえんだよ！

良くも悪くもお前は似非だ！　私はそれを知ってんだよ！

あのな、前に言ったよな！　お前は楽でいいよなとか、お前には分からんだろとか！　言っとくがありゃ嘘だ！　真っ赤な嘘だよ！

……私はな、それくらいの事全部分かるんだよ！　お前がさっきあんな風に動いちまったわけも、今こんな風に動けないわけもな！

お前は私の事が嫌になって、それでも私を捨てきれなくて、それで私に捨てられるのも嫌でこうしてるんだろ！

私もそうだ！　お前に心底うんざりして追っ払っておきながら今になってこれだからな！　馬鹿げてるよな本当に！

……けどな、お前も知ってる通り今の私の問題はそれだけじゃねえんだよ！

だから手伝って、さっさとこの馬鹿げた騒動を終わらせてくれ！

そんでお前は後で、全て終わってから私が存分に叱ってやるんだ！　絶対に逃げんなよ！

私の言いたい事は以上だ、こんの馬ッ鹿野郎！」

そう長々と言い終えるなり、私はその場で仰向けに倒れこんだ。

深呼吸しようとするが、どうしても咳き込んでしまう。

やはり体力不足はきつい。しかしこればかりはコイキング以下の雑魚にとってどうしようもない事なのだ。

果たしてあいつは、どうにかなったんだろうか。こんなグダグダな演説が、果たしてあいつを動かすに足るものだったのだろうか。

「……つくづく馬鹿だな、私も」

動悸の収まらない胸に片手を当て、自虐をしてみる。やばいな、

あまりにおかしくて笑えてくるじゃないか。答えなんて一寸先にあったのにな。

人は分かりあえないみたいな事をあれだけ説教臭く言っておきながら、実際には分かろうとすれば簡単に分かってしまった。これを大馬鹿者と呼ばずして何と呼ぶか。

どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。私も、嘉光も、杭瀬も、状況の変化を怖れるモブどもも。思うように動けず、いつだって縛られてばかりだ。

とにもかくにも、ここからは本当に杭瀬次第になる。

人には役割ってのがあると私は言った。なら私の役割は、あいつを労ってやる事だったんじゃないのか。私にはそれができなかった。だから次はしくじらない。今度の私のやるべき事は、あいつを信じてやる事だ。

私らしくないと思うか？　そうだよな。

けどな、私も似非なんだよ。

第六十四話　三人

『……私はな、全部解ってんだよ！　お前がさっきあんな風に動いてしまったわけも、今こんな風に動けないわけもな！』

屋上からはそんな強い口調の晴の声が聞こえてきて、まあ予想通りとはいえ、不覚にも俺は笑ってしまった。そりゃいつものあいつから想像出来る事じゃあねえよな。

「どうだよ、コエダ」

そして一見つまらなさそうな表情の小枝に問いかけてみる。

「これが俺達の後輩だぜ？」

「……」

だが依然、こいつは黙ったままだ。

……ま、それでも俺の言いたい事ぐらいはちゃんと分かってるだろうよ。ただ言える事がないだけさ。だって、どう見てもこいつはある奴と同類だからな……。

「これが俺達の後輩だぜ？」

だからもう一度、俺は同じ事を言った。別に催眠療法は信じちゃいないが、まぁ二回言って悪い事なんてのもないだろうさ。

「……」

だが、こいつは何も返してこない。随分と冷たいもんだ。

まあそれでもこいつなら、確かに言いたい事は分かっちゃいるはずだ。

なんせお前に似た、裏と表の板挟みで迷い苦しんでばかりの似非無口がついに動き出したみたいだからな。

ああそうだ、お前はあの似非無口野郎と同じなんだよ。平気そうな表情で悩んで、平気そうな表情で苦しんで、味方なんてものはてめぇ一人だけだと思って、そのてめぇ自身にまで縛られてやがる。

それだと守れる物も守れやしない。ま、俺は最初から何も守る気なんてないんだけどさ。

――んで、そのお前と同じあいつが吹っ切れたんだ。これでも何も出来ないか、コエダ？

そう思い、小枝の方に視線を向ける。こいつには敦次と同じく他人のモノローグを覗くという大層オドロキの特殊能力があるみたいだが、そんなもん使わなくても俺の言いたい事ぐらい分かるはずだ。物語ってのはそんな風に出来ている……なんてカッコつけてもみたり。

「この私は、まだ答えは出さない」

すると、やっとこいつは口を開いてくれた。

「ただ言えるのは、この私に守る物なんて存在しないという事だ」

おっと、似非無口の同類かと思ったらやっぱり俺の同類でもあったのか。こいつは失礼。

「ま、いいや」色々思う事はあったが、「そうかい」とだけ俺は返しておいた。

そんな俺の様子に小枝は、

「……どういう事だ？」

と疑問を呈した。どういう事って……あぁ、そういう事な。

「んなもん俺の管轄外の話だよ。お前を止められりゃそれでいい」

俺は拳銃やら何やらをぶっぱなしてりゃ満足なんだから。その上お前を変えてやろうなんてキャラがぶれるぜ。

「コエダ」

ま、俺に言ってやれる事なんてせいぜい、これくらいが限界だろ。

「今日は楽しかったぜ。また相手してくれ」

「それはどういう……」

「おっと、電話だ」

ポケットから携帯電話を取り出し、真っ黒でシンプルなデザインの、それを開いた。さすが、電波は安定の三本、満点だ。

ちなみにここ数日は謎の妨害電波で晴辺りの雑兵の連絡手段はことごとく断たれているが、俺や敦次の携帯となるとえらくスタイリッシュなおかげでこんな妨害電波などなんともないのだ。

「よう、敦次」
そんなわけで、電話の相手はその敦次、俺達の参謀先輩だ。
『誰が参謀だ。それにお前の先輩になった覚えもない』
今日も絶好調じゃねえか、参謀先輩。お前の読心術は電波も飛び越えるのか。
『……様子はどうだ』
「ああ、コエダと遊んでたぜ」
『聞くまでもなかったな』
「そっちこそどうよ？　晴と似非無口が面白い事やってたみてぇだが」
『ああ、偶然にも秋津が仕事をしたな』
「はっ」
こんな中でもいつもすぎる展開に、笑いが込み上げた。こいつの「偶然にも」ほど信頼出来る物もないだろう。
『偶然にも杭瀬を見つけた朱鷺羽は、突如階段を降り始めた杭瀬に驚いていたそうだ』
「だろうな」
『その後扉を開けてみたが、秋津は動こうとしなかった』
「そいつはまた……」
何なんだろうな。晴なりの贖罪って奴なのか？　やれやれ、あいつはスペランカーのくせして無理しやがって……。
「で、他はどうよ？　色男とか米野郎とかさ」
『……内藤は邦崎を連れて教室を飛び出た』
「ああ……？　邦崎って誰だっけな？」
『……それは昨日説明しただろ』
呆れたような敦次の声。だが残念ながら俺には覚えがない。もしかしてこれは俺にとっては明日説明する事だという敦次なりの天界ジョークだったのかもしれない。つくづく知らないうちにこいつには先を行かれてるな。
『いい加減にしろ』

「冗談だよ」と笑う。「あの似非親友だろ？」
『……ああ、その秋津の似非親友だ』
そう答えて、敦次は一拍置く。
『監視によると階段の下らしい。稀有だな』
なるほど。でもそれこそお前、偶然って言えばいいのにな。
「……まぁいいや、あいつにはあいつなりに頑張ってもらうか」
『あぁ』
「それで、米野郎はどうなんだ？」
納得した俺は、もう一人の事を聞いてみた。米野郎？　そりゃお前、あの米野郎の事だろうよ。大曽根的スラングだ。
『守坂は無事一クラス分を抑え込んだ』
「なるほど、木っ端ミジンコにしたと」
と冗談を言ってみる。木っ端ミジンコ？　そりゃお前、木っ端ミジンコの事だろうよ。
『……まぁそれでいい』
どうやら諦めたらしい。
『騒動に応じてすかさず避難と称したエスケープをしようとした生徒達を一人残らず蹴りで昏倒させた。兵糧だけで随分と変わる戦力だな』
「……全くだな」
冷静に言うが内容のものすごい敦次の台詞に、さすがの俺も冷や汗が垂れた。いや、下手すりゃ俺より働いてんじゃねえのそいつ？
『いや、天森小枝一人でも雑兵百人に匹敵するだろうからな』
雑兵て。
それでもありえねーだろ。蹴りだけで一クラス全滅させるなよ。
『全滅ではない。取り込める一年は取り込んでおいた』
「そうかい、そりゃ楽だったろうな」
まぁいいや。お前の事だ、どうせこれからもあいつを利用するんだろ？……あ。
「そんな事より敦次」

『どうした』
「コエダが消えたぜ」
と俺は伝えた。
『……』
そして電話の向こうの敦次の反応も消えた。
「おい敦次、生きてるか？」
『……故意だな？』
電話の向こうの敦次に晴と同じような確認を取るが、それに対し敦次はそんな変な事を聞いてきた。
「ん？　何の事だよ？」
『……まぁいいさ。お前の仕事はもう終わったからな』
「お、いいのか？」
あいつを放っとくなんて随分とお前らしくないじゃんか。
『黙れ』
という声が聞こえ、二人を裂くように電話が切れた。
「……ふう、やれやれだぜ」
普段後輩どもに見せる姿とは違うあいつの様子に、俺は肩をすくめた。
ホント、小枝が絡むと様子が変わるもんだ。
「さ、先輩達はここでおいとまするとしましょうか」
そう呟き、俺は自分の教室に向けて歩き出した。さあ、勤勉な俺はせいぜい自習でもしてるか。またいい成績を取らなきゃアホをからかえないからな。
後は任せたぜ、似非ばっかの後輩ども。

第六十五話　そこは紛れもなく戦場だった。

「内藤の奴、どこに行く気なんだ？」
「案外何も考えてなかったりしてな」
「まさかそんな事はないだろうよ」
綾女の手を引いて教室を出ていく時、クラスメイト達は口々にそんな事を言った。ほんとに失礼なやつらばかりだなと思う。
……まぁ、ほんとに何も考えてなかったんだけどな！
「え、ええと内藤君、どこまで行くのっ？」
「……いや、ちょっとな！」
そんなわけで俺はちょうどよさそうな場所として階段の周りというのを考えてみた。階段前……いいじゃないか。なんか絵になるし。俺は好きだよ？
と、廊下で見知った顔と遭遇した。同じ文芸部の、三年の先輩だ。何か言われるんだろうなぁ……。一体何を言われるんだろうか。
「あぁ、内藤か。久しぶりだな」
「あぁ、はい」
「……」
そういうと先輩は俺の横を通り過ぎ……

……。

……。

……え？　終わり？
いやなんか言えよななんか！　逆にすごい不安になるんだからさ！
「内藤」
と思ったら先輩は振り返り、こっちを見た。一体どうしたんだろう。まさか心の中で俺が猛烈に突っ込んでいたのがバレたか！？

「リア充は爆発しろ」
……はぁ。
一体何を言われるのかと思えばそんな事ですか。いやぁ驚いた。
俺はてっきりあの人も読心術とか使えるのかと……
「内藤」
「何ですか？」
俺が若干苛立ち気味にそう聞き返すと、先輩は背中を向けて向こうへと歩き出しながら、
「チャックが開いてるぞ」
と指摘してきた。直後に「きゃっ！」という綾女の声。視線を下に向けてみると、確かにチャックが開いていた。あっほんとだ！
……いやそれを先に言ってくれよ！　爆発云々とかもういいからさ！

「内藤先輩じゃないっすか。久しぶりですね」
階段前にたどり着いたが、そこでまた新たなエンカウントをした。
そう言ったのはおそらく一年の文芸部員。あいにく一年の顔まで俺は覚えてない。少人数でゆっくりやってくみたいなのとは正反対だからなうちの部は……。全員の顔と名前を覚えてなくても仕方ないとは思う。とまぁそれはともかく。
「あー、ちょっとどいてくれないか？」
「どうしてですか」
どうしてもなにも、他人がいる前で綾女にマンツーマンで説得なんて出来るわけないだろ！　いい加減にしろ！
「しょうがないですね」
言うとそいつは、その場で右手をこちらに、手のひらを上の方にして向けてきた。ときおり指を仰ぐように動かしてくる。
「……どういうつもりだ？」
「ただでどくわけにはいきませんね」
何かと思ったら賄賂要求かよ！　ずいぶんとふてぶてしいな！

お前ほどふてぶてしい奴見た事ないぞこの野郎！
「おい、頼むから」
「頼まれた程度でどいたら男がすたります」
「そうか、男がすたるなら仕方ないな」
本当に、残念な事だ。そこは諦めるしかないだろう。
「じゃあ……綾女」
俺は教室の時と同じように、彼女の方を向き両肩に手を添えた。
彼女は「え？　え？」と顔を真っ赤にして戸惑っている。ひょっとしたら風邪かも知れない。全て片付いたらお疲れさんとでも言っておくか。薬は何がいいだろう。頭痛にノーシンかな？　あいにくそのあたりはよくわからん。
んで今はなんというべきか……
「ありがとう……ってのはさっき言ったな。あー……何て言おうか……」
ちらりと、強情にもこの場面で居座るという驚きの行動を取った後輩に目を向ける……が、華麗なるまでに無視されてしまった。おのれ使えない奴め。しかも無視してると思わせてさり気に賄賂要求してんじゃねえよ！
「……ねえ」
さあどう言おうか……。こんにちはでもない……おはようでもない……さよならとか論外だ……ってか何でみんなあいさつの魔法なんだ……。
「ねえ」
ああ、こういう時にはっきりしないから俺は、晴希にもまともに取り合ってもらえないのかもしれないな……。どうにかしないと……。
「おい」
「ぐふっ」
疼く後頭部を抑えながら振り向くと、弥葉琉が片手にハードなカバーの本を提げて立っていた。いつもの無表情に見えるが……何か

違う気もする。よくわからないけど。
「……なんだ弥葉琉か。お前が話しかけてくるなんて意外ぐふっ」
頭部にセカンドインパクト（厨二病的な意味ではなく）。俺の頭が疼くぜ。
「あなたはいつまでのんびりしてるの？」
ああ……実に冷えた視線だ。出来れば晴希にもこんな風に……じゃなくてだ。
「違うよ、俺は深く考えている最中でぐふっ」
サードインパクト。ああ痛い痛い……俺の右目が疼くぜ。
「うるさい」と弥葉琉。「ここは戦場よ」
「……ああ、そうだな。でもぐふっ」
フォースインパクト。俺の尻が疼くぜ。参ったな、こりゃノーシンだけじゃなくてポラギノールも必要になるか？　なんてのはともかく。
「ああわかってんよ！　俺が晴希を放っとけるわけがねえだろうが！」
まさかの四連コンボを食らった俺は叫んだ。いやインパクト云々の話じゃなくて、自分の嫁をないがしろにできる奴がどこにいるんだよ！
「でもな、だからって綾女がどうでもいいってのは違うだろ！　晴希は俺が絶対なんとかする。だから――」
「違う」
静かに言った弥葉琉だったが、その目は本気に満ちているようで、とっさの反論もする気にならなかった。
「今うまい事を言えなかったとしても、後でなんとかなる事はある。決して取り返しのつかない事なんてないのよ」
そう言って制服の袖を引っ張られ、俺はあやうく転びそうになった。……こいつ、こんなりして実はかなり力強いんじゃないのか？　晴希にも今度聞いてみよう。
「私は、あなたを全力でサポートするために来たんだから」

と、全力をもって引っ張ってくる。体制が崩れるのを防ぐには、走ってついていくしかなかった。そうしながらも俺は思う。全力でサポート……ねえ。

いや、そんなのより大事な事言ってたよな、弥葉琉は。

「後でなんとかなる……か。綾女！」

その叫びで今まで固まっていた綾女がようやく顔を上げ、離れゆく俺を見て慌てていた。見事にあたふたしていた。

「慌てるな！」

そんな様子の綾女を見て更に続ける。

「続きは全部終わってからだから！　それまでにお前に言う事、ちゃんと考えとくよ！」

そう言い終え、綾女の顔を見た。

勝手に連れて行って勝手に引き延ばす。そんな暴挙をしたというのに。

何故か彼女は、安堵の表情を浮かべていた。

「なあ、弥葉琉。聞きたいことがある」

走る事においてもやはり文化系と思えない速度の弥葉琉の後を追って階段を登りながら、何も言わないこいつに対して、俺は思った疑問を口にした。

「ただ晴希と俺を会わせたいだけだったらさ、普通に晴希の方を連れてこりゃよかったんじゃないのか？」と。

どうせ待つのも向かうのも一緒だと思うんだが。こんな騒動になったんだから教室にいるわけでもあるまいし。

「何かあったんだな？」

「……」

弥葉琉は黙り込んでいる。いつもの無口キャラってのとはちょっと違うっぽいんだけどな。

「そういえばお前、言ってたよな。決して取り返しのつかない事なんてないって。あれはもしかしてお前の――」

「言わないで」そんな俺の言葉は不意に遮られた。「ただ、待ってて」って晴希は言ってた」
「そうか……」
理由も分からないのに、思わず笑みがこぼれる。
どうやら、間違いじゃなかったみたいだ。
弥葉琉が、いつもよりアクティブに見えたのは。
……四発も本の角で殴られて、内一発は目に入ってるしな！　あやうくスルーしそうになったけども！

「ここよ」
呆然とする、そこにいた後輩達の横をすり抜けてある扉の前で立ち止まり、弥葉琉はそう言った。
「屋上か」
何となく予想は出来ていたが、やっぱりここだったか。俺にとっても思い出深い場所だ。
……寒そうだなぁ。
「……悪かった、弥葉琉。これじゃ、取り返しのつかない事になる所だった」
晴希……寒さでダウンしてなきゃいいが……。
「……謝らなくていい。元はと言えば私が悪かったんだから」
そう言いながら弥葉琉は屋上へと続くドアを開け、
「ぐふっ」
もう終わったと思っていたらフィフスインパクト！　俺の背中が疼くぜ。しかしチルドレン並にインパクトが起こるな。これがセカイ系か。
だがまぁいい。今晴希に姿を見せたくないからという理由で背中を蹴り飛ばしてくれた弥葉琉の事も今は許そう。
なんせ、やっとこいつとの再会を果たせたんだから。
「……おう、晴希。……久しぶりだな」
「ああ、本当に久しぶりだ」

晴希は不機嫌そうだったが、元気だった。取り返しのつかない事にならなくて、本当によかった。

自分でも真摯だと思う瞳を晴希に向け、俺は今一度口を開いた。

第六十六話　幕引きは飽くまで美しく

「いいか、晴希」
真摯な瞳をこちらに向け、嘉光は口を開いた。その様子はあまりにも真摯すぎて、私が「うえ気持ち悪……」などというリアクションが冗談でも取りようがなかったくらいだ。
なんだなんだ、いったい何のつもりだ。嘉光の分際で説教か。それともキスか抱擁か。それならあの寒い中で残った最後の力を振り絞ってでも抵抗してやる。もしくは訴訟も辞さない路線だ。どんな事があろうと私はこいつに全てを許す気など更々ないんだから。
などと不必要に思えるほど警戒していたが、次に嘉光の取った行動はその中のどれでもなかったわけで、
「ごめんな」
と、真っ先にこいつは謝ってきたのだ。あまりにも筋違いだと思い結局の所私は「何がだよ」と返した。
「言っとくがな、お前がいなくて寂しかったなんて事は全然なかったんだからな」
まあ、そりゃあ、こいつがいないせいで色々面倒で忙しくてってのはあったが、それはまた別の事だ。久しぶりだろうが何だろうが、悲しい事に私はこいつの思考回路には飽き飽きなのだ。それは以心伝心ってのともまた違うよな。だってこっちの考えが向こうにはてんで伝わってないんだもの。
がしかし。
「いや、そうじゃない」
嘉光はそれを否定した。
となれば何の話だ……あー……。
「屋上についてもお前に謝られる筋合いはないな」
だってこれは、私の選んだ道なんだから。
途中で朱鷺羽や幡野達も来たが、あえて私はそいつらを追い出し

てここに居座った。ふん、屋上も慣れてしまえば楽なもんだ。
がしかし。
「いや、その事でもないんだ。……でもそれもあるか……」
それも違ったらしい。おいおい、じゃあ何の事なんだよ。
と思ったら嘉光はまたしっかりとこちらを見据えて、
「とにかく、どうも俺はお前がいないと駄目みたいなんだ」
と、曝(さら)け出した。ついさっきまで私の事をすっかり忘れてたくせに。この糞野郎は。
そんな風に毒づく私に構わず、嘉光は言葉を紡いでいく。
「お前のいない生活は物足りなかった。俺らの事はどうにもならないと思ってた他の奴らは何とかフォローしようとしてくれてたけど、毎日文芸部に行くのが楽しかったあの頃とは何もかもが違ったさ。俺はそんな楽しかった日常に戻りたい――だから、これからもお前と一緒にいなきゃならない。ごめんな」
これは――告白か。あるいは一方的な宣言か。いずれにせよ感じるのはいかんともしがたい既視感なのだが。一年前のあれと同じだ。やっぱりこれは以心伝心なんかじゃない。私がわざわざこんな言葉に応えてやる道理なんてない。「お前の考えなんて知らんからとりあえずどうにかしてくれ」とでも言っておけば満足するだろう。それで全てうまくいく。
――それでもだ。
「……ふざけんな」
私は文句を唱えずにはいられないんだ。
「お前言ったよな！　私がどこにいようが必ず助け出してみせるって！　必ず傍にいるって！　言ったよな!?
去年だって同じだろ!?　そんな告白まがいの事で全て上手くいくと思ってやがる！　その結果がこのループだ！」
あの時、嘉光は嫌だといってもずっと私の傍にいるんだろうと思っていた。それは、言うなれば奇妙な安心感だ。安易に受け入れられないとはいえ、決して不愉快なものではなかった。

「運命だの何だのをほざいておきながら、今になってこれだ。こんな奴にはどうしてくれようか。ああ、こうしてくれよう。
あと一度だ！　あと一度、お前のその独善的な宣言を私は信じてやる！　分かったな！？」
これが私の答えだ。どうしようもないとか言われそうだが、これが私の選択なのだ。
その選択に嘉光は果たして、
「おう！　言われなくてもそのつもりだ！
なんせ、決してやり直せない事なんてないからな！」
と、勢い良く返事した。
……全く、困ったもんだ。これだけ断言されると受け入れざるを得ないじゃないか。
言っておくが、私は決して嘉光に甘い人間になった覚えはない。その時はその時、こいつにもきちんとけじめくらい付けさせてやるさ。その時が本当に、『取り返しのつかない事態』になるだろうよ。
空が青い、風が寒い……まあ、そんな事はどうでもいいが。人が死のうが晴れる時は晴れるし、どんな幸福が訪れようが土砂降りの雨には見舞われる。私達の小さな闘争は私たちの中でしか完結しえないのだから。

「いい話だったな」
と、その傍で頭を微妙に傾け、腕を組みながら感想を述べたのは一宮さんだ。いつの間に現れたんだろうかと思うが、今の会話の合間にだろう。
「そうだ、最初からいた」
「なん……だと……！？」
私の頬を冷や汗が伝う。んでもってきっと額には縦線だ。まさか、あの恥ずかしいとまではいかないまでも口にするのを憚（はばか）られるあの会話を最初から聞かれていたと？
だが更に、一宮さんは指を鳴らした。まるで何かの合図のようだ。

そして校内放送として流れるザザザッという空気の擦れるような音。
おい……まさか……!?
『いいか、晴希』
「やめろおおおおおぉっ!」
獣のごとく、私は叫んでいた。当たり前だ。一宮さんに聞かれていただけならまだしも、まさか録音されて全校に流されるなどたまったものではない。
「秋津。これこそが戦略だ」
「嫌です! そんなの!」
「男なら諦めろ」
「無理ですし、まず私は女です!」
くそ、こんな残酷な戦略認められるか!私は、出来れば何一つ失わずに問題を解決していきたいんだ! 何も捨てない覚悟はあっても、何かを捨てる覚悟なんてあるわけがないだろう! こんちくしょう!
『いいや、違うんだ』
放送もそんな事を言ってくる。全然違わねえよ、この馬鹿!
「晴希」
「黙れ、内藤! お前に私を救えるのか!」
「ああ、救え――」
「黙れ内藤!」
嘉光はまあまともな事をまず言わないであろうから、こうして封殺しておいた。
『お前言ったよな! 私がどこにいようが必ず助け出してみせるって! 必ず傍にいるって! 言ったよな!?』
「そうか! そういう事なら大丈夫だ! 俺は地獄に行く覚悟すらも出来てる!」
「がああああああああっ!」
「晴希! 晴希!……くそ、一宮さん! 晴希が魔女化した!」
「落ち着け。秋津には頻繁にある事だ」

こうして、私は人として大事な何かを失いつつも、嘉光含む文芸部全般との関係を取り戻したのだった。

……まあ、いいか。

確かに嘉光はそこにいた。そんなところで、今日のお話は……

……。

……ああ、そういえば。

杭瀬、嘉光と辿ってきて、あと一人この件に深く関わってきた奴がいたんだったな。

「邦崎」

良かった。そいつは存外早く見つかった。時間が経つと変に距離を取ってきそうだからなこいつの場合。こいつはそういう奴だ。

「晴……秋津さん……」

……ほらな。今でもこれだもんな。というか今回私は何やってたよ？　いくら恥ずかしいとはいえお前にそんな反応される筋合いは無いから。

……まあいいや。そんな事より、こいつに言っておくべき事はあるんだ。

「お疲れ」

おそらく記憶喪失の嘉光のクラスに行っていた事から考えて、必然的にこいつにも何かあったんだろう。私は精神的に疲労しているであろう邦崎を労ってやった。

「いや、まだ終わってないよ」

ところが意外にも、邦崎の返答はそんなものだった。

おかしいな、いつもの邦崎じゃない……嘉光、お前は一体何を言ったんだ？　後で拷問して吐かせてやろうか……ま、いいか。私に

は関係ないや。
「それにしてもいつもの晴希じゃない……やっぱり別の秋津さんだ……」
「まあ、似非だからな」
そして何気なく失礼とかそういうのを通り越した事を言う似非親友を見て、必要もなく私はそう呟いた。

後は……またあの似非無口キャラ、杭瀬か。
さ、行こうかな。

第六十七話　Ｙｅｓ，ｓｈｅ　ｉｓ　ｈｅｌｐｅｄ．（前書き）

ようやく、ようやく終わったあああああ！

第六十七話　Ｙｅｓ，ｓｈｅ　ｉｓ　ｈｅｌｐｅｄ．

『おい、杭瀬ェ！　ちゃんと生きてるか！』

私、杭瀬弥葉琉が精神的に参っていた時に、晴希はいきなりこう叫んだ。言い得て妙だ。確かにその時、私はある意味で死んでいたと言ってもよかったのだから。

しかしそれは考えるまでもなく変な話だ。その前に言っていた事は「私の事が嫌いなのか！」なんていう恨み節だったのに。

そしてそんな疑問の投げ掛けに対し、本人に聞こえなかったとはいえ、確かに「嫌いだ」と言ったはずなのに。

一体どういう事なのか。

そんなの、ちゃんと考えてみれば分かる話だ。

いつも私を苦手として遠ざけているふうの晴希が、私と解り合おうとしたから。

『お前には解らんだろうな』

『お前は楽でいいよな』

これまで晴希は、私と解り合おうとしてこなかった。無理もないよね。晴希も目に見えて大変な状況だったんだから。それで同じように私も、晴希と解り合おうとはしなかった。

それが気付けば私は、一人だった。いや、一人ですらいられなかった。一人の存在としていられない、文字通り半人前の、まるで幽霊のような存在。

決して解り合える事のないであろう晴希に従う事なしには自分が自分でいられなくなっていて、それがまた自分を腐らせるだろうと分かっていた。

そんな悪循環に気付いてしまったら、誰だって嫌になるに決まっ

てる。全てを投げ出してしまうに決まってる。
だからだろう。

『あらら、遭っちゃったか』

あの何とも言い難い、ただ一つ言えるのは言うなら私の本当に大嫌いな女子生徒に、まさしく「遭って」しまったのは。
そう、元々私は誰にも見つからず、誰にも遭わないつもりでそこに来て、そこで仕事を進めようとした。それが確かに私の役割で、それが確かに私の存在だって。そんな風に無理矢理思って自分の在り方をあてはめたりしていた。
けどその存在は歪んでしまった。歪んで、それで結果的に彼女に遭ってしまったんだ。

『大丈夫、先輩?』
『ごめんね先輩』
『もしいいなら、晴希さんの代わりにあたしがいるからさ』

などと、彼女は手を差し伸べた。
それは眩しかった。強い力を持っていた。一見、私に力を与えてくれそうだった。
けど、違った。何かが心の奥に引っかかったんだ。

『あんたなんか、大っ嫌いっ!』

その手を私は、振り払った。差し出された手が私には不気味なほど眩しく、怪しく、受け入れがたく見えたから。けど――

『お前が単に希薄で独りがちな奴ならここまで私のために動く事なんてなかっただろうが!』

本当はこの時にも、私の中で晴希が生きていたからかもしれない。
晴希っていう希(のぞ)みを捨てていなかったからかもしれない。
もしあの時あの手を取っていたらどうなったんだろう。果たして晴希とやり直すことは出来たんだろうか……やめよう。そんな仮定無意味だし、なにより私がやりたくないから。
ただ、これだけは言える。

『……私はな、全部解ってんだよ！　お前がさっきあんな風に動いてしまったわけも、今こんな風に動けないわけもな！』

……そう。
「コイキングより弱い」「ちょっとした段差で死ぬ」ってのは本人の談だけど。
晴希は強かった。
そりゃ身体能力はあいかわらずどうしようもないけどそうじゃなくて、壊れかけのものを繋ぎ止めようとする強さを晴希は持っていた。誰よりも弱いのに、誰よりも強くあろうとしていた。そんな強さ。

『そんでお前は後で、全て終わってから私が存分に叱ってやるんだ！　絶対に逃げんなよ！　私が言いたい事は以上だ馬鹿野郎！』

その上で晴希は私を待ってくれていた。逃げるなよ、と。
そんな言葉の積み重ねがあったからこそ、私は「生き延びる」ことができた。
小さな塵の積み重ねで出来た私と晴希との間の壁は、大きな、一度の劇的な出来事で見事に蹴破られた。
そう、私って存在は、死んだりなんてしてなかった。
「ねえ晴希」

私はフェンスにもたれかかりうれしそうな、だけどそれを必死で隠そうと怒りを作っているような表情の晴希に向かって、できるだけ心を込めて言った。

場所は屋上。朱鷺羽みのりとかに言わせれば、晴希はどうも私への罪滅ぼしだとかで頭を冷やすために、ここから動こうとしなかったらしい。もっとも、本人は絶対にそんなことを言おうとはしないけれど。そして、きっと言っても肯定してくれないだろうけど。

「なんだよ」

今もこんな風に、素直な態度で話とかを聞いてくれはしないけれど。

私みたいに、まだありのままの自分をさらけ出せやしない、まだ殻を半端にしか破ることができない、まるで似非みたいな存在だけど。

それでも、わかってるよね。

私は、あなたに救われたんだよ。

「ありがとう。それとこれからもよろしく、晴希」

……などという終わり方を迎えた今回の騒動だったけれども。

私達はこの時、重要な事を見落としていたのだった。

第六十八話　彼は女神か将又悪魔か（前書き）

さて、遅れまして久しぶりの更新です。

第六十八話　彼は女神か将又悪魔か

日常というのは怠惰なものだ。これは日常という言葉の定義と言っても過言ではないかもしれない。

例え私こと秋津晴希（あきつはるき）が拉致されようが果てしないキチガイこと内藤嘉光（ないとうよしあき）が記憶喪失になり大規模な冷戦が起きようが終わってしまえば再び怠惰な日々に逆戻りであり、私は普通に学生の本分である勉強をし、そして授業の後れ（おく）を取り戻せずに中間テストでは大層酷い点を取っていった。なお似非親友の邦崎（くにさき）も同様である。

それはそうと、怠惰な日常パートがきちんと存在していたからこそここまでやってこれたって部分もあったりするのだ。

杭瀬（くせ）と他愛ない会話をしたり、一応幡野（はたの）にも約束した通りの報酬をくれてやったり、まあ色々とあったんだが基本的にここ一ヶ月ほどは平凡な日常を過ごしていたと言っていい。

しかし神様というのはどうやら質の悪いレベルの悪戯好きらしく、事件は再び訪れた。決して大きくはなくそれでいて決して小さくもない、そんな事件。

本来なら嘉光でも生贄にして神様に祈ってやりたい気分だが、あいつ如きの犠牲で私の対人運が治るとも思えない。また記憶喪失で戻ってこられても困るしな。かと言って神様に反逆を試みる程私は愚かでもない。

……まあいいんだけどさ。しょっちゅう殺人事件に出くわす少年探偵とかに比べてみれば私は十分恵まれている方なんだろうし。バトルもないし、そう考えれば楽っちゃ楽だ。

――なんていう空（むな）しい現実逃避はともかく。

簡潔に結果だけを述べてしまえば、要するにまた私が頭を悩ませる必要が出てきたって訳だ。

全く、うだうだ言う気にもならないくらい毎度毎度面倒臭い話だ。

「おい星ヶ丘！」

急いで帰ろうとする星ヶ丘柊(ほしがおかひいら)に何とか追い着いたのは校門の前だった。

おそらく膝の裏に届くくらいにはあるであろう眩しい銀髪を靡(たなび)かせ、背は高くスタイルは後姿からでもそうと分かるくらい抜群、当然のように顔もその銀髪に似合わないなどとは言えるはずもないという正(まさ)しく完璧な容姿。一旦視野に入ればおそらく目を離すことができなくなるであろうその姿を見つけるのにさほど時間はかからなかった。

そう――追いつくのが大変だっただけなんだ。こいつ歩くのすら早いし、追いついたといっても声を上げて引き止め、ただ待ってくれていただけの事。

どうして私なんぞにこの役を任せたのかとつくづく思う。先輩方は、「多分お前も関わってるんだからお前がやれ」などと私を無理矢理行かせた。意味が分からないし、それを言ったら嘉光は設定上全ての罪を背負っているわけで嘉光が行けばいいだろう、そう抗議したが、「今はあいつが行っても逆効果になるだけだ」なんて反撃を食らった。一体どっちなんだよ。嘉光は嘉光で行きたがらない。その上大曽根さんは「いいから行ってやれ、追っかけんのは男の仕事だ」とか意味の分からない事をほざくので私は男じゃない、だから嘉光の仕事でいいと抗議したが依然として譲ってはくれず、二人で行くなら許すという妥協になってない妥協をされたので何とも言えず結果として私一人で行く事になった次第だ。無茶苦茶だな。

とにもかくにも私は疲れた。これだけは絶対に言える事だ。そんなわけで両膝に手を置いてゼエゼエハアハアと荒い息をする。ところでゼイゼイはともかくハアハアって何かエロいよね。どうにかならんのだろうか。

「一体何の用……って、ああ」

星ヶ丘はそう訊いている最中に私の手に持ってある物を、そして自分の両手を見て納得した。
「そうだ、お前の鞄だ」
ほらよ、と言ってこいつにシックな見た目をした手提げの鞄を渡してやった。投げて寄越すなんて真似はしない。しない以前に私の力じゃ出来ないけどな。
「にしてもその反応、気付いてなかったのか？」
普通なら気付いたけど戻るのが億劫、とかそんな感じだと思うんだが。いやたとえばの話で普通の人間なら気付いた時点で戻るだろうが。
「……ああ、ありがとう」
と意外にもこいつは礼を言ってきた。いや、考えてみたらそれほど意外な事でもないか。要は今あなたの言った事はスルーしましたって意思表示なんだろう。こういう反応は
「どうも」なのでとりあえず返事をしておく。「それじゃ私は戻る。また会おう」
そう言って部室に戻ろうと身を翻すと、
「待ってよ。待ちなさい」
星ヶ丘にそう声を掛けられ、私は立ち止まった。そもそも逃げる理由もないし、逃げられもしないし。
「何だ」
「なんであんたは、そんなに強いの？」
「……は？」
これはまた奇異怪々な事を。買い被りでもお世辞でもやりすぎだろ。私はコイキングより弱い設定だというのに。現にお前に追いつくのにだって息を切らしてしまってるくらいだし。
「一つ言っておく。意味が分からん」
虚言に答えてやる道理なんてない。よって背を向けて私が部室へと歩き出そうとした時だ。
「だと思ってた」

なんていう声と共に側頭部に衝撃が走り、視界がぶれ、更にまだ夕方にもなってないというのにお星様まで見えた。しかし何でよりにもよって六芒星なんだ。私の趣味か。かっこつけやがって。

バランスを崩しそうになった体を何とか支え、後ろを見る。そこにいたのは他の誰でもなく、敵意を持った目で私の方を睨んでくる転校生、かつ転校してきた日の二時限目が終わる頃には『我等が董城の女神様』なんていう風に校内にファンクラブが出来上がってしまったというほどの完璧美少女、ザ・星ヶ丘柊。

「あんたには一生分からないわよ」

そんな言葉――以前私が杭瀬に言っていたのと全く同じ言葉を撒き散らし、さっき私の渡してやった手提げ鞄を振りかぶる。

さて、重ね重ね言うが、私の運動能力の無さと来たらそれは大した物なのだ。例えればちょっとした段差で死んでしまうくらいの。

まあそんな私が頭部に鞄スマッシュを二度叩き込まれたのである。まともに立ってなんかいられるわけがないじゃないか。

薄れゆく意識の中、そんな私の様子に気づかずただ一気に騒々しくなったその場から逃げるように校門を走って出ていく銀髪の悪魔の姿を見た。星ヶ丘の考えてる事はさっぱり分からないし、その上嘉光までもいつもの三割増しで意味が分からない。今度は一体何なんだよ？　お前一体どうしたいんだよ？

ああくそ……やっぱあの時逃げとくのが正解だったのか……？

第六十九話　復活

目が覚めると、まずどこかの天井が目に映った。そこで私が今文芸部室で横たわっていると気付いた。どうして文芸部室だと分かったかというと、それはこの独特の空気感に他ならない。いわばそれは一種の瘴気（しょうき）であり、なおかつ闇の気配でもある。そしてやがて、

「ところで大曽根（おおぞね）さん、晴希は治るのか？」

などという嘉光の声が聞こえてくる。

「んー、何とも言えねえな。この老いぼれがどこまで……」

と大曽根さんの返事。いやあんたは老いぼれじゃないだろ。ある意味私よりヤングだからな？

「しかしあんたは天才だ。彼女を治せるのはあんたしかいない」

いやだからさっきから何の話だよ？　ひょっとして私が気付いてないだけで後遺症とかでもあるのか？

「……そうまで言われるとやらねえわけにはいかねえみたいだな。どこまでやれるかわからねえが、まあやってみっか」

……何を？

「頼む。俺は一度に大切なものを二つも失いたくない……」

「……おう！」

「なんでそんなに嬉しそうな口調なんですかっ！」

身の危険を感じて跳ね起きる。まあ無論私に跳ね起きなんて出来るわけもないのだが。おかげで体勢を崩してしまう。そして更にある事実に気付いた。私の横たわっていた場所についてだ。

何で文芸部室にベッドがある？

床に直接敷いたとかじゃないし、かといって机の上に敷いたとかでもなく、元々寝具としての用途を持った柔らかな感触のそれだった。

……。

……まあいい、そこはスルーだ。突っ込んだら負けだ。

「大曽根さん……」

全くもって信じられん。そんな疑りを込めた視線を一見優等生な格好の眼鏡の先輩、大曽根誠文（まさふみ）さんに向ける。

「なんだ、生きてたのか……つまんね」

「だからなんでそんな口惜しそうな表情になるんですか！」

「いや、生きてたならいいんだぜ？　いやあ、生きてるって最高だぜ」

「いやあんたつまんねとか言ってましたよね？」

小声で言ったつもりでもちゃんと聞こえてたからね？　今更そんな主人公っぽい事言っても遅いからね！？

「いや、そりゃ俺からすりゃ晴（はる）の体がライブ・メタルになろうが構いやしねえんだがな。戦闘力も上がるし」

「私は嫌です！　そんな戦闘力と引き換えにアーマロイド・レディみたいになるつもりはないですから！　なあ内藤！」

と言って今さっき大曽根さんと会話していた内藤嘉光に呼びかける。こいつは変態だが私に好意を持っているから大層重要な問題だろう。そう思ったのだが。

「……晴希、アーマロイド・レディになるのか！？　それしかないのか！？」

信じんなこら。ってかその様子だとあれか？　もしかしてさっきの会話をアドリブでやらかしたのか！？　何なんだその無駄な才能は！？

「……それしか手がないなら俺は諦めるよ。ただお前がどんな姿だろうと俺はお前の事を――」

「ゲホッゲホッ！」

「……っ晴希！　大丈夫か！？」
思わずむせてしまった。全然大丈夫じゃないよ、お前の頭がな。
思えばこいつはこんな奴だった。くそ、歯の浮いたような言葉を平然とほざきやがって……。
「晴希、大丈夫じゃないならせめてこの体でいる間に一度抱きしめさせて――」
「……守坂（かみさか）！」
「御意」
私はある人物の名前を呼び、そいつがその声に応じた。曰くわが文芸部の新たな仲間であり、私にとっても重要な役割を持つ存在である。
「ぐふっ」
そうして目の前の変質者は崩れ落ち、その背後に足を肩幅ほどに広げつつ両手をまっすぐ下ろし掌を地面に向けた体制で黒く長いポニーテールを翻し、まるで一陣の風のように一人の女子が現れた。
守坂椎乃（しいの）。スカートからニーソックスに包まれた長い足を伸ばした細身の一年で、私に大層懐いている後輩であるところの朱鷺羽（ときわ）みのりの親友だ。あいつの実家が古武術の同情をやっているらしい。守坂にとってあのフォームが自然体なのだ。いや本当の所は知らないけども。
いかにして文芸部に誘い入れたのかは知らないが、私が忌々しい例の騒動から戻ってきた時にはもうこの部室に存在していた。まあその騒動と関係ある事は自明の理なのだが、厳密にはまだここの部員ではない。一宮さんと契約を結んでいるだけだとかなんとか。一体どこの何のプロなんだよと思うが、まあかくいう私もかなり厄介になっているのだが――嘉光の処刑人として。
かくして守坂の重い踵落としの一撃が弧を描きながら嘉光の後頭部に見事なまでに叩き込まれ、忽ち（たちま）ダウンしてしまったわけである。
「わざわざ悪いな」
「いえ。あなたの危機は朱鷺羽の危機であり、朱鷺羽の危機は自分

の危機である。ただそれだけの事です」
　などとこのようにいかにもな堅苦しい口調だが、基本的にはいい後輩である。四月の時に見た神城（かみしろ）って奴とは大違いだ。
「……それで朱鷺羽、どうしてお前まで私に抱き着い――」
「晴希先輩っ！」
「……」
　私の腰に抱き着いている朱鷺羽の語調と力があまりにも強く、私はそれに何も言えなかった。忘れていたが今の今まで気絶していたんだよな。
「本当に心配したんですから！　死んじゃうかと思ったんですよ！？」
「あー……悪かったよ」
　私としても少し心配をかけすぎたと思う。多少の粗相には目を瞑ってやることにした。とは言っても頭を撫でてやるような真似はしないが。
「俺とみのりで頑張って運んだんだよ。何と言うか……ちゃんとしてやれなくてごめんな」
「……守坂」
「御意」
　ただし嘉光、てめえはだめだ。
　そうしていつの間にか復活して背中を抱きしめてきていた嘉光を始末させておき、私は朱鷺羽に声を掛ける。
「おい朱鷺羽、いい加減離れてくれないか？」
「嫌です」
　即答だった。
「いや、そうは言ってもだな、私は家に帰らなくちゃならない」
「それなら私も一緒に行きます」
「大丈夫だって」
「駄目です。一緒にいます」
「電車とかで金かかるだろ？」

「そんなの私の勝手です」
「……」
それを言ったら一人で帰るのも私の勝手だろ。
そう言おうと思ったがやめておいた。仮に言ってしまえばこいつは「それは違います！」なんて激昂してくるに決まってる。これまでの流れを見ればわかるが、こいつは大した力はないくせして（勿論私が言えた事じゃないが）いい奴すぎるのだ。
「……分かったよ」
「ちょっと待ってくれ晴希、俺は……！」
「よし帰るか、朱鷺羽」
「晴希！？」
あの馬鹿が処刑されているのをずっと見物しているのもなんだし、こうなったらもう朱鷺羽の厚意に甘えさせてもらおうか。

第七十話　目覚めるダーク・ソウル

結論から言えば朱鷺羽はしっかりと家まで付いてきた。やけに義理堅く、そしてまたそれなりに有難くもある。まあやめて欲しいけどな。

そしてその時に色々と話をした。私が文芸部にいない間に何があったのかとか、守坂がどんな奴なのかとか、そんな感じの。それでも今日の事について責めるような事はもう言っては来ず、その事を訊いてみた所この後輩は、

「よく考えてみたらあれは私も不注意でしたから。ごめんなさい」

などと答えた。

「いや、よかった。お前がいいなら私も別にいいんだ」

「そうですか。それならこれからお互い気を付けませんとね」

「全くだな」

平凡とした日々に転校生、星ヶ丘柊は突如現れた。思えば私達は最初からヘマを踏みすぎたのかもしれない。その私達というのは秋津晴希であり、朱鷺羽みのりであり、内藤嘉光であり、そして星ヶ丘柊でもある。つくづくやっちまったな、って感じだ。

だがそれでいて、私たちはまだ安全地帯と危険地帯の境界は踏み越えていない。なにしろ文芸部員だ。頼りになる先輩方がいる――果たしてその庇護される私達の中に星ヶ丘が含まれているのかはさておき。いや、あいつは強いから大丈夫か？

と、一つ思い当たる事があったので訊いてみることにする。

「なあ朱鷺羽」

「はい」

「お前はあの星ヶ丘の事、どう思ってるんだ？」

そう、列記とした一人の乙女である所の私のどたまを鞄でぶん殴り気絶させたのは紛れもなく奴なのだ。私の不注意やらなんやらもあったが、当の本人であるあいつの事はどう思っているんだろうか

？　どうしようもないほど深く恨んでたりするのかね？」
「えと……ちょっと複雑ですね」
「……お前もか」
「……と言うと？」
　という問いに対し、私は溜め息を吐いてから喋った。なおこの溜め息は癖みたいなもので、特に意味はない。それは朱鷺羽も分かっている事らしく、気にはしなかった。
「私はてっきりお前があいつに対し敵意みたいなのしか感じてないと思ってたんだがな」
「……そうですね、確かにそれもありますけど……」
「ん」
　それもあるが、他にどう感じているのだろうか。もしかするとこいつの言う微妙ってのは私の微妙ってのと同じ事なのかも知れない。
「確かに晴希先輩にあんなことをしたのは許しておけないですけど……」
「うんうん……ん？」
　あれ？　まだそこの話続いてんの？　本来ならもうそこで逆説から本題に入ってるべきなんじゃないのだろうかね？　朱鷺羽さんや。
「目には目を歯には歯をって同じ事を三倍返しでしてやりたいですけど……」
「……あのー、朱鷺羽さん？」
　いかん、何だか朱鷺羽が黒くなってきたぞ。やっぱこれ絶対深く恨んでるよね。微妙な気持ちとか嘘だよね？
　ちなみに目には目を歯には歯をって言葉はハンムラビ法典が元なんだが、それはやられた以上の事を仕返ししてやってはいけないってのが本当の意味である。間違っても三倍返しではない。私とあいつの体力差を考慮すればまた変わるけども。
「それでも、あの人があんな事をした理由は私達にあるんですよね」
「……ああ、そうだ！　全くもってそうだ！」
「えっと……どうしてそこでやけに力強く頷くんですか？」

「いや、何でもない！」
私はただお前の話がちゃんと落ち着くべき場所に落ち着いたのが嬉しいだけだよ。頼むからお前はヤンデレにはなってくれるなよ？
「別にいいですけど……あと、あんな形で終わっちゃったのは星ヶ丘先輩もきっと後悔してると思うんですよ。だからそんな敵視ばっかりするのもどうかと思うんです」
「……朱鷺羽」
「はい？」
首を傾げる朱鷺羽。
「お前に訊いて良かったよ。いや本当に」
私がそう言ってやると、朱鷺羽は「ええと……ありがとうございます」と頭を下げた。いや、頭を下げたいのはこちらの方だがな。おかげで私は自分の考えが間違いでないと分かったんだから。すごく安心した。ちょっと黒い事を言い始めた時は安心とは程遠かったが、終わり良ければすべて良しだ。
「さあ、これからどうするか……」
と呟いた所で突然、左ポケットに入れていた携帯電話が振動した。Eメールだ。送り主は不明。だがこれは流れ的に……
「一宮さんだな」「参謀先輩ですね」
同時に私達はそう結論付けた。ちなみに参謀先輩とは三年の一宮敦次さんの別名である（本人は嫌がっているようだが）。要するに私達の意見は見事なまでに合致していた。……よくわかってんじゃんお前。早速受信トレイを開く。
『私は参謀ではありません』
なんてこった。自分から正体バラしやがった。一瞬唖然としてその場の勢いでメールを消去しかけたが、これしきの行動に気を奪われていては大事な事を見失ってしまいそうになので、気を取り直して続きを読む。
『我々文芸部から貴女へ一つ伝えたい事があります』
はいはい。

『おそらく今貴女と共に道路の左端に寄って歩きながら無意識のうちに多少黒い発言をしてしまっているであろう後輩の朱鷺羽さんにも伝えておいて下さい』

「何でそこまで分かってんだよ！？」

もう読心術とかそういうレベルじゃないよな！？　しかもやけに説明口調だしさ！

「晴希先輩、どうしたんですか？　えっと……私が黒い事をっていうのもよく分からないですし……」

「いや……私達は本当に凄い人を味方につけていたんだなと改めて実感しただけの事さ。黒い云々もさしたる問題はない」

「えっと、それはどういう……」

「気にするな。あまり考え過ぎると禿げるぞ。それは良くない」

訊いてきた朱鷺羽にそう釘を刺しておく。ってかお前自分が変な方向に話進めてた自覚ないんだな……。まあいいけどさ。

「そうですか……」

誤魔化された朱鷺羽はまだ納得出来てはいないようだったが、空気を読んだというか意図を察したというか、それ以上の追及はしないでくれた。そして私も記憶の彼方に追いやっておく。誰だって禿は嫌だからな。

で、続きを読む。重ね重ね言うが一宮さんの超人的読みに関してはスルーだ。それについて論理的な解を求めると何かが変わってしまいそうな気がする。いや髪だけじゃなくてな。そっちの話はもう終わりだ。

『貴女方には星ヶ丘柊をどうにかして引き入れて頂きたい所存です。彼女の転校によってわが文芸部に多少の揺らぎが生まれてしまった事。これはこちらとしても予想しておくべきことでした。どうもすみません』

私は驚愕した。あの一宮さんが文面上とはいえ謝ってきたのだ。敬語でのメール自体は前に送られてきていたが、あの時はただ単に一宮さんなりの参謀ジョークなのかとも思ったがもしかしたら元々

こういうキャラなのかもしれない。普段の態度がアレなだけで……なんてな、そんなわけないか。ってか参謀ジョークってなんだよ。

『なので何とかして星ヶ丘柊との間にある蟠りを解消していただきたいのです』

「星ヶ丘先輩との……何て読むんですかこれ？」

「あいだ、だろ」

訊いてくる朱鷺羽に対し私は適当にそう答えた。

「それくらい知ってます！　その後のこれですよ」

言って朱鷺羽は「蟠り」の部分を指さす。

「知らん」

「ですよね」

ちなみに後で調べてみた所、どうやら「わだかまり」と読むらしかった。なるほど納得いった。

「まあ漢字の読みはいい。次だ」

そう言って読み進める事にする。

『このままでは星ヶ丘柊は危険なのです。貴女自身の利益の為にも任務の遂行をお願い致しております』

「なるほど」

それは妙に納得がいった。私自身の利益――確かにあるのだ。どうやらこの任務とやらで損をする人間は誰一人いないようだし……

「まあ、毎度毎度だが頑張ってやるか」

と私は独り言を言った。

「晴希先輩、まだ続いてるみたいですよ」

「……ああ、そうだな」

さっきの文章でどうやら終わりかと思ったが、数行空けて一番下に何か書いてあった。

『追伸――何故そこまで上から目線なのですか』

「……」

私は黙って携帯電話を閉じた。一筋の冷や汗が垂れる。

……つくづく何者なんだあの人。

第七十一話　メインヒロイン

家に帰った後風呂に入り、夕飯も食べ終わって部屋に向かった後の事。私は携帯電話を開いた。待ち受け画面に戻していなかったらしく、先の一宮さんのメールが一瞬目に入ってくる。……私はそれを見なかった事にし、素早く電源ボタンを短く押した。

うん、だから何も見てませんって。何かあるように見えたのはきっと目の錯覚だろう。人は何もないものでも脳が勝手に別の何かだと判断する事があるらしい。つまりはそういう事だ。気にするとこれもきっと禿げるだろう。要注意だ。

して、アドレス帳に登録された名前を探す。あいつとは色々あった末アドレスを交換するに至ったのである。

名前を見つけ、通話発信する。さあ、この想いよ、届け！

開始二秒で出た。

「早っ！？」

『もしもし？　誰？』

電話回線の向こうから聴こえてくるか細い声。……うん、少しばかり緊張したもんだが大丈夫だ。

「……ああ、画面見れば分かるだろうが」

『……ん、大仏殿さん？』

「違えよ大仏殿さんって誰だよ」

『……その声と突っ込みは、晴希？』

「いやそれで何で判断基準が神原駿河と同じなんだよ」

しかも画面見れば分かるって言っているのに。機械音痴？　いや違う。それなら二秒で通話に応じられる筈がないからな。

……と言う訳で。

電話の相手は何を隠そう、似非無口キャラこと杭瀬弥葉琉である。

前の騒動の時、私が杭瀬を疎かにしたばっかりにあいつは私から離れてしまった。結果的に良かったものの、危うくあいつを独りに

してしまう所だったのだ。だからこそあれから話をしてやったり、メールアドレスの交換をしたりした。

こいつの事を信頼して、それでいて時々は気にかけてやるって約束した。

『大仏殿尋人（ひろひと）さんはね、二期の第五話に出てきたアニメオリジナルの登場人物なの』

「……あっそう」

何で菅原と同じ回なんだよ。いやあの後輩自分で違うって言ってたし関係ないけどさ。ってかこいつにその話言ってないよね？　何故被ったしと言う他ないんだが。

「まあその大仏殿さんの事はいい。それより言っておきたい事がある」

『何？　やっぱり告白？』

……やっぱりって何だやっぱりって。ひょっとして期待でもしてんのか？

「いやしかし私は朱鷺羽と違ってレズじゃないからな？」

『そう……え？』

「何でそんな予想外なリアクションを取るのかねお前は！」

この電話の相手はさっきからまるで動揺してるような上ずった声で喋っているんだが、はっきりと言わせて貰おう。演技である。いやあ……呆れるね。さっきから私突っ込みに追われてばかりだし。

確かに私はこいつを信頼すると言ったが、生憎盲信する気などは全くない。あんな事があった後でもこいつはこんな冗談ばかり言う事に変わりはないし、何より信じてやると言った手前すぐさま騙されたというのもある。……うん、考えてみるとだんだんムカついてきた。決して言葉には出さないけど。

『晴希、五月蝿（うるさ）い』

「……ああ、うん、そうだな。悪い」

確かに電話口でこんな叫ばれても迷惑なだけだもんな。私は話を戻し、本題に入る。

「……あの転校生の事だよ」
『仕返しはよくない』
「いや、別にその気はないんだ」
向こうが余りある私の弱さを配慮出来てなかったってのもあるからな。「なんでそんな強いの？」とか言ってたしな。お前に何が分かるのかと。
現に私は見た目運動出来そうだとか言われる事があるが、体育の授業とかやってられない。百メートル走さえも私にとってはマラソンだ。どうだ恐れ入ったか。
『という事はつまり？』
「ああ」
『……星ヶ丘を晴希が攻略するって事？』
「何でだよ！」
『晴希、五月蝿い』
「いやいやいや……」
二度目の文句に頭を抱えた。
それでも杭瀬は容赦をしない。
『確かに晴希が何だかんだで秋津ハーレムを増やしていたいのは分かるけど……』
「ちょっと待て、秋津ハーレムって何だ初めて聞いたぞ」
新出単語に思わず戸惑った。そして大体予想は出来ているんだが、愚かにも私はそれを聞きたくなってしまった。
『いや、だから、邦崎さんと朱鷺羽と守坂と、あとメインヒロインの私だけど？』
「いや何『当然でしょ？』みたいな感じで言ってんの？」
それ私含めて皆ただの女子生徒だからな？　そしてやっぱりお前はメインヒロインになるのかよ。
「ってかハーレム云々なら普通に内藤だろうに」
『え？　メインヒロインが？』
「ねえよ」

そんなのないし、あって欲しくもない。勿論あいつが実質ハーレムの主って現状も認めたくはないのだが。

しかし本当にこいつはよく分からない奴だ……とはいえ、これからこいつともちゃんとやってかなきゃならないんだよな、私は。なんせ私はこいつの数少ない仲間なんだから……時々、と言うかかなり頻繁に殴りたくなってくるけど。

『……まあ、大体の事は分かった』

「ん？　ハーレムの事か？」

『いい加減そこから離れて』

お前が言ったんだろうに。正直ちょっとキレかけたぞ？

『晴希の選択は何も間違ってない』

「ああ、知ってる」

朱鷺羽もそう思ってくれていた。一宮さんもやれと言った。人の意見にそこまで影響される主義でもないんだが、ここまで言われれば自分を疑う事なんてまず出来るわけがないだろう。

『……何だか腹が立ってくるのはどうして？』

「いや私に訊くなよ」

それを言うならこっちの方だ。先程も述べた通りこいつの発言にはたまに苛立たされたりする事がある。いや、苛立つとまではいかないんだがね。前ほどは苦手じゃなくなったし、そう考えると私の沸点の方がかなり低くなってしまったのかもしれない……精進しなければ。

「あー……すまん、杭瀬」

『まあ冗談だけど』

「冗談かよ！」

謝ってすごく損した気分だ。

「まあ、とはいえお前にも太鼓判を押して貰ったのは素直に嬉しいよ」

『晴希……ひょっとしてデレ期？』

「五月蝿い黙れ」

くそ、素直に言って損した。私はあれだな、もっと内向的でクールにならなきゃならんのかもしれない。

『でも、どう致しまして』

「くっ……」

私は屈辱に打ち震えた。電話の向こうの声が余りにも得意げだったからだ。

『それなら私からも一言――晴希は、十分強いよ』

「……は？」

『それじゃ。他に伝えたい事はあった？』

「いやちょっと待てよおい」

『ないみたいね。それじゃ』

「いやだから待てって！」

ツーツーと、無情にも電話の切れる音が響く。

「……意味が分からん」

携帯を机に置き、やはり私は嘆息した。まあ確かに特に伝えるべきこともなかったのだが。

星ヶ丘に続いてお前までそんな事を言うのか。つくづく謎ばっかりだ。この私が何となくで珍しくコールしてやったと思ったらこれだ。電話しない方が良かったのかもしれないとか、そんな事も思う。

そのままベッドに倒れこみ、私が星ヶ丘に昏倒モノの一撃を見舞われるに至るまでの出来事を思い返してみる。

あれは今から……何時間前だったか。まあそれっぽく言うまでもないな。なんせ今日の出来事だ。

第七十二話　報い

「なあ、おかしいとは思わないか」
朝。大柄の男子生徒、幡野克剰（かつのり）は私の机の前で仁王立ちし、そんな事を言い始めた。一息ついて引き続き喋り始める。
「そりゃああの騒動を終わらせたのはお前とあの影の薄い……なんだっけなあれ……」
杭瀬な。
「……まあいいや、あいつの働きが大きいだろうさ。だがそれは結果論だろ。頑張ったにも拘（かかわ）らず結果論だけで何もしなかったというのは暴挙だ」
結果論は暴挙――なるほど、それは尤（もっと）もだ。
私も体育の授業は大抵見学だが、それをサボり呼ばわりされる言われはない。体力不足は免罪符などではなく、運動すると本気でダウンしてしまうレベルなんだから。確かに見た目だけは運動能力ありそうとか言われるが、これは仕方がない事だ。まあ別にそういうオーラを出している気は一切ないので、似非ではないと思う。
「いや、そもそも元から俺は仕事を完了していたと思うんだ。俺の仕事はお前のＳＯＳを新聞部に伝える、それで終わりだったんじゃないだろうか。その後の事は言わばアフターサービス、俺の心優しい気遣いだ」
ほうほう、それは感心だ。
言われた事だけでなくその後の事も手伝ってくれるとは。新聞部は文芸部に負けず劣らず残念だが、その分いい奴らだったりもするんだな。お前の気遣いって所には若干引っかかるが。
「それに約束も確かにした筈だ。俺が仁科さんにそれを伝え終わったら、あれの終わった後にちゃんと報酬をくれると」
うん、確かにした。
ちなみに仁科さんってのは新聞部の部長だ。独特の交渉術を得意と

するらしいが、生憎私にとっては一々水道水を勧めてくるのがうざったいだけである。

「秋津、約束を守る事は大切だよな？」

当然だ。場合によりけりだとは思うが、約束するって事はその相手に大なり小なり自分の尊厳を預ける事だと思う。それを守ろうとしないのは何より自分の為にならない。約束をするとはそういう事なのだ。そう言えば一年の時に嘉光と何か約束した気もするが……まあきっと気のせいだろう。

「……それで、結局お前は何が言いたいんだ？」

呆れつつも本題を問うてみる。実を言うとこいつの今の話を聞くのは一度目ではない。というか毎日言われてて、本当にうんざりとしていた所なのだ。

「だから！」そこで幡野は体制を低くし、机を殴りつけ、こう叫んだ。「大人しくエロ本を俺に渡してもらおうか！」

……。

「お、おう……」

はっきりと言わせて貰おう。引いた。えらく引いた。

「何でだよ！？」

「だって……なあ？」

何を言うかと思ったらエロ本を渡せときた。これに引かない奴が果たしているといるのやら……いや、本当にいるからそんな驚いたのか。流石新聞部だな。

「いやだからエロ本って先に言ったのはお前じゃん？」

「あのな」

そんな訴えをする幡野に溜息をくれてやり、私なりに諭してやる。

「下手な言いがかりはやめろ。あれは確かにくれてやったじゃないか」

「あれは！」再び机を殴る幡野。さっきから本当に五月蠅い。「俺の求めていたのとは全然違うじゃないか！」

何を言うか。貰った時に感動してそれから一歩も動けなかったく

せに。
「そんな事言ってしっかり読んでんだろ？　分かってんだよ」
「表紙でアウトだったわ！　何だあれ！」
表紙？　と言ってもあれはどっからどう見てもごく普通の……
「いやだから……男の聖典だろう？　それ以上でもそれ以下でもない」
「確かに間違ってはいないが何かが致命的に違うだろ！　普通の男子高校生がガチホモ見せられて喜ぶと思ったのか！？」
「……そういえばそうだな」
いやあ、盲点だった。
思えば私が報酬だと言ってくれてやったのはまあ、ウホッでアーッな奴だったわけだ。普通のエロ本は兄が何ともまあ余計なお世話で私に買ってきてくれるんだが、中学時代のクラスメイトから半ば押し付けられるような形で貰ったものがあり、それが幡野にくれてやった物だ。上手く使えよ。
だが確かにこいつの言っている事は正しいな。完全に廃棄物のつもりで流してたから全くもって気付かなかったよ。
「だからさっさとエロ本を寄越せ。自分がされて嫌な事はするんじゃない」
そんな風に色々と台無しな事を言う幡野。そしてその言葉は前後が矛盾以外の何物でもないと思う。少なくとも私はエロ本貰っても嫌なだけだぞ。そもそも男子高校生じゃないからな。
「まあそんな事はともかく、結論から言えば何だ？」
「エロ本が欲しい」
「……素直でよろしい」
……いやまあ、本音を言えば全然よろしくないんだけどな？　当然だが。まず一女子高生がエロ本の話をしている時点でどこかがおかしいと思う。
「分かった。面倒だから適当な時にくれてやるよ。どうせ私には不要だ」

「と言うと……使用済みか？」
「死ね」
そう言って、とりあえず手に持っておいたシャーペンを幡野の拳に突き刺しておいた。
……ああ、随分とアレな話をしてたもんだな。
「おはよう晴希……って、幡野君は何やってるの？」
と、そこに現れたのは邦崎綾女（あやめ）だった。
「さあ？　きっと体のツボか何かを刺激してんだろ。ほら、シャーペンが刺さってるだろ？」
「うん……」
何だか違和感を覚えつつも、邦崎は納得している様子だった。
……本当に危なかったと言わざるを得ない。
この邦崎という五年の付き合いのクラスメイトは一般的に言う所の親友キャラに当たるんだろうが、いかんせん似非だ。いつもいつでも、何かあればすぐに絶妙な間合いで私を困らせてきたのである。
そんな奴に今のエロ本の話なんぞを聞かれたら……やめておこう。
そんなの想像もしたくない。
「それはそうと、大変な事になったんだよ！」
「……どうしたいきなり」

「内藤君のクラスに、転校生が来るんだって！」

……あっそう。知らなかった。だがそれがどうかしたか。わざわざ強調してまで言うもんじゃ――
「何……だと……！？」
……と思ったら幡野は項垂れ、床に膝を着けていた。何なんだその驚きようは？
「もしかして、何か知ってるのか幡野？」
「いや……全然知らなかった……これでも新聞部員なんだぜ……？」
何だ……何かと思えばそんな事か。それで自分の情報量の無さに

落ち込んだと。
「折角毎日部室に来て、モンハンをしてたってのに……」
「……」
……ああ、うん、それは仕方ないんじゃないのか？　寧ろそれでよく自分の情報量に一人前の自信が持てたもんだな。そんなんだから情報弱者などと言われるし、ノーマルなエロ本を手に入れたつもりがガチホモ系統のやつだったりするんだよ。この情弱め。
しかしまあ、一宮さん達はどうせこの事を知ってたんだろうな。結果的に知らされなかったという点では私と同じか。
……と、ふと誰かの携帯のメロディーが鳴る。幡野は屈みこんだまま「ああ、俺のだ」と言いながら応答した。
「……もしもし？　どうしたんですかそんなに慌てて……えっと、転校生が来たって？　いえ、知ってますけど」
反射的に携帯をひったくった。
「もしもし？」
『もしもし……もしかするとその声と突っ込みは秋津さんですか？』
「……何でその判断基準なんですか。第一今の一言のどこに突っ込みがありましたか？」
『やっぱり秋津さんですね』
落ち着きながらも推測が当たったからなのか少し嬉しそうな声。
電話の相手はさっき言った新聞部の部長、仁科由宇さんだった。
「……まあ色々と言いたい事はあるんですが、一つだけ教えてもらえますか？」
『はい？』
「もしかしてさっき初めて知ったんですか？　転校生の話」
『……』
「……」
そうしてやっていられない沈黙が続き、やがて電話がプツンと切れた。
駄目だこの部……何かもう色々と……。

「幡野、悪かった」
そして私は幡野に携帯を奪った事とさっき情弱と心中で罵倒した事、二つの意味を込めて謝罪し、携帯電話を返してやった。

第七十三話　恋は戦争、されど平和の為なら死ねる。

「あー……つまり、その転校生とやらがどうやらとんでもない美少女らしくて、そいつを一緒に拝みに行こうと？」

邦崎の話を私なりに要約し、果たしてそれが正しいかどうか確認をとってみる。……等と書くと非常にシンプルだが、実際こいつの話は何とも支離滅裂でありその内容を理解するのに随分と手間を要した。テンパりすぎなんだよな本当。

ちなみに一度さっきの『美少女らしくて』と『そいつを一緒に』の間に『お前の大好きな内藤がかどわかされないか心配で』と入れてみたら猛烈な勢いで否定された。

「ふむ……」

長ったらしい説明は朝のホームルームが始まる頃にようやく終わり、先生の話を右から左へ受け流しながら、多少私はその転校生云々という情報について考えてみる。

まず最初に言えることは、来たのが嘉光のクラスで良かったってことだ。この辺りのあいつの主人公補正には一応感謝しておこう。仮に私のクラスに来られても面倒事になりそうな予感しかしないからな。あいつには正の補正が働いていて私には負の補正がかかっている。これには流石にお空に不平等を嘆かずにはいられないのだがそんな今更な話はさておきだ。

邦崎はあんなにも慌てているが、あれは嘉光がそのえらく美少女な転校生に取られそうだという焦燥なんだろう。しかしそんなもの私からすればどうぞ勝手にって話だ。ぶっちゃけてしまえば、別にポジション的にも期待値の低そうな邦崎の味方をしてやる理屈もない。いや親友じゃないし。似非親友だし。

あと……ああ、ここで変にフォローしてやってもこいつのためにはならないだろう。自分の問題は自分で乗り越えなければ。そう、決して面倒なわけではないのだ。

第一私があれだけフラグを放置したり時には叩き潰そうとしたりしても今も私の尻を追い続けている嘉光が、今更美少女の転校生程度で揺れ動くわけがないだろう。期待をするだけ損というものだ。そいつが何か訳ありでそのイベントの為に暫く時間と労力を傾けるなんて事が仮にあったとしても結局は相も変わらず私の下へと舞い戻ってくるのである。

余裕？　これは諦めというものだ。くそったれ。

とにかくまあそういう事で、別に私が何かしなくてはならないわけでもない。私の日常はいつも面倒で、それゆえ今日も平常運行である。

「余裕だな」

私の考えを読み取ったのか、もしくは私ならどうせこうだろうとでも推測したのか、幡野が横から口を出してきた。だから余裕じゃなくて……ふむ。

「……なんだお前、いたのか」

「最初からな。ってか最初にお前と話してたんだろうが」

「教室に戻らなくていいのか？」

「俺最初からここのクラスだぞ！？　舐めんなこら！」

「最初最初うるせえな、初期設定なんてどうでもいいんだよ」

「おいこら！」

「……何だお前。何をそんなに怒ってるんだ。カルシウムでも摂取したらどうだ」

ついつい心配になった私はそう労ってやる。我ながら親切だ。一体どうした事か。

「カルシウムぐらい取ってるぞ！　ただ全部背に行ってるだけで！」

それ結果的に不足してるっての否定できてないよな。

「ま、そんな野暮な話はどうでもいい」

私はそれだけ言って黙った。邦崎も幡野も何かを言ってきているが知った事か。私は疲れたんだ。モブキャラどもの話なんぞ必要ない。

しかし一度そう断定はしてみたものの、正直不安と言うものはある。どうにかこの転校生の登場というイベントを何事もなく終わらせてほしいと願っている。

まあそんな願いは微塵もなく打ち砕かれたわけだが。

だがこんなのは勿論終わりなんかじゃなくて、ただの始まりなのだ。

これから私は杭瀬の言う所の『攻略』をしなければならない。

「なあ、お前ギャルゲーやった事あるか？」

「……ちょっと何を言っているか分からないんだけど」

だから翌日にて、具体的な手順の提示を杭瀬に煽ったわけだが、返答はこうだった。話の分からないやつである。お前それでも文芸部員か。まあ存在意義の全く見つからない嘉光よりは幾分マシだとは思うが。

「だから昨日あれを攻略するって言ったろ。その通りの意味だ」

「うん」

と相槌を打つ杭瀬。立て続けに私は言う。

「だが生憎私はギャルゲーと名のつくものに手を染めた覚えはない。そしてその状態で挑むのは無謀が過ぎるというものだ。失敗は成功の素（もと）と言うが実際その通りで、才能だなんだというのを言い争うより先に経験を培った方がいいのは自明の理だ。だが私のような素人でもそれなりの結果を残す方法というのはあるだろう」

「うん」

と相槌を打つ杭瀬。満足した私は引き続き話を進める。

「そう、自分の経験がないなら他人の経験を借りればいい。所謂（いわゆる）軍師というものを得れば戦えるのではなかろうかというわけだ。そう――これは戦いだ。戦争だ。右手には折れぬ剣を、左手には砕けぬ盾を、心には死する覚悟を持って臨むべき戦争だ」

「うん」

「私は困惑した。私にはギャルゲーがわからん。私は単なる一人の女子高生だ。だが私は人一倍フラグには敏感だった。一見ただの面倒にしか思えないイベントだが、これを乗り越えればまた私の望む世界に近づくというまあなんだ……」

「うんうん」

「……」

「……うん？」

……その急かすような相槌はやめてくれ。

正直私も言ってる最中に恥ずかしくなってきた。何が戦争だよ。死にに行くとか死んでも嫌だよ。もう平和のためなら死ねるくらい。うん。

「晴希……」

杭瀬は深く感情の読めない、眼光を伴わない真っ暗な瞳を無言でこちらに向けてきていた。やめろ！　そんな目で私を見るな！

と思うとその表情もすぐに崩れ、前までは決して見せる事のなかった柔らかな微笑みと共にこう言った。

「晴希は、女子高生じゃないでしょ」

「ファックだ」

とりあえず額を抑えながらもう一方の手で中指を突き立ててやったが、依然として杭瀬はどこ吹く風である。スルースキル高いなこいつ。つくづく変な所で憧れる。

「……いいからどうなんだ。ギャルゲーはやった事あるのか」

「晴希と違ってないけど、それが？」

今度は堂々と言いやがった。さり気に私に変な疑いを被せながら。

「いや私もないが、んじゃまず私は何をやるべきだと思う？」

前半の部分はやはりさり気に流しつつ、そう質問をしてみる。すると杭瀬は黙り込み数秒の思索の末また口を開いた。

「じゃあ晴希がギャルゲーを一切合財やったことがないってていで話を進めるけど」
「ああうんもうそれでいいよ」
つくづく面倒なやつである。何だか八つ当たりのような気がしなくもないがそれもこの際どうでもいい。私は八つ当たりなんてしていないし、私がギャルゲーをしていないというのも今とりあえずの話である。所謂Ｗｉｎ－Ｗｉｎの関係ってやつ。何か違う気もするけど。
「どうして私に聞くの？　馬鹿なの？　死ぬの？」
「ナチュラルに罵倒すんな」
そういうのは心の中に留めておけ。私みたいに。
「晴希もよく言ってるけど」
「うっさい」
しかし思い返してみると確かにそうだったかもしれない。じゃあ今忘れよう。前も言ったがそういうのを気にしすぎると禿げる。
「どうしてって言ってもなあ……だってお前キャラ的に案外やってそうだろ」
「……どんな判断基準？」
いや、似非だからだよ。
「最近はそういうのが流行りなの？」
「きっとな」
目を合わせず私は答えた。無論根拠は無いけど。ソースは私ってやつだ。
「他に友達はいないの？　幡野とか」
こいつまたナチュラルな罵倒を入れてきやがった。
「あんな男は私の友達なんかじゃないし、きっとあれはギャルゲーに手を出してみたはいいがどうしてもクリア出来ずに憤慨しているタイプだ」
「それは流石に偏見だと思う」
「だがあいつはそういう奴だ」

もう私の中ではそういう残念な奴という事で結論づいている。秋津脳内議会において八対二で賛成派が圧倒的多数を占めたのは記憶に新しい。

それにもし私がそんな話を出せばあいつはまた嬉々として勘違いを犯し、新聞部を巻き込んで大々的に報道を始めるだろう。流石にロリコン疑惑に続いてギャルゲー好き云々で二度も校内新聞に載る趣味はない。

「ふうん……じゃあ邦崎は？」

「訊けるかアホ」

それこそ駄目だ。絶対やってないだろうし、そんな話を出した途端邦崎は私の友ではなくなる。実際何度も私は「晴希」から「秋津さん」への位置変更を強いられてきたのだ。

「まあ冗談はとにかく……」

と杭瀬。おいさっきの全部冗談かよ。好き勝手やりすぎだろ。

「一宮先輩からは、何も？」

「ああ。えらくアバウトな話だった」

「じゃあ、いいんじゃない？」

何が、と言い返すまでもなく今度は杭瀬が話を続ける。静かながら、いつもの似非無口とはまた違う口調だ。

「その時になったら問題は向こうから舞い込んでくるんだから、それから逃げない限りは。無理なんかしなくていいよ。晴希は今のその、レズで隠れエロゲー好きな晴希のままでいいんじゃない？」

「おい待てこら」

何かいつの間にか私に新たな要素が追加されていた。ギャルゲーに留まらずエロゲーまで来たか。そりゃまあ高校生でもエロゲーやってるやつはごく一部にいるだろうが、第一私は女だし。杭瀬にギャルゲーについて訊いたのは……まあそういう日もあるからだろ。

「それじゃ、私は本を読んでるから」

と言ってまた怪しげな本を取り出し、読み始めた。思うんだがこいつが読んでる本は普通の女子高生が読むにしては大きくてまるで

鈍器にできそうなものばかりで、手の平サイズの文庫とかを読んでる所なんて見た試しがない。まあつまりこいつこそが紛れもなく普通でないＪＫであるという事だが。

「……そのままでいい、ねえ」

私は誰にも聞かれないように呟き、それを誤魔化すように無遠慮にひとつ溜息をついてみる。

杭瀬は変わった。

とは言っても別に私を弄らなくなったとか、文字が横に並んで読みづらくなった書籍化した携帯小説を読むようになったとかじゃなくて。それでもまあ小さくない変化ではあったとは言っていい。

あいつはそれまで普通すぎるほど普通に溶け込んでいた世界から、その存在を露わにした――何だかやけに格好つけた言い方になってしまったが、要するに杭瀬弥葉琉がこの教室にいない存在から存在感の薄い存在にクラスチェンジしたって事だ。だからこそ幡野も名前こそ詰まって出さなかったもののあいつの話を振ってきたわけだし。

その覚悟に至るまでの経緯とかそういうあいつの心中を私は知る術もないが、いい事か悪い事かと言えばきっといい方なんだろう。心なしか表情も色々見せてくるようになった気がするし。

自分のままでいいって言ってたのはそういう点で自分と照らし合わせていたってのもあるのかもしれない。さっき話していた時も目を逸らしながらだったが、それは嘘をついているのとはまた別の理由に感じられたし。

あと、これまで以上に私に無遠慮になった。弄らなくなったってのとは全く逆の変化だ。まあこれも私に積極的に心を開いてきてくれたって事でどちらかといえば……いい事だ。非常に、非常に悔しい事だが。あとはもうちょっと私以外にもそれを分けてやってほしいものだ。いやほんと。お願い。期待できないけど。

「……ん？」

私は首を傾げた。何か引っかかる。だが他に杭瀬についての話が何かあっただろうか。いや、ない。

だからまあ、気のせいなんだろう。私はそう結論付け、自分の席についた。

この世界には謎が多い。この程度の事なんて言ってしまえば些細極まりないのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3504j/

白世界

2011年12月18日10時48分発行